

京都府遺跡調査概報

第117冊

1. 上安久城跡
2. 長岡京跡右京第830次・上里遺跡・井ノ内遺跡
3. 薪遺跡第6次
4. 椿井遺跡第1・2次
5. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡
 - (1) 上人ヶ平遺跡第8次
 - (2) 内田山遺跡・内田山古墳群(第5次)

2006

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)内田山B 1号墳埋葬施設S X 154全景(南西から)



(2)内田山B 1号墳出土六獣形鏡(S=3/4)

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成16・17年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、京都府山城土地改良事務所、独立行政法人都市再生機構(旧都市基盤整備公団)の依頼を受けて行った、上安久城跡、長岡京跡右京第830次・上里遺跡・井ノ内遺跡、薪遺跡第6次、椿井遺跡第1・2次、関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、御活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、舞鶴市教育委員会、長岡京市教育委員会、京田辺市教育委員会、山城町教育委員会、木津町教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センターなどの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 上安久城跡
2. 長岡京跡右京第830次・上里遺跡・井ノ内遺跡
3. 薪遺跡第6次
4. 椿井遺跡第1・2次
5. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	上安久城跡	舞鶴市上安久	平17. 5.18～8. 4	京都府土木建築部	田代 弘
2.	長岡京跡右京第830次・上里遺跡・井ノ内遺跡	長岡京市井ノ内頭本・廣海道	平16. 7.26～平17. 3. 8	京都府土木建築部	伊野近富 増田孝彦
3.	薪遺跡第6次	京田辺市新巽	平16. 9.21～12.27	京都府土木建築部	柴 暁彦
4.	椿井遺跡第1・2次	相楽郡山城町椿井	平16. 9.21～平17. 2.10 平17. 4.17～5.30	京都府山城土地改良事務所	柴 暁彦 高野陽子
5.	関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡			都市基盤整備公団・独立行政法人都市再生機構	筒井崇史
	上人ヶ平遺跡第8次	相楽郡木津町大字市坂小字上人ヶ平31	平16. 4.19～6.29		
	内田山遺跡・内田山古墳群(第5次)	相楽郡木津町大字木津小字内田山	平16.12. 1～平17. 2.17		

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 上安久城跡発掘調査概要-----	1
2. 長岡京跡右京第830次・上里遺跡・井ノ内遺跡発掘調査概要-----	13
3. 薪遺跡第6次発掘調査概要-----	45
4. 椿井遺跡第1・2次発掘調査概要-----	67
5. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡発掘調査概要-----	91
(1)上人ヶ平遺跡第8次-----	92
(2)内田山遺跡・内田山古墳群(第5次)-----	98

付表目次

5. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡	
付表 内田山遺跡・内田山古墳群調査一覧-----	100

挿図目次

1. 上安久城跡	
第1図 調査地および周辺の主要城跡位置図-----	2
第2図 トレンチ配置図-----	4
第3図 曲輪跡4実測図-----	5
第4図 曲輪跡4・溝断面図-----	5
第5図 曲輪跡1実測図-----	6
第6図 曲輪跡2・3実測図-----	6
第7図 第1トレンチ南壁断面図-----	7
第8図 第2・3トレンチ東壁断面図-----	7
第9図 B地点トレンチ配置図-----	8

第10図	B地点遺構検出状況図-----	9
第11図	B地点トレンチ北壁断面図-----	9
第12図	石組み遺構S X01実測図-----	10
第13図	石組み遺構S X01出土遺物実測図-----	12

2. 長岡京跡右京第830次・上里遺跡・井ノ内遺跡

第14図	調査地位置図-----	13
第15図	トレンチ配置図-----	14
第16図	Aトレンチ柱状図-----	15
第17図	Aトレンチ遺構図-----	15
第18図	井戸S E02実測図-----	16
第19図	竪穴式住居跡S H77実測図-----	17
第20図	竪穴式住居跡S H148実測図-----	17
第21図	土坑S K04遺物出土状況図-----	18
第22図	土坑S K117遺物出土状況図-----	18
第23図	B～Eトレンチ遺構配置図-----	19
第24図	井戸S E172実測図-----	20
第25図	Cトレンチ東壁土層断面図(部分)-----	21
第26図	井戸S E175実測図-----	21
第27図	溝S D190実測図-----	22
第28図	溝S D218・土坑S K392実測図-----	23
第29図	掘立柱建物跡S B210実測図-----	23
第30図	S X231実測図-----	24
第31図	土坑S K273実測図-----	25
第32図	土坑S K272実測図-----	26
第33図	溝S D427実測図-----	26
第34図	溝S D250実測図-----	27
第35図	土坑S K359実測図-----	28
第36図	Aトレンチ井戸S E02出土遺物実測図(1)-----	29
第37図	Aトレンチ井戸S E02出土遺物実測図(2)-----	30
第38図	Aトレンチ井戸S E02出土瓦実測図-----	31
第39図	Aトレンチほか出土遺物実測図-----	32
第40図	Aトレンチ出土縄文土器実測図-----	32
第41図	Bトレンチ井戸S E172出土遺物実測図(1)-----	33
第42図	Bトレンチ井戸S E172出土遺物実測図(2)-----	35
第43図	Bトレンチ井戸S E172出土遺物実測図(3)-----	36

第44図	Bトレンチ井戸S E 172出土遺物実測図(4)	37
第45図	Cトレンチ出土遺物実測図・拓影	38
第46図	Dトレンチ出土遺物実測図	39
第47図	Eトレンチ出土遺物実測図	40
第48図	Eトレンチ溝S D250出土遺物実測図(1)	41
第49図	Eトレンチ溝S D250出土遺物実測図(2)	42
第50図	Eトレンチほか出土遺物実測図	43

3. 薪遺跡第6次

第51図	調査地位置図	46
第52図	西壁土層断面図	48
第53図	検出遺構平面図	49
第54図	竪穴式住居跡(S H31：上・S H68：下)実測図	50
第55図	竪穴式住居跡S H68炉跡実測図	51
第56図	土坑S K17実測図	52
第57図	土坑実測図(1)	53
第58図	土坑実測図(2)	54
第59図	出土土器実測図(1)	55
第60図	出土土器実測図(2)	56
第61図	出土土器実測図(3)	57
第62図	出土土器実測図(4)	58
第63図	出土土器実測図(5)	59
第64図	出土土器実測図(6)	60
第65図	出土石器実測図(1)	61
第66図	出土石器実測図(2)	62
第67図	各遺跡出土の北白川C式土器	64

4. 椿井遺跡第1・2次

第68図	調査地および周辺主要遺跡分布図	68
第69図	調査地配置図	69
第70図	第I地点土層断面図	70
第71図	第I地点遺構配置図	71
第72図	土坑S K41実測図	72
第73図	竪穴式住居跡S H22実測図	73
第74図	竪穴式住居跡S H23実測図	74
第75図	土坑実測図	75
第76図	掘立柱建物跡S B26実測図	76

第77図	溝S D14・15・24実測図-----	77
第78図	第2～4トレンチ土層断面図-----	78
第79図	第2～4トレンチ遺構配置図-----	78
第80図	第Ⅱ地点トレンチ配置図-----	79
第81図	第5～10トレンチ土層断面図-----	80
第82図	第5・7トレンチ遺構配置図-----	81
第83図	第8・10トレンチ遺構配置図-----	82
第84図	第Ⅰ地点出土遺物実測図(1)-----	84
第85図	第Ⅰ地点出土遺物実測図(2)-----	85
第86図	第Ⅰ地点出土遺物実測図(3)-----	86
第87図	第Ⅱ地点出土遺物実測図-----	88
第88図	山城の高地性集落-----	89

5. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡

(1) 上人ヶ平遺跡第8次

第89図	上人ヶ平遺跡周辺主要遺跡分布図-----	92
第90図	上人ヶ平遺跡全体配置図-----	93
第91図	上人ヶ平遺跡遺構配置図-----	94
第92図	上人ヶ平17号墳周溝S X101遺物出土状況-----	95
第93図	上人ヶ平遺跡出土遺物実測図-----	96

(2) 内田山遺跡・内田山古墳群(第5次)

第94図	内田山遺跡・内田山古墳群周辺主要遺跡分布図-----	98
第95図	内田山遺跡・内田山古墳群年度別調査区配置図-----	99
第96図	内田山B1号墳墳丘測量図-----	101
第97図	埋葬施設S X153実測図-----	103
第98図	埋葬施設S X154実測図-----	104
第99図	内田山B1号墳東側周溝S D84遺物出土状況図(1)-----	105
第100図	内田山B1号墳東側周溝S D84遺物出土状況図(2)-----	106
第101図	内田山B1号墳東側周溝S D89遺物出土状況図-----	107
第102図	竪穴式住居跡S B155実測図-----	109
第103図	内田山B1号墳下層検出掘立柱建物跡平面図-----	110
第104図	鏡・鉄器実測図-----	111
第105図	内田山B1号墳埋葬施設S X153出土埴輪実測図-----	112
第106図	内田山B1号墳東側周溝S D84出土埴輪実測図-----	113
第107図	内田山B1号墳東側周溝S D84・89出土埴輪実測図-----	114
第108図	内田山B1号墳東側周溝S D84出土埴輪実測図-----	115

第109図	内田山B 1号墳出土傘蓋形埴輪立ち飾り拓影-----	116
第110図	内田山B 1号墳・内田山遺跡出土土器実測図-----	118

図 版 目 次

1. 上安久城跡

図版第 1	(1) 上安久城跡全景(東から)	(2) 上安久城跡と田辺城下町(東から)
図版第 2	(1) 上安久城跡A地点遠景(北から)	
	(2) A地点曲輪跡1・4調査前風景(北から)	
	(3) A地点曲輪跡4調査前風景(南東から)	
図版第 3	(1) A地点曲輪跡2・3試掘調査風景(北西から)	
	(2) A地点曲輪跡4調査風景(南西から)	
	(3) A地点曲輪跡2斜面調査風景(北西から)	
図版第 4	(1) A地点曲輪跡3から曲輪跡1・2を望む(南から)	
	(2) A地点曲輪跡2調査状況(北から)	
	(3) A地点曲輪跡2土層堆積状況(東から)	
図版第 5	(1) A地点曲輪跡1トレンチ調査状況(北から)	
	(2) A地点曲輪跡1土層堆積状況(西から)	
	(3) A地点曲輪跡1土層堆積状況(南から)	
図版第 6	(1) B地点掘削作業風景(北から)	
	(2) B地点石組み遺構検出作業風景(北から)	
	(3) B地点遺構実測風景(北から)	
図版第 7	(1) B地点石組み遺構検出状況(西から)	
	(2) B地点石組み遺構検出状況(南から)	
	(3) B地点石組み遺構検出状況(北西から)	
図版第 8	(1) B地点石組み遺構・円礫群検出状況(西から)	
	(2) B地点石組み遺構・円礫群検出状況(南西から)	
	(3) B地点石組み遺構・円礫群検出状況(上が南)	
図版第 9	(1) B地点石組み遺構・円礫群除去後(北から)	
	(2) B地点石組み遺構・円礫群除去後(南から)	
	(3) B地点石組み遺構・円礫群除去後(西から)	
図版第10	(1) B地点石組み遺構・鉄磬検出状況(上が北)	

- (2) B 地点石組み遺構・不明金具検出状況(左が北)
- (3) B 地点石組み遺構・瓦器椀と鉄刀検出状況(上が北)

図版第11 出土遺物(1)

図版第12 出土遺物(2)

2. 長岡京跡右京第830次・上里遺跡・井ノ内遺跡

- | | | |
|-------|------------------------------------|-----------------------------|
| 図版第13 | (1) A トレンチ全景(上が東) | (2) E トレンチ全景(上が西) |
| 図版第14 | (1) 調査地遠景(上が南) | (2) 調査地遠景(上が北) |
| 図版第15 | (1) A トレンチ近景(南から) | (2) 井戸 S E 02 断面(北から) |
| | (3) 竪穴式住居跡 S H 148(西から) | |
| 図版第16 | (1) 竪穴式住居跡 S H 77(西から) | (2) A トレンチ近景(北から) |
| | (3) 土坑 S K 04(東から) | |
| 図版第17 | (1) 土坑 S K 117(西から) | (2) B・C トレンチ調査前全景(北から) |
| | (3) B トレンチ近景(南から) | |
| 図版第18 | (1) 井戸跡 S E 172 近景 | (2) 井戸跡 S E 172 井戸側検出状況 |
| | (3) C トレンチ近景(北から) | |
| 図版第19 | (1) D トレンチ近景(北から) | (2) 井戸跡 S E 175 断面(西から) |
| | (3) 土坑 S K 392 近景(北東から) | |
| 図版第20 | (1) 土坑 S K 392 遺物出土状況(東から) | (2) 溝 S D 218 近景(北から) |
| | (3) 溝 S D 218 遺物出土状況(南から) | |
| 図版第21 | (1) 掘立柱建物跡 S B 210(北西から) | (2) E トレンチ調査前全景(南から) |
| | (3) E トレンチ近景(北から) | |
| 図版第22 | (1) S X 231 近景(南から) | |
| | (2) 土坑 S K 272・273、S X 231 近景(北から) | |
| | (3) 土坑 S K 272 近景(南東から) | |
| 図版第23 | (1) 土坑 S K 272 遺物出土状況(北から) | (2) 土坑 S K 273 近景(南から) |
| | (3) 土坑 S K 273 礫検出状況(西から) | |
| 図版第24 | (1) 溝 S D 250 近景(北西から) | (2) 溝 S D 250 近景(南東から) |
| | (3) 溝 S D 427 近景(北から) | |
| 図版第25 | (1) 土坑 S K 359 近景(南西から) | (2) 土坑 S K 359 遺物出土状況(南東から) |
| | (3) E トレンチ近景(南から) | |
| 図版第26 | (1) 井戸跡 S E 02 掘削風景(北から) | (2) 井戸跡 S E 172 掘削風景(東から) |
| | (3) 溝 S D 218 遺物検出作業(南から) | |
| 図版第27 | 出土遺物(1) | |
| 図版第28 | 出土遺物(2) | |
| 図版第29 | 出土遺物(3) | |

図版第30 出土遺物(4)

3. 薪遺跡6次

- 図版第31 (1)調査前の状況(南から) (2)調査前の状況(北から)
(3)西壁断面(部分)(東から)
- 図版第32 (1)調査地遠景(上が西) (2)調査地遠景(上が南)
(3)調査地の状況(真上から)
- 図版第33 (1)北半部検出遺構の状況(南から)
(2)竪穴式住居跡S H68完掘状況(南から)
- 図版第34 (1)竪穴式住居跡S H68検出状況(西から)
(2)竪穴式住居跡S H68完掘状況(南から)
- 図版第35 (1)竪穴式住居跡炉跡礫出土状況(北から)
(2)土坑S K17北白川C式土器出土状況(北から)
- 図版第36 (1)竪穴式住居跡S H31 (2)土坑S K26遺物出土状況(北東から)
(3)土坑S K30遺物出土状況(南東から)
- 図版第37 (1)竪穴式住居跡S H68炉跡炉床(南から)
(2)同上断ち割り状況(北から) (3)現地説明会風景(西から)
- 図版第38 (1)土坑S K17上面遺物出土状況(北から)
(2)土坑S K17下面遺物出土状況(北から)
(3)土坑S K17完掘状況(北から)
- 図版第39 (1)土坑S K22遺物出土状況(南から) (2)土坑S K27完掘状況(南東から)
(3)土坑S K20焼土塊出土状況(南東から)
- 図版第40 (1)土坑S K70検出状況(南から) (2)土坑S K70半裁状況(北から)
(3)土坑S K70完掘状況(東から)
- 図版第41 (1)土坑S K63断面(南から) (2)土坑S K22断面(南から)
(3)溝S D66掘削状況(南から)
- 図版第42 (1)出土土器(1) (2)出土土器(2)
- 図版第43 出土土器(3)
- 図版第44 (1)出土石器(1) (2)出土石器(2)
- 図版第45 出土石器(3)
- 図版第46 出土石器(4)

4. 椿井遺跡第1・2次

- 図版第47 調査地遠景(西から、手前中央は椿井大塚山古墳)
- 図版第48 (1)調査地遠景(北東から)
(2)調査地近景(上が北西、左上は椿井大塚山古墳後円部)
- 図版第49 (1)調査地近景(上が北西) (2)第1トレンチ全景(上が西)

- 図版第50 (1) 椿井遺跡遠景(北西から) (2) 調査前全景(第Ⅰ地点)
(3) 第1トレンチ全景(南から)
- 図版第51 (1) 第1トレンチ北部全景(東から) (2) 竪穴式住居跡S H22全景(北西から)
(3) 竪穴式住居跡S H22周壁溝検出状況(西から)
- 図版第52 (1) 竪穴式住居跡S H22貯蔵穴検出状況(上が東)
(2) 竪穴式住居跡S H22周壁溝内土器出土状況(北から)
(3) 竪穴式住居跡S H22周壁溝内砥石出土状況(上が南)
- 図版第53 (1) 竪穴式住居跡S H23全景(東から) (2) 竪穴式住居跡S H23(北西から)
(3) 掘立柱建物跡S B26(西から)
- 図版第54 (1) 土坑S K41(南東から) (2) 土坑S K1(北東から)
(3) 土坑S K25(北から)
- 図版第55 (1) 第1トレンチ中央部遺構検出状況(古墳状隆起)(北西から)
(2) 溝S D14・15・24検出状況(西から)
(3) 第1トレンチ東壁中央部土層断面(西から)
- 図版第56 (1) 第2トレンチ全景(北から) (2) 第3トレンチ全景(北から)
(3) 第4トレンチ全景(北から)
- 図版第57 (1) 第7トレンチ西壁土層断面(東から)
(2) 第8トレンチ下層遺構全景(南から)
(3) 第8トレンチ下層土坑S K103完掘状況(南から)
- 図版第58 (1) 第7トレンチ上層遺構全景(北東から)
(2) 第7トレンチ下層遺構全景(北東から)
(3) 第7トレンチ下層溝S D105完掘状況(南西から)
- 図版第59 (1) 第5トレンチ全景(東から) (2) 第5トレンチ近景(西から)
(3) 第6トレンチ全景(南から)
- 図版第60 (1) 第10トレンチ上層遺構検出状況(東から)
(2) 第10トレンチ西壁土層断面(西から)
(3) 第10トレンチ下層遺構完掘状況(北から)
- 図版第61 出土土器(1)
- 図版第62 (1) 第Ⅱ地点出土土器 (2) 出土石製品・鉄製品・銭貨

5. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡

(1) 上人ヶ平遺跡第8次

- 図版第63 (1) 調査地全景(北東から) (2) 調査地南半全景(北東から)
(3) 調査地北半全景(南東から)
- 図版第64 (1) 上人ヶ平17号墳周溝S X101遺物出土状況(北東から)
(2) 出土遺物

(2)内田山遺跡・内田山古墳群(第5次)

- 図版第65 (1)内田山B1号墳・内田山遺跡全景(東から)
(2)内田山B1号墳・内田山遺跡全景(西から)
- 図版第66 (1)内田山B1号墳・内田山遺跡全景(真上から、上が北)
(2)内田山B1号墳・内田山遺跡全景(南西から)
- 図版第67 (1)調査前全景(東から、第1次調査) (2)重機掘削作業風景(南西から)
(3)掘削作業風景(南東から)
- 図版第68 (1)埋葬施設SX153全景(北西から) (2)埋葬施設SX153全景(南西から)
- 図版第69 (1)埋葬施設SX153検出状況(南西から)
(2)埋葬施設SX153蓋形埴輪転用枕出土状況(北西から)
(3)竪穴式住居跡SB155全景(東から)
- 図版第70 (1)埋葬施設SX154全景(南西から) (2)埋葬施設SX153近景(南西から)
- 図版第71 (1)埋葬施設SX154六獣形鏡出土状況(木棺材遺存、北東から)
(2)埋葬施設SX154六獣形鏡出土状況(北西から)
- 図版第72 (1)埋葬施設SX154検出状況(南西から)
(2)埋葬施設SX154六獣形鏡検出作業風景(北から)
(3)現地説明会風景(東から)
- 図版第73 (1)東側周溝SD84全景(北西から) (2)西側周溝SD89全景(北西から)
- 図版第74 (1)東側周溝SD84掘削作業風景(南から)
(2)東側周溝SD84埴輪片出土状況(北西から)
(3)東側周溝SD84堆積状況(南西から)
- 図版第75 (1)東側周溝SD84蓋形埴輪立ち飾り片出土状況(北から)
(2)東側周溝SD84鉄鏃出土状況(北西から)
(3)溝SD90堆積状況(南西から)
- 図版第76 (1)北側周溝SD84(北西から)
(2)西側周溝SD89掘削作業風景(南西から)
(3)西側周溝SD89埴輪片出土状況(南西から)
- 図版第77 (1)埋葬施設SX01第1次調査全景(南東から)
(2)埋葬施設SX02第1次調査全景(南東から)
(3)西側周溝SD89埴輪片第1次調査出土状況(北から)
- 図版第78 (1)埋葬施設SX154出土六獣形鏡(鏡背)
(2)埋葬施設SX154出土六獣形鏡(鏡面)
- 図版第79 出土遺物(六獣形鏡細部、鉄製品、埴輪)
- 図版第80 (1)埋葬施設SX153出土蓋形埴輪立ち飾り
(2)東側周溝SD84出土蓋形埴輪立ち飾り

- 図版第81 出土遺物(蓋形埴輪、朝顔形埴輪、不明埴輪)
- 図版第82 (1)出土遺物(蓋形埴輪、土師器、弥生土器)
(2)出土遺物(弥生土器、須恵器)

1. 上安久城跡発掘調査概要

1. はじめに

上安久城跡は、舞鶴市上安久に所在する。安久氏が中世に築造したと伝えられる城跡である。上安久城跡の範囲内において舞鶴港改修工事に伴う道路建設が計画されたことから、京都府土木建築部の依頼を受けて発掘調査を実施した。

平成16年度に試掘調査を行い、対象地内の遺構の有無について確認を行った。試掘調査は、平成17年1月6日～3月3日に実施した。試掘調査の結果、対象地内には城跡の遺構が良好な状態で遺存することが判明した。今年度は、この試掘調査の成果に基づき、平成17年5月18日～8月4日にかけて発掘調査を実施した。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、主任調査員田代弘が担当した。調査面積は、平成16年度が330m²、今年度(平成17年度)が320m²である。

調査期間中は、京都府教育委員会・京都府港湾事務所・舞鶴市教育委員会・京都府立丹後郷土資料館・地元自治会などの関係諸機関の指導・助言・協力をいただいたほか、地元の方々には作業員・調査補助員・整理員として作業に従事していただくなど、多数の方々の協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。^(注1)

なお、今回の調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

2. 調査地の位置と環境

上安久城跡は、西舞鶴の伊佐津川右岸にある。標高30m前後の丘陵と派生する尾根を利用して造営された山城で、付近には陣取りの小字が残る。西舞鶴市街地の東を北流する伊佐津川河口付近に位置し、城跡からは、田辺城跡を中心に発達した西舞鶴市街地を眺望することができる。丘陵南側には丹後と若狭を結ぶ街道が通り、南側には天然の良港がひかえるなど、まさに交通の要衝に位置している。^(注2)

3. 調査の概要

平成16年度に、遺構、遺物の有無を確認するために試掘調査を実施した。その結果、道路建設予定地内に曲輪が5か所以上残っていることが判明した。今年度、試掘調査成果に基づいて、引き続き調査を実施した。この調査地点をA地点とする。また、A地点の北東地点に位置する曲輪状の遺構についても、あわせて調査を実施した。この調査地点をB地点とする。

(1) A地点の調査

1) A地点の位置 A地点は、伊佐津川東岸にある標高約23mの独立丘陵上に位置する。丘陵



第1図 調査地および周辺の主要城跡位置図

(『京都府遺跡地図第3版 第1分冊』 京都府教育委員会 2001を転載、加筆)

- | | | | | |
|------------|------------|-------------|------------|-------------|
| 151. 上安久城跡 | 150. 上安遺跡 | 155. 高迫城跡 | 144. 匂ヶ崎城跡 | 164. 田辺城跡 |
| 154. 上安城跡 | 147. 五老岳城跡 | 202. 佐武ヶ嶽城跡 | 205. 万願寺城跡 | 176. 愛宕山北城跡 |

の南西裾を伊佐津川が流れている。この丘陵は、平面形が「T」字形で、起伏に富む地形と急峻な斜面を有している。東側と南側は、旧地形が良く残っているが、西側と北側は開墾によって斜面が失われている。この丘陵上には、自然地形を加工して作られた曲輪が随所に遺存している。

2) 調査経過 平成16年度の試掘調査では、道路工事計画範囲内に位置する曲輪状の平坦地形5か所(曲輪跡1～5)についてトレンチ調査を実施した。この結果、2か所については後世の開墾などにより削平を受け不明であったが(曲輪跡3・5)、3か所については明確な曲輪跡であることが判明した(曲輪跡1・2・4)。本年度はこの成果に基づいて、曲輪跡1・2・4と、曲輪跡5の未調査部分について調査を行った。調査の経過は、次の通りである。まず、調査に先立ち、下草処理をした。重機を投入し、表土の一部を除去した。この後、人力により、掘削・精査を行った。調査の進捗状況に応じて写真撮影、遺構実測、地形測量などを行い、調査の記録を作成した。掘削完了後、空中写真撮影を実施した。7月28日、地元住民の方々を対象として現地説明会を開催した。重機によるトレンチの埋め戻し作業を行い、8月4日に終了した。

3) 調査概要 平成16年度に試掘調査で確認した曲輪跡のうち、3か所(曲輪跡2・4・5)について調査をした。調査の結果、城跡は標高約23mの最高所に東西約30m、南北約15mの最も広い平坦面(曲輪1)が設けられ、そこから北、南に派生する尾根筋を利用して、北側には曲輪4・5、南側には曲輪2・3という具合に曲輪を配置していることがわかった。曲輪跡2・3は、試掘調査を行った地点を拡張した。伊佐津川に面する急斜面に土盛りをして曲輪を造成したものである。曲輪跡4は、自然地形を台形に削り出した高さ4mの曲輪跡で、築城時は幅約6m前後の規模があったと考えられる。曲輪跡5は城跡に関する遺構を検出することはできなかったが、城跡で最も広い面積を占めているので、当時重要な場所であったと推測される。

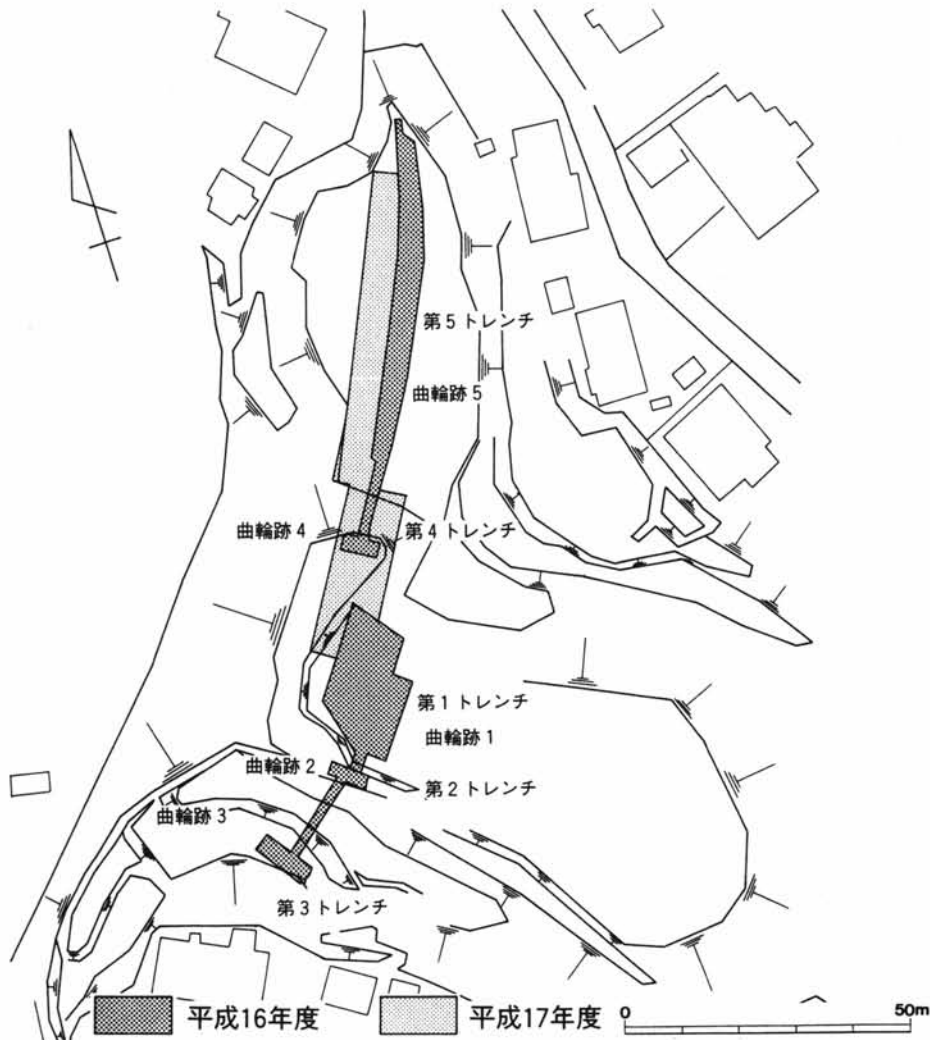
4) 検出遺構 検出遺構は、曲輪と溝である。

曲輪跡1 丘陵最上部に位置する、平面形が長楕円形の曲輪である。平坦面の中軸は、北西―南東で、南北長約25m、東西長約50mである。城跡の主郭とみられる場所である。道路工事にかかる北西端について調査を実施した。表土を除去し、精査した結果、丘陵頂部平坦面から曲輪4へ向かう傾斜面を検出した。曲輪4との境に段が設けられていることを確認した。段は、傾斜面の裾を垂直に削りだして作ったものである。約1mの落差がある。曲輪1と曲輪4を区画するために設けられた施設であり、この間を容易に往来ができないように造作したものと考えられる。

曲輪跡2 伊佐津側に面する丘陵南斜面に作られた曲輪である。一部について表土を除去し精査した。あわせて、遺構断面を観察・記録する目的で、曲輪3をつなぐ形でトレンチを設定し、掘削をした。作業の結果、曲輪2は、急峻な斜面を造成し、土を盛って台形の地形を造り出したものであることがわかった。平坦面は、東西に長く、調査地の外側へと広がっていく。

曲輪跡3 曲輪2の下方に位置する曲輪状の平坦地形である。裾部側は、近代の開墾により削られ、崖となっている。2m×6mのトレンチを設け、精査した。しかし、建物跡や柵などの遺構を検出することはできなかった。城に伴う遺構と推測されるが、確証はない。

曲輪跡4 曲輪1の北側に造られた台形の曲輪である。北西側が破壊されており、北東側が遺



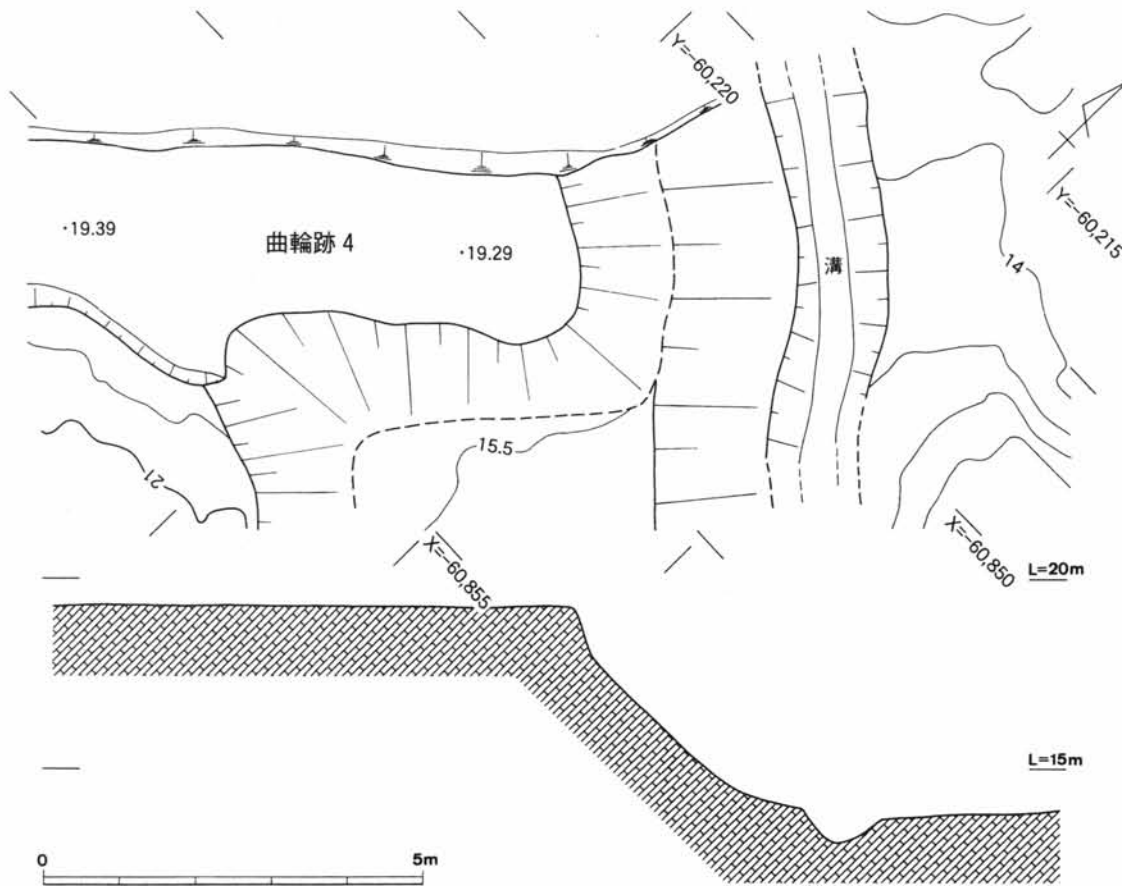
第2図 トレンチ配置図

存している。曲輪1の丘陵から派生する尾根を造成して造られた曲輪で、長方形の平坦面がある。地山を削りだして造成したものである。規模は、長さ約10m、幅現存長約7m、高さ約5mである。頂部平坦面から裾にかけての斜面は、急な傾斜角をもたせて造られている。曲輪先端裾部には、溝が巡らされている。溝は、幅約2.5m、長さ10m以上、深さ約0.8mである。曲輪の外部に対する防御効果を高める目的で掘削されたものであろう。

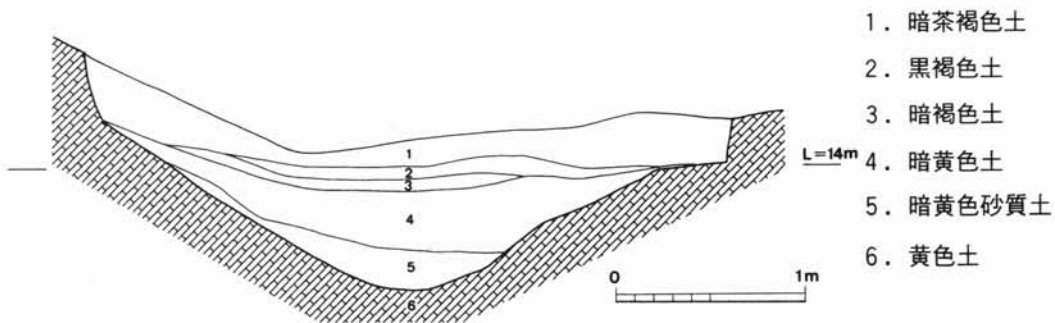
曲輪跡5 最も北側に位置する大形の曲輪である。長さが約50m以上、幅約25m以上の規模がある。北側と東側は、土砂採取などにより地形が大きく改変されている。平坦面について調査を行ったが、建物跡や柵などの遺構を検出することはできなかった。地元の方々の話しでは、戦前、戦中にこの場所に宅地・畑地があったという。こうした開墾により、遺構が失われたのだろう。

(2) B地点の調査

1) **B地点の位置** A地点の北東に上安久城の本城とみられる丘陵がある。この丘陵は、北東に長い丘陵で、丘陵にはいくつかのピークがある。北東寄りのものが最も高く、標高約52mを測る。この丘陵の北端部は、狭長な谷部に面する急斜面であり、北側の丘陵と里道で区切られている。里道は丘陵鞍部を造成して作られたもので、南北2つの丘陵は、かつては、標高30m前後で



第3図 曲輪跡4 実測図

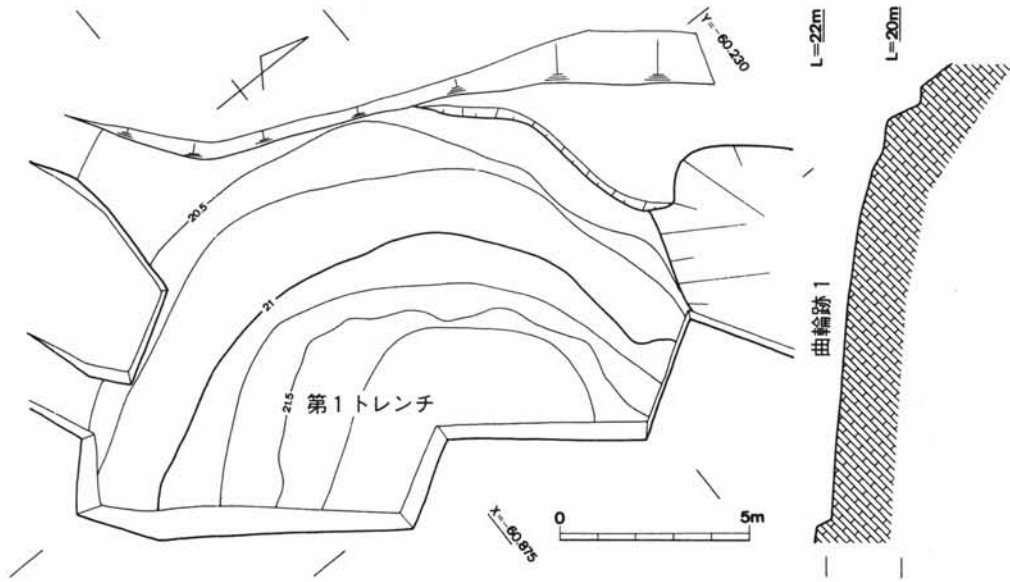


第4図 曲輪跡4・溝断面図

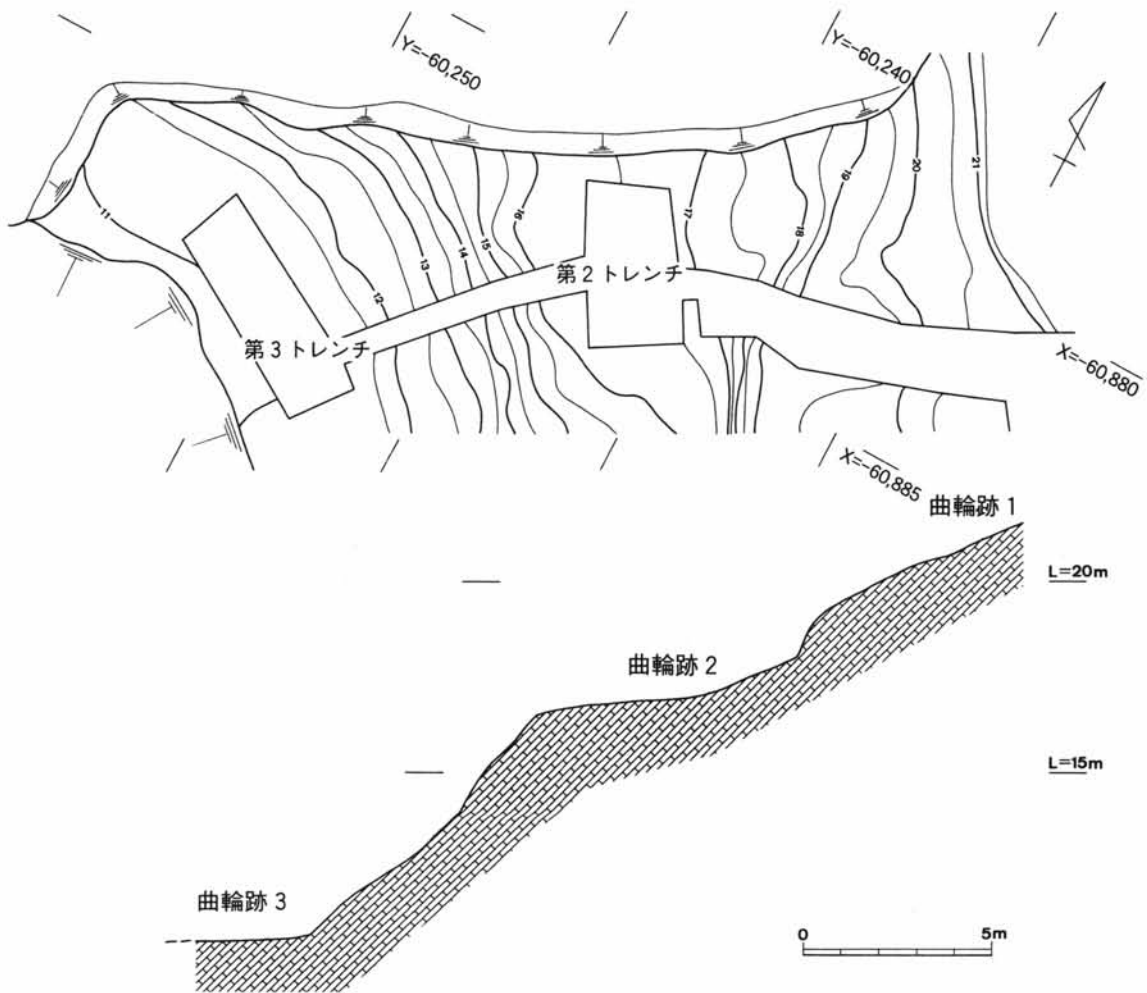
- 1. 暗茶褐色土
- 2. 黒褐色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 暗黄色土
- 5. 暗黄色砂質土
- 6. 黄色土

つながっていたらしい。上安久城の丘陵北斜面、標高約34mのところ、テラス状の平坦面が形成されている。この平坦面は、谷部側が崩れており造成時より縮小しているが、現状で長さ約20m、幅約4mの規模がある。この平坦面は、下安久城を構成する郭である可能性が指摘されている。この場所をB地点として調査を実施した。

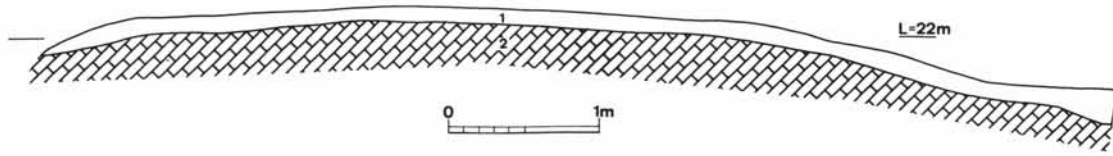
2) 調査経過 この場所に、港湾道路に連結する道路が建設されることになったため、事前に発掘調査を実施した。調査に先立ち、遺構の現状を記録することを目的として、地形測量作業を行った。この後、この地形の造成がどのように造成されたのか、遺構・遺物があるのかどうかなどを確かめるために、平坦地形の主軸に平行するトレンチと直交するトレンチを設定して、掘削



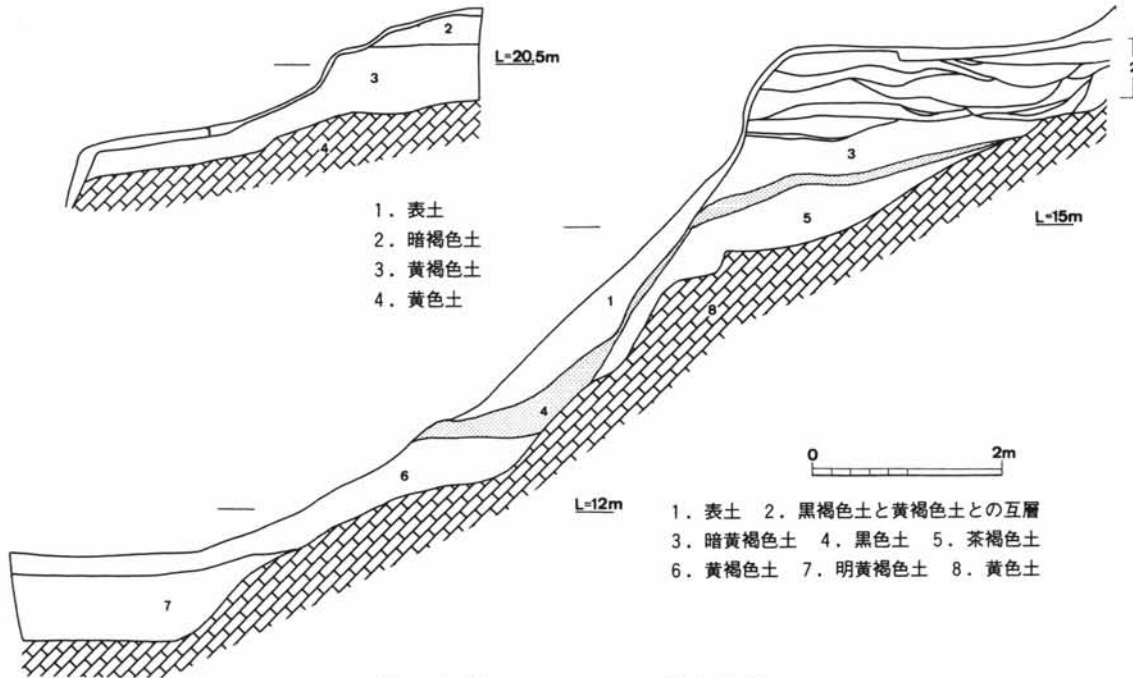
第5図 曲輪跡1実測図



第6図 曲輪跡2・3実測図



第7図 第1トレンチ南壁断面図



第8図 第2・3トレンチ東壁断面図

した。表土から順に土層をはぎ取り、地山面に至るまで精査を繰り返した。

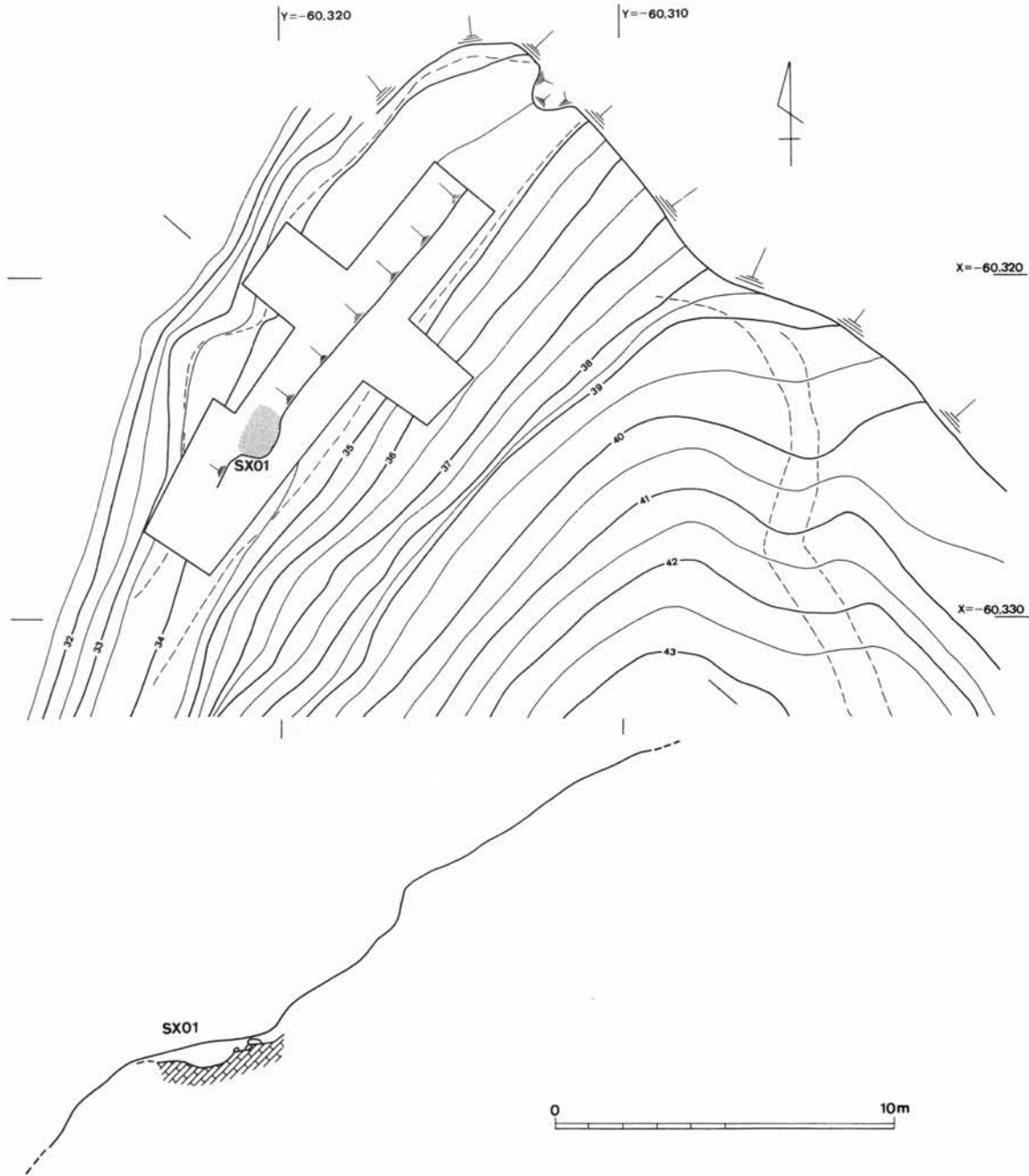
3) 調査概要 精査の結果、造成は少なくとも2時期(第1次造成面・第2次造成面)あり、第1次造成面に伴う石組み遺構があることが判明した。

a. 第1次造成面 第1次造成面は、第2次造成により破壊され、約1mだけが遺存していた。石組み遺構は第1次造成面上に構築されており、同様に破壊を受けていた。後述するように、石組み遺構は精査の結果、中世に形成された遺構であることが判明した。第1次造成面は石組み遺構に先だてて形成されたと考えられるので、同じく中世に形成された遺構と考えられる。

b. 第2次造成面 現状の平坦地形が形成された際の造成である。第1次造成面を拡張したものである。丘陵斜面を削りだした排土を盛りだして造成した遺構である。突端は破壊され、崖面になっている。形成時期は明らかでない。

c. 石組み遺構 S X01 この遺構は、大半が破壊されていたので、検出当初、遺構の性格や形状がどのようなものであるか見当がつかなかった。掘削を進めるうちに次第に様子が明らかになり、上部構造と下部構造からなる遺構であることがわかってきた。

①上部構造 ほとんどが壊れており、石列が一部遺存するのみであった。石列は、下部で検出された方形土坑の一辺に対応するように角礫を配置したものである。角礫は拳大から一抱えもあ



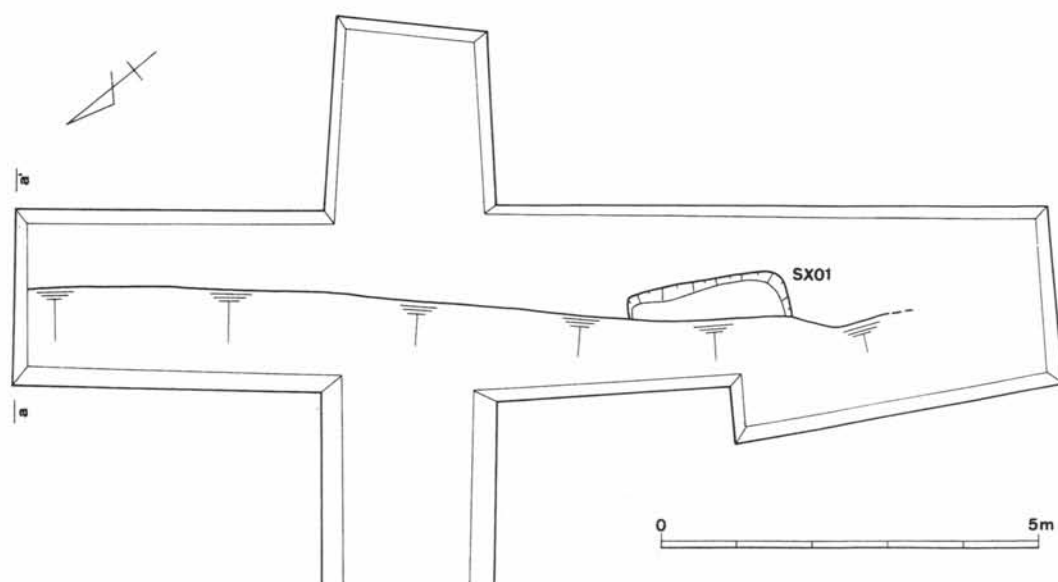
第9図 B地点トレンチ配置図

る大きなものまでである。下部にやや平たくて小振りのものを置き、その上に大形のものを置いて二段分を構築している。本来は、それぞれの辺に礫を数段配置していたのだろう。盛り土とともに、石垣をもつ基壇のような遺構を形成していたと考えられる。

②下部構造 石組み遺構を掘り進めていくと、土坑の中に、拳大の円礫が分布していることがわかった。石組み遺構の中心施設と考えられるものである。

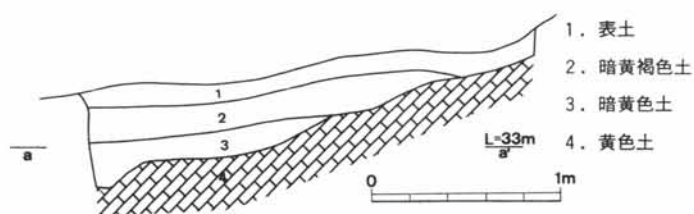
土坑は、南北に主軸をもつ方形の土坑である。東側一辺と、南側・北側の辺の一部分を確認した。東側の辺は約2.1m、南側・北側それぞれ約50cm分を検出した。壁はほぼ垂直で、底面は平坦である。一辺が2m前後の正方形か長方形の土坑と考えられる。

円礫群は、東西約70cm、南北約1mの楕円形の範囲に分布し、南北に主軸がある。円礫は2～



第10図 B地点遺構検出状況図

3段に集積しており、中央に向かって陥没する傾向が認められた。礫は55個あり、一つが花崗岩であるほかは、輝緑凝灰岩である。礫群とその周囲から、土器類・鉄製品などが出土した。

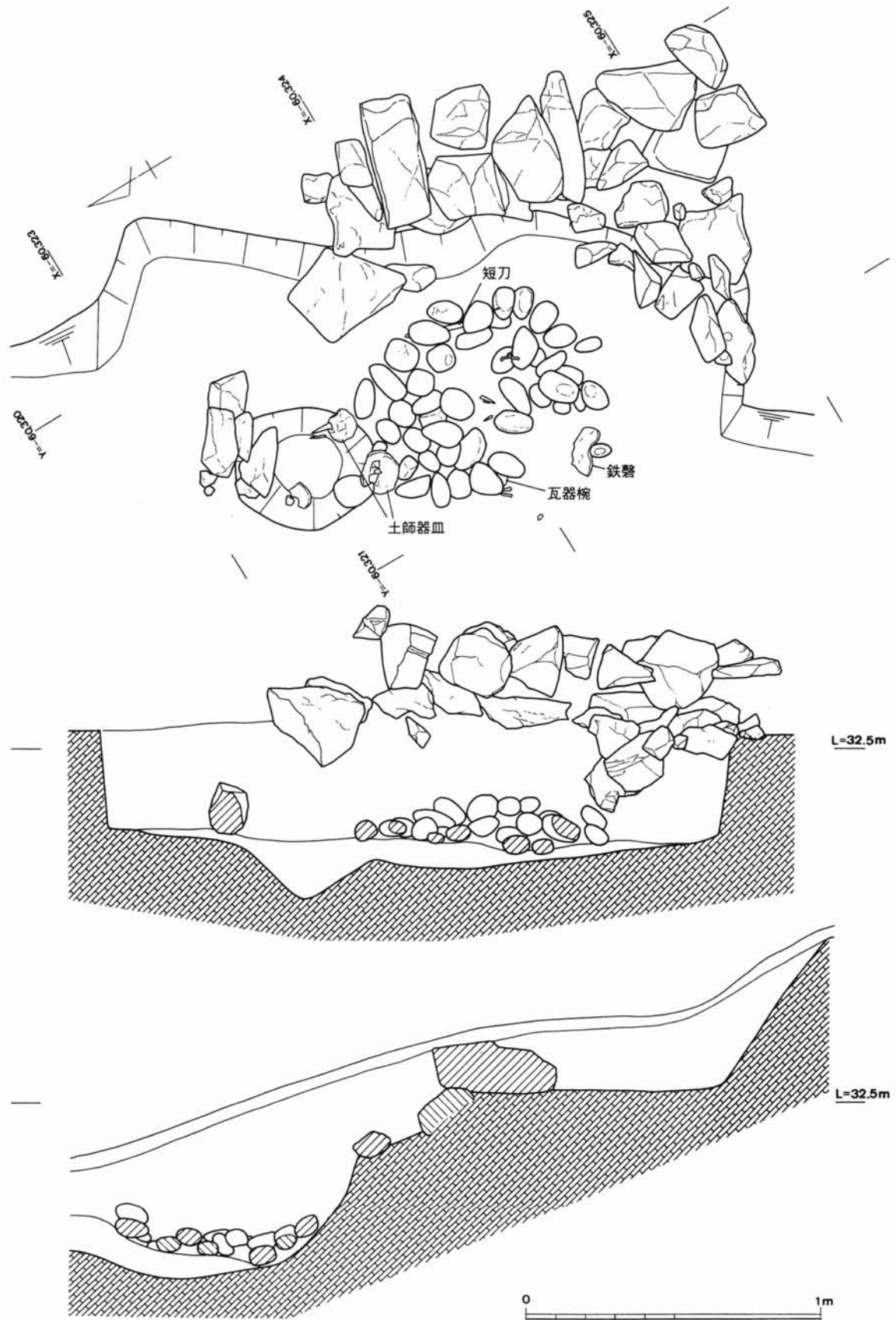


第11図 B地点トレンチ北壁断面図

③遺物出土状況 遺物出土状況は以下の通りである。礫群の北端から約40cmのところ角礫が数個置かれていた。すべての礫を除去した結果、この礫と円礫群の間には、楕円形の土坑が掘られていたことがわかった。角礫は土坑が埋め戻された後に配置されたのである。土坑は、長さ約50cm、幅約40cm、深さ約15cmの断面が皿状形の浅いものである。遺物は含まれていなかった。

④円礫群と遺物 円礫群周辺で、土師器・瓦器などの土器類、鉄釘・鉄髻・短刀・不明金具などの金属製品が出土した。鉄釘を除いて、遺物は礫群を中心として取り巻くような状態で出土している。鉄釘は、礫群中央付近を中心として広く分布していた。礫と礫の間に落ち込んだ状態で出土したものが多く。土師器は、皿が4個体出土した。礫群の北側に接した場所で3個体、北側に少し離れた場所で1個体出土した。瓦器皿は、礫群の西側で検出した。円礫の下敷きになっていた。鉄髻は、礫群の南側にあり、紐が下を向いた状態で出土した。短刀は、礫群の東側で出土した。柄を北側にして、礫群の主軸に平行しておかれていた。短刀も瓦器と同じく、礫の下敷きになった状態で出土した。

⑤焼土 円礫群の北側、土師器皿の分布するあたりに焼土がみられた。焼土は、堅く焼き締まったものではなく炭・灰を主体とするごく薄いものである。木材を焼いた痕跡と考えられる。焼土は土師器の下に位置するので、火を炊いた後に土師器を配置したと考えられる。



第12図 石組み遺構 S X01実測図

4. 出土遺物

B地点石組み遺構S X01出土遺物(第13図) 石組み遺構下部から一括して遺物が出土した。遺物出土状況は先に述べたとおり、円礫群の周囲から出土したものと、円礫群中から出土したものがある。円礫群周囲から出土した遺物は、土師器皿(1・3)・瓦器椀(2)・鉄刀(21)・鉄磬(20)・不明銅製品(19)である。円礫群中から出土した遺物は、鉄釘(4～18)である。

土師器皿(1・3) 1は、口径8.6cm、高さ1.5cmの小形の土師器皿である。厚みは底部で0.5cmを測る。色調は、赤褐色である。3は、口径10.1cm、高さ3cm、厚さ0.5cmの法量を持つ、やや大振りの土師器皿である。底部内面にハケ調整痕がある。

瓦器椀(2) 瓦器椀は、口径9.3cm、高さ2.5cm、厚さ0.5cm前後の小形品である。高台は強いナデにより成形され、断面形は鋭い逆三角形となっている。椀内面にヘラミガキが施されている。

不明銅製品(19) 断面長方形、長さ約6.5cmの青銅製金具である。頂部にあたる場所に突起が拵えられ、円形の孔が開けられている。金装されていた可能性がある。懸架用の金具であろう。

鉄刀(21) 鞘・柄部に木部が遺存しており、黒漆とみられる黒色部物質が少量付着している。全長は、約35cm(刀身は約24cm、柄部は約11cm)である。幅は、刀身の中央付近で約3.2cmを測る。刀茎の中程に径5mmの目釘孔がある。鏝は認められない。

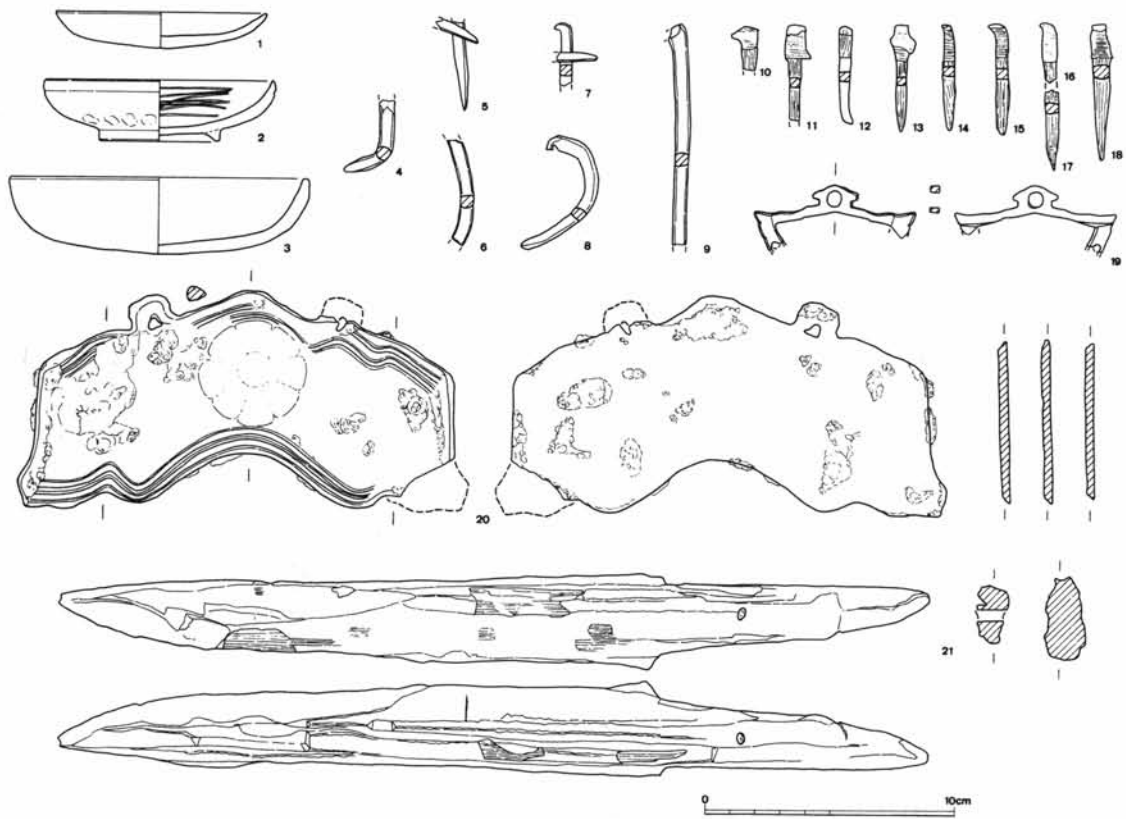
鉄磬(20) 本資料は、向かって右側の銑の一部と鈕が失われているほかは、遺存状況は良好である。文様は片面にのみ施される、いわゆる片面磬である。文様は、撞座と子縁に認められる。撞座は、花卉形の陽文である。鏽が進み詳細は不明であるが、花卉先端に丸味をもつ、8弁前後の蓮弁が描かれていると推測される。子縁は二条の凹線からなる。铸造品であろう。各部の法量は次の通りである。絃は約18cm、肩間は約16.4cm、股入は約2.2cm、側縁は約5.3cm、博は約8.7cmである。

鉄釘(4～18) 方形の断面を持ち、頭部が折れ曲がる鍛造鉄釘である替折釘と呼ばれる和釘である。太く長いもの(4・6・8・9)と、小振りのもの(5・7・10～18)がある。4・6・8は弓なりに曲がっている。9は先端が失われているが、現存長約9cmの大きなものである。5と7は、2本の釘が交錯した状態で錆びついたものである。10・12～18には木質が遺存している。これらの頭部には約2cmほど釘の長軸方向に対して直交する木目が認められ、それ以下は、主軸に併行する木目が認められる。つまり、これらの釘は、主軸に直交する厚さ2cmほどの板と、主軸に併行する木目をもつ板を結合するために打ち込まれた釘であることがわかる。いも組の木箱に打ち込まれたものと推測される。

5. まとめ

A地点では曲輪跡の調査をしたが、後世の開墾などで削平を受けており、柵や建物などの施設の痕跡や当時の生活遺物は確認できなかつた。しかし、城のために山を造成した跡は良好に残っており、城の構造を知る手がかりを得ることができた。

B地点の曲輪状の平坦面は、城跡との関連は分からなかつたが、盛り土を伴う石組み遺構の一



第13図 石組み遺構S X01出土遺物実測図

部が見つかった。この遺構は、下部に円礫で築いた小石室を持ち、中央に木製容器が納められていた。容器の中に何が収められていたかは不明である。容器埋納の際に仏具を用いた儀式が行われているので、墳墓か経塚などの仏教関連遺構と考えられる。造営時期は平安時代末期頃から鎌倉時代初頭頃である。

磬は、仏教行事に伴って僧侶が打ち鳴らす楽器の一種で、銅製品と鉄製品がある。今回出土した鉄製の磬は、伴出した遺物から12世紀後半という時期を特定できる貴重な資料である。

(田代 弘)

注1 平成16年度 山岡匠平・工藤信・小島健之介・大石健・寺尾貴美子・荻野富紗子・村上優美子・難波靖明・太田とし子・藤原志津枝・坂元美智代・稲田律子・山尾路明・太田光義・近江玲子・竹原千代子・鍋師康弘・宮田春江・森川長美

平成17年度 中村ひろみ・山岡匠平・工藤信・竹原千代子・鍋師康弘・鍋師静子・稲垣あや子・寺島勝・宮田春江・森川長美・大石健・永谷トヨ子・井上聡

注2 舞鶴市「京都府の地名」『日本歴史地名体系26』 平凡社 1981

2. 長岡京跡右京第830次(7ANGKT-2・GHD-9地区)・ ^{かみざと}上里遺跡・^{いのうち}井ノ内遺跡発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、主要地方道大山崎大枝線地方道路交付金事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

調査地は、長岡京市北西部の井ノ内頭本・廣海道地内に所在する。小畑川右岸の善峰川により形成された低位段丘上に立地する。付近の標高は、40.4～41.1mである。調査範囲は、長岡京の条坊推定復原によると、右京一条四坊三町～右京二条四坊一町(新条坊：右京二条四坊一町～右京二条四坊三町)にあたり、府道大山崎大枝線は、西三坊大路内を通じていることになる。また、縄文時代から中世までの複合集落遺跡として知られる広範囲におよぶ上里遺跡、井ノ内遺跡や中世の井ノ内館跡が含まれており、周辺には、前方後円墳の井ノ内車塚古墳や稲荷塚古墳のほか、井ノ内古墳群が存在する。

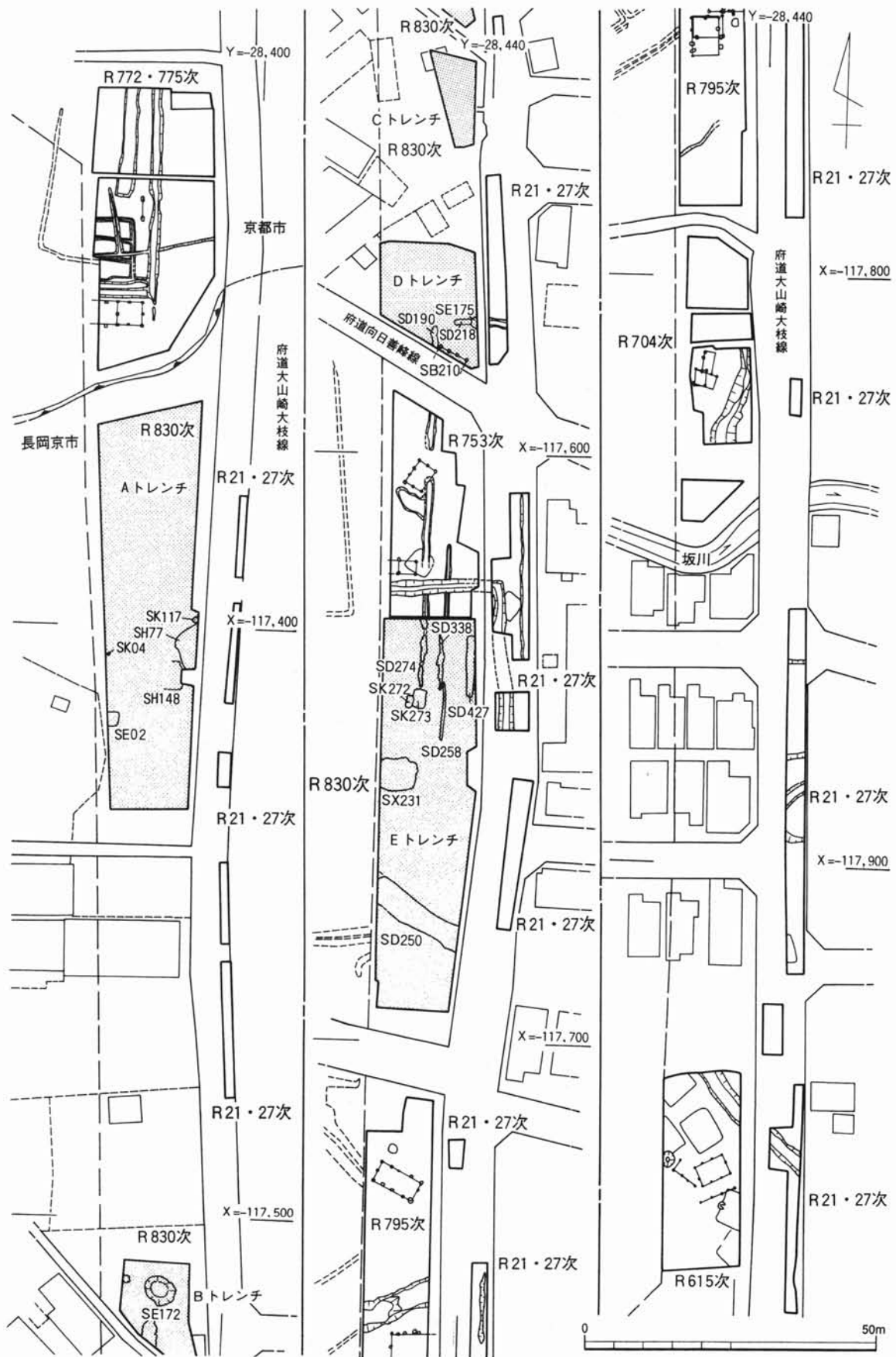
道路整備事業に伴う調査状況は(第15図)、平成15年度に(財)京都市埋蔵文化財調査研究所が実施した調査では、縄文時代晩期の甕棺墓や古墳時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡、長岡京跡の西三坊大路西側溝・門跡、一条大路南側溝が検出されている(右京第772・775次)。南側では昭和53・54年度(右京第21・27次)、平成13～15年度に調査が実施され(右京第704・753・795次)、古墳時代後期の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡、平安時代の掘立柱建物跡や中世の館跡の東限・北限の溝が確認されている。またこの付近は、富坂荘・長岡荘の荘園が存在していたことが知られており、関連が問われるところでもある。調査成果によると、周辺に奈良時代後半～中世にかけての鍛冶工房の存在が示唆されており、館跡と鍛冶工房の関係など中世の復原を試みる上で重要な地域でもある。

なお、平成14・15年度に実施した調査成果については世界測地系(新座標)で表示し



第14図 調査地位置図(国土地理院1/25,000京都西南部)

- | | |
|------------|----------|
| 1. 上里遺跡 | 2. 井ノ内遺跡 |
| 3. 井ノ内車塚古墳 | 4. 稲荷塚古墳 |



第15図 トレンチ配置図

ていたが、今回の調査成果と合わせて、長岡京跡の調査で使用されている日本測地系(旧座標)に表示方法を改めた。

今回の調査では、西三坊大路西側溝の南側延長部分、井ノ内館跡の南限の溝、館内の建物跡の検出、右京第753次で確認した道路状遺構の延長部分の時期や性格などを明確にすることを目標に調査を実施した。

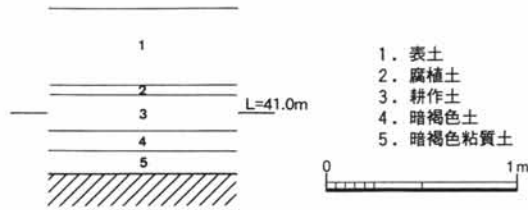
現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長石井清司、同調査第2係次席総括調査員伊野近富、同調査第3係主任調査員増田孝彦が担当した。調査期間は、平成16年7月26日～平成17年3月8日までである。調査面積は2,500㎡である。

調査に際しては、京都府乙訓土木事務所・京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・井ノ内自治会をはじめとする関係諸機関からご指導・ご協力をいただいた。また、現地作業・整理作業については、調査補助員・整理員の協力を得た。記して感謝したい。^(注7)

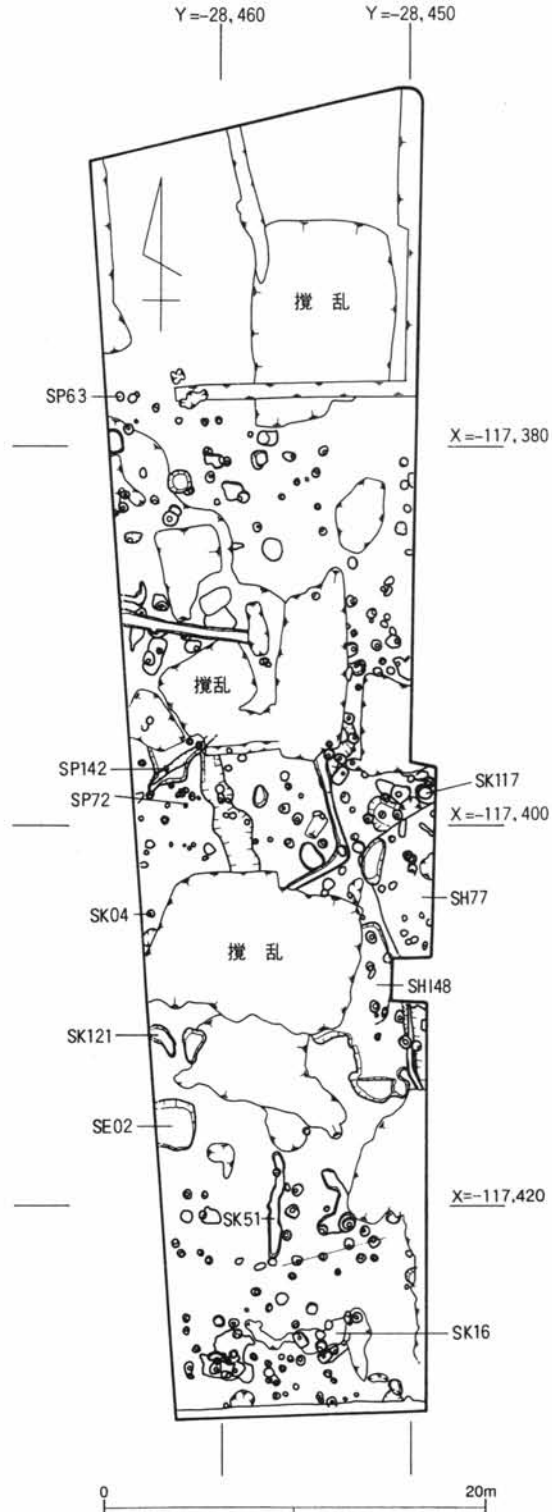
なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

2. 調査概要

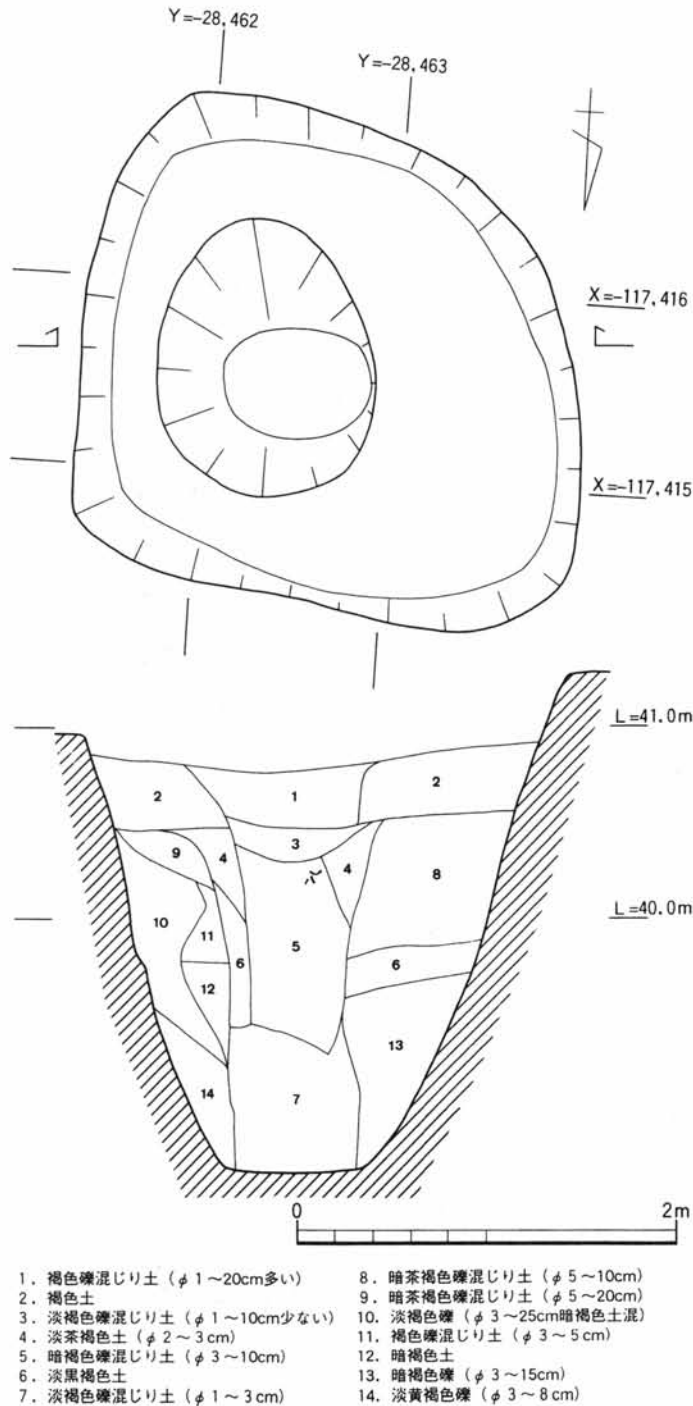
調査は、調査地北端からA～Eの5か所の各トレンチを設定した。各トレンチとも重機により表土を除去し遺物包含層を確認した後、人力掘削を行った。調査地は、現況では竹藪や更地となっていたが、過去には建物が存在した場所もあり、大きく現代の攪乱・削平を受けていた。各トレンチとも遺構の残存状況は、良好ではなかった。重機掘削では、掘削土砂とコンクリート・アスファルト、Eトレンチでは竹根の分別を行い、掘削を実施した。



第16図 Aトレンチ柱状図



第17図 Aトレンチ遺構図



第18図 井戸 S E 02実測図

おり、遺構の残存状況は良好ではなかった。検出された主な遺構としては、縄文時代の土坑、古墳時代の竪穴式住居跡、平安時代の井戸、平安時代から中世にかけての時期が考えられる柱穴などがある。

井戸 S E 02(第18図) トレンチのやや南よりの西壁付近で検出した。検出面での規模は一辺2.6m、深さ2.4mのややいびつな隅丸方形の掘形を有する。中央部分で、直径1m程の井戸枠が存在していた痕跡を確認した。埋土中からは、縄文土器・須恵器・土師器・瓦・陶磁器・埴輪が出土しているが、平安時代初期の遺物が最も新しいものとなる。特筆される遺物として、文字瓦

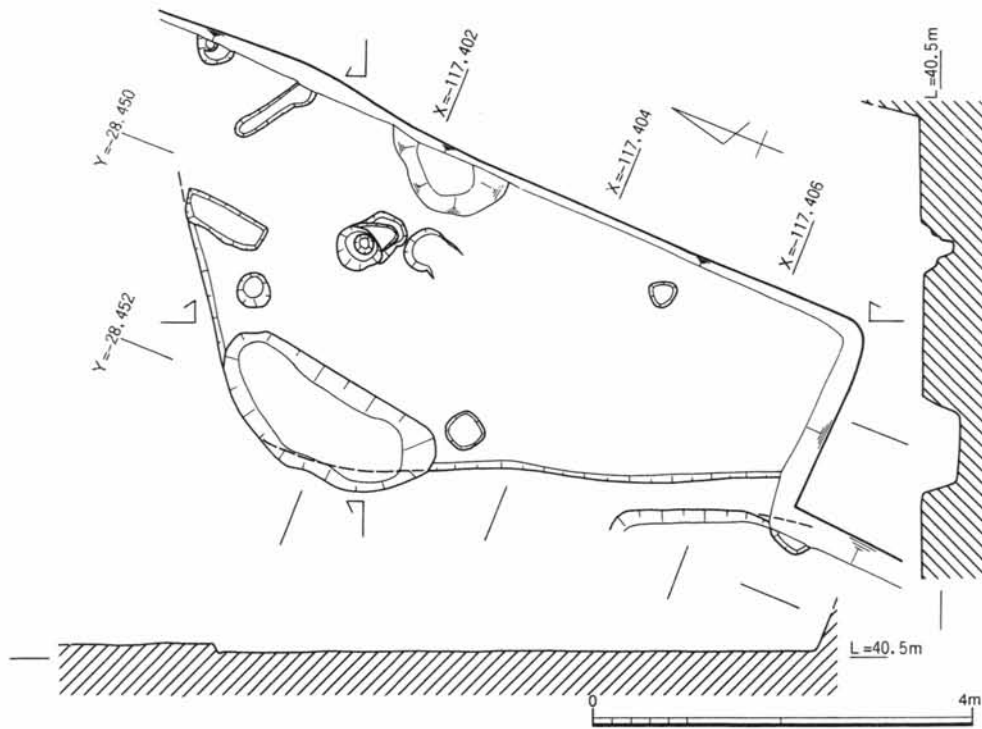
(1) A トレンチ

1) 基本層序(第16図)

トレンチ西壁中央付近では、表土下約40cmまでがコンクリート・産業廃棄物を含む現代の盛土、その下に約5cmの旧竹林の腐植土、その下層は竹林の表土ないし耕作土が約20cmある。さらに竹林の土入れか耕作に伴うと考えられる攪乱された暗褐色土が約10cm、12cmの中世遺物包含層と続く。その下面が、地山である黄褐色粘土(部分的に礫を含む)の遺構検出面となる。検出面までは中央部が最も深く0.84m、南側では0.3mと浅い。全体的に南から北に向かって緩やかな傾斜をなす。南側の遺構検出面は、土石流で押し流されてきたような礫層上で確認した。北側での遺構検出面の標高は41m、南側での遺構検出面の標高は41.2mである。京都市境に見られる北側の水田との約1.5mの段差は、調査地の土砂を削平し平坦面を造成したもので、本来は東側に並行して走る大山崎大枝線と同様な緩い傾斜を呈する。

2) 検出遺構(第17図)

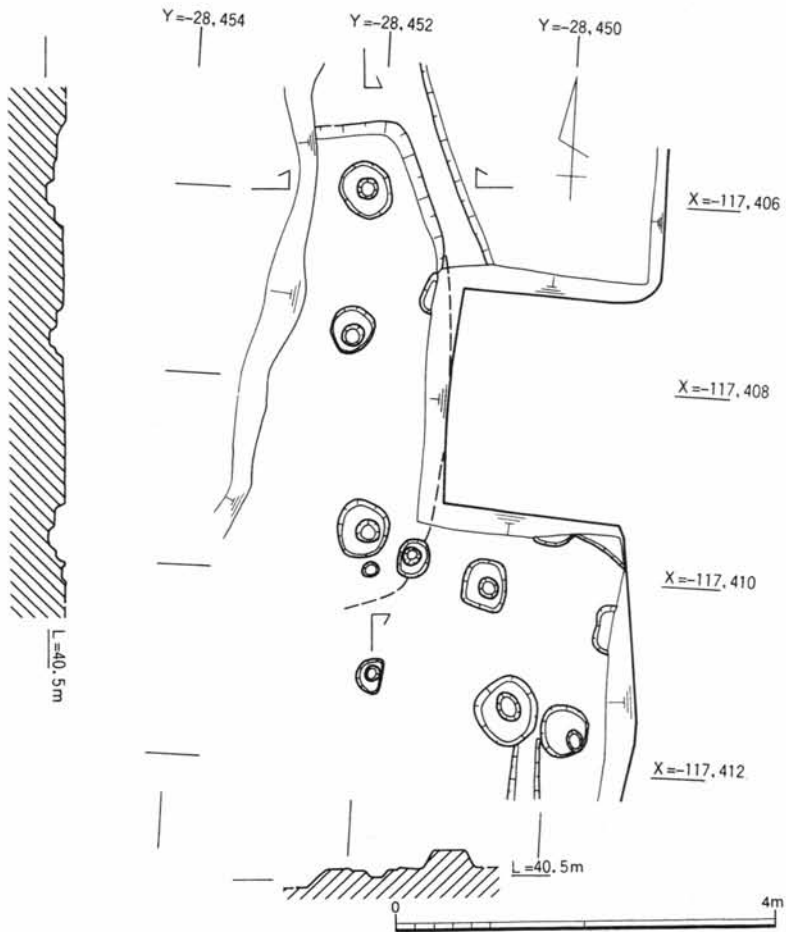
調査したトレンチの約半分が、現代の土坑、攪乱により削平を受けて



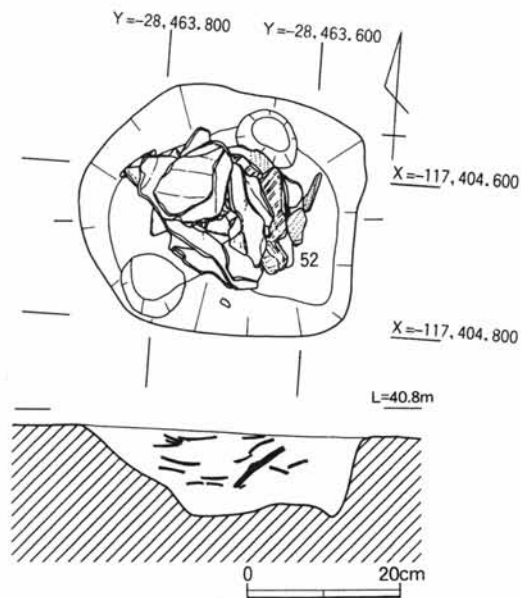
第19図 竪穴式住居跡 S H 77実測図

『国万呂』の出土がある。長岡京内では初めての出土であり、京都府内では恭仁宮跡で出土例があり、瓦の再利用を考える上でも重要な資料となるものである。

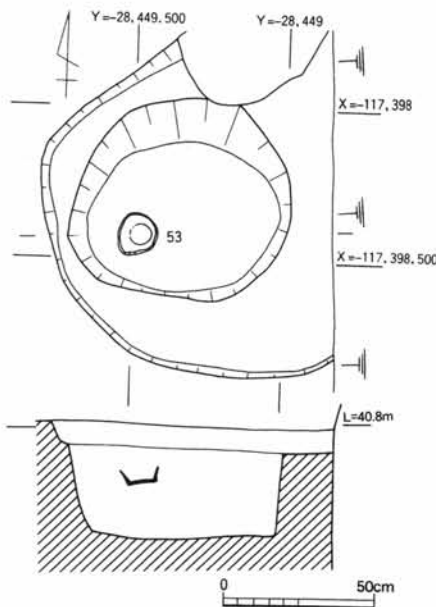
竪穴式住居跡 S H 77(第19図) 竪穴式住居跡 S H 148に隣接する北西側で検出したもので、約2/3が調査地外となる。主軸はN26°Wを測る。竪穴式住居跡と考えられ、深さ約0.2mが残存する。柱穴は検出されなかったが、南側の右京第21・27・753次調査でも柱穴を有さない竪穴式住居跡が検出されている。竪穴式住居跡 S H 148同様、遺物は出土しなかったが、周辺から出土する遺物



第20図 竪穴式住居跡 S H 148実測図



第21図 土坑S K 04遺物出土状況図



第22図 土坑S K 117遺物出土状況図

などから、6世紀後半頃の時期が推定される。

竪穴式住居跡S H 148(第20図) トレンチ中央部東壁付近で検出したもので、検出面および住居の西側2/3が現代の攪乱を受ける。軸は、N 2°Wを測る。一辺約5mの規模を測る竪穴式住居跡が復原される。深さ約0.2mが残存する。柱穴は、2か所確認した。竪穴式住居跡内からは、遺物が出土しなかったが、周辺から出土する遺物などから、6世紀後半頃の時期が推定される。

土坑S K 04(第21図) トレンチ中央部西壁付近で検出した。直径0.35m、深さ0.11mを測り、ややいびつな楕円形を呈する土坑である。土坑内に破片を重ねたような状態で、縄文土器深鉢が出土した。深鉢は壊れたものを埋めたようで、

鉢の体部中位から底部にかけては存在せず、口縁部も完全に揃っていなかった。廃棄土坑であろうか。

土坑S K 117(第22図) トレンチ中央部東壁付近の方形の後世土坑の下層で検出した。直径約0.7mの楕円形土坑で、深さ0.32mを測る。土坑中位付近に深鉢底部付近のみ、立位状態で出土した。土坑S K 04・117から出土した遺物は、縄文時代中期後半の時期が考えられる。

検出された多くの柱穴は、一部古墳時代のものも含まれるが、大半が平安時代～中世にかけてのものと考えられるが、建物跡を特定するには至らなかった。また、西三坊大路西側溝についても、トレンチ北・南側・中央の3か所の断ち割りを行い、下層遺構の確認を行ったが、その痕跡を認めることはできなかった。

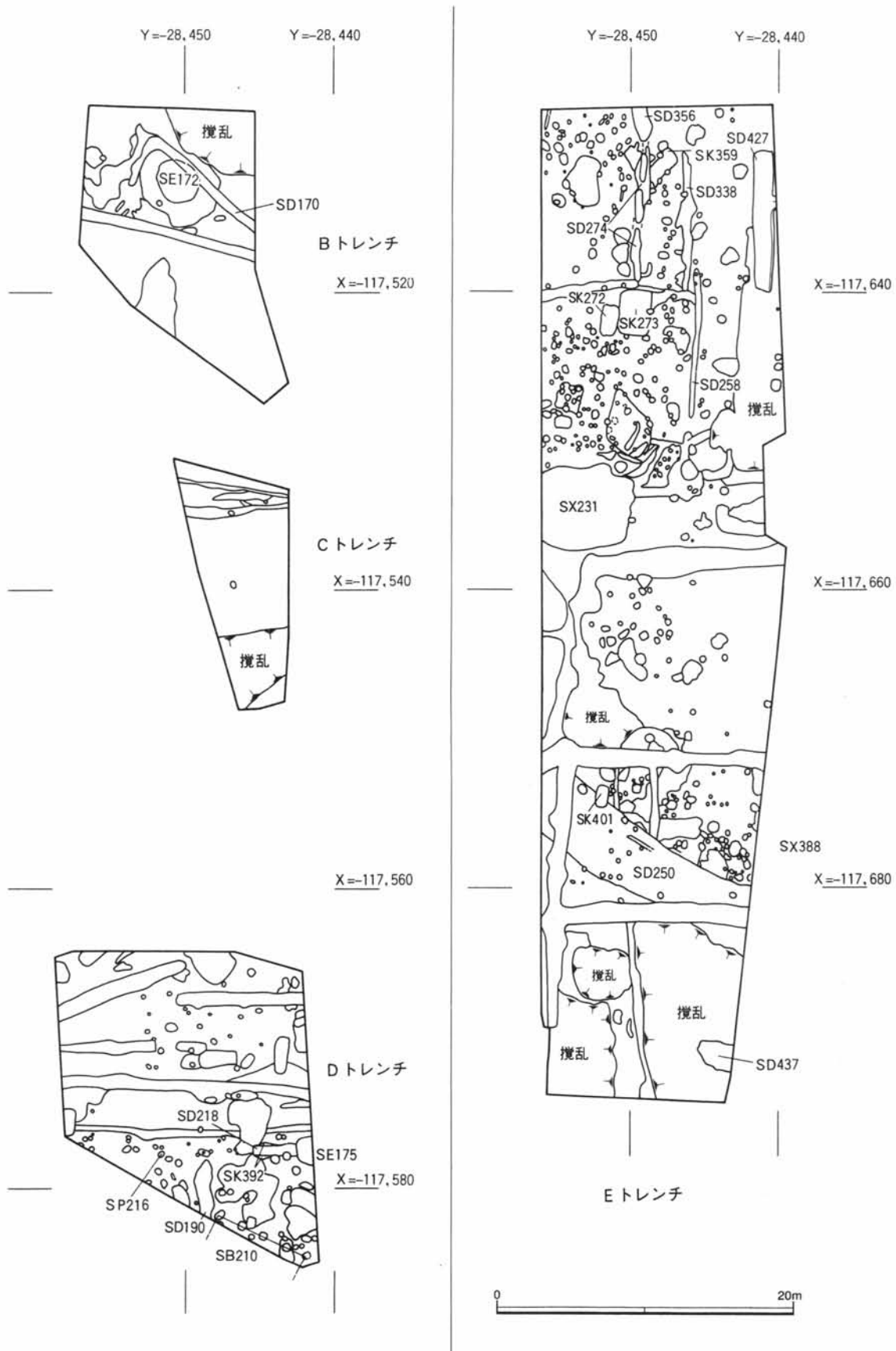
(2) B トレンチ

1) 基本層序

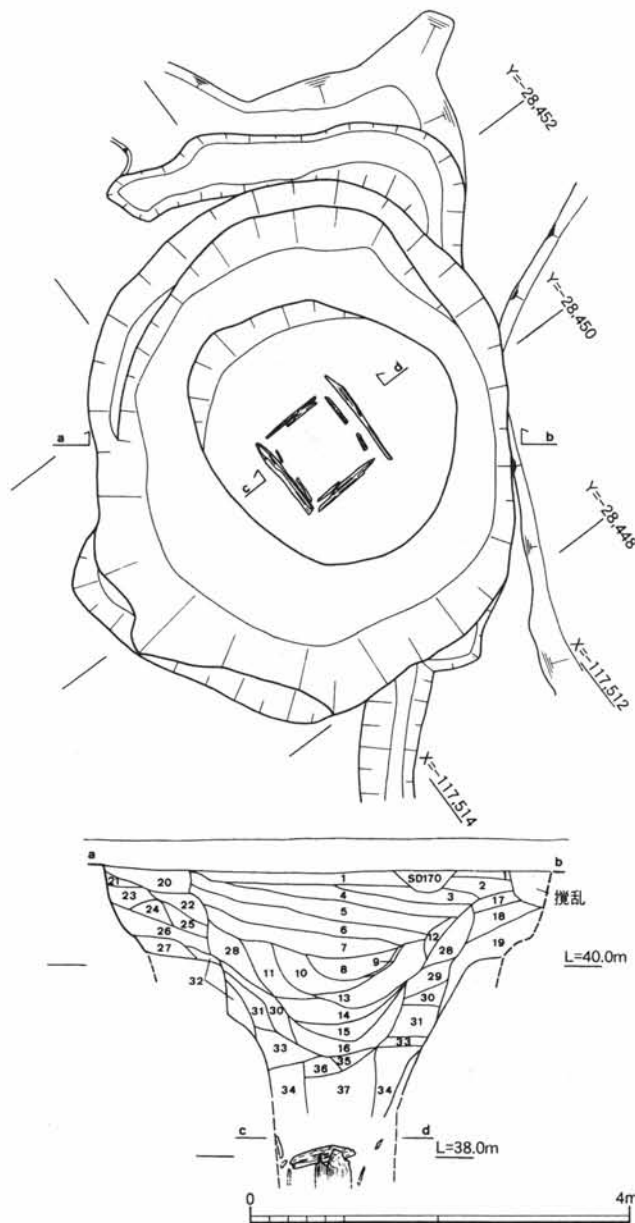
地表面から地山である黄褐色粘土の遺構検出面までは、コンクリート・産業廃棄物を含む現代の盛土が約0.36mある。地山は、トレンチ北西から南東にかけて緩やかな傾斜をなす。南東側では一部遺物包含層が残存していたが、遺構は検出できなかった。

2) 検出遺構(第24図)

井戸S E 172(第23・24図) 大型の井戸で検出面で直径5.6～5.7m規模を測り、0.34m掘り下げたところで、直径約3mの井戸枠が存在していた痕跡を確認した。さらに、検出面からの深さ



第23図 B～Eトレンチ遺構配置図



1. 暗褐色礫混じり土
2. 淡褐色砂礫土
3. 淡褐色礫混じり土 (土器多い)
4. 淡褐色土
5. 褐色土 (土器混じり)
6. 暗褐色粘質土 (土器混じり)
7. 暗褐色礫混じり土 (φ 3~5cm, 土器多い)
8. 暗茶褐色礫混じり土 (大型の礫混じり, 土器多い)
9. 焼土
10. 褐色礫混じり土 (土器多い)
11. 褐色礫混じり土 (礫少ない)
12. 淡茶褐色粘質土 (炭混じり)
13. 褐色礫混じり土 (φ 4~10cm, 土器混じり)
14. 暗褐色礫層 (φ 20cm混じり, 土器多い)
15. 暗茶褐色礫層 (φ 20cm混じり)
16. 暗灰色礫層 (φ 1~3cm)
17. 淡黄褐色粘質土
18. 淡褐色土 (φ 1~3cm)
19. 茶褐色土
20. 淡黄褐色土 (粘質土混じり)
21. 暗褐色粘土
22. 暗褐色礫 (黄褐色粘土混じり)
23. 暗褐色粘質土 (淡褐色土混じり)
24. 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土混じり)
25. 褐色土 (黄褐色土混じり)
26. 褐色粘質土
27. 淡黄褐色礫混じり粘質土 (φ 3~5cm多い)
28. 暗褐色粘質土
29. 褐色土
30. 暗褐色土
31. 暗茶褐色土
32. 茶褐色粘質土 (淡黄褐色粘土混じり)
33. 暗褐色土 (φ 1~8cm混じり)
34. 暗灰褐色礫 (φ 1~8cm)
35. 暗灰褐色礫層 (φ 1~3cm, 土器多い)
36. 暗褐色粘質土
37. 暗褐色礫 (φ 1~10cm, 30cmのものも混じる)

第24図 井戸 S E 172 実測図

2.9mで、残存する木製の井戸側を確認した。井戸側は一辺0.8mの方形で、その内側に縦板を据えている。調査できた範囲では、各辺に2~3枚ずつの残存する縦板の一部と横棧を検出したため、縦板組横棧留井戸側と考えられる。検出面から3.3mまで掘削したが、井戸底はこれよりもさらに深く、井戸枠裏込め部分に亀裂が入り崩落する危険性が生じたため、下層への調査を断念した。上層で確認した井戸枠の痕跡と残存する井戸堀形との規模が異なることから、上下2段にわたり井戸堀形が設けられていたものと考えられる。断面観察では標高39.15m付近に土層の堆積状況に変化が認められることから、この付近が境と推定される。内部からは、平安時代前期の無釉陶器・土師器・須恵器を中心に、古墳時代後期や奈良時代後期の土器や少量ではあるが、瓦・磚・風字硯などが出土した。

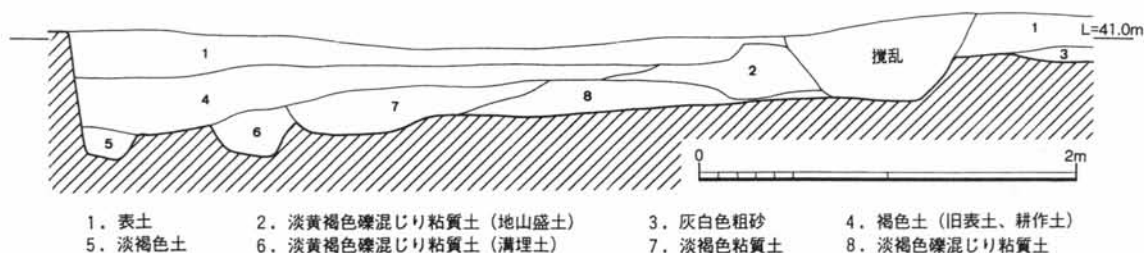
(3) C トレンチ

1) 基本層序(第25図)

トレンチ中央より南側は、大きく現代の攪乱削平を受けている。堆積状況がわかる東壁北端では、表土下約20cmまでがコンクリートを含む現代の盛土、その下層は旧耕作土が約25cm、その下面が地山である黄褐色粘土(部分的に礫を含む)となる。

2) 検出遺構(第23図)

近代の耕作に伴う溝や現代の攪乱が検出されたのみで、遺構は存在しなかった。旧耕土中より、少量の遺物が出土した。



第25図 Cトレンチ東壁土層断面図(部分)

(4) Dトレンチ

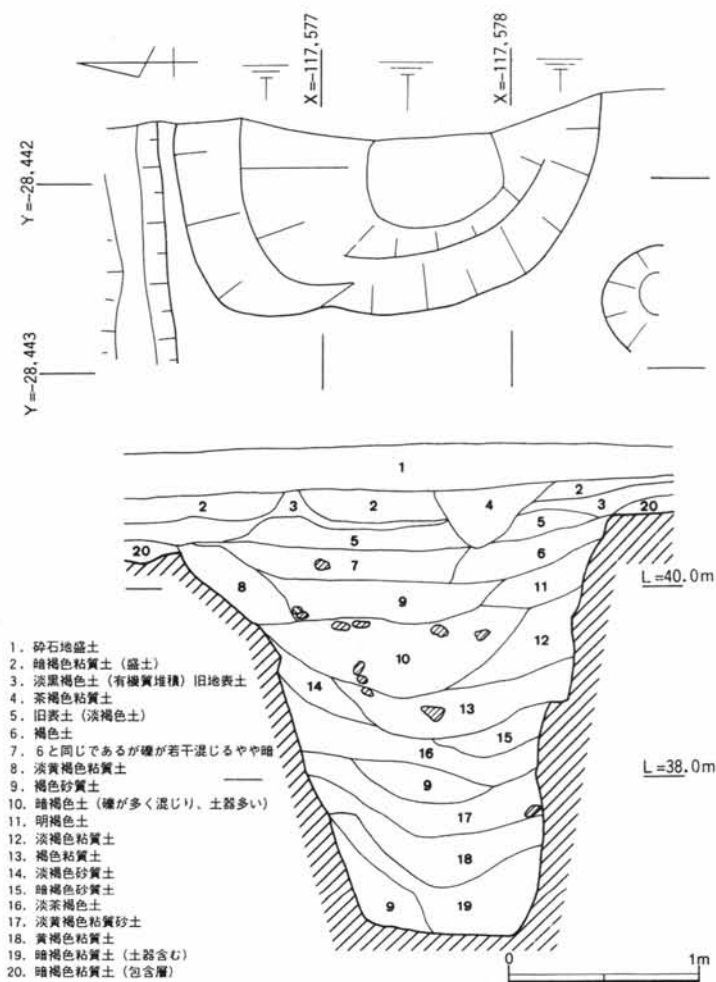
1) 基本層序

井戸 S E 175 東壁で、表土下約30cmまでがコンクリート・産業廃棄物を含む現代の盛土、旧盛土が約10cm、その下に旧地表面(耕作土?)が約10cm、その下層に約15cmの中世遺物包含層が続く。その下面が地山である黄褐色粘土の遺構検出面となり、中央部が最も深く表土下0.88m、南側では0.35mと浅い。全体的に北から南に向かって緩やかな傾斜をなす。北側での遺構検出面の標高は40.9m、南側での遺構検出面の標高は40.84mである。

2) 検出遺構(第23図)

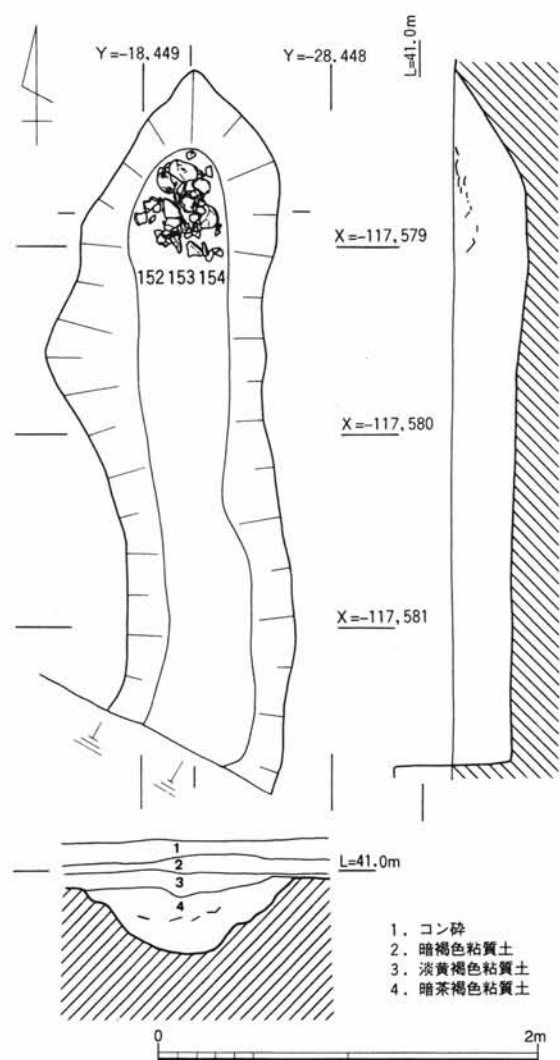
現代の土坑、溝、上下水道管理設溝により、トレンチ中央部より北側は遺構の残存状況が良くなかったが、南側においては現代の攪乱の間をぬって遺構が検出された。古墳時代と考えられる掘立柱建物跡、長岡京から平安時代前期の溝・土坑、平安時代後期以降の井戸を検出した。

井戸 S E 175(第26図) トレンチ東側で検出したもので、約半分が調査地外になる。一辺約2.2mの規模が推定され、深さ2.3mを測る。検出面から2m下層では湧水が顕著であったが、井戸枠は検出されなかった。井戸内から小片化した須恵器・土師器・瓦器が少量出土した。平安時代後期以降のものとは推定される。



第26図 井戸 S E 175 実測図

溝 S D 190(第27図) トレンチ



第27図 溝 S D 190 実測図

南端で検出したもので、南北方向に延びる。検出長3.7m、幅0.9m、深さ0.35mを測る。平成14年度調査で検出されている、溝 S D 03の北側延長部分と考えられる。溝の北端より、土師器皿・甕・杯などの平安時代初期の遺物がまとまって出土した。

溝 S D 218(第28図) 溝 S D 190の西側、井戸 S E 175に切られた溝で、幅0.7m、長さ2.9m、深さ0.38mを測る。埋土から少量の遺物が出土した。昭和53・54年度に調査された溝 S D 2701の延長部分と考えられる。この溝 S D 2701は出土した遺物より長岡京期よりも先行する奈良時代後半の時期が考えられている。この溝中からはフイゴ羽口、鉄滓などが出土している。

土坑 S K 392(第28図) 溝 S D 190の西側、井戸 S E 175に切られた溝 S D 218の下層で検出した土坑で、長さ1.7m、幅1.1mの楕円形を呈し、深さ0.6mを測る。土坑底面より須恵器杯身2と鍛冶滓が出土した。この須恵器杯検出面およびその下面は焼土混じりの土であり、水洗・磁石による内容物の採集を行ったところ、多量の鍛造剥片・粒状滓・鉄塊系(図版第30)の遺物が採

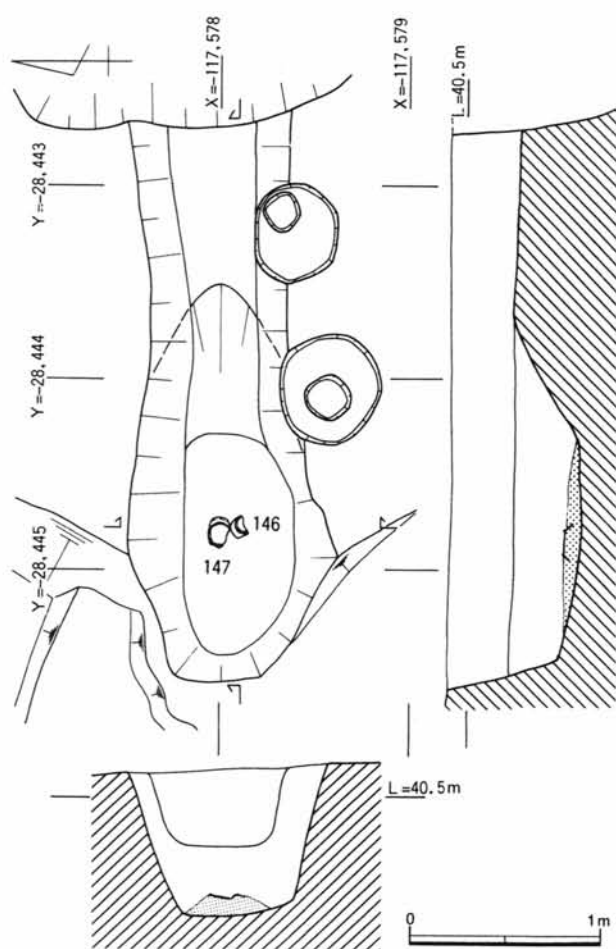
集できた。鍛冶炉、鍛冶炉周辺の土砂を須恵器とともに廃棄したものと考えられる。長岡京期か平安時代前期の時期と考えられる。溝 S D 218の少量の遺物も同時期と考えられ、昭和53・54年度に調査された溝 S D 2701と関連するものであり、同辺に鍛冶工房が存在する可能性がある。

掘立柱建物跡 S B 210(第29図) トレンチ南壁付近で検出した。北西から南西方向の建物跡と考えられ、東西4間(6.5m)分を確認した。南西側に延びていく可能性があり、主軸はN25°Eである。柱穴の掘形はややいびつな楕円形、円形、隅丸方形を呈し、直径0.5~0.55m、深さ0.28~0.37mを測る。遺物が出土しないため時期は不明であるが、すぐ南側の右京第753次調査や周辺の調査で検出されている竪穴式住居跡や掘立柱建物跡と同方向であることから、古墳時代後期の建物跡の可能性はある。

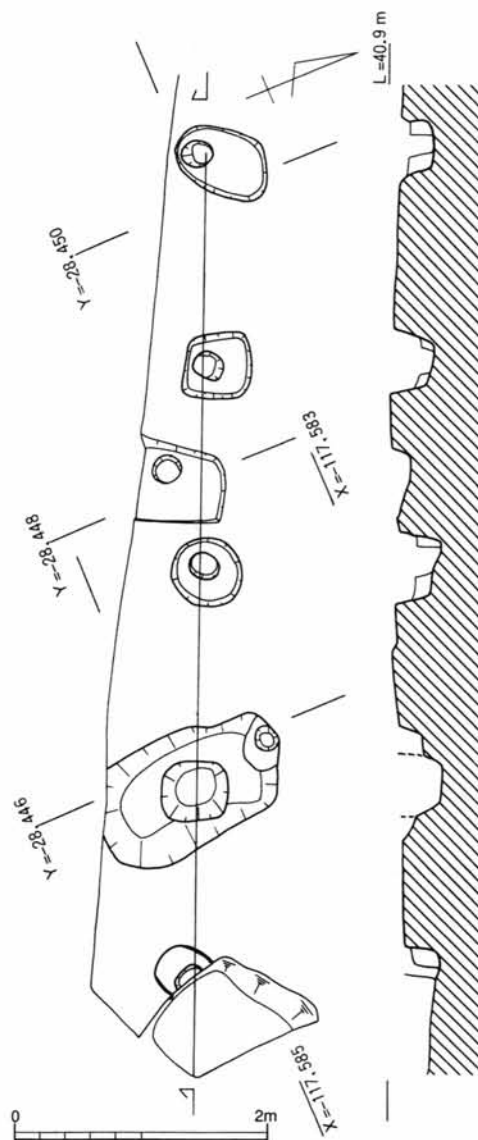
(5) E トレンチ

1) 基本層序(第34図)

トレンチ東側と南端は現代の攪乱が多く存在し、中央部より南側は1段低く竹藪となっていた。トレンチ中央部西壁付近の溝 S D 250付近での堆積状況は、表土下約30cmまでが竹藪の土入れを



第28図 溝 S D218・土坑 S K392実測図



第29図 掘立柱建物跡 S B210実測図

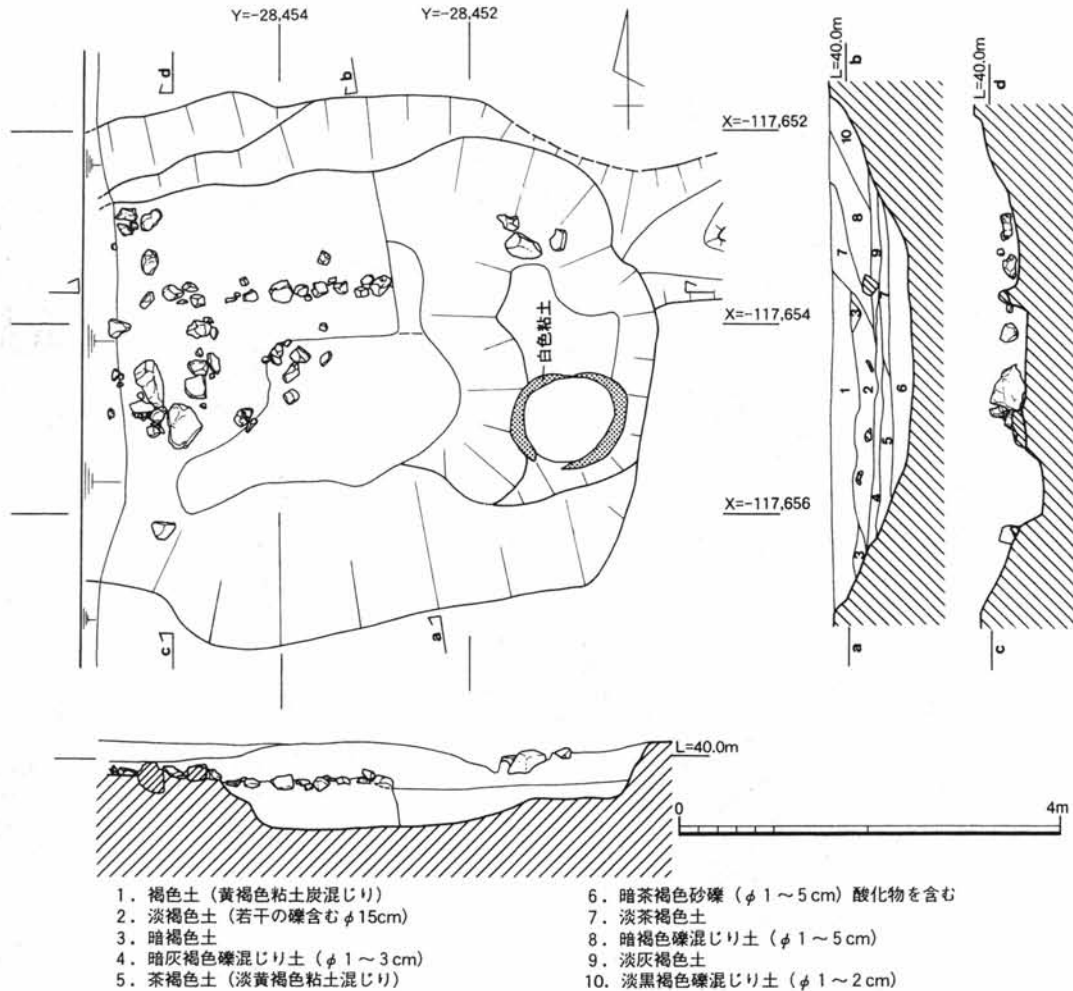
した表土、その下に約30cmの竹林の表土ないし耕作土が約20cm、さらに竹林の土入れか耕作に伴うと考えられる攪乱された褐色礫混じり土が約20cm、さらに20cmの整地層である明灰褐色粘質土が続く。その下に溝 S

D250の埋土が続く。遺構検出面は北から南に向かって緩やかな傾斜をなしているが、中央部より南側は一段低い。北側での遺構検出面の標高は40.65m、南側での遺構検出面の標高は39.91mである。

2) 検出遺構

検出された主な遺構としては、柱穴、土坑、溝、道路状遺構などがある。

S X 231(第30図) トレンチ中央部西壁付近で検出したもので、南北5.8m、東西5.9m、深さ0.9mを検出した。長方形の平面形を呈すると思われるが、西辺が調査地外になる。検出面より0.4m下層で北・西辺は幅1.4cmにわたり「L」字状に盛土による平坦な段が設けられ、この上に平坦面端に沿って石材が並べられていた。この石材、平坦部は中央部より東端まで延びていたが、土層観察溝により消失した。土坑底面には、滞水していたような状態も観察できない。土坑南東角付近には、直径1m程の円形に白色粘質土を貼った浅い土坑状のものが認められた。性格は不



第30図 S X 231実測図

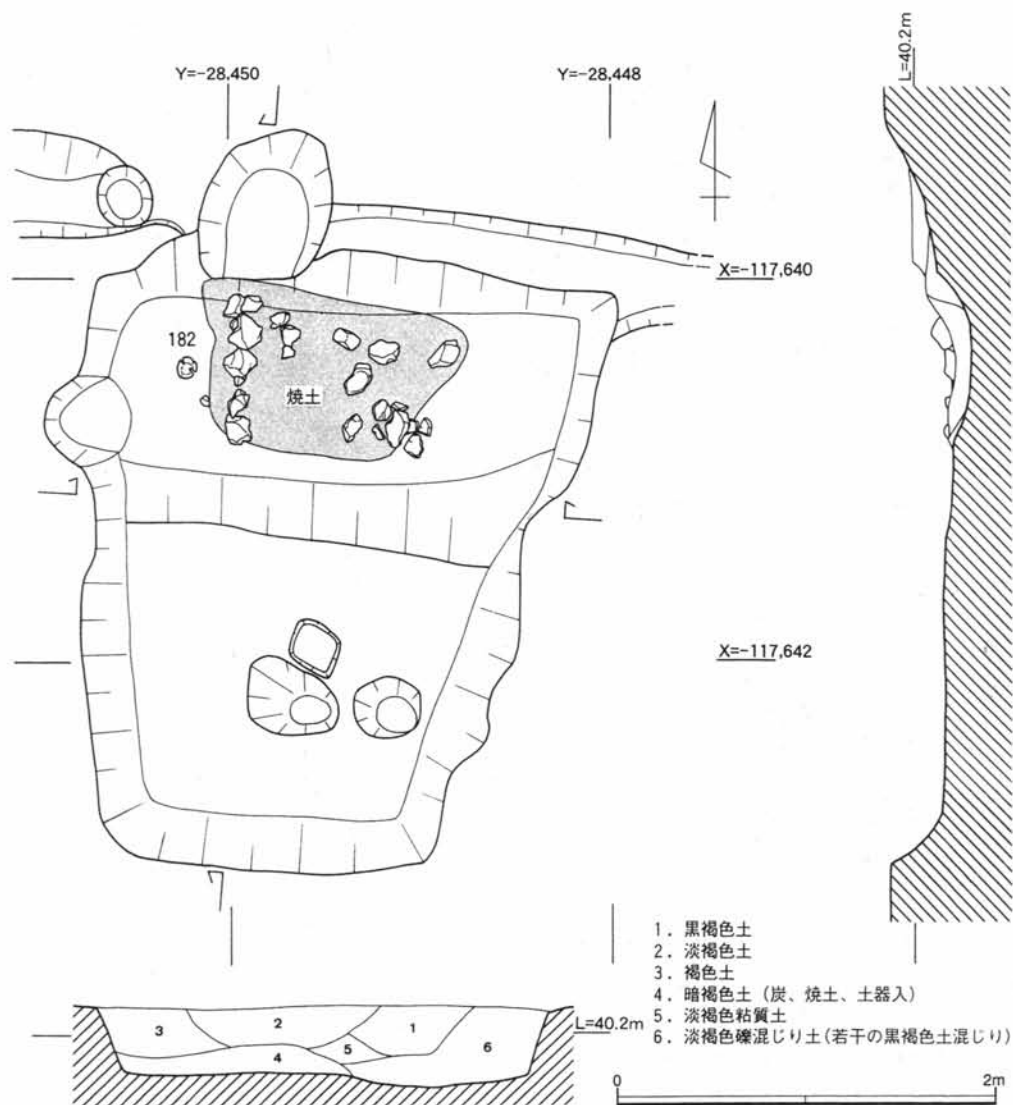
明である。埋土中より多くの土器類が出土したが、14世紀代のものと推定される。

土坑 S K 272(第32図) トレンチのやや北よりの中央部分で検出した。長さ2.15m、幅1.2mの長方形の平面形を呈し、北側半分は南側より1段深く掘り下げられる。南側は検出面から深さ0.3m、北側は深さ0.65mを測る。北側の1段深く掘り下げられた部分から、鉄板を長方形に折り曲げたものと、刀状の鉄板、刀子状の金銅貼り製品が一塊になって出土した。土器が出土していないため、時期は不明である。

土坑 S K 273(第31図) 土坑 S K 272の東側で検出した。東西1.93~2.7m、南北3.26mのやや不整形な長方形の平面形を呈する。北側半分は南側より1段深く掘り下げられる。南側は検出面から深さ0.3m、北側は深さ0.47mを測る。北側の土坑中央付近の北壁寄りでは焼土・炭混じり土の上に石材を配している。土坑外に延びる煙道と考えられる炭混じりの施設を確認した。底面には、柱穴は認められなかった。石材の周辺から出土した土師器皿から14世紀代と考えられる。

S X 231・272・273は同時期と考えられ、関連するものと思われるが性格など明らかでない。

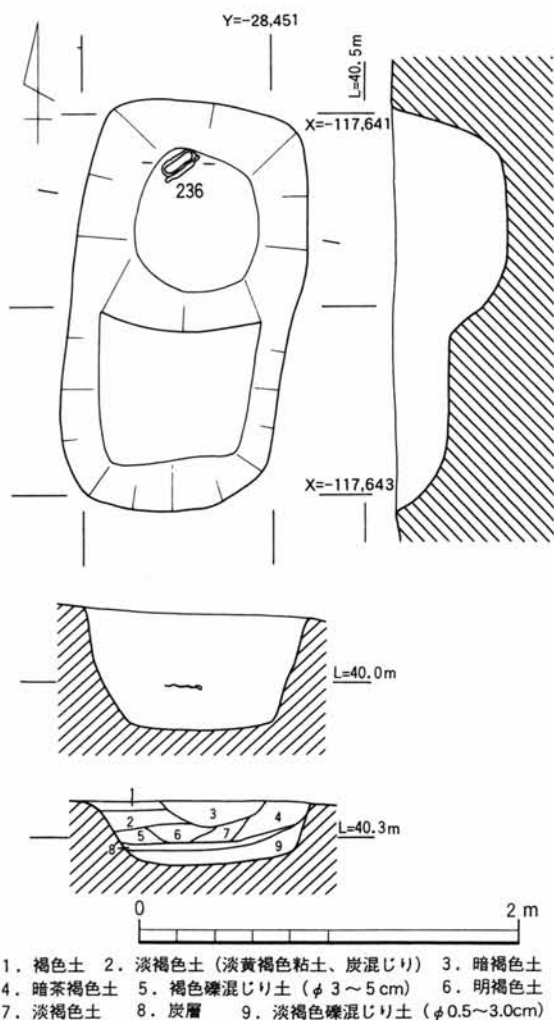
溝 S D 258・274、338・356(第15図) 各溝は平成14年度調査の溝 S D 03・05の南延長部分で、約20mにわたって検出した。幅約0.45~1.8m、途中で途切れたり、横にズレたりして前回調査のように一直線上に伸びていない。また、深さも溝の再利用があったようで、一部深く掘り込ま



第31図 土坑 S K 273実測図

れた部分も確認できた。両溝の中心間の距離は、3.1m～3.4mを測る。Dトレンチで検出した溝 S D 190からの総延長は、約72mになる。この溝はトレンチ中央付近までは検出できたが、それよりも南側は削平されたためか、溝の痕跡を確認することはできなかった。道路状遺構・築地の両側溝などが考えられるが、いずれとも断定できなかった。この溝の時期を確定する遺物は出土していないが、Dトレンチの溝 S D 190の延長部分と推定されることから、平安時代前期と考えられる。北端の右京第772・775次で検出されていた西三坊大路西側溝とこの溝 S D 274の中心間の距離は、約11mである。

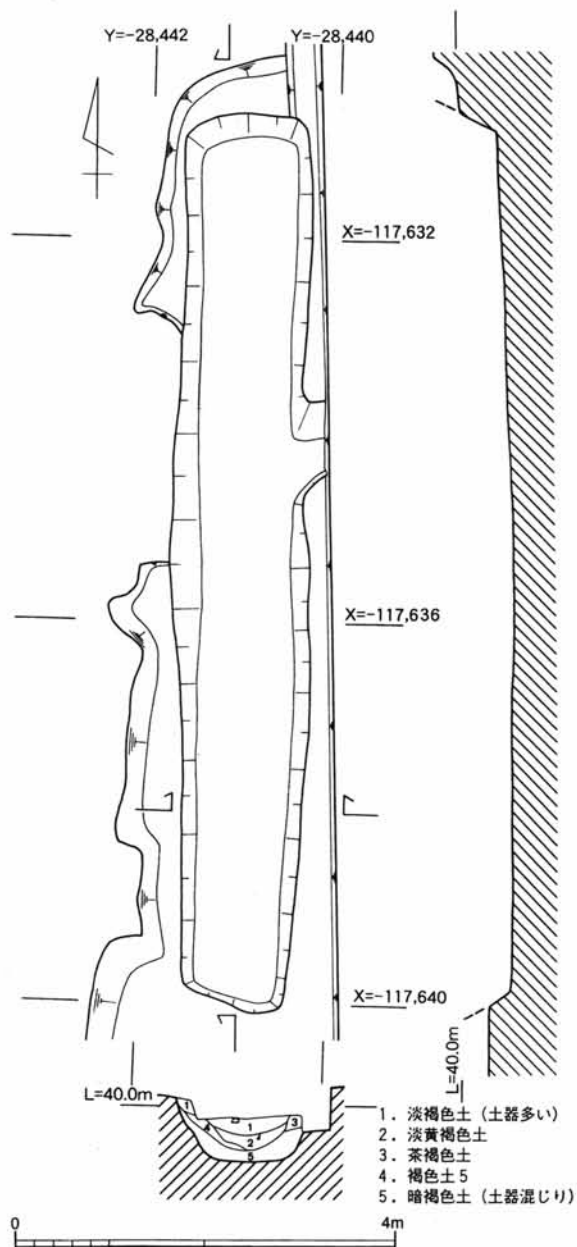
溝 S D 427(第15図) トレンチ東側の攪乱下層より検出した。幅1.2～1.3m、深さ0.65m、検出長9.3mを測る。攪乱で削平された部分も考えると、もともと深さ0.9m以上あったものと推定される。北端近くで東に延びる部分が確認できたが、この溝と同一のものは攪乱により判断できなかった。右京第21・27次調査ではこの延長部分にトレンチが設けられていないため不明である。南端はこれ以上延びて行かず、何らかの区画溝と思われる。出土遺物から平安時代前期と考



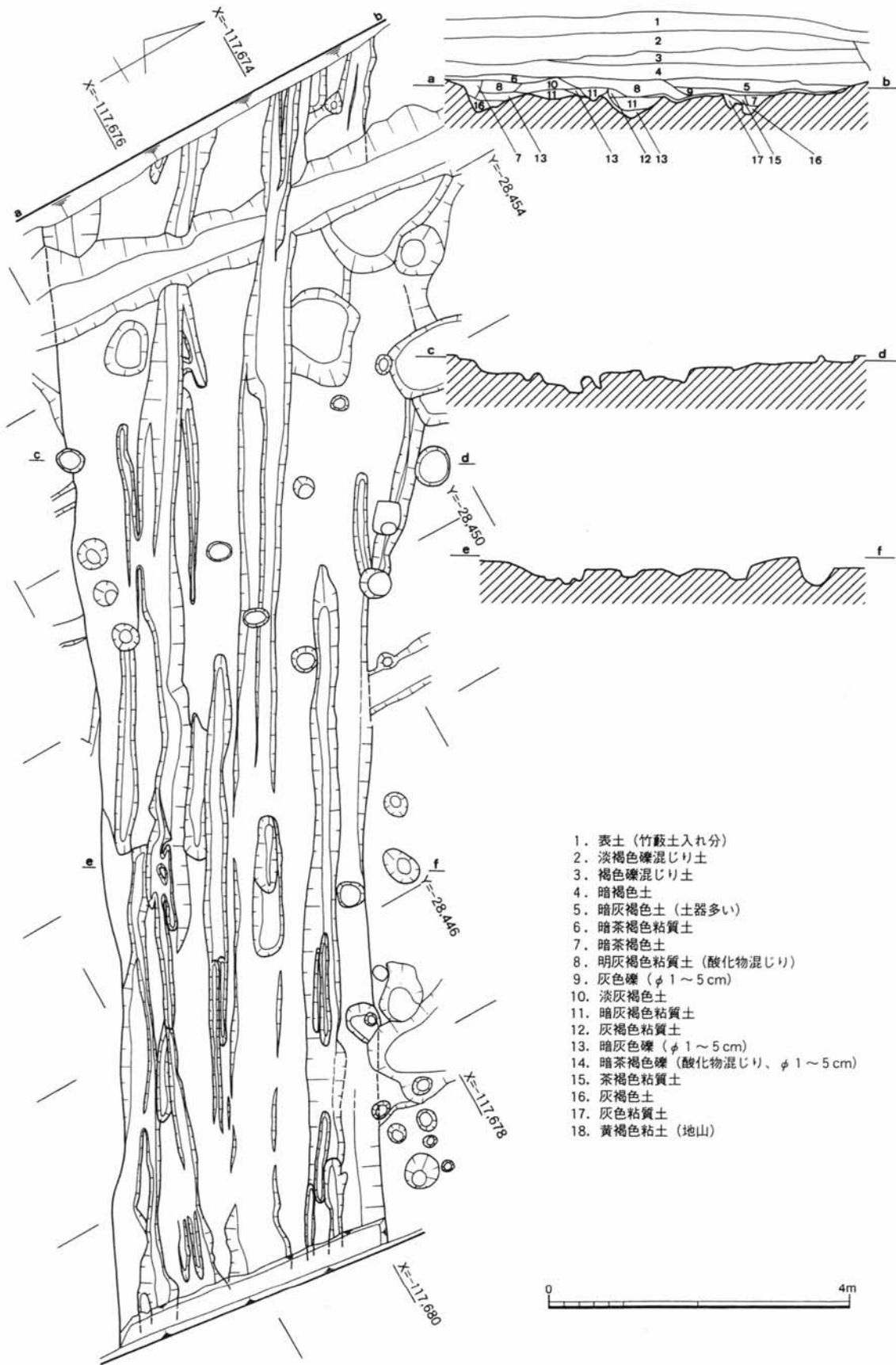
第32図 土坑 S K 272実測図

えられる。溝 S D 258・338、274・356との関連は不明である。

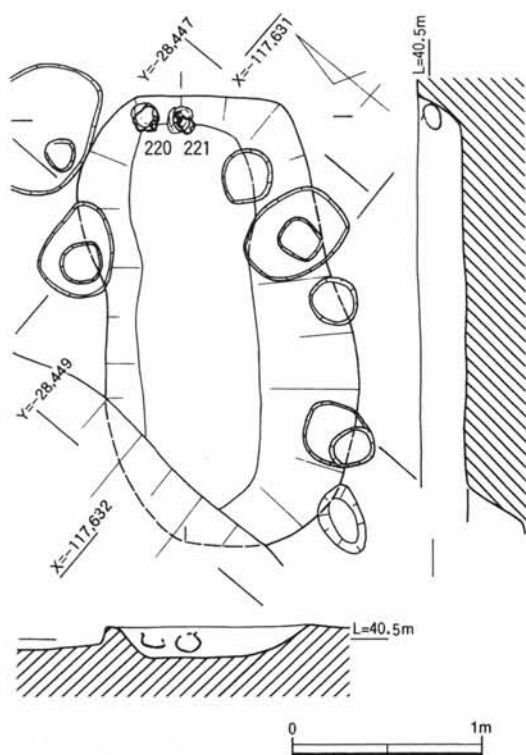
溝 S D 250(第15図) トレンチ南端近くで検出した。北西から南東方向に延びるものである。検出長17m、幅約3.5~4.5mを測る。当初、土馬の出土を見たため溝として調査を行ったが、埋土を除去すると、礫敷きの道路状遺構を検出した。礫検出面には、明瞭な轍痕が数条にわたり認められた。さらに、この礫を除去すると粘土層の地山面でも明瞭な轍痕が認められた。当初、地山上を直接通じていた道路が使用され、悪路となった場所に礫を投入し路面を改良し、使用したものと考えられる。この礫については3~5回の投入が認められる。轍の幅は0.1~0.6mほどあるが、0.1m強と0.3m前後のものが多く、長さは0.8~10m、深さは5cm前後のものが多い。礫層以下地山面までは、遺物が出土していない。使用されていた時期については、検出面では瓦器碗などが認められ、轍検出までの間は長岡京期の遺物が出土した。轍内からは遺物の出土は認められなかった。「井ノ内館」造成以前に使用され、造成に伴い埋められたものと考えられる。



第33図 溝 S D 427実測図



第34図 溝 S D 250 実測図



第35図 土坑 S K 359実測図

冶生産関連遺物など各種におよぶ。

(1) A トレンチ

井戸 S E 02出土遺物(第36～38図) 1・2は土師器皿である。内外面ともナデで仕上げている。平らな底面にやや外反して1cmほどの口縁部を付ける。1は口径9cm、器高1.7cmである。色調は淡橙褐色である。3は土師器杯である。口径14cm、器高3.4cmである。色調は淡橙褐色である。4・5は土師器皿である。5は口径17cm、器高2.2cm、色調は橙茶色である。6は土師器杯である。7は土師器杯である。外面は口縁部ヨコナデ、他はヘラケズリ、内面ヨコナデである。外底面に墨書がある。色調は橙褐色である。口径14cm、器高3.3cmである。8は土師器杯である。口縁部はヨコナデし、他はヘラケズリ、内面はナデを施す。色調は橙色である。口径18cm、器高3.8cmである。9は土師器杯である。色調は橙褐色である。10は土製円盤である。直径3.8cm、厚さ0.5cmで、色調は橙褐色である。11～18は土師器甕である、11は口縁部ヨコナデ、体部外面はハケメである。色調は橙灰褐色である。12～15の口縁部はヨコナデ、体部内外面はハケメを施す。16～18も同様の手法である。16の色調は黄褐色である。19は埴輪である。タガは断面台形である。タガの上下はタテハケを施す。色調は灰褐色である。厚さは約1cmである。20は須恵器甕である。口縁部は回転ナデである。外面は並行タタキ、内面は同心円文タタキである。口径19cmである。色調は青灰色である。これらは一部を除いて長岡京期～平安時代初期である。

21は須恵器杯身である。色調は淡灰色である古墳時代後期である。22・23は須恵器杯Bである。高台は底部端に貼り付けている。色調は灰褐色である。24～28は須恵器杯Bである。25は内外面とも回転ナデを施す。色調は灰褐色である。口径12cm、器高4.2cmである。27は口径14.8cm、器

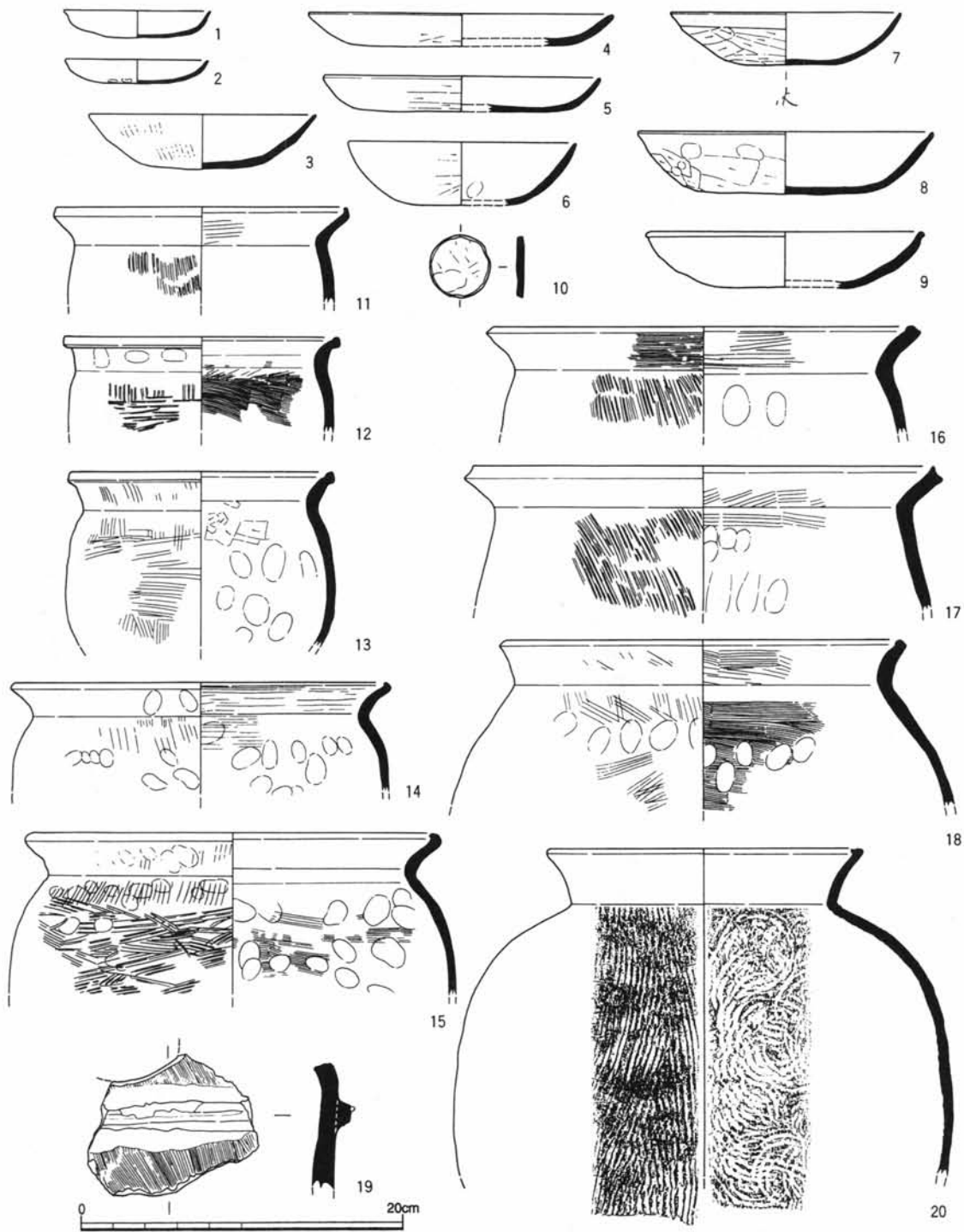
土坑 S K 359(第35図) トレンチ北側の中央部分で検出した。長さ約2.4m、幅約1.2m、深さ0.25mを測り、隅丸長方形の平面形を呈する。南西側の一部を溝 S D 274により切られる。北東側側壁に沿って、短頸壺2個体が出土した。土坑墓であると推定され、古墳時代後期と考えられる。

そのほか、多くの柱穴が検出され、根石が残るものや裏込めに瓦・土器を入れたものも認められたが、建物跡を特定することができなかった。

(増田孝彦)

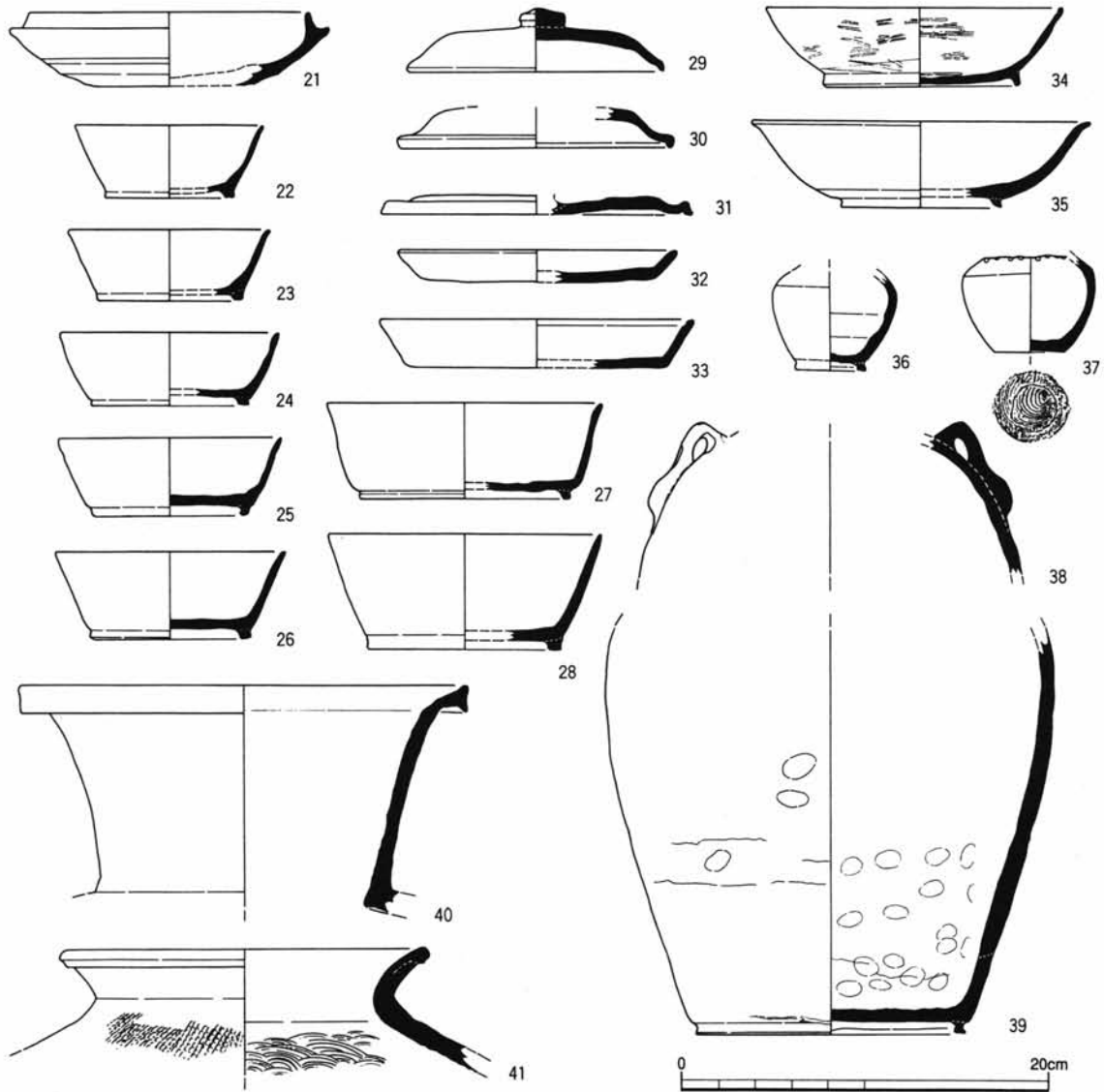
3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器、埴輪、瓦、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、無釉陶器、瓦器、青磁、中世陶器、土製品、フイゴ羽口、鉄器、鉄製品、銅製品、石製品、鍛



第36図 Aトレンチ井戸S E02出土遺物実測図(1)

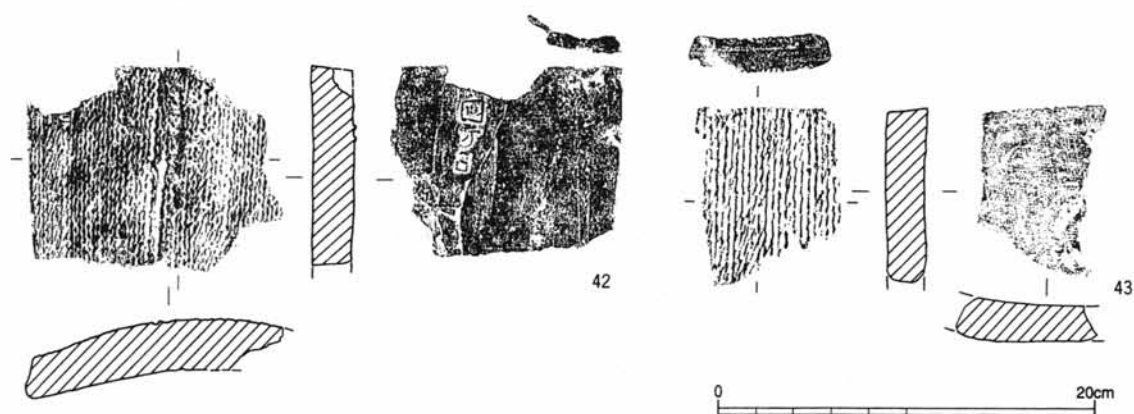
高5.2cmである。28は口径14.6cm、器高6.3cmで、色調は灰褐色である。29～31は須恵器蓋である。29は口径13.8cm、器高3.5cm、色調は青灰色である。宝珠つまみを付けている。32・33は須恵器皿である。平らな底面に短く外反する口縁部を付けたものである。内面は回転ナデ、外底面は未調整である。色調は淡灰色である。口径15cm、器高1.7cmである。33は32と同様のプロポーシオンで、大型である。34は黒色土器碗A類である。内外面ともミガキを施す。高台は貼り付けである。35は灰釉陶器である。内面は施釉、外面は露胎である。高台は貼り付けである。釉調は濃緑



第37図 Aトレンチ井戸SE02出土遺物実測図(2)

色で、素地は淡灰色である。口径18.4cm、器高4.6cmである。36は須恵器壺Lである。高台は貼り付けで、底部端に付けている。色調は灰色で、底径3.8cmである。体部は卵形で、最大径は6.6cmである。37は須恵器の壺である。36と同様のプロポーションだが、底部は糸切りである。底径3.7cm、体部最大径は7.2cmである。38は須恵器壺である。丸い肩部に退化した把手を付けている。体部内外面ともナデを施す。色調は淡灰色である。現在の体部最大径は19.8cmである。39は須恵器甕である。体部内外面ともナデで仕上げている。下半はユビオサエである。高台は貼り付け底部端に付けている。色調は灰色で、底径は14.5cmである。40は須恵器壺である。口縁部のみ遺存している。口径は24.1cmである。色調は淡灰褐色である。41は須恵器甕である。「く」の字状の単純口縁をもつ。体部外面は平行タタキ、内面は同心円文タタキである。口径19.2cm、色調は青灰色である。これらは一部を除いて平安時代初期である。

42は平瓦である。凸面は縄タタキ。凹面は布目である。瓦端は一面が残っている。内面には「国万呂」との刻印がある。文字部分は木板などに彫り、それを刻印したものである。「国」の字

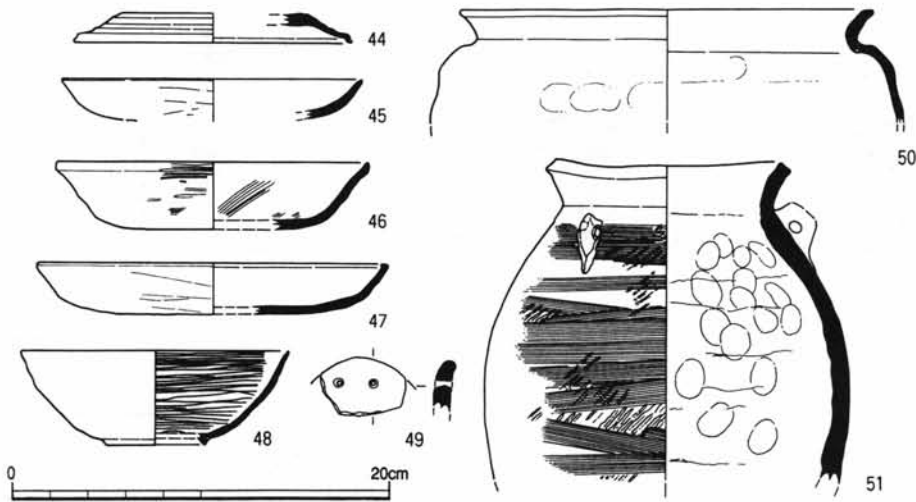


第38図 Aトレンチ井戸SE02出土瓦実測図

は、「王」の部分は剥落していたものの、「、」は残っていた。また、「万」は特徴的な字形である。これらの特徴を備えたものは恭仁京跡でも出土しており、また、平城京跡でも出土しており、奈良時代中期の瓦が再利用されたと考えられる。焼成は良で、色調は凸面が暗灰色、凹面が灰褐色である。胎土には長石、石英を含む。43は平瓦である。凸面は縄タタキ、凹面は布目が残る。色調は淡褐色である。瓦端は一面が残っている。

そのほかの出土遺物(第39・40図) 44は須恵器蓋である。土坑SK16から出土した。天井部は扁平で、口縁端部はゆるやかに屈曲する。色調は青灰色で、口径14.6cmである。45は土師器皿である。土坑SK51から出土した。色調は橙色で、口径は15.8cmである。46は土師器杯である。SP63から出土した。内外面ともミガキを施す。色調は淡橙色である。口径16.2cm、器高3.5cmである。47は土師器皿である。外面はヘラケズリ、内面はナデである。色調は淡橙褐色である。口径18.2cm、器高2.6cmである。48は瓦器碗である。SP142から出土した。内面には密なミガキを施す。外面は不明である。内外面とも黒灰色である。口縁端部内面には一条の段をもつ。大和型である。高台は断面三角形で、貼り付けである。口径14cm、器高5cmである。49はSH121から出土した土製の円盤で、円孔が2か所ある。直径は0.5cmである。円盤はやや反っており、あるいは蓋かもしれない。色調は淡灰褐色である。最大長4.5cm、最大幅3.1cmである。50は土師器甕である。SP72より出土した。口縁部は「く」の字に屈曲する単純なものである。ヨコナデを施す。体部外面はユビオサエのため凹凸がある。口径12.6cm、色調はこげ茶色である。51は須恵器三耳壺である。二耳が残存している。口縁部は「く」の字に外反する。端部はすぼまらず、肩部と同じ厚さである。ナデを施す。体部外面は平行タタキ後ナデ消す。内面はユビオサエである。口径12cm、現存長16.9cmで、色調は灰色である。中国越山窯青磁を模倣したものと考えられる。

52は縄文土器深鉢である。土坑SK04より出土した。外面全面に縄文を施す。ところどころにヘラ状で沈線を施す。上部には粘土を貼り付け突起文としている。一部の突起は外周が高く、中を窪ませたものもある。厚さは0.7~0.8cm、色調は茶褐色系である。縄文時代中期である。53は縄文土器である。土坑SK117より出土した。底部は平底で、ナデである。体部は直線的に外開きになっている。ナデを施す。底径10.2cmで、色調は黄褐色である。底部の厚さは1cm、体部の

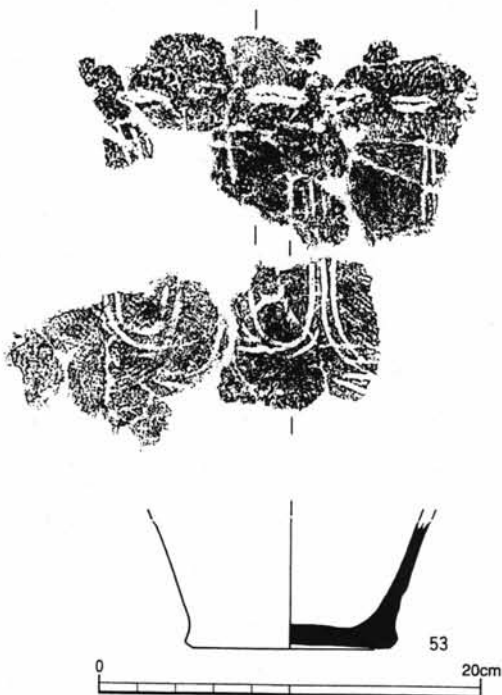


第39図 Aトレンチ出土遺物実測図

厚さは0.7cmである。

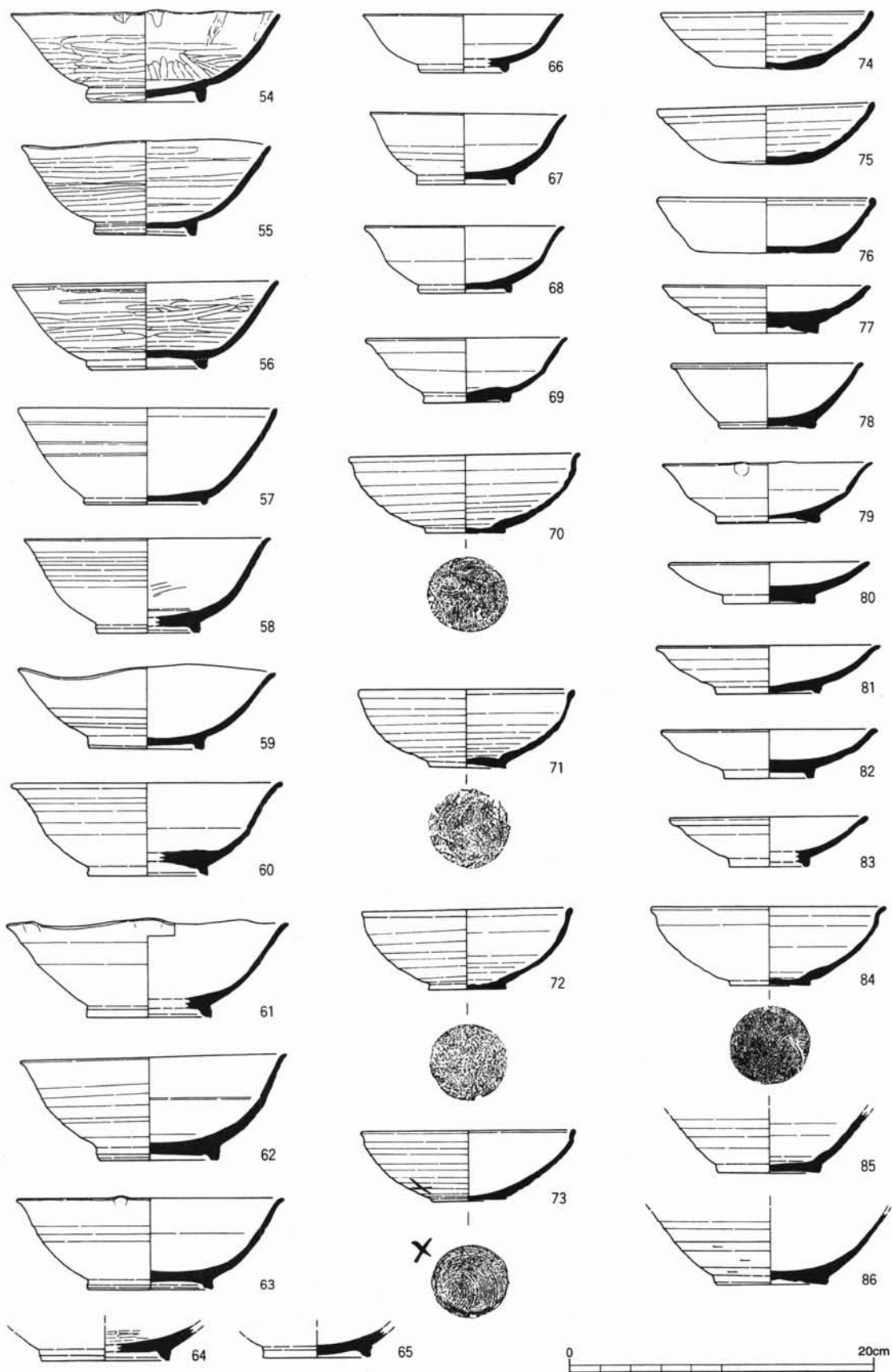
(2) Bトレンチ(第41~44図)

井戸SE172 平安時代前期の須恵器・土師器のほか、施釉陶器・黒色土器・風字硯・磚などが出土した。54は無釉陶器輪花椀である。内外面ともミガキを施す。削り出し高台である。高台の高さは1cmである。輪花はヘラ状のものを、縦方向に口縁部内面に当てて、外側に押し出したものである。内面には20cmほどの刻みが入り、外面には0.7cmほどの突起が生じている。口径は、17.6cm、器高は5.9cmである。色調は灰褐色で、胎土は密で1mm以下の長石や黒色砂を含む。55は無釉陶器椀である。内外面ともミガキを施す。削り出し高台である。56は無釉陶器椀である。プロポーシオンや調整手法は(55)と同様である。57は無釉陶器椀である。平らな底部に、直線的



第40図 Aトレンチ出土縄文土器実測図

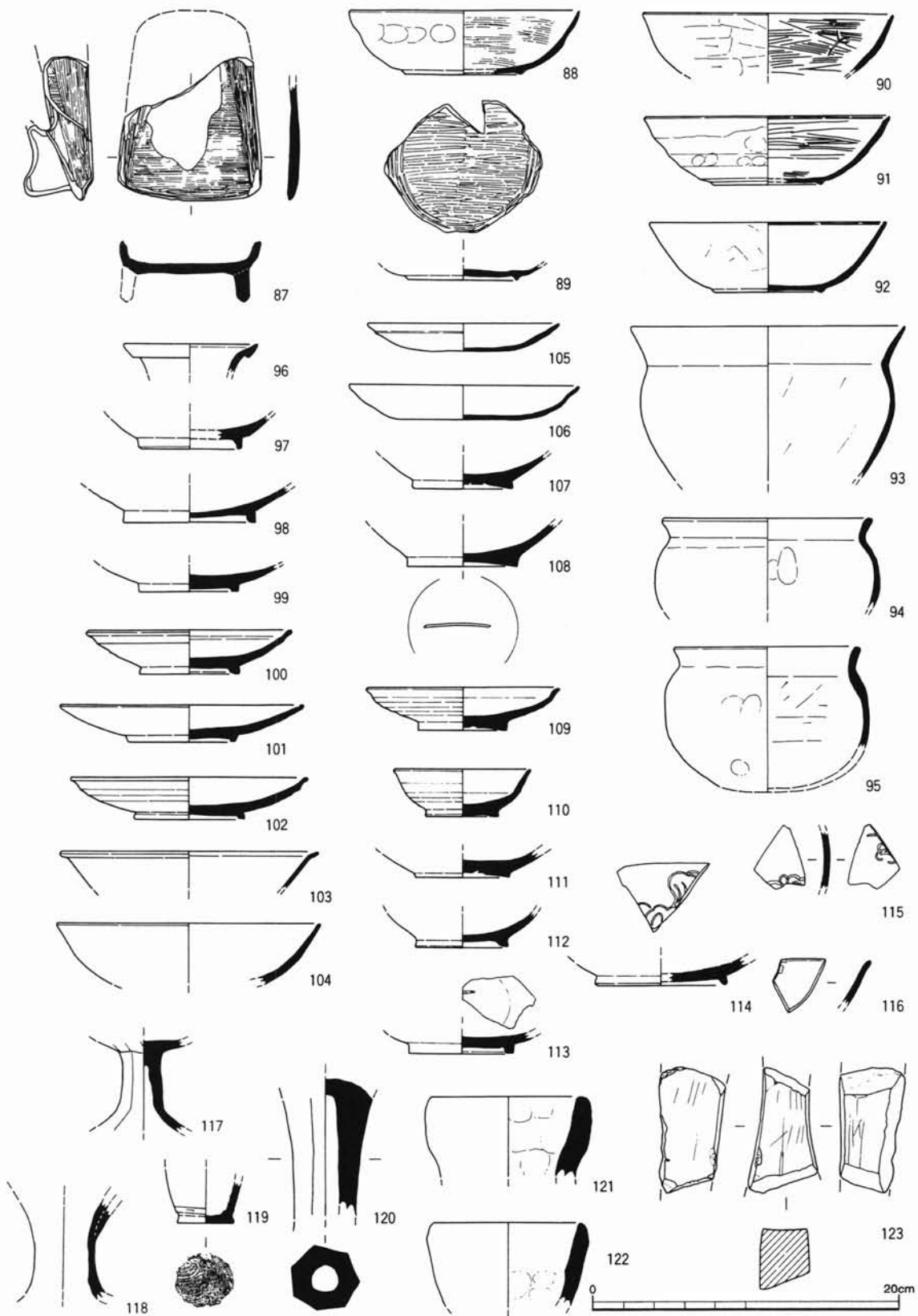
に外反する体部をもつ。削り出し高台である。口径は17.0cm、器高は6.2cmである。58は無釉陶器椀である。口縁部は小さく外反する。口径は16.2cm、器高は6.3cmである。色調は黄灰色である。59は無釉陶器椀である。口縁部は小さく外反するが、焼成の際に体部は大きく歪んでいる、色調は灰色である。60・62は無釉陶器椀である。体部中位が「く」の字に屈曲している。色調は暗灰色である。61・63は無釉陶器椀である。ヘラ状のもので輪花としている。64・65は無釉陶器椀で、底部のみ遺存している。体部内面にはミガキを施す。66~69は無釉陶器椀である。小型の椀である。66は口径13.2cm、器高は3.9cmである。削り出し高台で、色調は灰褐色である。70~73



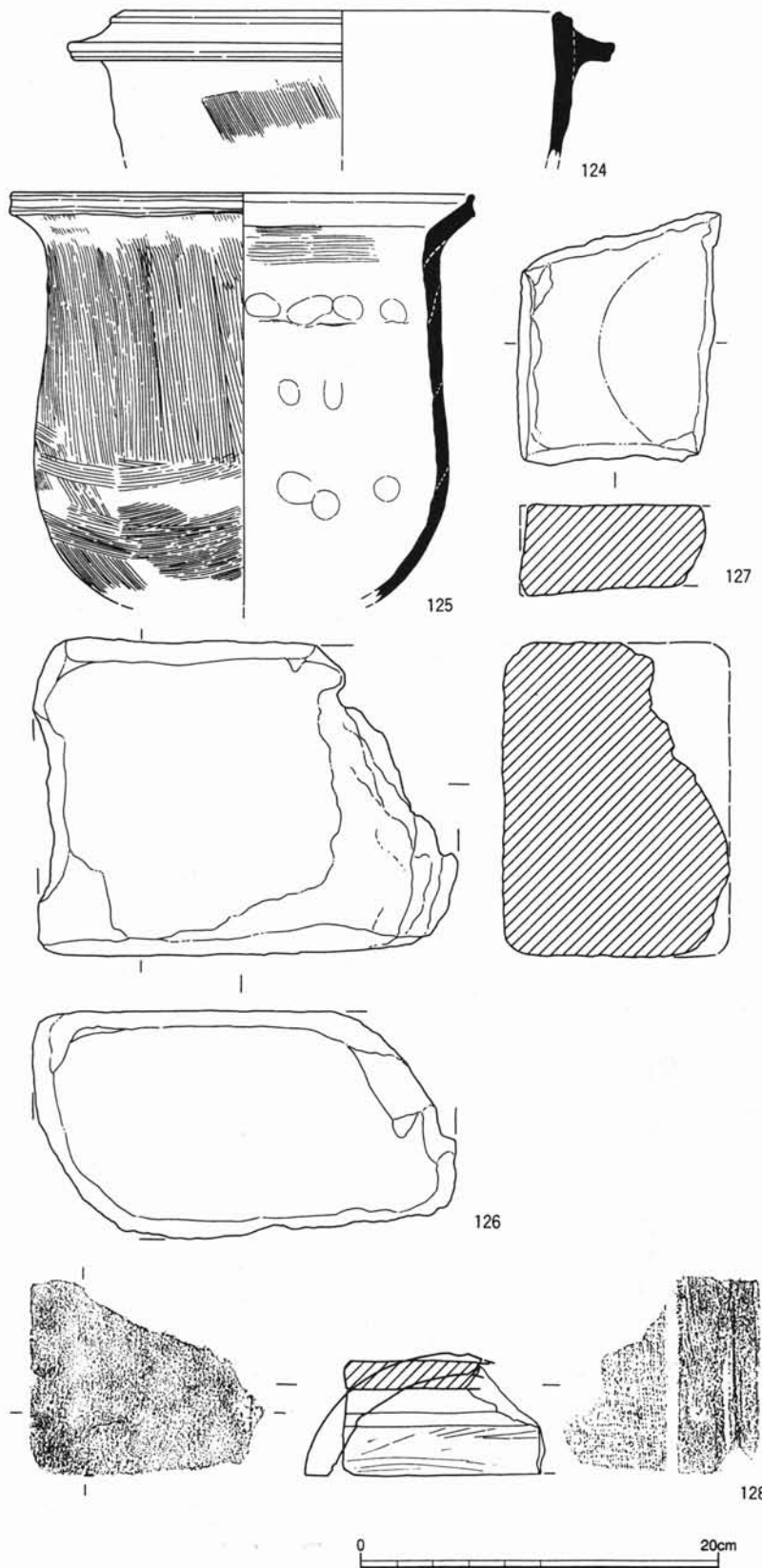
第41図 Bトレンチ井戸SE172出土遺物実測図(1)

は無釉陶器碗である。口縁部は小さく「く」の字に外反する。内外面とも回転ナデで、一気に仕上っている。底部は糸切りである。胎土は緻密で、色調は明灰色である。73は体部外面下半に「十」の墨書がある。74・75は須恵器杯である。ミガキは施さない。内外面とも回転ナデである。74は口径13.9cm、器高は3.9cmである。76は須恵器杯である。色調は黄灰白色である。平底に外開きの体部がつく。77は無釉陶器皿である。内外面ともミガキを施す。底部は削り出し高台である。色調は灰褐色、胎土は緻密である。口径は13.6cm、器高は3.2cmである。78は無釉陶器碗である。平高台に直線的に外開きになる器形である。口縁端部は小さく外反する。色調は灰褐色で、口径12.6cm、器高は4.2cmである。緑釉陶器の器形である。79は無釉陶器碗である。底部は削り出し高台で、体部中位は屈折している。そこから口縁部にかけて外反している。輪花を施す。80・81は無釉陶器皿である。底部は平高台で、体部は低く外反する。内外面ともミガキを施す。82は無釉陶器皿で高台は削り出しである。口縁部は小さく外反する。83は無釉陶器皿である。削り出し高台である。色調は灰色、口径は13cmである。84は無釉陶器碗である。底部は糸切りで、体部は丸みを帯び、口縁部は「く」に字に小さく外反する。色調は黄灰色で、口径は15.3cm、器高は5.1cmである。85は須恵器鉢である。底部は糸切りで、直線的に外開きになる器形である。色調は暗灰色である。86は須恵器碗である。底部は平底で、体部下半はヘラケズリを施す。

87は黒色土器の風字硯である。上端は欠損している。内外面とも黒灰色である。下端の幅は、9.5cm、現存長は9.4cmである、表面は横方向にミガキを施している。側面および裏面もミガキを施す。裏面端付近2か所に脚を付けている。脚は台形で、接地面は面取りし、中央部が弯曲している。88は黒色土器碗A類である。内面は黒色、外面は淡褐色で、口縁部付近は黒色である。内面にはミガキを施す。外面はナデである。口径15cmである。89は黒色土器碗A類、底部のみ遺存している。見込みには横方向にミガキを施す。高台は貼り付けである。90は黒色土器B類である。内面はミガキ、外面はヘラケズリである。91は黒色土器B類である。92は黒色土器碗A類である。調整は表面が磨滅していて不明である。93～95は土師器甕である。93の内面はヘラケズリ、外面は磨滅のため不明である。口径は18cm、色調は赤橙色である。96は須恵器壺の口縁部である。軟質で色調は淡灰色である。97は須恵器碗底部である。内外面ともナデを施す。色調は灰色である。98は無釉陶器碗である。内外面とも回転ナデを施す。高台は削り出しである。胎土は密で、微砂粒を含む。色調は暗灰色である。99は無釉陶器皿である。内外面ともミガキである。高台は削り出し、色調は灰色である。100は無釉陶器皿である。内外面ともミガキを施す。高台は削り出しである。口径13.2cm、器高3cmである。胎土は密で、色調は黄灰色である。101は無釉陶器皿である。内外面ともミガキを施す。102は東海系灰釉皿である。内面は施釉、外面は露胎で、ナデを施す。色調は淡灰色である。口径15.6cm、器高2.7cmである。103は緑釉陶器碗である。口縁部は小さく外反する。内外面とも施釉である。釉調は明緑色で、素地は灰色である。いわゆる硬陶である。104は緑釉陶器碗である。内外面とも施釉である。釉調は淡緑色で、素地は桃褐色である。105は土師器皿である。内外面ともナデを施す。口径12.6cm、器高1.8cmである。口縁部は緩く屈曲する。色調は淡茶色である。106は土師器皿である。口縁部をヨコナデすることにより、緩く

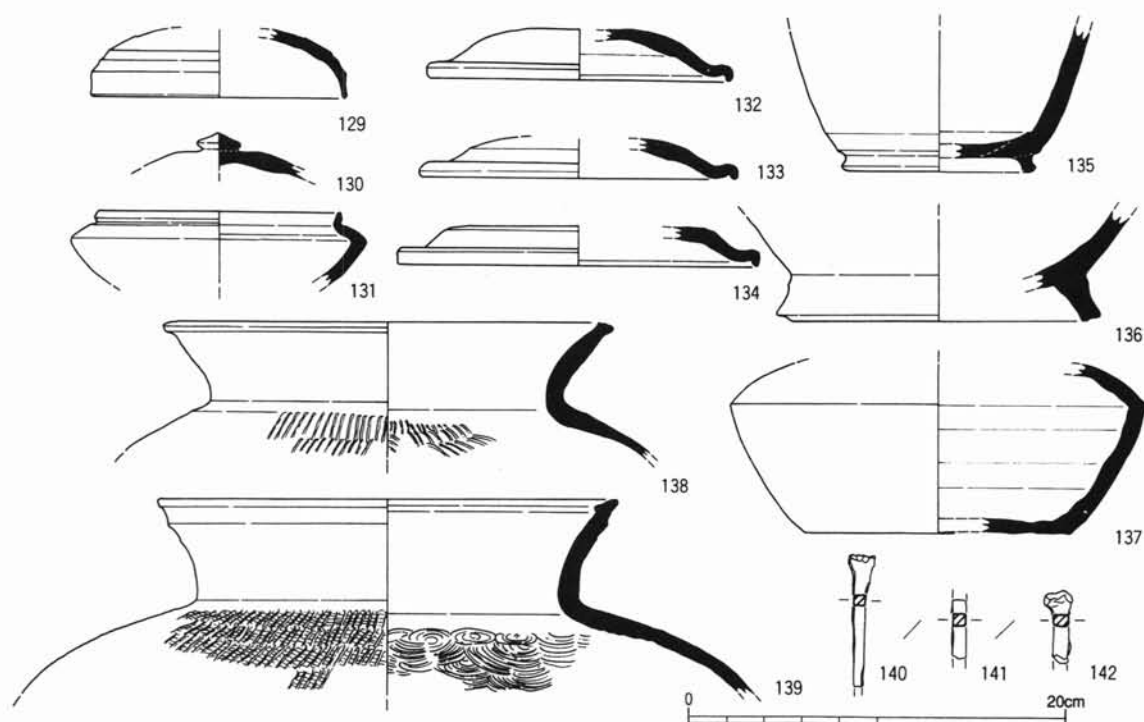


第42図 Bトレンチ井戸S E 172出土遺物実測図(2)



屈曲している。口径15cm、器高2.3cmである。色調は淡茶色である。107は無釉陶器碗である。内外面ともミガキを施す。高台は削り出しである。色調は暗灰色である。108は無釉陶器碗である。内外面ともミガキを施す。外底面に線刻がある。109は無釉陶器皿である。口縁部は緩く外側に屈曲している。内外面ともミガキを施す。色調は青灰色である。口径12.4cm、器高2.8cmである。110は緑釉陶器皿である。内外面とも施釉である。底部のみ露胎である。釉調は淡緑色で、素地は灰色である。口径8.9cm、器高3.1cmである。113は緑釉陶器碗である。見込みに陰刻がある。高台部分以外は施釉している。釉調は淡黄緑色で、素地は灰色である。114は無釉陶器皿である。見込みに陰刻花文がある。底部は削り出し高台である。色調は灰褐色で、胎土は1mm以下の長石、チャートを含有する。硬質である。115は緑釉陶器碗である。体部片のみで、内面に陰刻花文を施す。内外面とも施

第43図 Bトレンチ井戸SE172出土遺物実測図(3)

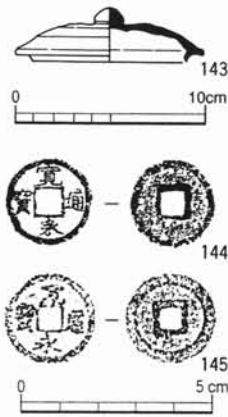


第44図 Bトレンチ井戸SE172出土遺物実測図(4)

釉し、釉調は渋い緑色である。素地は灰色で、硬質である。116は緑釉陶器碗である。口縁部片である。内外面とも施釉し、釉調は淡緑色で、素地は灰色で、いわゆる硬陶である。117は土師器高杯である。筒部は7面に面取りされている。色調は淡茶灰色である。杯部はナデで仕上げている。118は中国越州窯青磁壺である。頸部のみで把手の付け根部分が残存している。外面は施釉され、釉調は淡緑灰褐色である。胎土は密でしまっている。最小径は3.9cm、現存長は6.9cmである。119は須恵器壺Gである。底部は糸切りで、体部下半は回転ナデである。内面は一気に回転作用で引き上げた凹凸がある。色調は灰色である。120は土師器高杯の筒部上半である。杯部は欠損している。7面に面取りされている。色調は淡赤褐色である。121・122は製塩土器である。いずれも上半のみ遺存している。外面はナデ、内面はユビオサエである。外形は急角度の逆台形で、厚さ1cm以上と分厚い。色調は淡茶色～淡黄褐色で、胎土に1mm以上の長石、石英を含む。123は砥石である。砥面は3面で、色調は淡黄褐色である。残存長は8.3cm、残存幅は4.3cm、厚さは4.5cmである。これらの遺物は平安時代前期である。

124は土師器羽釜(甕)である。円筒形の口縁部直下に鑿を付けたものである。口径は23.8cm、体部外面にはタテハケを施す。色調は淡茶褐色で、外面には煤が付着している。平安時代初期である。125は土師器甕である。円筒形の体部に短く外反する口縁部をつけたものである。体部外面にはハケメ、内面上部がヨコハケ、その下はユビオサエである。色調は黄茶褐色である。126は罎である。焼成は軟、色調は黒ずんだ淡褐色である。2辺が残存している。現存長は23.6cm、現存幅は17.6cmである。127は罎である。色調は茶色と黄褐色で、断面は淡黄色である。128は丸瓦である。凸面はタタキ後ナデ消し。凹面は布目を施す。

129は須恵器杯蓋である。古墳時代後期。130は宝珠つまみのある須恵器杯蓋である。飛鳥時代。



第45図 Cトレンチ
出土遺物実測図・拓影

131は須恵器壺である。132～134は須恵器蓋である。奈良時代後期～長岡京期である。135は須恵器壺である。体部外面は回転ナデ、内面はナデ、貼り付け高台である。色調は暗灰色である。136は須恵器壺である。貼り付け高台を施す。底径は15cmである。137は須恵器壺である。古墳時代後期。138・139は須恵器甕である。138は口径22cmである。体部外面羽平行タタキ、内面は同心円文のタタキである。140～142は鉄釘である。

(3) Cトレンチ(第45図)

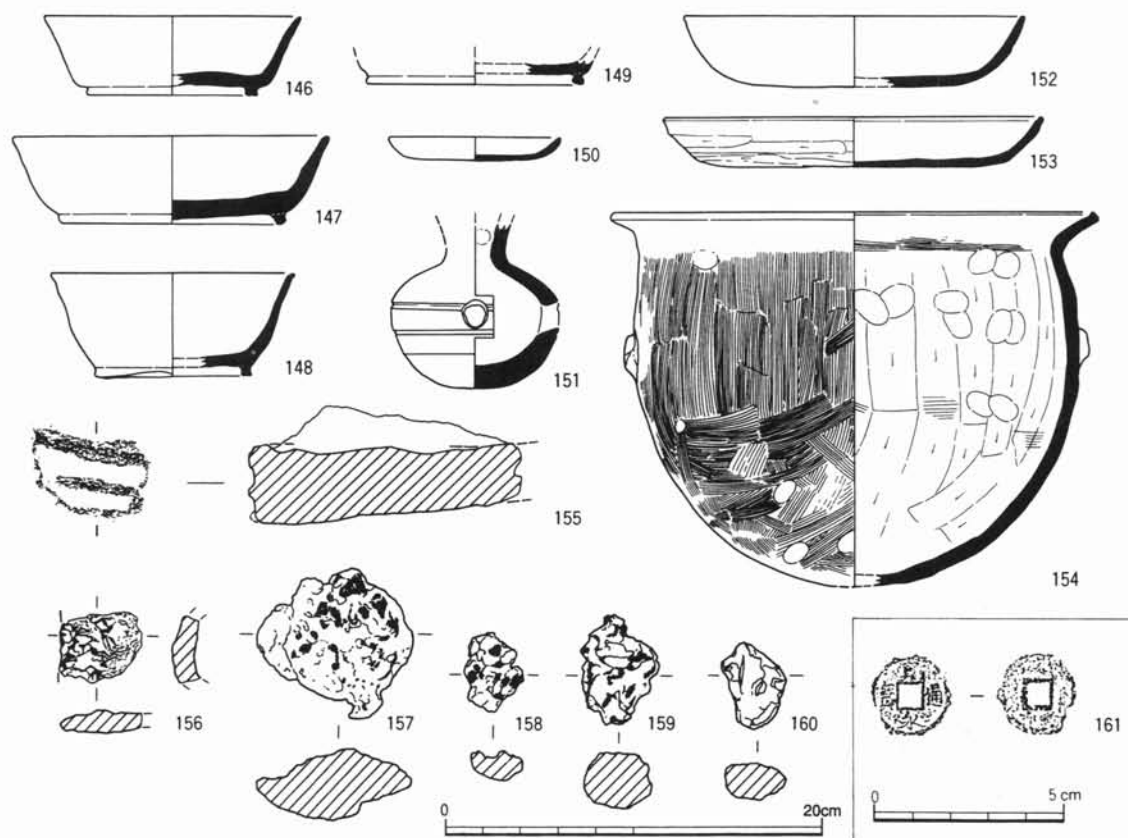
143は須恵器杯蓋である。退化した宝珠つまみを付けたものである。上半は回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデである。時期は飛鳥時代である。144・145は銭貨で、寛永通寶である。

(4) Dトレンチ(第46図)

146～149は須恵器杯B類である。146・147は溝S D218から出土した。長岡京期～平安時代初期である。148は貼り付け高台が底部端にあり、平安時代前期である。149はS P 216から出土した。長岡京期～平安時代初期である。150は土師器皿である。口径9cmで色調は淡褐色である。151は須恵器臚である。古墳時代後期。152は土師器杯身である。溝S D190から出土した。口径は17.8cm、器高3.8cmである。色調は短黄褐色である。153は土師器皿である。溝S D190から出土した。口径は19.5cm、器高2.7cmで、色調は橙褐色である。体部下半はヘラケズリ、他はナデを施す。154は土師器甕である。溝S D190から出土した。半球形の体部に短く外反する口縁部を付けたものである。2か所に把手を付けているが、ほとんど欠損している。体部外面はハケメ、内面はヘラケズリを施す。色調は茶褐色である。155は軒平瓦である。重弧文である。軟質で文様の一部が残存しているに過ぎない。156・157・159・160は鉄滓である。158はふいごの羽口である。156～158は溝S D218から出土した。161は銭貨である。寛永通寶である。攪乱層から出土した。

(5) Eトレンチ(第47図)

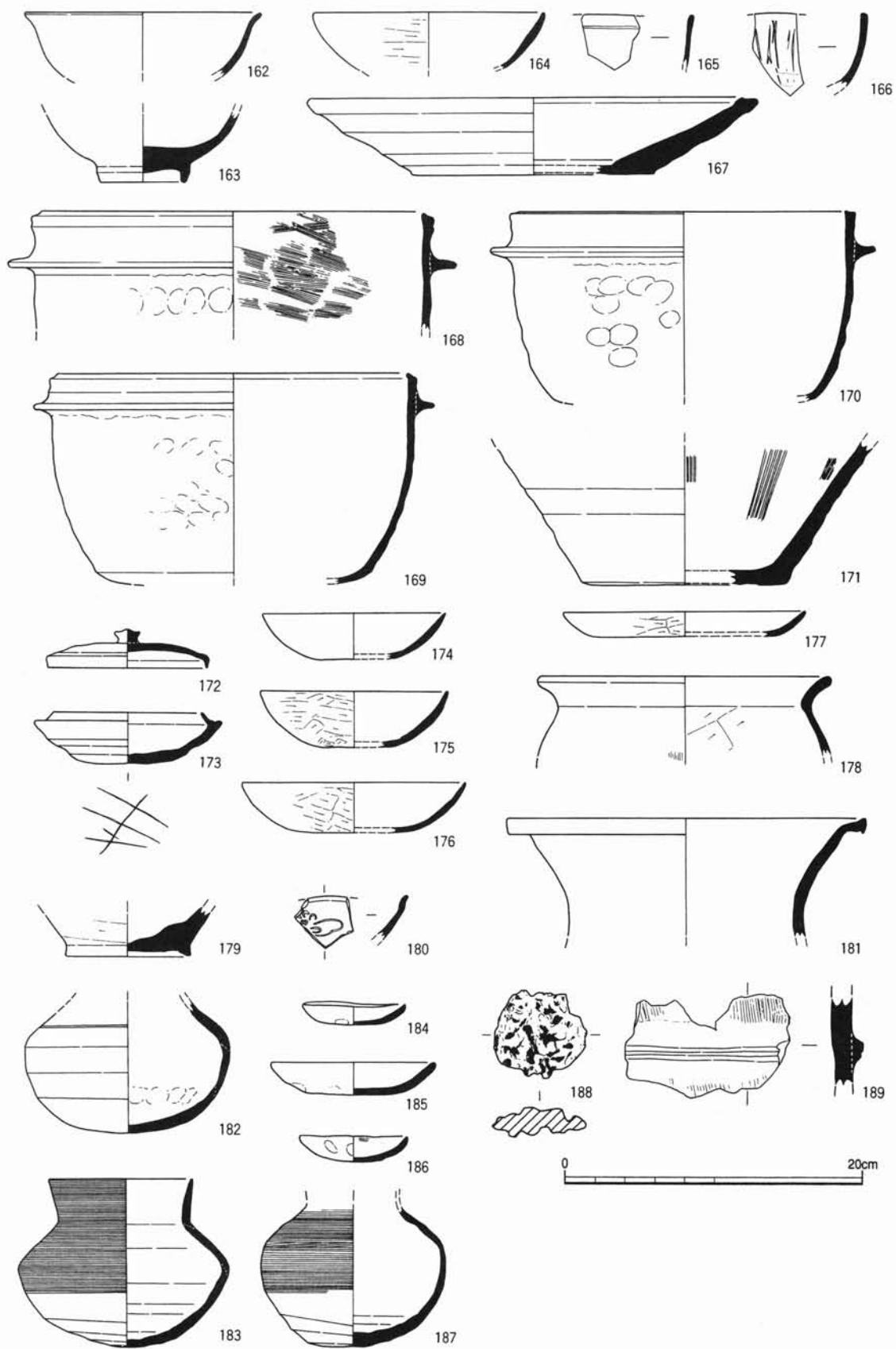
162～171はS X 231出土である。162・163は青磁碗である。竜泉窯系で、色調は黄褐色である。164は土師器碗である。色調は赤褐色である。165は青磁碗である。色調は青緑色である。166は青磁碗である。外面にヘラ描きの連弁文を施す。167は丹波浅鉢である。内面は緑灰色、外面は茶褐色である。168～170は瓦器羽釜である。168の体部羽桶状で、内面はハケメ、外面は鏝以下がユビオサエである。169は浅い桶状の体部に小さく突出する鏝を付けたものである。170は169と同様のプロポーションで、鏝下方に煤が付着している。171は信楽播鉢である。内面には1単位5条の櫛目を施す。焼成は良で、色調は淡茶褐色である。これらの遺物は鎌倉時代後期から南北朝期である。172～178はS X 388の出土である。172は須恵器壺である。宝珠つまみを付ける。色調は暗灰色である。173は須恵器杯身である。外面に線刻がある。古墳時代後期である。174は土師器碗である。色調は黄茶褐色である。175・176は土師器杯・碗である。外面はヘラケズリ、内面は不明である。177は土師器皿である。外面はヘラケズリ、内面はナデである。色調は淡茶



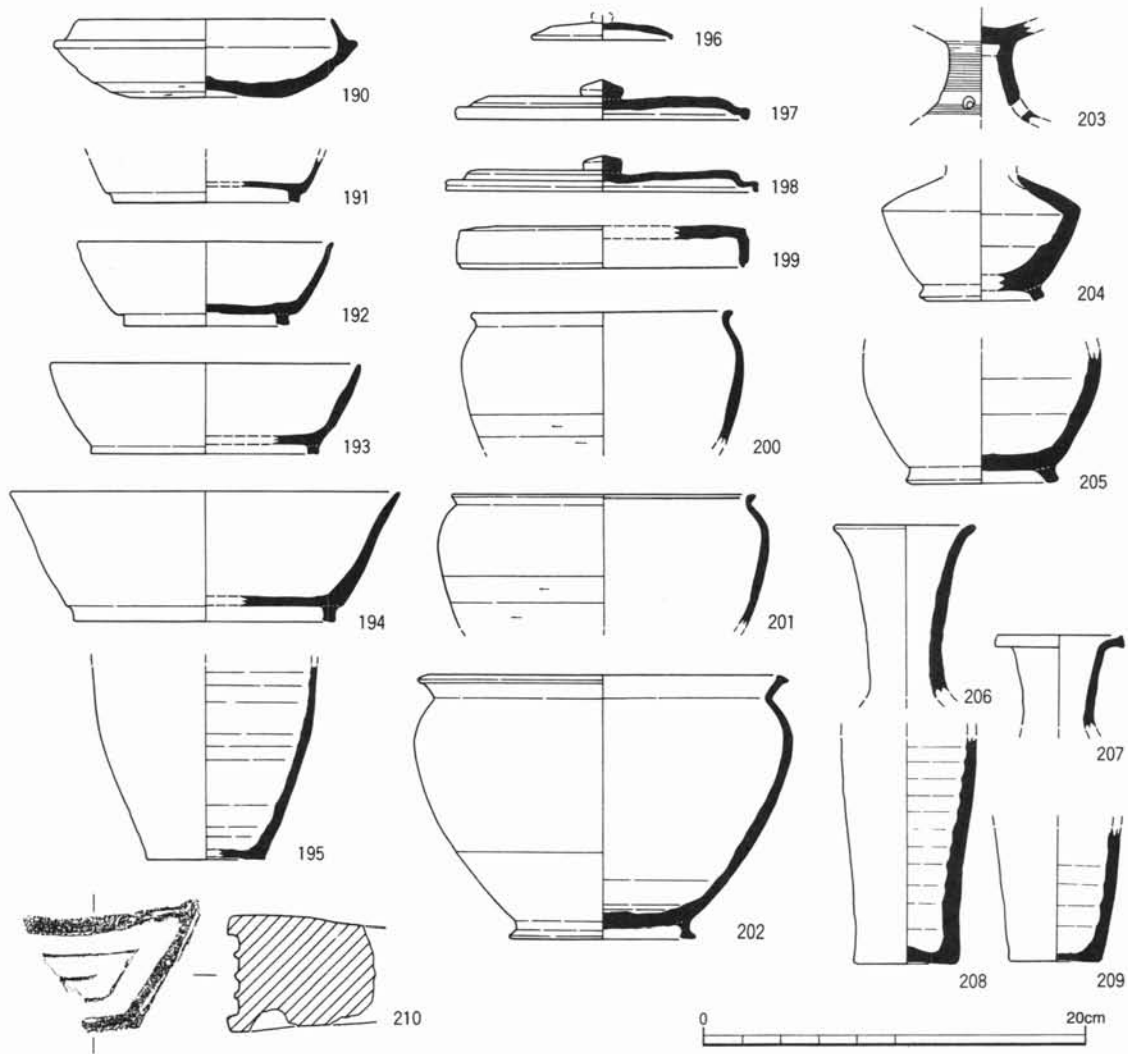
第46図 Dトレンチ出土遺物実測図

褐色である。178は土師器甕である。口縁部から体部上部は「く」の字に屈曲する。口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラケズリを施す。口径19.2cm、色調は褐色である。一部古いものはあるが、奈良時代後期から長岡京期である。179～181は溝S D427の出土である。179は東海系の壺底部である。内面は自然釉、外面はヘラケズリである。180は緑釉陶器である。内面には陰刻花文を施す。釉調は淡黄緑色、素地は灰褐色である。京都洛西産である。181は須恵器甕である。これらは平安時代前期である。182・183は土坑S K359の出土である。182は須恵器壺である。体部外面下半は回転ヘラケズリである。183は須恵器短頸壺である。口径9.4cm、器高11.5cmである。184は土坑S K273北側で出土した土師器皿である。口縁端部には煤が付着している。口径6.9cm、器高1.4cmである。185は土坑S K273で出土した土師器皿である。口縁部はヨコナデ、体部下半はユビオサエである。口径10.8cm、器高2.2cmである。186は土坑S K401で出土した土師器皿である。内外面ともユビオサエを施しているが、内面にはハケメがかすかに残っている。口径7.2cm、器高1.7cmである。187は溝S D437から出土した須恵器壺である。188は溝S D356から出土した鉄滓である。189は溝S D357から出土した円筒埴輪片である。タガは断面台形であるが、やや崩れており退化している。タガの上下はタテハケを施す。色調は橙茶色である。

溝S D250出土遺物(第48・49図) 190は須恵器杯身である。色調は淡黄灰色で、体部外面下半はヘラケズリを施す。古墳時代後期。191～194は須恵器Bである。貼り付け高台で、内外面とも回転ナデを施す。長岡京期～平安時代初期である。195は須恵器壺である。おそらく、大型の長



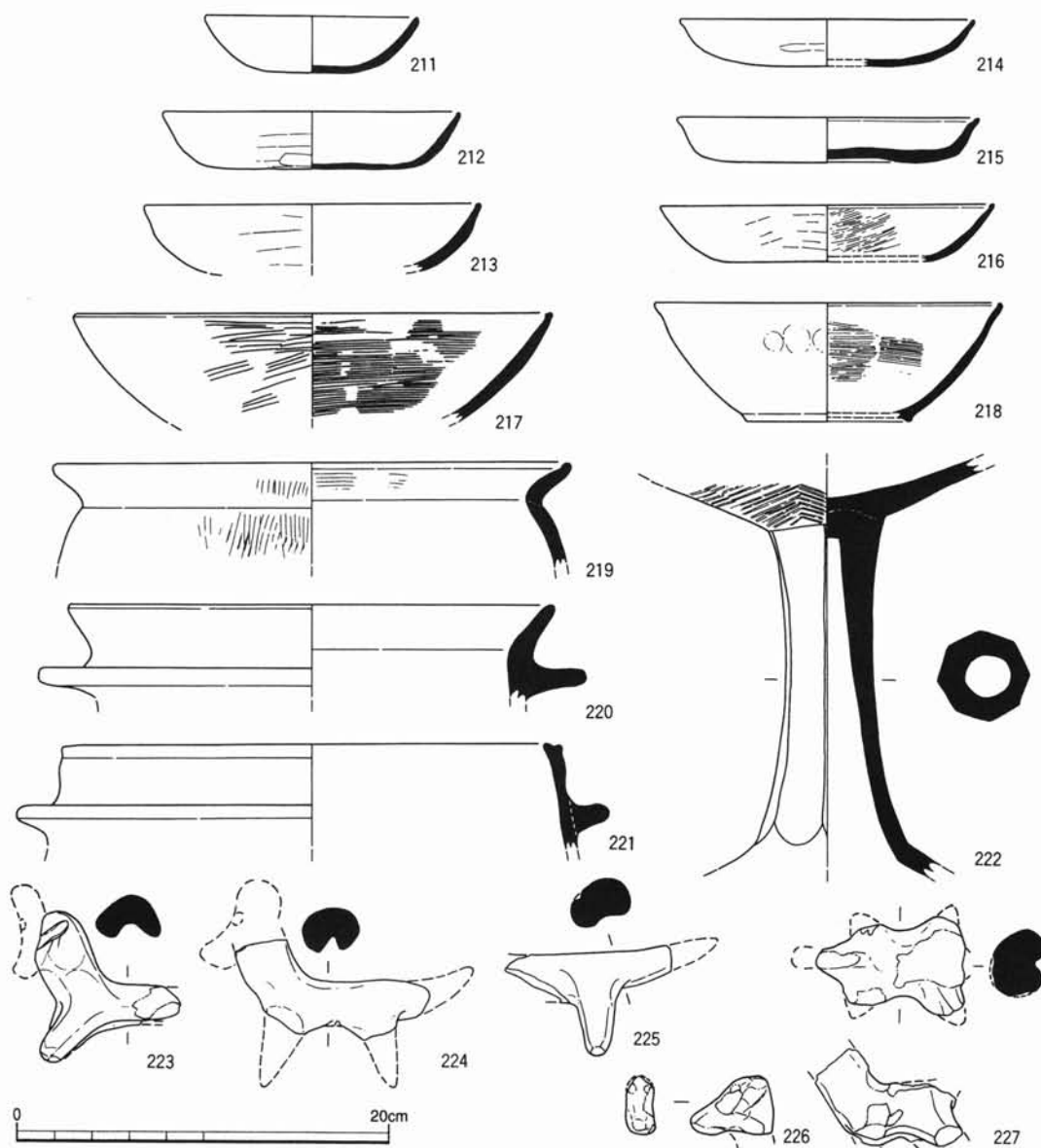
第47図 Eトレンチ出土遺物実測図



第48図 Eトレンチ溝S D250出土遺物実測図(1)

頸壺と思われる。内外面とも回転ナデを施す。底部は糸切りである。196～199は須恵器蓋である。196は口縁端部が屈曲せず、そのまま終息する。197・198は緩く屈曲する口縁部をもつ。199は須恵器壺蓋である。色調は暗灰色である。200・201は須恵器Eである。200は口径13.6cm、色調は淡灰色である。体部外面下半はヘラケズリ、他は回転ナデである。201も同様である。202は須恵器鉢である。口径18.4cm、器高13.8cm、色調は明灰色で、貼り付け高台である。203は須恵器脚部である。現状3か所に透かしを施す。外面はカキ目である。古墳時代後期である。204・205は須恵器壺である。204は壺Cである。体部は「く」の字に屈曲する。205の体部は丸味を帯びる。206～209は長頸壺である。206の口縁端部は外反し、すばまる。207の口縁端部は横方向に屈曲し、上方につまみ上げる。208・209は壺Gである。色調は灰色である。210は軒丸瓦である。重郭文である。焼成は硬く、色調は灰色である。難波宮式である。

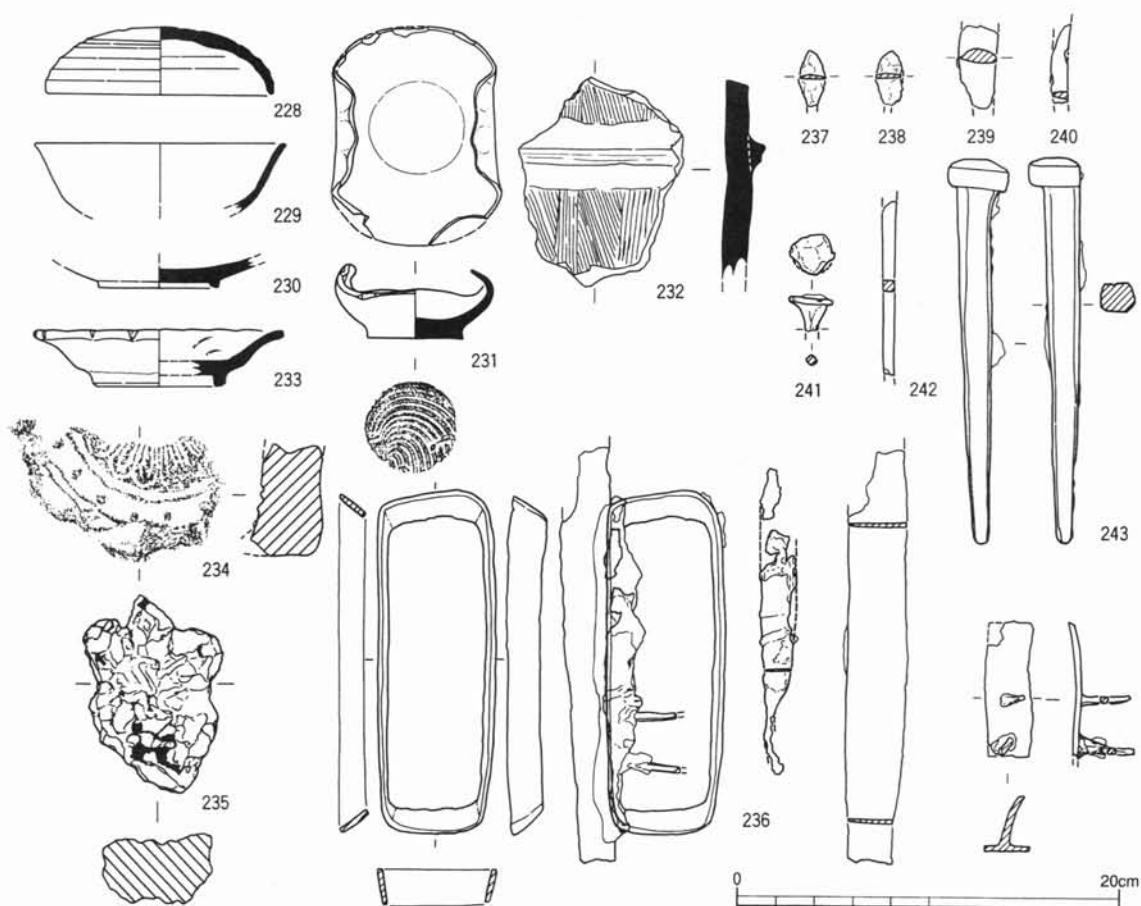
211～213は土師器杯である。211は口径11.4cm、器高3.1cmで、小振りである。色調は橙茶色である。212は口径16cm、器高3.1cmで、色調は黄茶褐色である。214～216は土師器皿である。216は外面ヘラケズリ、内面はハケメである。口径は18.2cm、器高3cmで、色調は茶褐色である。



第49図 Eトレンチ溝S D250出土遺物実測図(2)

217は土師器杯である。口径25.6cmで、大振りである。色調は淡茶色で、ミガキを施す。218は土師器杯である。小破片のため、口径や傾きは絶内外面とも回転ナデを施す。対的ではない。219は土師器甕である。外面はタテハケ、口縁部内面はヨコハケを施す。220は土師器羽釜である。色調は茶褐色である。外反する口縁部直下に長い鏝を付けている。221は瓦質の羽釜である。焼成は良で、色調は明灰色である。222は土師器高杯である。推定30cm程度の口径を持つ大形品である。杯部分はミガキ、筒部は8面の面取りを施す。223～227は土馬である。226が頭部片で、それ以外は胴部片で完形品はない。色調は淡黄褐色である。これらの遺物は長岡京期である。

そのほかの出土遺物(第50図) 228は須恵器杯蓋である。古墳時代後期である。229は緑釉陶器碗である。体部内面中位は屈折しており、沈線が認められる。釉調は淡緑色で、素地は淡褐色である。ヘラミガキの後、施釉している。230は緑釉陶器皿である。全面施釉である。釉調は淡緑色で、素地は灰色である。231は緑釉陶器耳杯である。底部は糸切り。釉はほとんど剥落してい



第50図 Eトレンチ出土遺物実測図

る。素地は明灰色である。232は埴輪である。タガの断面は台形で、形は崩れている。タガの上下にタテハケを施す。須恵質で古墳時代後期である。233は中国製青磁皿である。口縁端部はヘラにより花形に成形している。釉調は黄白色で、白濁している。口縁端部の一部に本来の色である黄緑色の釉が残る。外底面は露胎である。素地は灰白色である。234は複弁蓮華文軒丸瓦である。中央区は蓮華文で、外区に珠文を配している。235は鉄滓である。236は鉄製の箱状で、その一端に長方形の鉄板や銅製の板が付着している。土坑S K 272から出土した237～239は鉄鏃か。240は鉄製品である。241～243は鉄釘である。

(伊野近富)

4. まとめ

今回の調査成果について簡単にまとめておく。Aトレンチ北側の右京第772・775次調査では、縄文時代晩期の甕棺墓が検出されているが、今回の調査では縄文時代中期後半の土坑が検出された。上里遺跡の上限時期がさらに遡ることになり、早くからこの段丘上が利用されていたことが窺われる。周辺に拠点となる縄文時代の集落が存在するものと考えられる。

竪穴式住居跡は2基検出されたが、多数検出された柱穴の中には古墳時代の遺物が含まれるものもあり、周辺の調査成果とあわせて考えると削平された竪穴式住居跡、掘立柱建物跡が存在す

る可能性がある。また、古墳時代後期の埴輪が出土したことにより、周辺に古墳が存在していたものと考えられる。井ノ内車塚古墳、稲荷塚古墳、井ノ内古墳群が築造された後の時期の古墳と集落の様子を窺うことができる貴重な資料となる。

Aトレンチでは、西三坊大路西側溝の南延長部は検出できなかった。台地の縁辺部に位置することからもともと造成されなかったか、後世に削平されたか、推定延長部分に現代の攪乱が多く認められることから、これに伴い消滅した可能性なども考えられる。しかし、B～Eトレンチでは、推定西三坊大路路面上の調査を実施したことになる。右京第753次調査で検出した溝SD03・05や今回の調査で検出した溝SD190・258・274・338・356の総延長は、南北72mになる。これらの溝は、長岡京期～平安時代前期にかけてのものであり、築地など宅地や道路に関係する何らかの区画溝と考えられる。また、これらの溝の東側には、溝SD218・427など同時期の溝もあり、路面上には多くの遺構が展開していることになる。これらとともに周辺から多数出土した長岡京期の遺物は、周辺に生活に伴う多くの遺構が存在することを裏付けるものと考えられる。

平安時代前期になると、台地上には多くの遺構があり、大型の井戸SE172を中心に周辺に拠点となるような建物跡が存在しているものと考えられる。そして、鍛冶生産関連遺物の出土から鍛冶工房が存在することが明らかとなった。鍛冶工房は今までの調査結果からすると、長岡京期から中世まで続いていることになり、この地域が長く鉄を供給する工房地帯であった可能性も考えられる。

井ノ内館に伴う南限の溝は検出できなかった。調査地外に存在することも考えられるが、北限の溝の底面と南限の遺構検出面の標高が同じであることや、周辺に攪乱が多く認められることなどから、消滅した可能性もある。また、館内の建物跡を特定するには至らなかったが、多くの柱穴が存在することから、今後検討していきたいと考えている。

(増田孝彦)

注1 網伸也・百瀬正恒「長岡京右京二条四坊一町跡・上里遺跡」(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報(2003-4)』京都市埋蔵文化財研究所) 2003

注2 奥村清一郎ほか「長岡京跡右京第27次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)』京都府教育委員会) 1980

注3 柴暁彦「長岡京跡右京第704次(7ANGSK-1地区)・井ノ内遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第102冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

注4 増田孝彦「8.長岡京跡右京第753次(7ANGHD-5地区)・井ノ内遺跡・上里遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第107冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

注5 増田孝彦「4.長岡京跡右京第795次(7ANGKS-6地区)・井ノ内遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第113冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005

注6 向日市史編さん委員会『向日市史』上巻 向日市 1983

注7 調査参加者 杉江貴宏・鳥居雅彦・坪内正尚・井上聡・尾上忍・渡辺咲子・前川敬子・長谷川マチ子・久米政代・荒川仁佳子・春日麻子・西村香代子・川村真由美・陸田初代・中平幸・坪内千津子

3. ^{たきぎ}薪遺跡第6次発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、主要地方道八幡木津線道路整備促進事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

調査地は、京都府京田辺市薪巽2番地に所在する。今回の調査は、平成13年度の第4トレンチの試掘結果に基づく本調査である。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長石井清司、同調査員柴暁彦が担当した。調査期間は、平成16年9月21日～12月27日まで実施した。調査面積は、約750m²である。

平成13年度から始まった本事業に伴う試掘調査(調査面積：13年度約400m²、14年度約730m²、15年度約350m²)では、合計15か所の試掘トレンチを設定して調査を進めてきた。

第3次調査(平成13年度)では、第2トレンチで古墳の周濠とみられる溝を検出し、この中から埴輪片が出土した。また、第4トレンチでは淡黄灰色砂質土(地山面)で溝、土坑、配石遺構を検出した。以上のように各トレンチから縄文時代の遺構や古墳の周溝などが新たに検出され、これまで古墳時代後期以降とみられていた、薪遺跡の開始年代が縄文時代にまで遡ることが明らかになった。

第4次調査(平成14年度)では、遺跡の北西側で縄文時代後期段階と考えられる方形の落ち込みや平安時代から中世と考えられる土坑や柱穴を確認した。また、第5次調査(平成15年度)では遺跡範囲の中央部分で奈良時代の溝や土坑などを検出した。

また、平成11年度に京田辺市教育委員会が行った酬恩庵(一休寺)の北西隣の調査(第2次調査)では、鎌倉時代後半と江戸時代後半の遺構・遺物が確認された。中でも鎌倉時代後半(13世紀後半～14世紀前半)の遺構では、居館跡に伴うと考えられる園池が見つかり多量の遺物が投棄されていた状況が確認された。

これまでの調査成果で読み取れる薪遺跡の状況は、手原川の氾濫原とみられる遺跡の北西側は遺構が希薄であり、遺跡範囲の中央部分ほど遺構密度が高い傾向がうかがえる。

調査期間中は、京都府教育委員会、京田辺市教育委員会をはじめとして、地元住民の方々のご指導・ご協力を^(注1)得た。また、現地調査および整理作業には、調査補助員・整理員の参加・協力を^(注2)得た。記して感謝したい。

なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

2. 位置と環境

薪遺跡は、木津川左岸の丘陵裾部に位置している。遺跡の立地状況は、南側は天理山丘陵、西

側は木津川支流の手原川、東側を天津神川で囲まれた場所に位置し、遺跡の南西約2kmに所在する、甘南備山に源を発する手原川の扇状地上に立地している。薪遺跡の範囲は東西約950m、南北約900mの広範に及ぶ。当遺跡の現況は天理山丘陵裾の微高地上は現在住宅地となっており、その北東側に位置する道路計画路線帯には水田や畑地が展開している。



第51図 調査地位置図(『京都府遺跡地図』から転載。1/25,000)

- | | | | | |
|------------|-----------|-------------|------------|-----------|
| A. 調査対象地 | 24. 薪遺跡 | 84. 棚倉孫神社遺跡 | 26. 天理山古墳群 | 22. 堀切古墳群 |
| 23. 堀切谷横穴群 | 25. 西薪遺跡 | 27. 小欠古墳群 | 15. 大欠1号墳 | 19. 西山古墳群 |
| 16. 狼谷遺跡 | 17. 畑山古墳群 | 18. 畑山遺跡 | 162. 薪城跡 | 5. 大住車塚古墳 |
| 6. 大住南塚古墳 | 7. 姫塚古墳 | 85. 三野遺跡 | 122. 奥村遺跡 | 158. 田辺遺跡 |
| | | | | 29. 興戸遺跡 |

当遺跡周辺の環境は、弥生時代中期の遺跡として薪遺跡の西側の丘陵部に狼谷(小谷)遺跡があり、土器や石器が採集されている。後期では水田跡が検出された興戸遺跡がある。

古墳時代では、遺跡背後の丘陵部に多くの古墳が築造されている。西側の丘陵には、郷土塚古墳群(6基)、畑山古墳群(4基)、西山古墳群(3基)が存在する。また、南側の丘陵には、天理山古墳群(4基)、小欠古墳群(3基)、堀切古墳群(10基)が知られる。この中で郷土塚2号墳(中期：円墳)では多数の鉄器とともに家形埴輪・鳥形埴輪などが出土している。同4号墳(円墳)では、横穴式石室から、多くの土器とともに鉄製の鍛冶道具が出土している。堀切7号墳(後期前半：円墳)では周溝から人物埴輪3体・船形埴輪・靱形埴輪などが出土した。このうち人物埴輪の1体には顔面に直弧文が描かれたものとして注目されている。

奈良時代については詳細が明らかではないが、平安時代には平安京造営の南目印となった甘南備山に神奈比寺が建立される。また、平安時代後期末から鎌倉時代にかけて、薪集落は「薪荘」と呼ばれる石清水八幡宮の荘園となっていたようである。室町時代には一休が大応国師の創建した妙勝寺を復興し、酬恩庵を開いたとされる。

3. 調査概要

平成16年度の発掘調査は、平成13年度の試掘調査で縄文時代などの遺構を検出した4トレンチを対象に調査区を設定し発掘調査を実施した結果、縄文時代の竪穴式住居跡や多数の土坑、平安時代と思われる溝などを検出した。以下に主要遺構について述べる。

(1) 検出遺構

1) 縄文時代の遺構

竪穴式住居跡 S H31 直径約10mを測ると思われる円形の住居跡である。調査地内で全体の約1/3を検出した。深さは検出面から約0.3mを測る。床面は平坦になっていたが、住居跡に伴うと思われる明確な支柱穴は確認できなかった。壁はほぼ直に立ち上がる。壁際で周壁溝と考えられる溝の一部を検出した。埋土中から少量の縄文土器の破片が出土した。また、土坑内の焼土に伴い骨片が出土した。

竪穴式住居跡 S H68 調査地北東部で検出した、一辺約5mを測る隅丸方形を呈する住居跡である。住居跡の壁はすでに削平されており、住居跡の床面直上で周壁溝と支柱穴4か所、炉跡1基を検出した。周壁溝は西側と南側では二重に巡り、住居の部分拡張が考えられる。支柱穴の状況は、p1は1.1m×0.9mの不整円形をなし、深さは約0.9mを測る。p2は1.2m×0.8mの楕円形をなし、深さは約0.5mを測る。p3は0.9m×0.7mの楕円形をなし、深さは約0.66mを測る。p4は0.7m×0.8mの不整円形をなし、深さは約0.57mを測る。このピットには南東側に抜き取り痕がみられる。支柱穴の埋土の中から縄文土器片が出土した。炉跡は住居跡の中央やや北寄りで見出された。この炉跡は石囲い炉のような整然とした礫の配列はみられなかったが、掘形内の周囲には人頭大の角礫を配し、内側には子どもの拳大の円礫や角礫が散乱していた。炉床には粘土を貼っており、この粘土は被熱により赤変していた。炉床の粘土は断ち割りの結果、約5cm

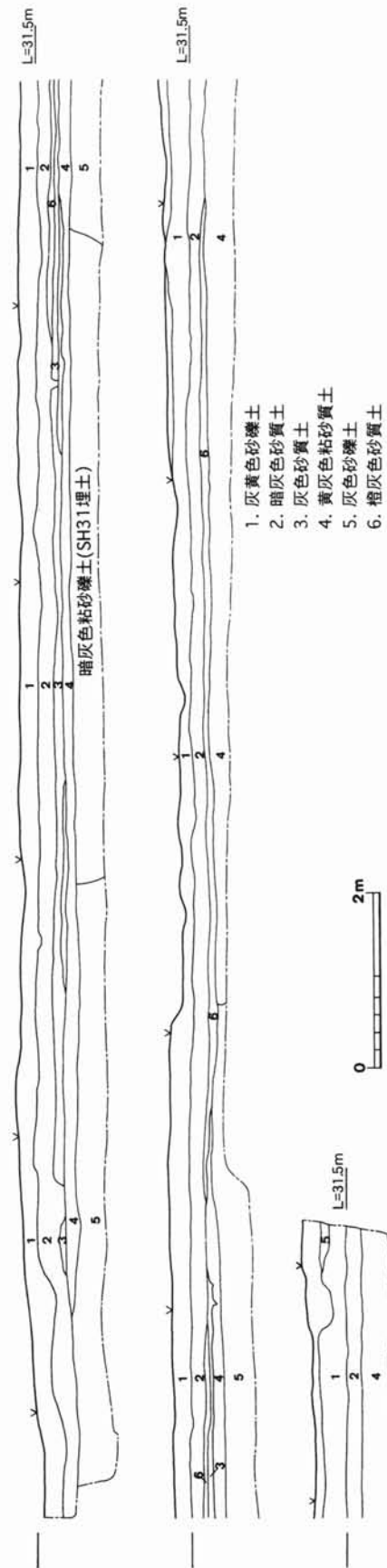
の厚さがあることを確認した。炉跡内でみられた礫は被熱痕跡が認められ、中には石皿の転用と思われる礫もみられたが、礫は炉床からは浮いた状態であり現位置は保っていないと考えられた。これらの礫は炉の廃棄に伴い炉内に投棄されたものと判断した。また周壁溝内の精査の結果、溝内に杭を打ち込んだと思われる小ピットを20数か所で確認した。ピットの大半は杭が垂直に打ち込まれた状況を呈していたが、中には斜め方向に打ち込まれたものもみられた。杭の深さは断ち割りの結果、約5 cm程度と比較的浅かった。このピットは屋根の垂木痕と考えられる。

一方、住居の東側部分の支柱穴付近の床面には直径約0.15mのピットが2対みられたことから、東側が入口であった可能性がある。出土遺物は支柱穴や周壁溝内から縄文土器片や石器が出土した。また南側の周壁溝に切られた土坑を検出したが、出土遺物がないため時期は不明である。

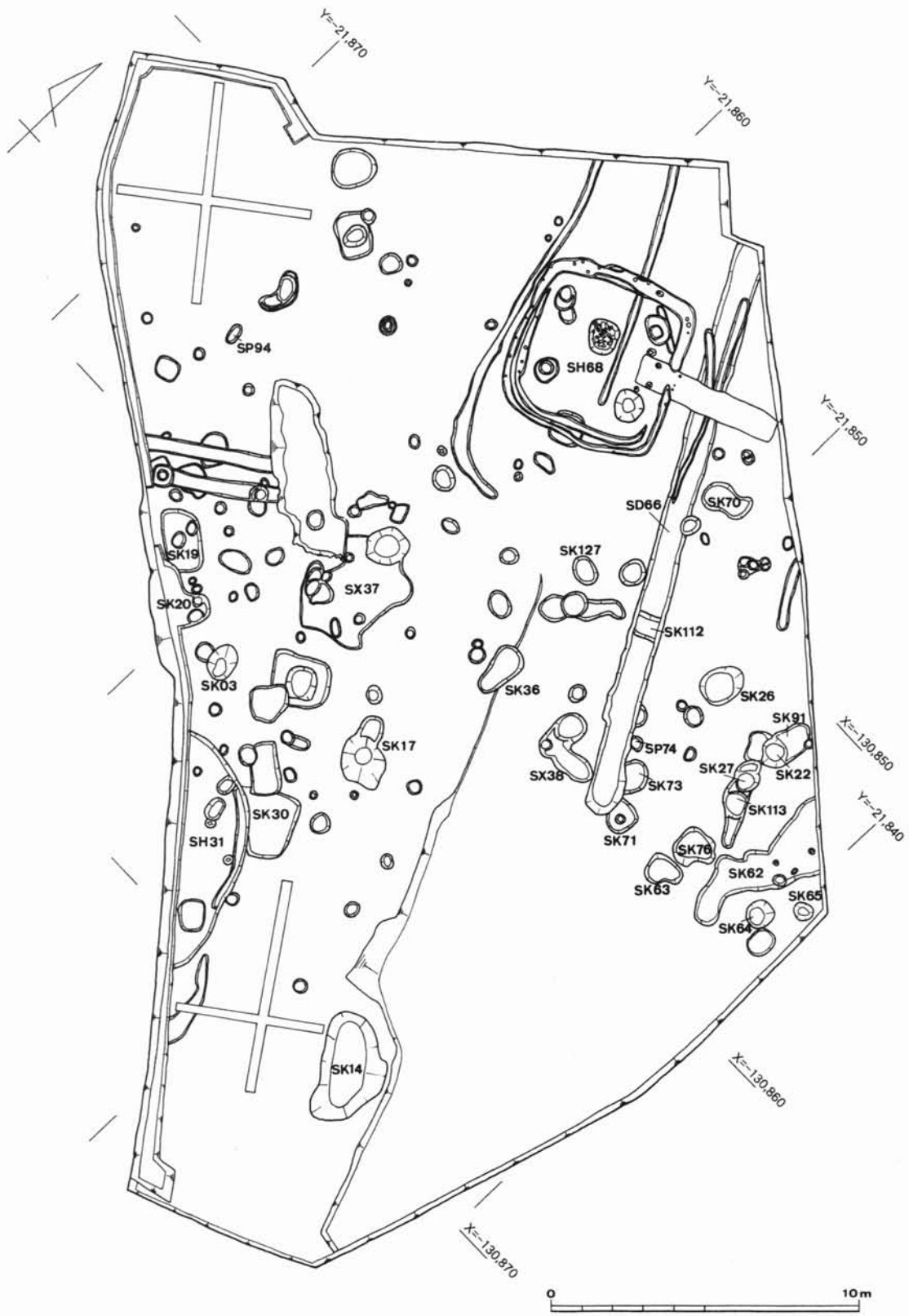
土坑S K 17 長軸約2.4m、短軸約1 m、深さ約1 mを測る不整楕円形の土坑である。土坑の断面の状況は北側が浅く、南側が深くなる。遺物の出土状況は、土坑内の南東側に集中して折り重なるように多数の深鉢や浅鉢などの縄文土器片や石匙・石皿・敲石などの石器が出土した。また用途不明の焼土塊も出土している。埋土は砂礫を含む暗茶色土である。出土した土器から、土坑の時期は縄文時代中期末の北白川C式段階と思われる。

土坑S K 22 直径約1 mを測る。深さは検出面から約0.6mを測る。北側は土坑S K 91を切る。土坑内から縄文土器が土坑底面から浮いた状態で内面を上にして出土した。時期は縄文時代中期末と思われる。

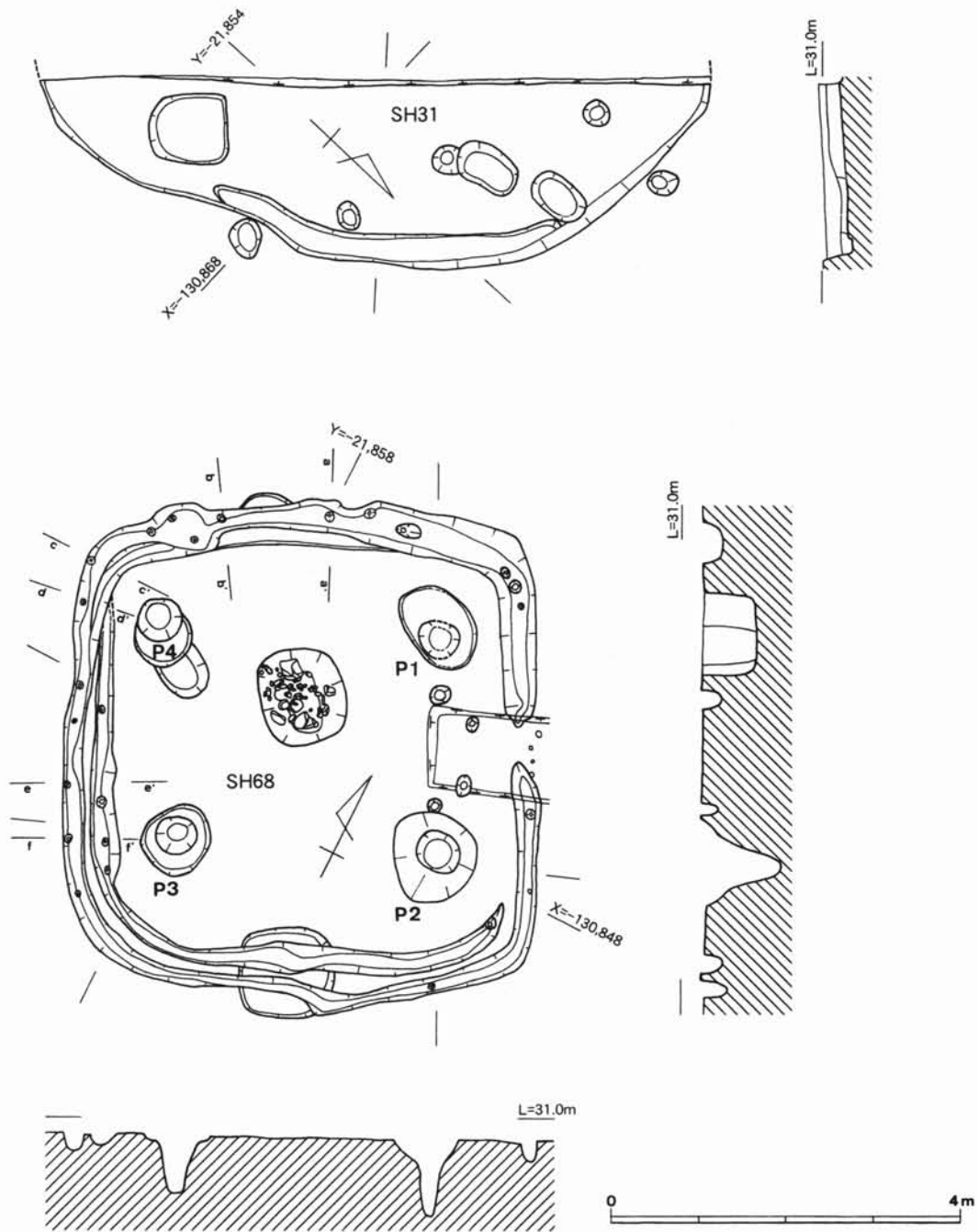
土坑S K 26 長軸約1.5m、短軸約1.1mを測り、平面形は楕円形を呈している。深さは、検出面から約0.6mを測る。埋土中からは縄文土器が出土した。また、土坑底面からミニチュア土器が正位置を保って出土した。



第52図 西壁土層断面図



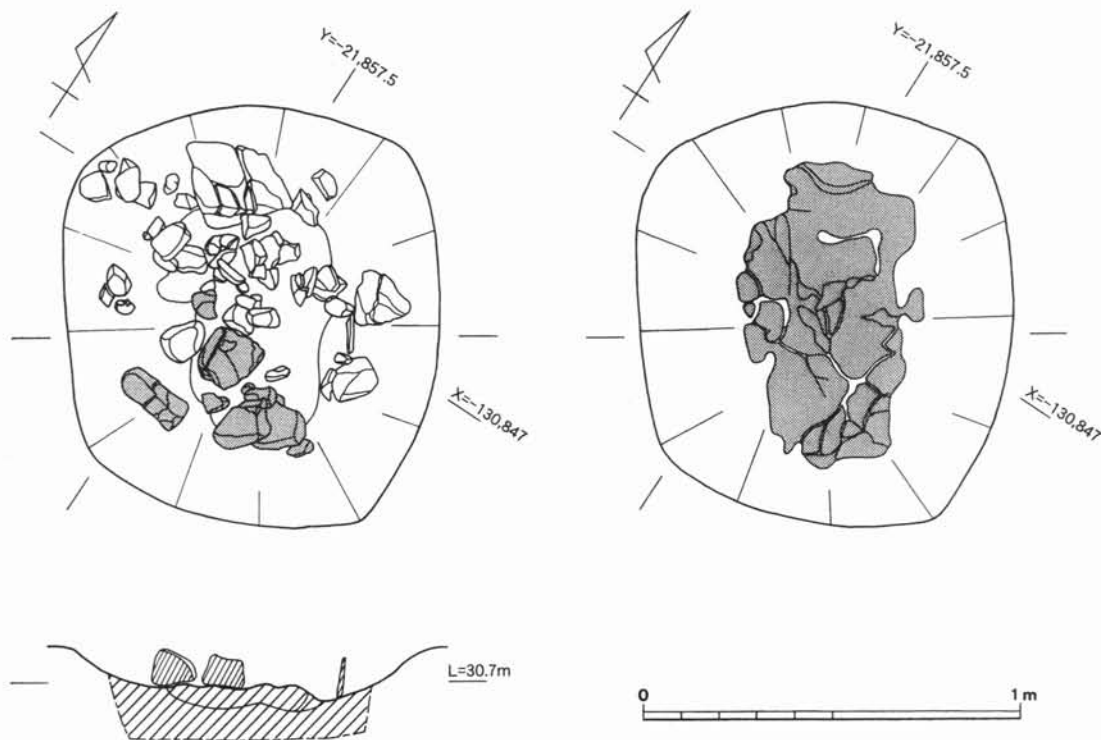
第53図 検出遺構平面図



第54図 竪穴式住居跡(SH31:上・SH68:下)実測図

土坑SK27 長軸約1.1m、短軸約0.7mを測る。深さは検出面から約0.65mを測る。土坑内から縄文土器や叩石が出土した。いずれの遺物も土坑底面から浮いた状態で出土した。土器は外面を上にして出土した。埋土は暗茶色砂質土である。

土坑SK70 長軸約1.6m、短軸約0.8mを測る。深さは約0.15mを測る。掘形は平面形が長楕円形を呈する。試掘調査では配石遺構SX3として報告している。土坑上面に人頭大の礫5石が東側に面をもたせるように凹字形に並び、並んだ礫の西側(外側)に子どもの拳大の礫が散乱していた。並んだ礫は受熱により脆くなり亀裂が入り割れたものや、赤変したものがある。いずれの



第55図 竪穴式住居跡 S H68 炉跡実測図(アミ掛けは被熱部分を示す。)

礫も埋土上面に存在しており、土坑底面に接するものはない。埋土は暗茶色砂礫土である。埋土中からは焼土塊が出土した。単独の集石土坑と思われる。

土坑 S K 03 長軸約1.2m、短軸約0.9mを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは検出面から約0.9mを測る。埋土は暗茶色砂礫土である。土坑内から縄文土器片が出土した。

土坑 S K 30 長さ約2.2m×1.5m以上を測る方形の土坑である。西側を竪穴式住居跡 S H31、北側の一部を土坑 S K45に切られている。深さは約0.55mを測る。埋土は暗茶色砂礫土である。埋土中から縄文土器片が出土した。

土坑 S K 63 長軸約1.2m、短軸約0.9mを測る不整形の土坑である。深さは約0.35mを測る。埋土中から縄文土器片が出土した。

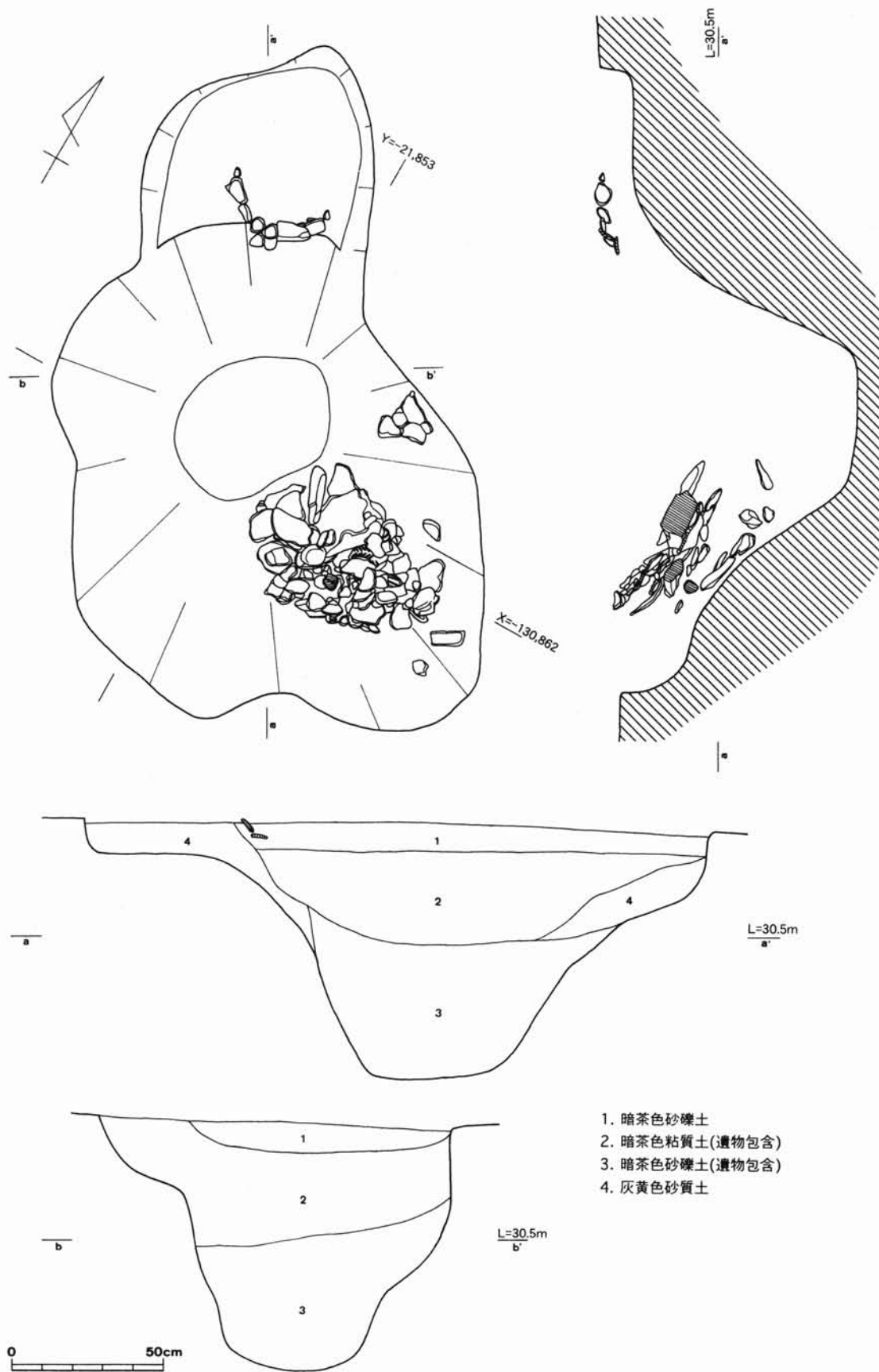
土坑 S K 64 直径約0.9mを測る円形の土坑である。深さは約0.35mを測る。埋土中から縄文土器片が出土した。

土坑 S K 65 直径約0.55mを測る円形の土坑である。深さは約0.3mを測る。縄文土器片が出土した。

土坑 S K 76 長さ約1.35m×1.25mを測る不整形の土坑である。深さは約0.4mを測る。埋土中には礫を含んでいた。埋土中から縄文土器片が出土した。

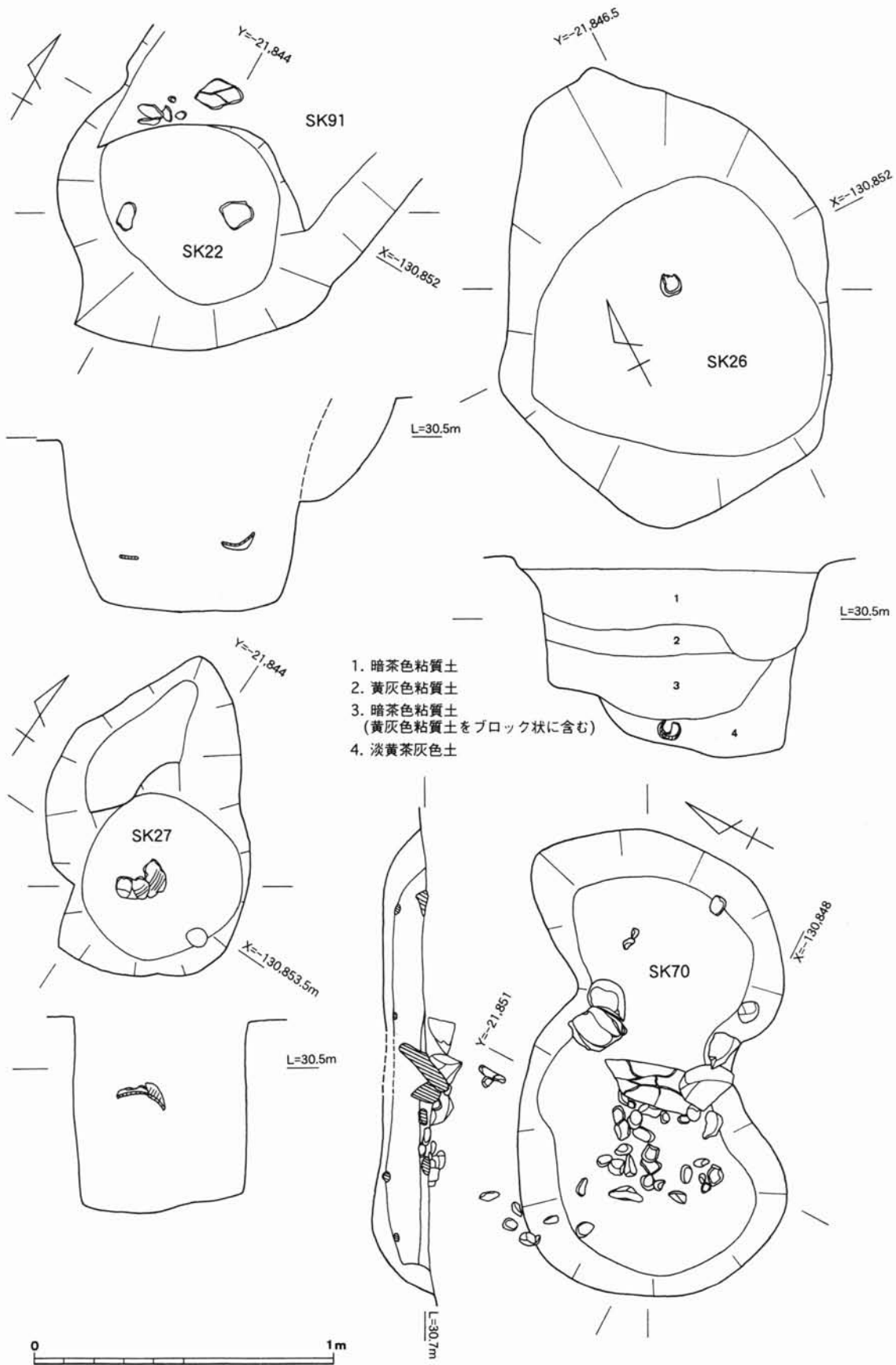
(2) 平安時代の遺構

溝 S D 66 試掘調査では溝 S D 1として報告している。調査地を北西 - 南東方向に斜行する素掘りの溝である。幅約1m、長さは約18.5mを測る。深さは検出面から約0.25mを測る。埋土上面では近世段階と考えられる素掘り溝と切り合い関係をもつ。埋土は暗茶色砂礫土である。埋土

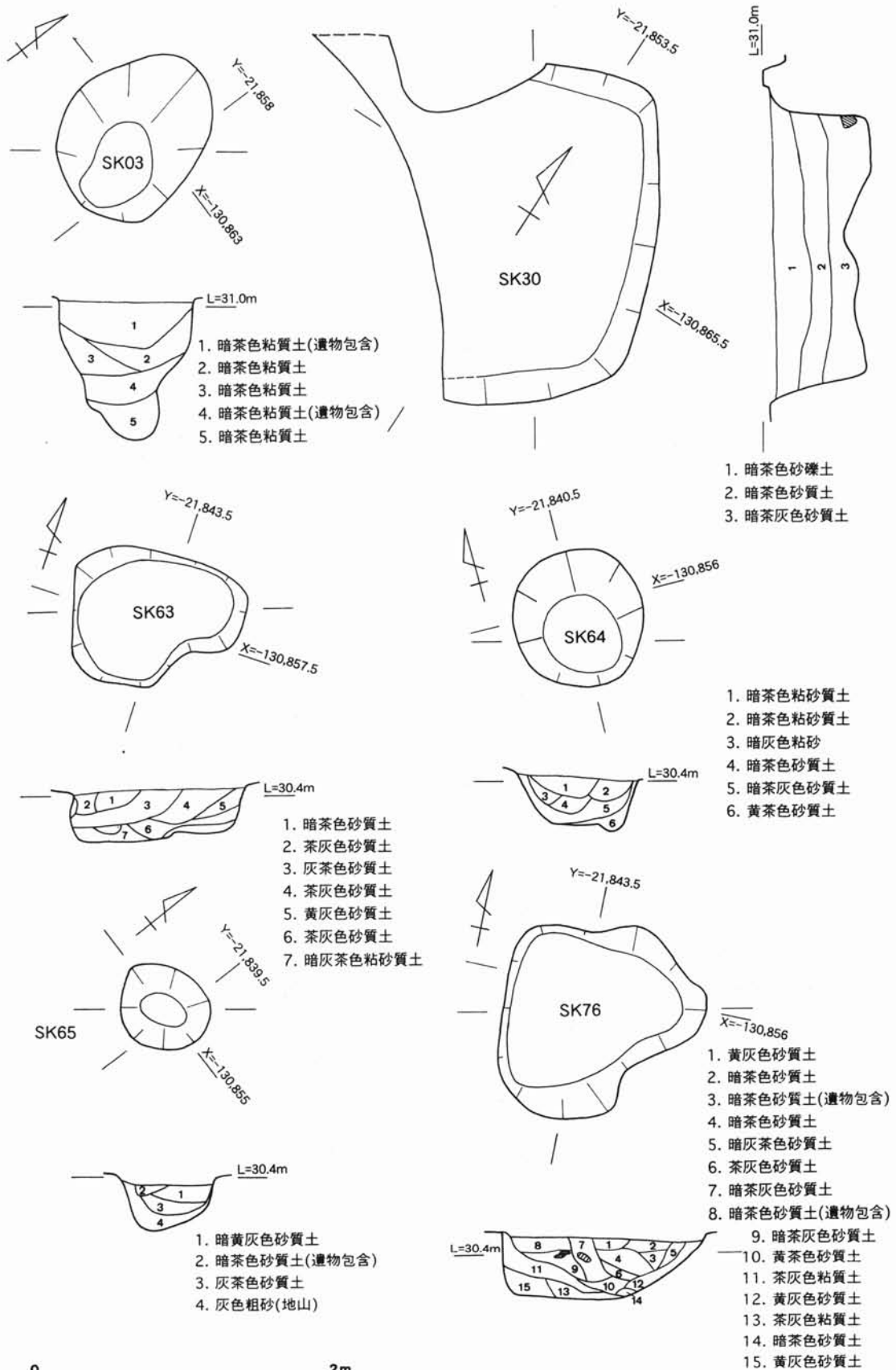


1. 暗茶色砂礫土
2. 暗茶色粘質土(遺物包含)
3. 暗茶色砂礫土(遺物包含)
4. 灰黄色砂質土

第56図 土坑 S K 17実測図



第57図 土坑実測図(1)



第58図 土坑実測図(2)

中には子どもの拳大の礫が含まれていた。溝は縄文時代の遺構を切っている。溝の中から少量の須恵器が出土した。時期は9世紀頃と考えられる。

柱穴S P 94 長軸約0.7m、短軸約0.3m、深さ約0.3mを測る、平面形が楕円形を呈するピットである。埋土中から内面を黒色処理した黒色土器碗A類が出土した。時期は10世紀後半と考えられる。

4. 出土遺物

(1) 縄文時代早期後半の土器

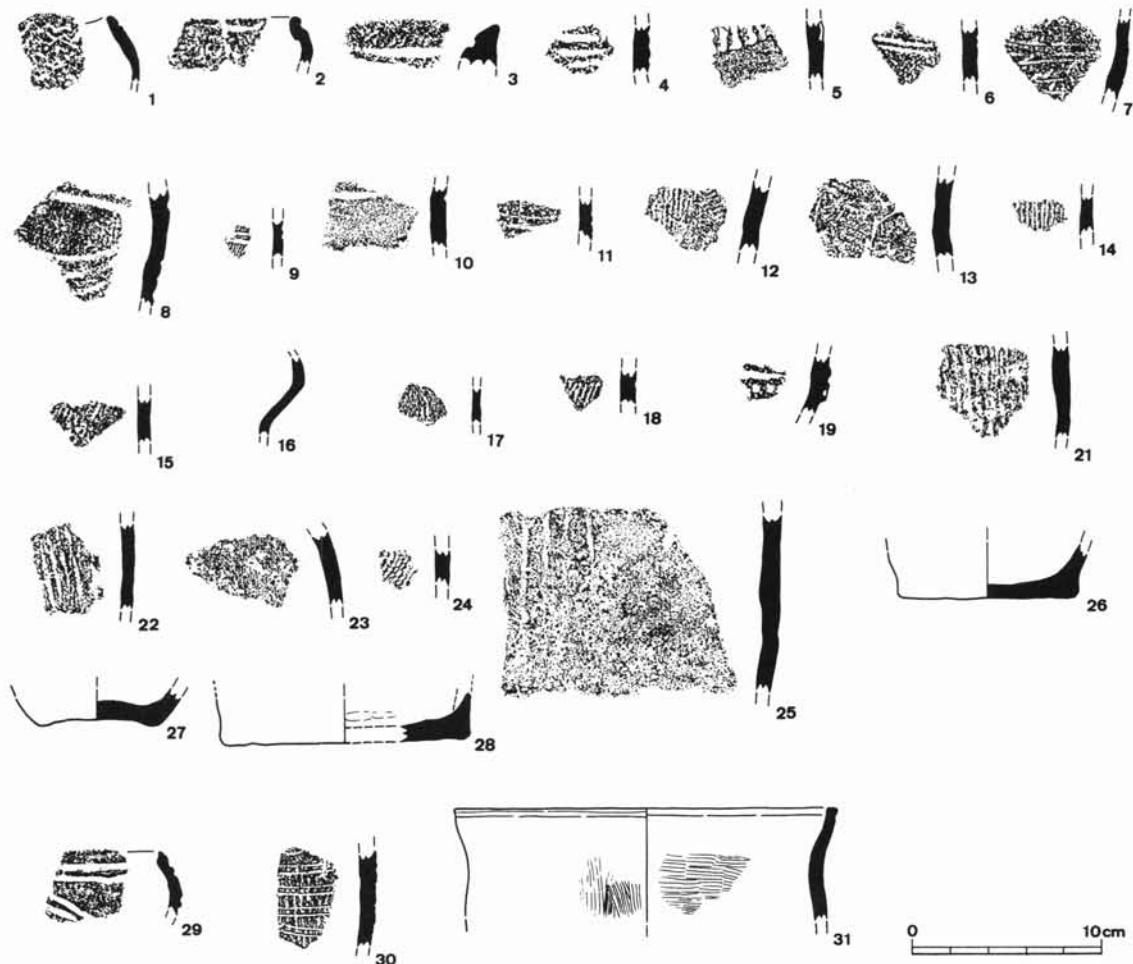
石山式土器がある。

(2) 縄文時代中期前・中葉の土器

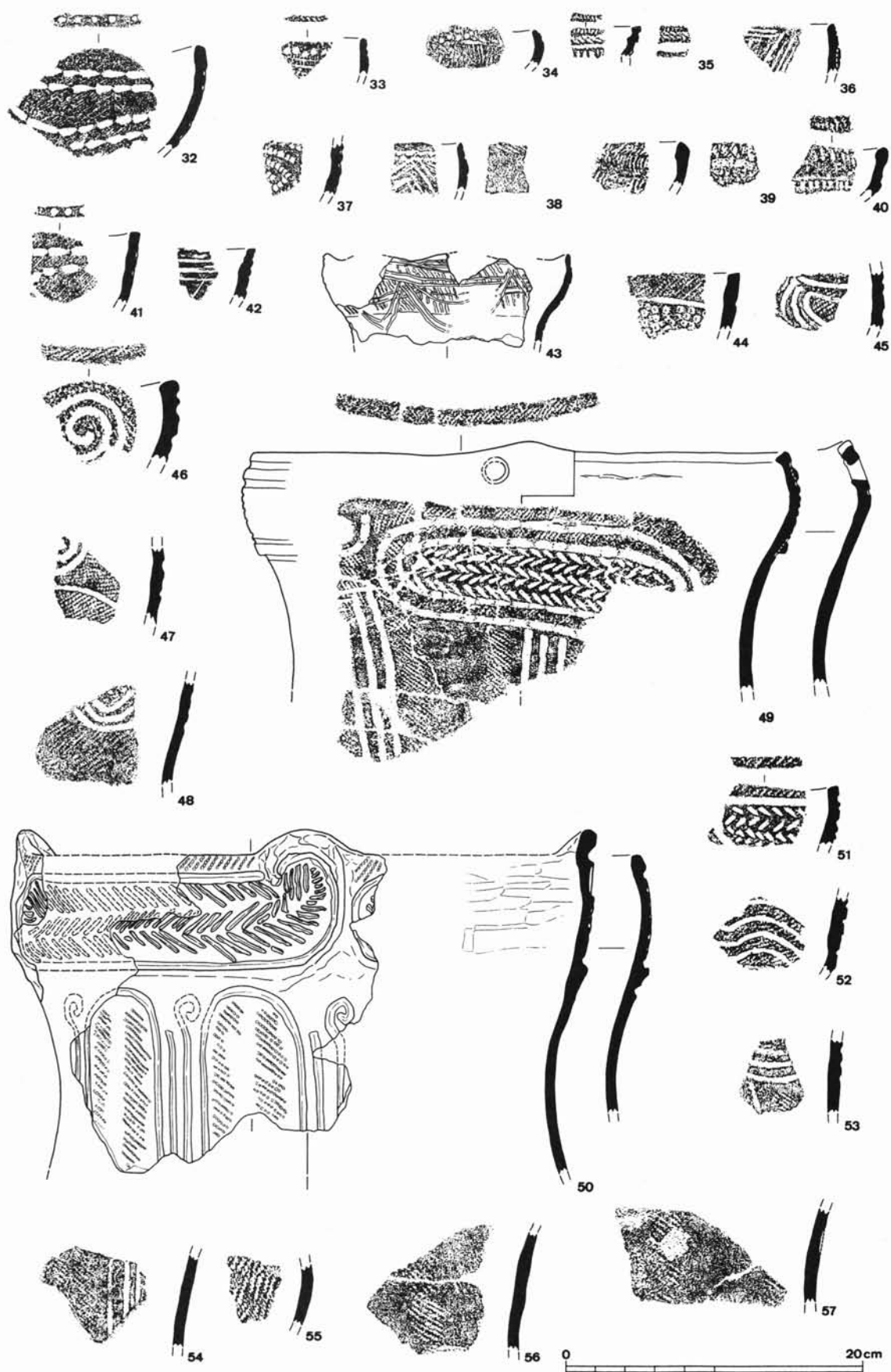
船元I～IV式土器、鷹島式土器、新保・新崎式土器がある。縄文地に半截竹管で平行沈線を描くものである。

(3) 縄文時代中期末の土器

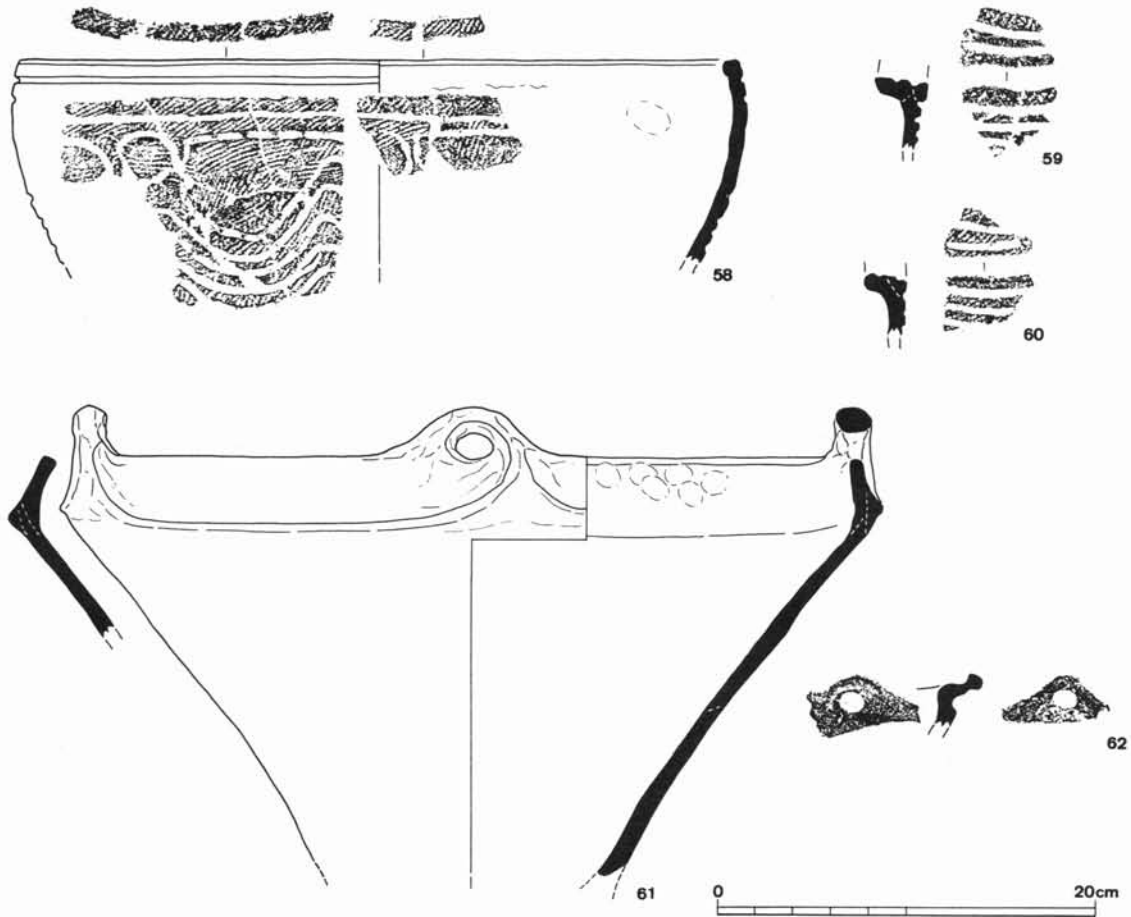
縄文時代中期末の土器については、泉拓良氏の分類^(註3)に従う。分類については以下、北白川を省略する。



第59図 出土土器実測図(1)



第60図 出土土器実測図(2)

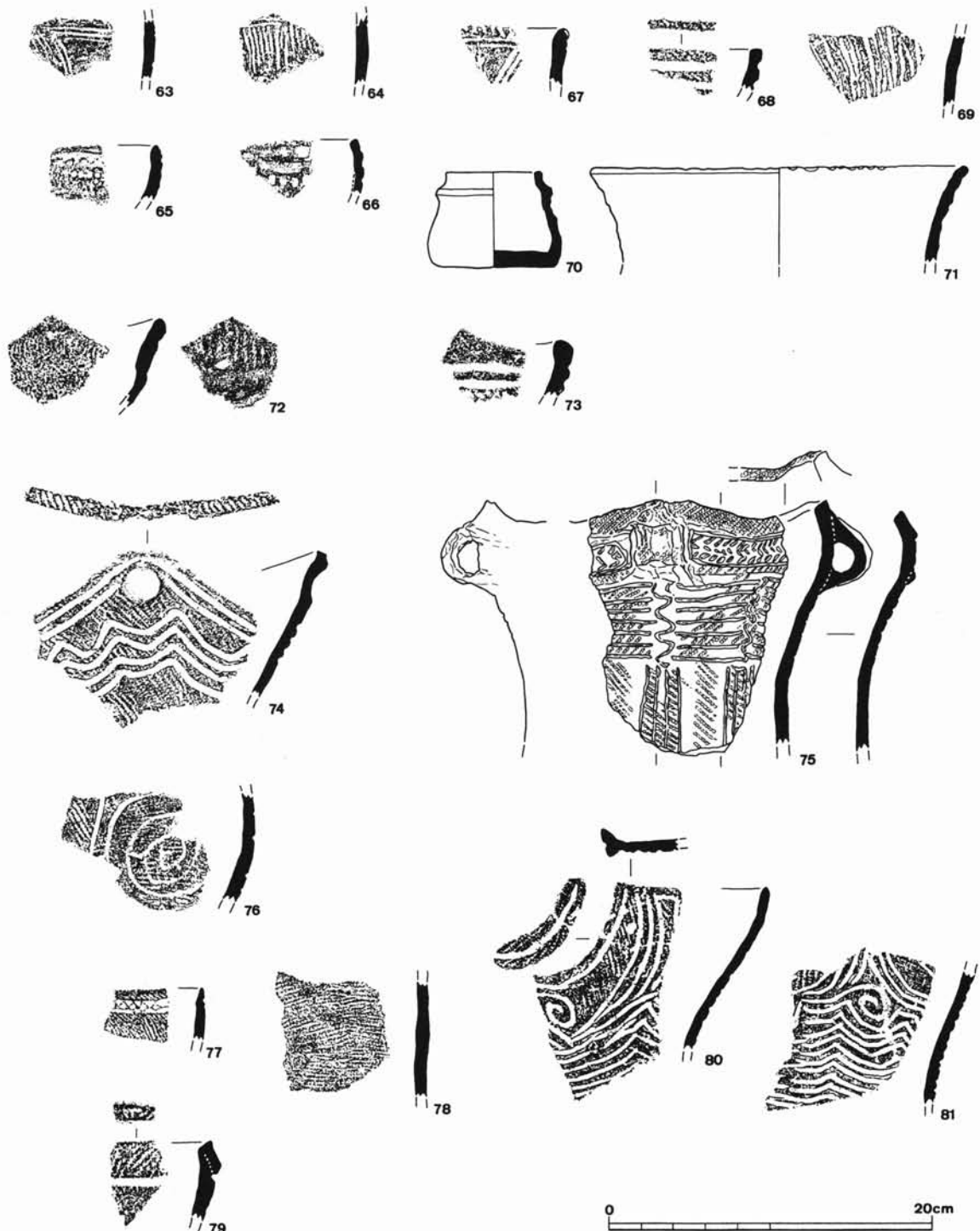


第61図 出土土器実測図(3)

竪穴式住居跡 S H68出土土器(1~28) 1は、里木Ⅱ式土器である。口縁端部外面に半截竹管による波状文様が施文される。8は星田式の土器である。縄文地文に沈線が施されている。10は後期の土器の可能性はある。14は撚糸文土器である。15は船元式の土器である。16はキャリパー型の器形をなす、深鉢の頸部部分である。17・18は撚糸文土器の体部片である。19は横方向の沈線に区画された内部に竹管状の刺突を施した土器である。21は里木Ⅱ式の撚糸文土器である。22は船元Ⅳ式土器である。24は里木Ⅱ式の撚糸文土器である。25の地文は磨滅で不明であるが、垂下する沈線をもつ北白川C式土器である。27の底部片は里木Ⅱ式のものと考えられる。

竪穴式住居跡 S H31出土土器(29~31) 29は咲畑式土器の口縁部片である。30は船元Ⅲ式土器である。31は弥生時代の畿内第Ⅳ様式土器である。

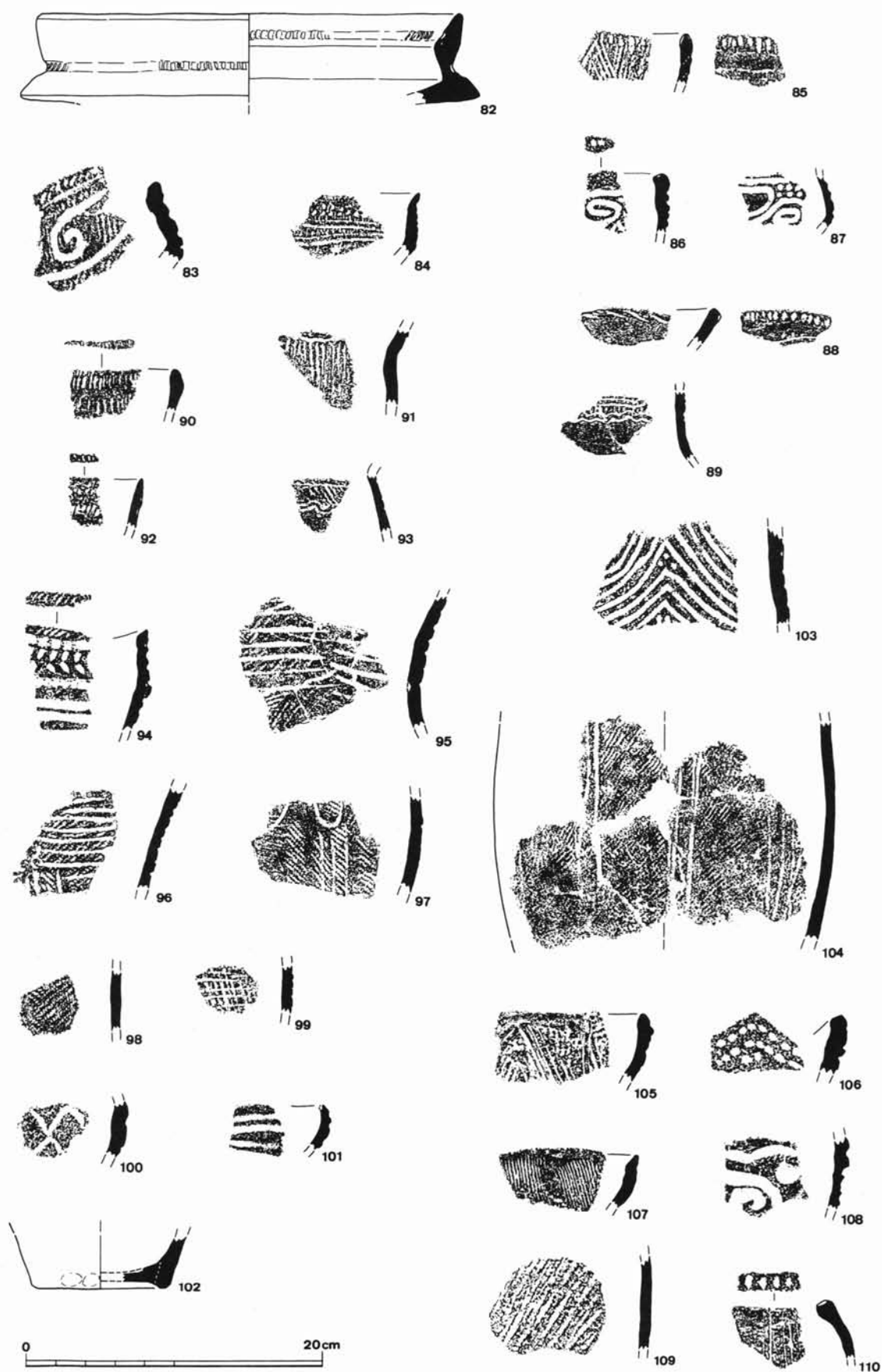
土坑 S K17出土土器(32~63) 32は地文がLR単節のキャリパー型をなす深鉢の口縁部片である。横位施文の左→右方向の押し引き文が施される。42も同様である。34は船元Ⅰ式土器である。2条の横位沈線間に竹管状工具の刺突が施される。35は大歳山式土器である。36・42は船元Ⅲ式土器である。37は系統不明の土器である。38は里木Ⅱ式の土器である。LRの縄文である。40は船元Ⅰb類(鷹鳥式)の口縁部片である。42・43は船元Ⅲ式土器である。43はRL縄文である。44はLRの縄文地文に沈線区画内を竹管状工具の先端刺突が施された土器片である。(45~54)は北白川C式土器である。47~49はLR縄文である。55・56は船元Ⅰ・Ⅱ式土器である。50は4単位



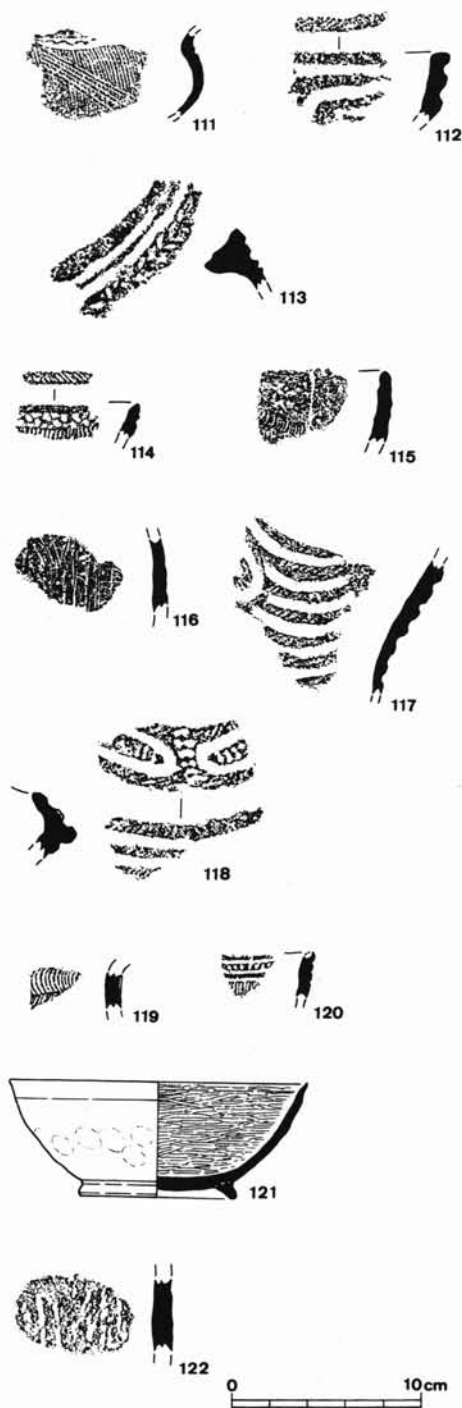
第62図 出土土器実測図(4)

の波状口縁を有する深鉢で、A 1 類 c に該当する。地文はLR縄文である。51は5単位の波状口縁を有する深鉢で、北白川C式2期A 1 類 c に該当する。中でも52・53は星田式の土器である。地文はLR縄文である。58は星田式の深鉢である。横位の主文様部は押し引き沈線である。その下部は波状沈線となる。59・60はc類の口縁部片である。61はC式2期B 2 類に該当する浅鉢である。波頂部は4単位で、渦巻状の文様を持ち、穿孔を有する。

土坑S K 03出土土器(63~66) 66は咲畑系の土器である。体部外面の刺突は下方向から施文さ



第63図 出土土器実測図(5)



第64図 出土土器実測図(6)

外面に横方向の押し引きが施される。83は口縁部下の区画帯に渦巻き文を施す深鉢c類口縁部片である。時期は中期末と思われる。地文はLRである。

土坑S K 64出土土器(85~87) 85は船元IV式の土器である。86は北白川C式の土器である。87は咲畑系の土器である。

土坑S K 65出土土器(88・89) 88は畿内第II様式の弥生土器である。89は里木II式土器である。

れている。

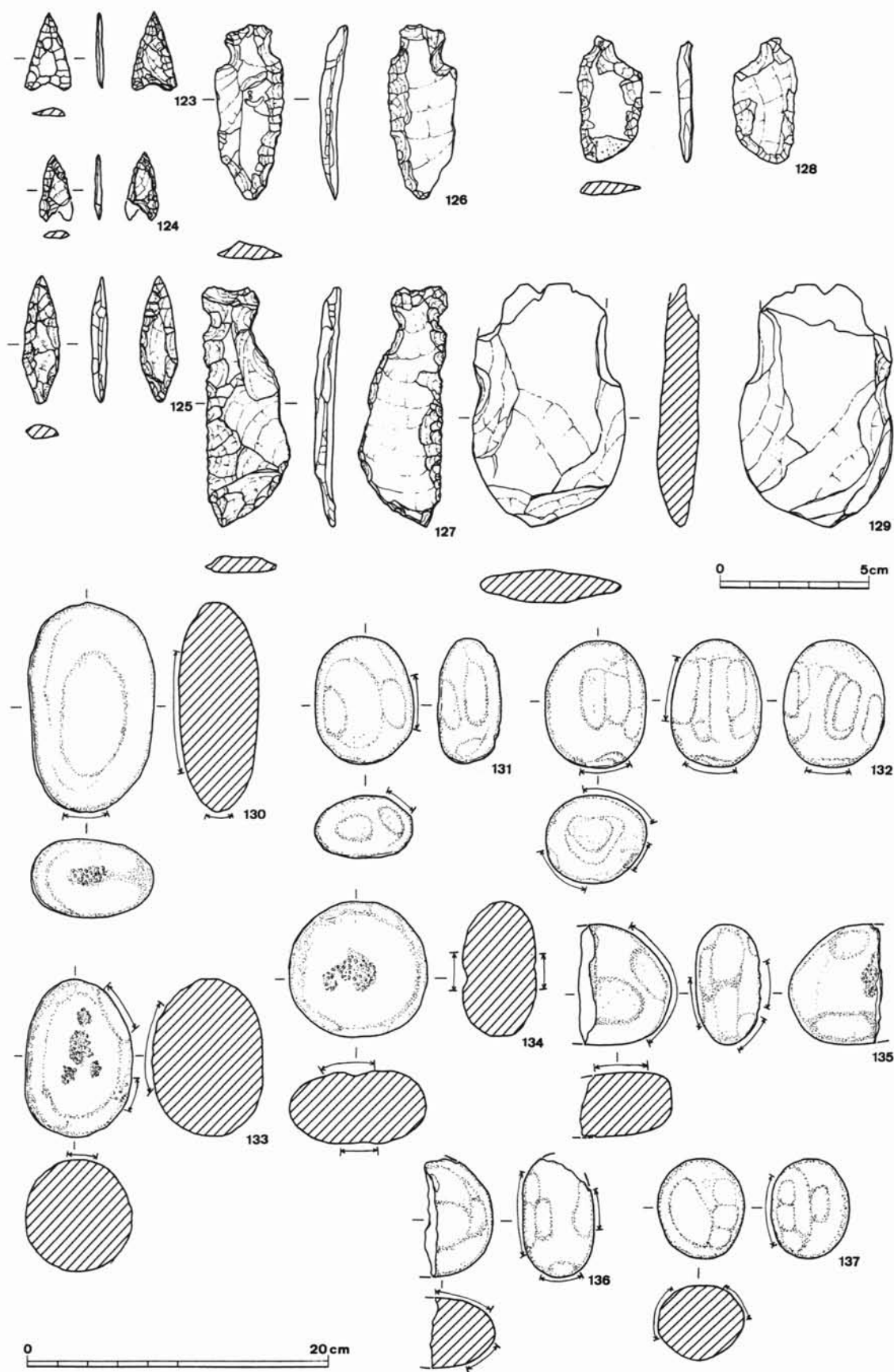
土坑S K 26出土土器(67~71) 67は北陸地方の新保・新崎式土器である。近畿地方では船元I式に併行する。68は北白川C式土器である。69は船元式の土器である。RL縄文である。70はミニチュアの深鉢である。頸部直下に横方向の突帯を施している。色調は内外面とも黄褐色をなす。北陸地方の模倣土器と考えられる。

土坑S K 14出土土器(72) 波状口縁の土器である。鷹島式の土器である。外面に爪形文を施し、内面には縄文を施文する。

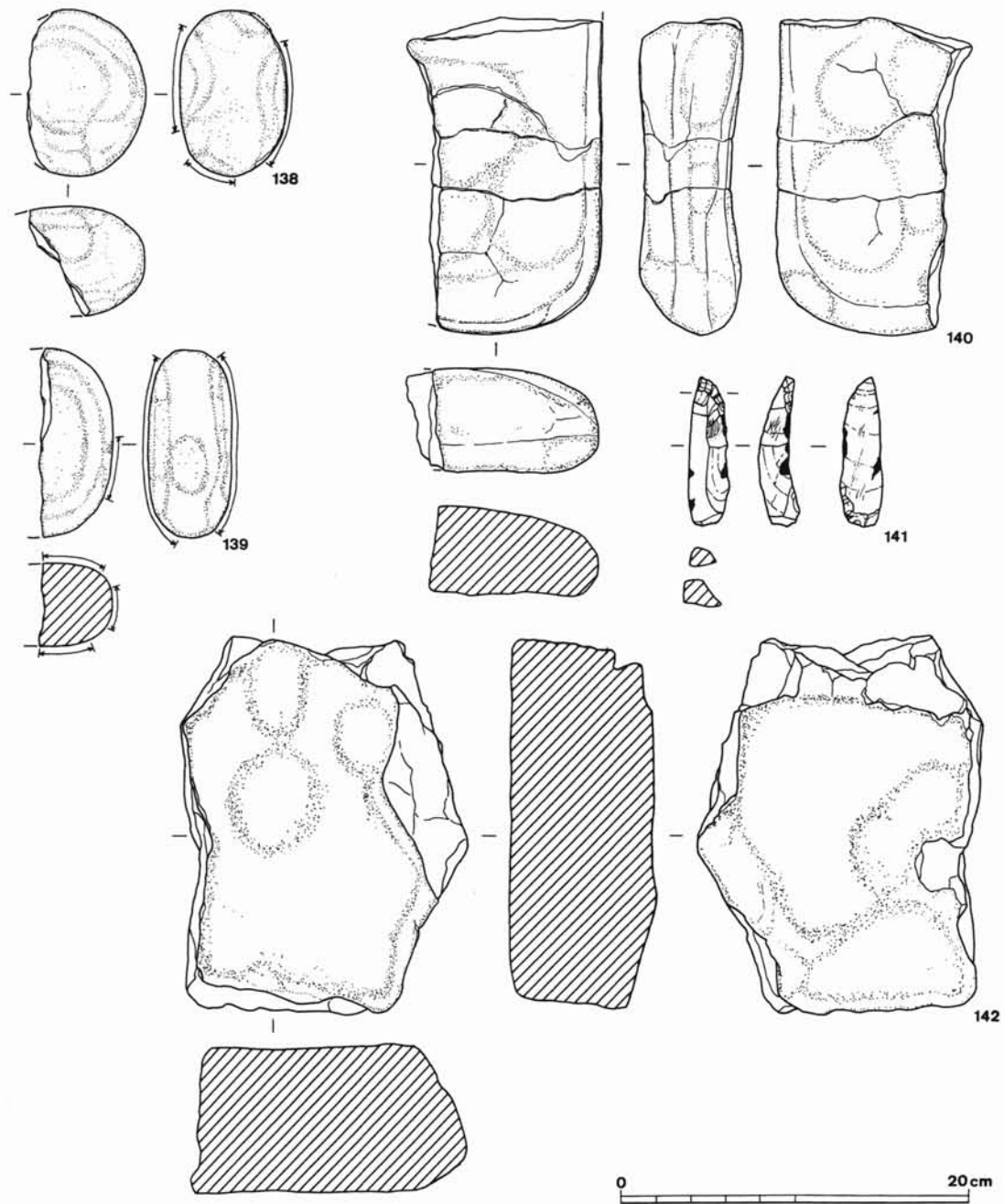
土坑S K 19出土土器(73) 波状口縁をなす土器で、口縁部外面に2条の沈線を施している。

土坑S K 27出土土器(74~81) 74はRL縄文を地文とする深鉢である。口縁部外面に波頂部に平行する2条の沈線を施し、波頂部には円形の押圧が見られる。その下部には4条の波状沈線が施される。75はc2期a1類cに該当する。波頂部直下の横位の長楕円の区画帯の間に橋状把手が貼り付けられる。区画帯のなかには「ハ」字状の刺突が施される。長楕円区画帯の下には7条の横方向の沈線が施され、その沈線間には、垂下する蛇行沈線が施される。また、蛇行沈線下には4条の縦方向の垂下沈線が施されている。垂下沈線間は帯状にLRの縄文が施される。79はLR縄文である。80・81は同一個体と考えられる。c2式c2類に該当する。LR縄文である。

土坑S K 30出土土器(82・83) 82はいわゆる鏝付き土器である。色調は赤褐色をなし、胎土に砂粒を多量に含む。滋賀県の湖東地域に類例が見られる。土器内



第65図 出土石器実測図(1)



第66図 出土石器実測図(2) (黒塗りは新しい割れ口)

土坑S K 91出土土器(94~99) 95~97は北白川C式土器の深鉢体部片である。地文はLR縄文である。

土坑S K 112出土土器(103) 波状口縁をなすc類の土器である。

土坑S K 113出土土器(104) LR縄文地文に垂下沈線を施す深鉢体部片である。

溝S D 12 出土土器(105・106) 105は船元Ⅲ式土器である。RL縄文である。

溝S D 66 出土土器(107・108) 108は北白川C式古段階の土器である。

土坑S K 127出土土器(109・110) 109はRLの太い原体による施文である。110は船元式土器

である。

土坑S K 37出土土器(111～113) 111は里木Ⅱ式土器である。屈曲部に横位施文の竹管状工具による波状文が施される。112は口縁端部にLRの縄文が施文されている。113は波状口縁をなす口縁端部片である。北白川C式2期c 2類である。

土坑S K 38出土土器(114～118) 114は里木式土器である。横位の文様帯を上下交互に刺突することにより、波状文様効果を出している。115は早期末石山式のD字爪形文土器である。116は船元Ⅲ式土器の体部片である。117の地文はLRである。118は113と同じc 2期c 2類土器の口縁端部片である。

遺構精査に伴う土器(119・120) 119は船元Ⅰ式土器の破片である。120は里木Ⅱ式土器である口縁部外面に横位の沈線を施し、その間に円形刺突をしている。114の破片より後出する。

(4) 平安時代の土器

ピットS P 94出土土器(121) 黒色土器碗である。内黒のA類である。内面は横方向のミガキが密に施される。

(5) 土製品

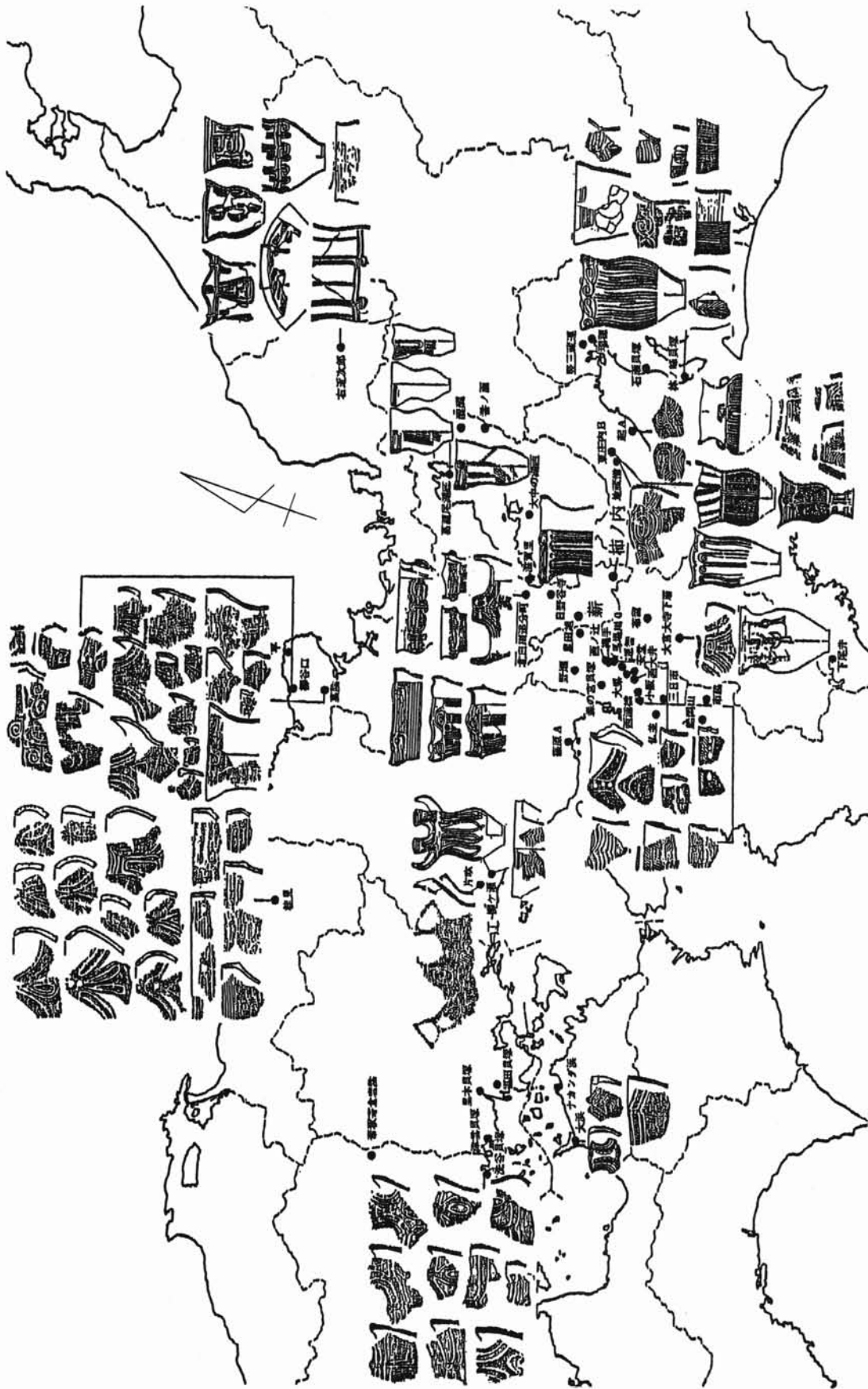
122は、竪穴式住居跡S H 68出土の土器片錘である。小判型をなす両端に切れ込みがある。

(6) 石器

石鏃・石匙・打製石斧・叩石・磨石、石皿・サヌカイトの剥片がある。石鏃は凹基無茎鏃である。123は土坑S K 20から出土した石鏃で完形品である。重量は0.88 gである。124は茎部分の一方を欠失している。重量は0.57 gである。125は柳葉形の石鏃である。重量は2.33 gである。126～128は石匙である。いずれも縦形のものである。石鏃・石匙とも石材はサヌカイトである。重量は126が9.01 g、127が15.49 g、128が5.28 gである。129は打製石斧と思われる。基部を欠失している。刃部と基部の境の側面には浅い抉りが認められる。石材は粘板岩である。重量は61.5 gである。130～139は磨石・敲石である。130・135は敲打痕を合わせもつ。130は重さ815 g、131・132・136～139は磨石である。131は重さ308 g、132は465 g、133は780 gである。134は敲石である。重さは540 gである。135は335 g、136は316 g、137は255 g、138は308 g、139は316 gである。140・142は石皿である。140は竪穴式住居跡S H 68の屋内炉に転用されていた。被熱により赤変し、割れていた。両面とも作業面をもつ。重量は1.73kgである。141は薪堂ノ後の表採資料である。『薪誌』に写真が掲載されているものを今回図示した。縄文時代のスクレイパー(削器)である。石材はサヌカイトである。重さ5.69 gである。142は土坑S K 17から出土した^(注4)。同じく両面に作業面をもつ。重量は5.32kgである。

5. まとめ

今回の調査では縄文時代中期末の遺構(竪穴式住居跡・土坑)が遺物を伴って検出された。これは南山城地域では初出である。当遺跡以外に南山城地域でこの時期の遺物を出土した遺跡には加茂町柿ノ内遺跡(恭仁宮下層)がある。大井谷川の西側に南北に延びる丘陵の先端部に位置し、標



第67図 各遺跡出土の北白川C式土器(参考文献6に加筆)

高は47m前後を測る。集落としての位置付けは明らかではないが、土器片が深さ約1.5mを測る自然流路内(S D951001)から出土しており、出土した中期末の土器は北白川C式3～4期である。このほか流路内の資料には、後期前葉(北白川上層1式)の土器も含まれる。

北山城地域では、京都市左京区の北白川遺跡群の北白川上終町遺跡(住居跡1基)、北白川追分町遺跡(住居跡2基)や、遺構の状況がわからないものの上賀茂遺跡がある。北白川追分町遺跡では土器が多量に出土しており、北白川C式が型式設定されている。また、京都市伏見区の日野谷寺町遺跡がある。標高は約48mを測る。丘陵の末端扇状地に立地する。遺構としては石囲炉2基、焼土坑がある。石囲炉は落ち込みの中心に位置しており、この落ち込みが竪穴式住居跡になる可能性もある。京都市山科区では、中臣遺跡がある。標高は約29mを測る。実態は不明であるが、栗栖野丘陵が低位段丘部に移行した地点に形成された低湿地から土器が出土している。乙訓地域では、向日市鶏冠井遺跡で土器溜りが検出されている。報告書は未刊行であるが、長岡京市の井ノ内遺跡では、円形のピットから北白川C式3・4期の深鉢B2類の破片や、包含層から若干の土器が出土している。

また、縄文時代後期まで広げてみると、縄文後期前半の土器が出土した遺跡には木津町の燈籠寺廃寺がある。この土器群は自然流路内から出土したもので、その土器の時期については、後期初頭(中津式)から断続的に後期末葉(宮滝式)までの遺物が出土している。これらの土器の中心となる時期は福田KⅡ式から四ツ池式(広瀬土坑40段階)、および北白川上層Ⅰ式段階(古段階)である。また、乙訓地域では長岡京市下海印寺遺跡で同時期の土器が出土している。遺構には土坑、集石遺構がある。南山城地域では後期中葉～後葉の遺跡として城陽市森山遺跡がある。遺構としては竪穴式住居跡などが確認されている。

今回の調査によって、薪遺跡の縄文時代中期末葉(北白川C式1・2期)の集落の一端が明らかになった。今回発見された縄文時代の集落は、薪遺跡の範囲からするとごく限られた成果に過ぎないが、こうした集落が扇状地上に点在しているものと判断される。これまでの調査では、縄文時代後期の土器を出土する地点も認められ、遺構は明らかではないものの、後期集落も存在する可能性がある。今後も隣接地で調査が予定されており、成果が期待される。

以上のように資料数は増加しているものの、乙訓地域を含めた京都府南部の中期末葉を概観してみても、北白川遺跡群を除くと集落の様相が明確な遺跡が少ないなかで、薪遺跡の成果は竪穴式住居跡や土坑群などが検出され、これらに伴って土器や石器が出土しており、より具体的な集落の状況が確認できる資料として特筆されるものである。

また、近畿地方に目を向けても当該期の資料は滋賀県では滋賀里遺跡、大阪府では豊中市野畑遺跡がある。野畑遺跡では29基の土坑とともに土器が出土している。また、北白川C式3・4期の資料として大阪府堺市の小阪遺跡がある。遺構としては、土坑・落ち込み・土器片敷遺構などが検出されている。

ただ、現段階で確認されている北白川C式1・2段階の土器が出土する遺跡は、数例を数えるに過ぎない。玉田芳英氏は、兵庫県龍野市片吹遺跡の報告で、関東地方の加曾利E式の影響を近

畿地方中央部が受容し、主導的な役割を果たしつつ周辺部へと波及していったとしている。

この仮説が正しいとするなら、今回、南山城地域において薪遺跡の縄文時代中期末(北白川C式1・2段階)の遺構および遺物が確認されたことにより、北白川C式古段階の土器が滋賀県から北山城地域を経て南山城地域に伝播したルートが確立したことは大きな発見と言える。それに伴いその文化が北白川C式3・4期(新段階)において日本海側、瀬戸内側、そして太平洋側へと広がり、また、大阪湾岸沿いに摂津、河内、和泉へと波及していったと考えられる。

(柴 暁彦)

注1 現地調査に於いては、京田辺市教育委員会鷹野一太郎氏、滋賀県立大学人間文化学部教授高橋美久二氏、鈴木重治氏から助言を得た。また、縄文土器全般について、京都大学大学院文学研究科教授泉拓良氏、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館松田真一氏、長野県岡谷市教育委員会会田進氏、福井県教育庁埋蔵文化財センター山本孝一氏・白川綾氏、関西縄文文化研究会の方々からご教授を得た。このほか礫石器については、古代学協会桐山秀穂氏の教示を得た。記して感謝したい。

注2 調査参加者 杉江貴宏・穂積優子・堀瀬賢二・松本一彦・渡辺理気・村上優美子・栃木道代・徳田智恵子・川端美恵(順不同、敬称略)

注3 泉拓良ほか「第3章 遺物」、「第1章 北白川追分町遺跡出土の縄文土器 1 中期末縄文土器の分析」(『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター) 1985

注4 高橋美久二ほか『薪誌』 薪誌刊行委員会 1991

参考文献

1. 鷹野一太郎ほか「薪遺跡発掘調査概要」(『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第30集 京田辺市教育委員会) 2000
2. 渡辺誠「京都府長岡京市下海印寺遺跡範囲確認調査報告書」(『長岡京市文化財調査報告書』第10冊 長岡京市教育委員会) 1982
3. 小島孝修「恭仁京跡平成8年度発掘調査概要(2)縄文時代」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1997
4. 富井眞「北白川追分町遺跡出土の縄文土器—北白川C式の成立を考える—」(『京都大学構内遺跡調査研究年報1994年度』京都大学埋蔵文化財研究センター) 1998
5. 泉拓良ほか「第2章 縄文時代 第2節 遺跡の説明 (2)野畑遺跡」(『新修豊中市史』第4巻 考古豊中市教育委員会) 2005
6. 合田幸美「第2章 北白川C式土器について—小阪遺跡出土土器を中心として」(『小阪遺跡—近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書—自然科学・考察編』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター) 1992
7. 田辺昭三編 (『湖西線関係遺跡調査報告書 図版編』湖西線関係遺跡調査団) 1973
8. 玉田芳英「縄文時代中期末～後期初頭の土器について」(『片吹遺跡 龍野市文化財調査報告書6』龍野市教育委員会) 1985

4. 樁井^{つばい}遺跡第1・2次発掘調査概要

1. はじめに

樁井遺跡は、京都府相楽郡山城町樁井に所在する縄文時代～近世の複合集落遺跡である。遺跡は、三角縁神獸鏡が大量に出土したことで知られる樁井大塚山古墳の後背丘陵上に立地する。今回の調査は、樁井大塚山古墳の東方の丘陵部を縦断する府営農免農道整備事業に伴い、京都府山城土地改良事務所の依頼を受けて実施したものである。

樁井遺跡は、遺物散布地として知られていたが、過去に発掘調査は行われておらず、調査にあたっては、まず試掘調査を行い、遺構の広がりを確認された部分について、拡張調査を行った。対象地は、谷部を挟んで2つの丘陵上にあり、北部丘陵を第Ⅰ地点とし、南部丘陵を第Ⅱ地点とした。調査は2か年にわたり、試掘を含め、第1次調査として1,000㎡を対象とし、第2次調査として200㎡の調査を実施し、合計1,200㎡の調査を終了した。調査期間は、第1次調査を平成16年9月21日～平成17年2月10日とし、第2次調査に平成17年4月17日～5月30日をあてた。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長石井清司、同主査調査員柴暁彦、同調査員高野陽子が担当した。第1次調査は、高野が担当し、第2次調査は、柴が担当した。本報告は、柴と高野が分担執筆したものである。文責については、文末に示した。調査にあたっては、京都府山城土地改良事務所、山城町教育委員会や京都府教育委員会をはじめとする関係諸機関や、地元山城町自治会・樁井大塚山古墳保存会など関係者の方々に多大なご支援とご協力を得た。また、調査に参加していただいた作業員・調査補助員・整理員には記して感謝の意を表したい^(注1)。

なお、調査に係る経費は、全額、京都府山城土地改良事務所が負担した。

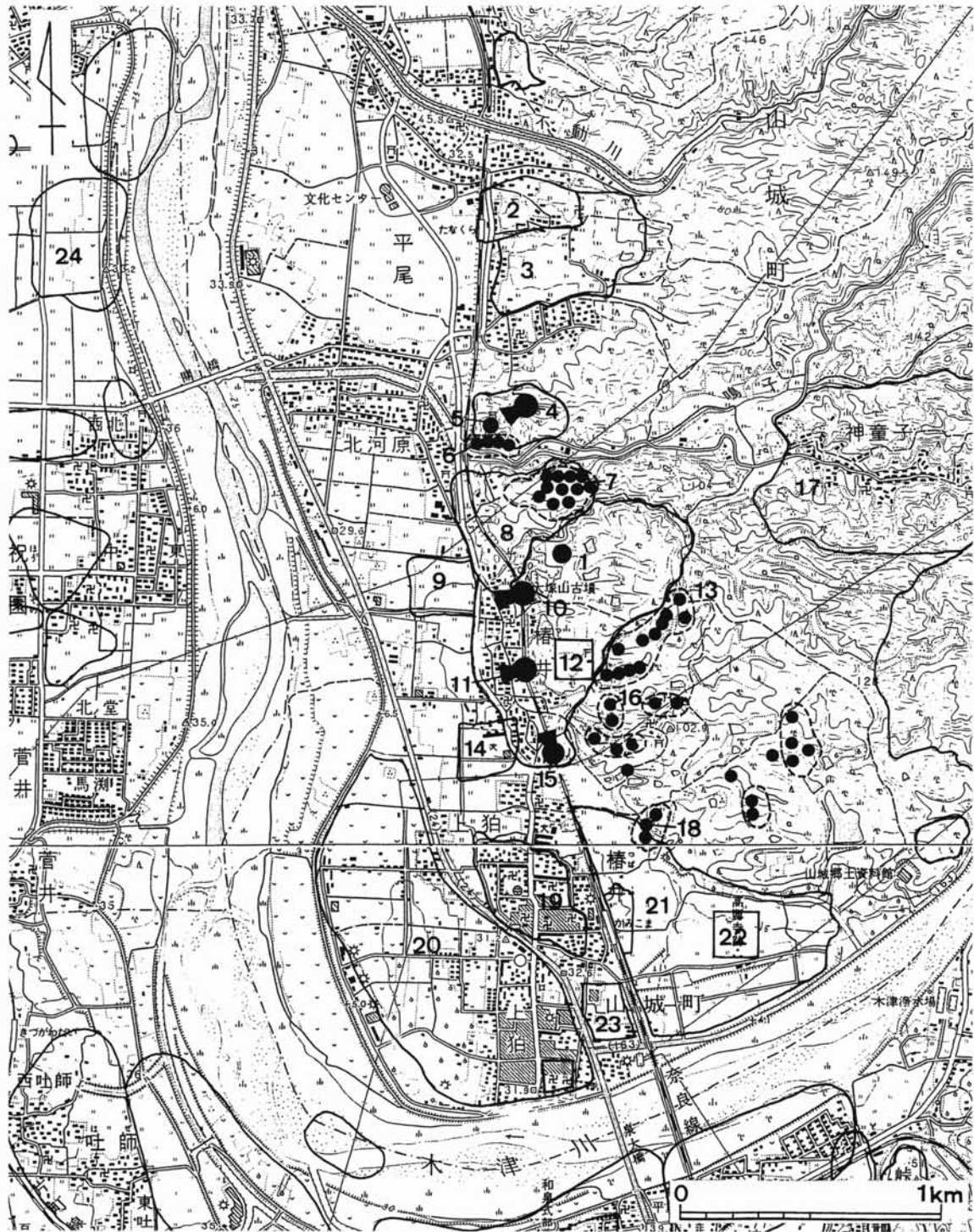
2. 周辺の遺跡

樁井遺跡は、木津川東岸の高位段丘上に形成されたもので、山城最大の前期前方後円墳である樁井大塚山古墳の東方丘陵上に立地する。周辺では、山城町平尾の湧出宮遺跡から縄文時代前期の土器が出土し、堂の上遺跡や樁井大塚山古墳の盛土内から、北白川C式や中津式をはじめとする縄文時代中～晩期の土器が出土している。

弥生時代には、中期に湧出宮遺跡や山城町上粕西遺跡などで、低地の集落遺跡が形成されるようである。後期には、中葉～後葉に、前述した上粕西遺跡で再び集落の活発な形成がみられ、木津川西岸の棕ノ木遺跡では大溝が検出され、周辺に大規模な集落の存在が推定される。この時期には、丘陵上でも多くの遺跡が存在しており、堂ノ上遺跡や、樁井大塚山古墳の盛土内のほか、平尾城山古墳や天上山古墳の調査の際にも、土器が出土している。なかでも、天上山古墳の調査の際に検出された大溝は、弥生時代後期と推定されるもので、丘陵上に大きく集落が展開する可

能性がある。

古墳時代前期は、周辺には山城でも最大規模の前方後円墳が相次いで築造される。30数面の三角縁神獸鏡を出土した椿井大塚山古墳(全長約175m)に続いて、平尾城山古墳(全長約110m)が築



第68図 調査地および周辺主要遺跡分布図(国土地理院1/25,000田辺・奈良)

- | | | | | |
|------------|-----------|------------|-----------------|-------------|
| 1. 椿井遺跡 | 2. 湧出宮遺跡 | 3. 丹夕遺跡 | 4. 平尾城山古墳 | 5. 稻荷山古墳 |
| 6. 北谷横穴群 | 7. 西ヶ峰古墳群 | 8. 堂ノ上遺跡 | 9. 坂ノ下遺跡 | 10. 椿井大塚山古墳 |
| 11. 天上山古墳 | 12. 松尾廃寺 | 13. 宮城谷古墳群 | 14. 柳田遺跡 | 15. 御霊山古墳 |
| 16. 切ヶ敷古墳群 | 17. 神童寺遺跡 | 18. 天竺堂古墳群 | 19. 狛城跡(大里環濠集落) | |
| 20. 上狛西遺跡 | 21. 上狛東遺跡 | 22. 高麗寺跡 | 23. 鶴白遺跡 | 24. 棕ノ木遺跡 |

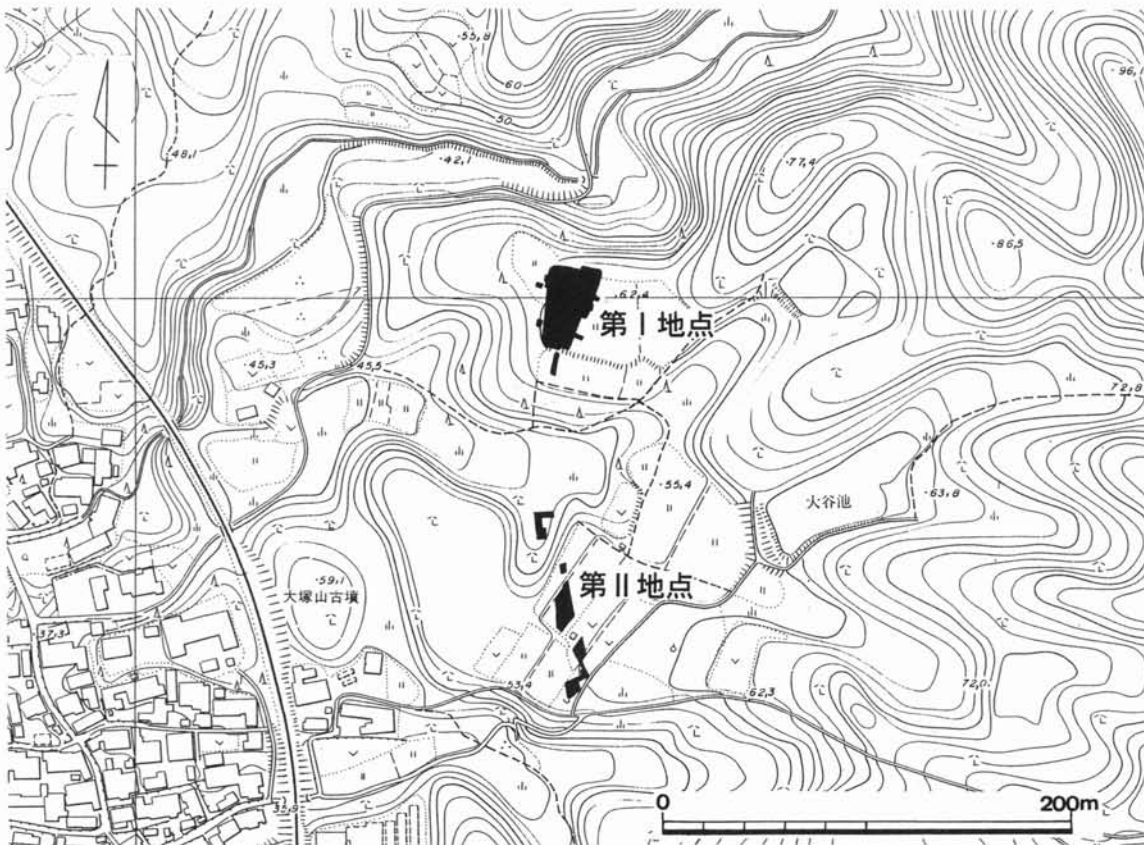
造され、詳細は不明であるが、天上山古墳や御陵山古墳もまた前期と推定されている。中期には、古墳の築造は、対岸の精華町鞍岡山古墳群や木津町域の内田山古墳群や上人ヶ平古墳群などで大きく展開するようになり、城陽市の久津川車塚古墳を頂点とする久津川古墳群が山城地域の覇権を確立する。後期には、山城町域では古墳の築造が活発となり、周辺で、西ヶ峰古墳群、宮城谷古墳群、北谷横穴群などの後期古墳が築造される。

歴史時代以降、飛鳥時代には、山城盆地における寺院建立の嚆矢となった高麗寺に続いて、蟹満寺が造営される。また奈良時代には、北に隣接する井出町で、橘諸兄の建立とされる井出寺が造営され、山城町域でも、高井出瓦窯で南都七大寺式の鬼瓦が出土するなど、木津川沿いに大規模な寺院や官営の瓦工房跡が多く分布する。平安時代には、椿井遺跡北西の神童寺が山岳信仰の霊地として信仰され、修験霊場として栄えた。

中世戦国期には、山城南部は山城国一揆の舞台となり、周辺は西軍の畠山義就が居城を置いたと伝えられる。

3. 調査概要

椿井遺跡は、これまで遺物散布地として知られるだけで、実態が不明であったため、調査にあたっては、まず南北約200mの計画路線帯に試掘調査を実施した。対象地は、谷部を挟んで2つの丘陵上にあり、北部丘陵を第I地点とし、南部丘陵を第II地点とした。第1次調査として、平成16年度にまず第I地点を対象とした試掘調査を行い、遺構の広がる部分を中心に拡張し、面的



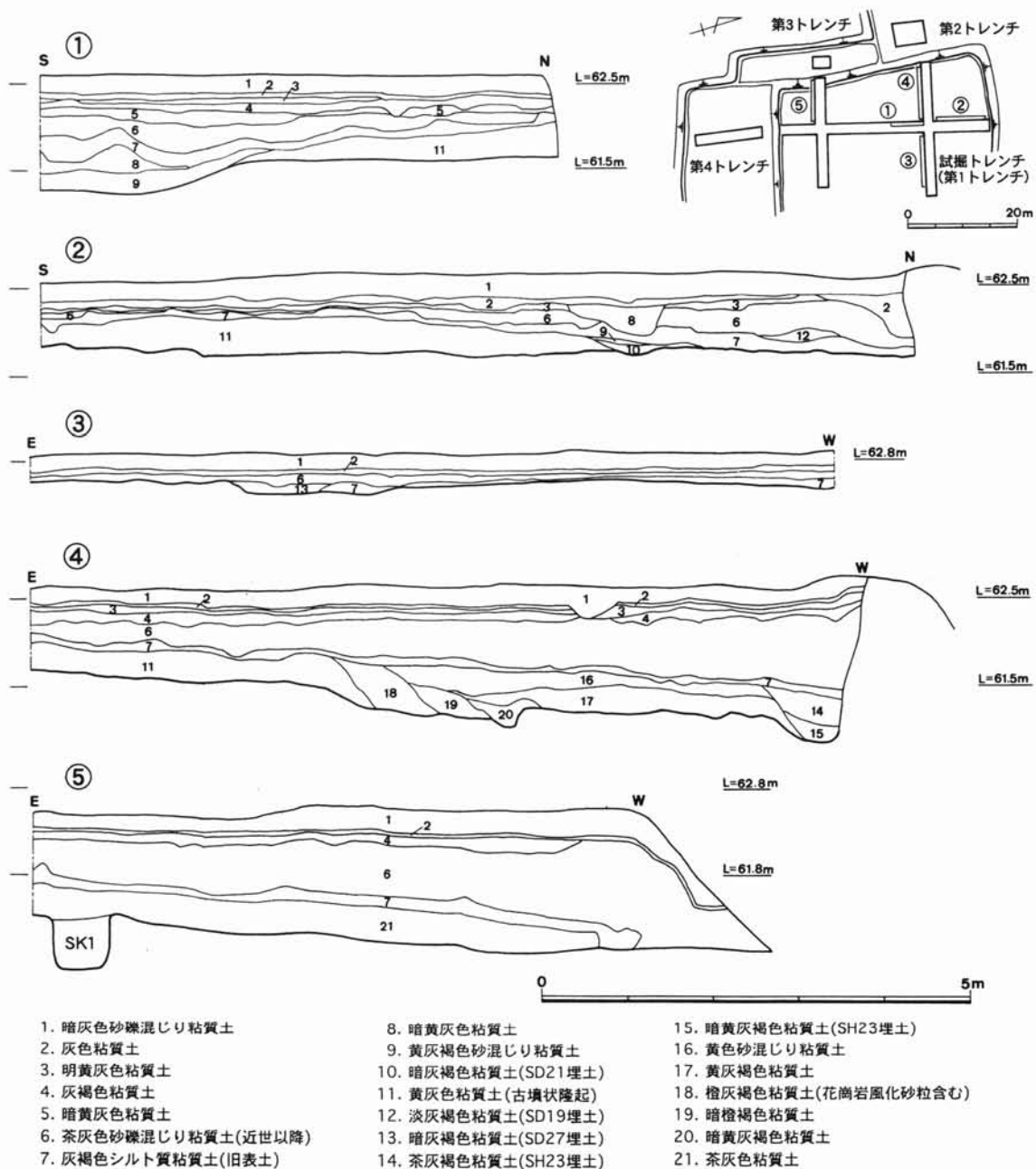
第69図 調査地配置図

調査を実施した。また、同じく第1次調査として、第Ⅱ地点を対象に試掘調査を実施し、平成17年度に第2次調査として、面的調査を実施した。最終的に、第Ⅰ地点880m²、第Ⅱ地点320m²を対象とし、合計1,200m²の調査を終了した。

(1)第Ⅰ地点

①第1トレンチ

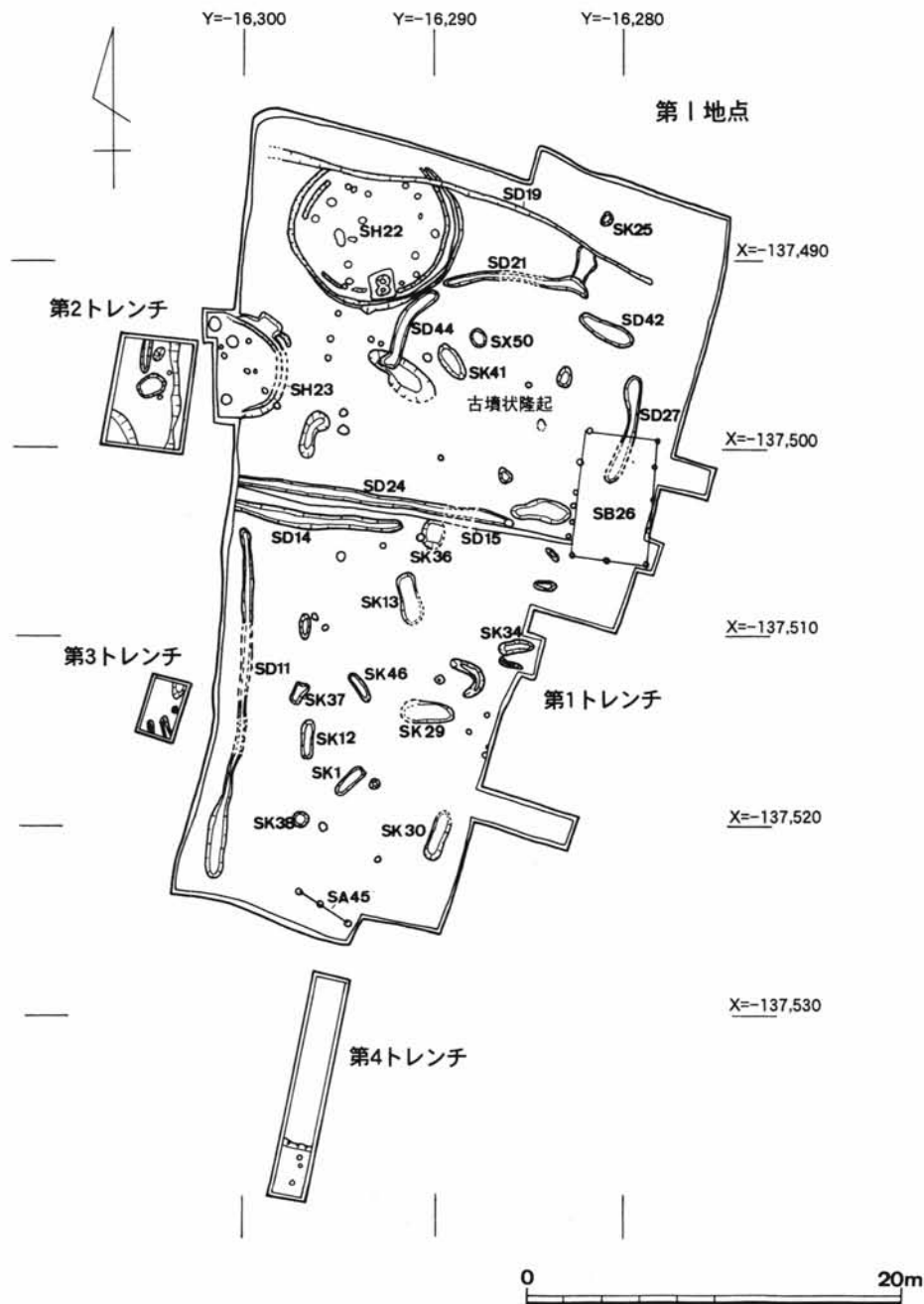
基本層序 第1トレンチは、調査前には竹林となっており、広く平坦面が形成されていた。調査にあたっては、まずこの平坦面に、南北と東西に直交する試掘トレンチを設定した(第70図)。基本層序は、表土(暗灰色粘砂質土；第1層)下において灰色粘質土(第2層)および灰色砂混じり



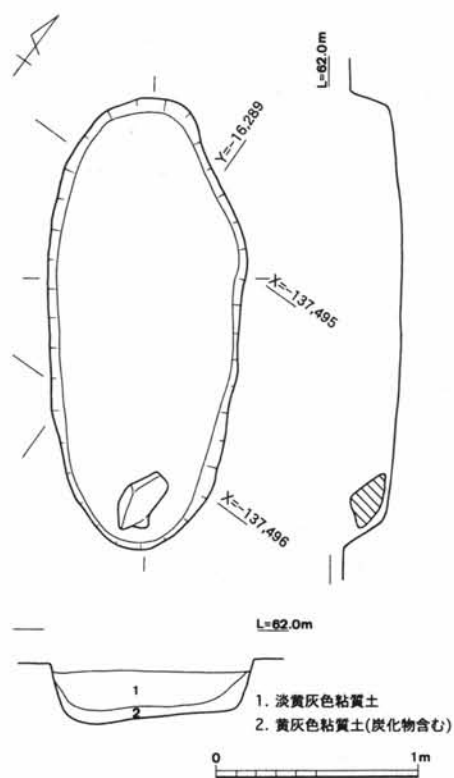
第70図 第Ⅰ地点土層断面図

粘土層(第3層)を約20cmの厚さで検出した。その下層では、茶灰色粘砂質土(第6層)を検出したが、この層は、平坦面中央部では約0.4m、東部では約1m堆積しており、平坦面を造成するための人為的な盛土であることが判明した。江戸時代前期と推定される溝は、丘陵傾斜に沿って検出していることから、平坦面の造成は当該期以降になされたものと考えられる。第6層直下では、約0.1~0.2mの厚さで灰色シルト層を検出し、平坦面造成前の旧表土と推定された(第7層)。この層位の下層には、約0.4mの厚さで茶灰色粘質土を検出した。弥生時代と推定される土坑は第5層直下から掘削されている。

検出遺構 第1トレンチでは、縄文時代後期の土坑1基、弥生時代後期の竪穴式住居跡2基、



第71図 第I地点遺構配置図



第72図 土坑 S K 41 実測図

弥生時代と推定される土坑群、古墳時代後期と推定される古墳状隆起、時期不明の掘立柱建物跡1棟、江戸時代の溝状遺構などを検出した。

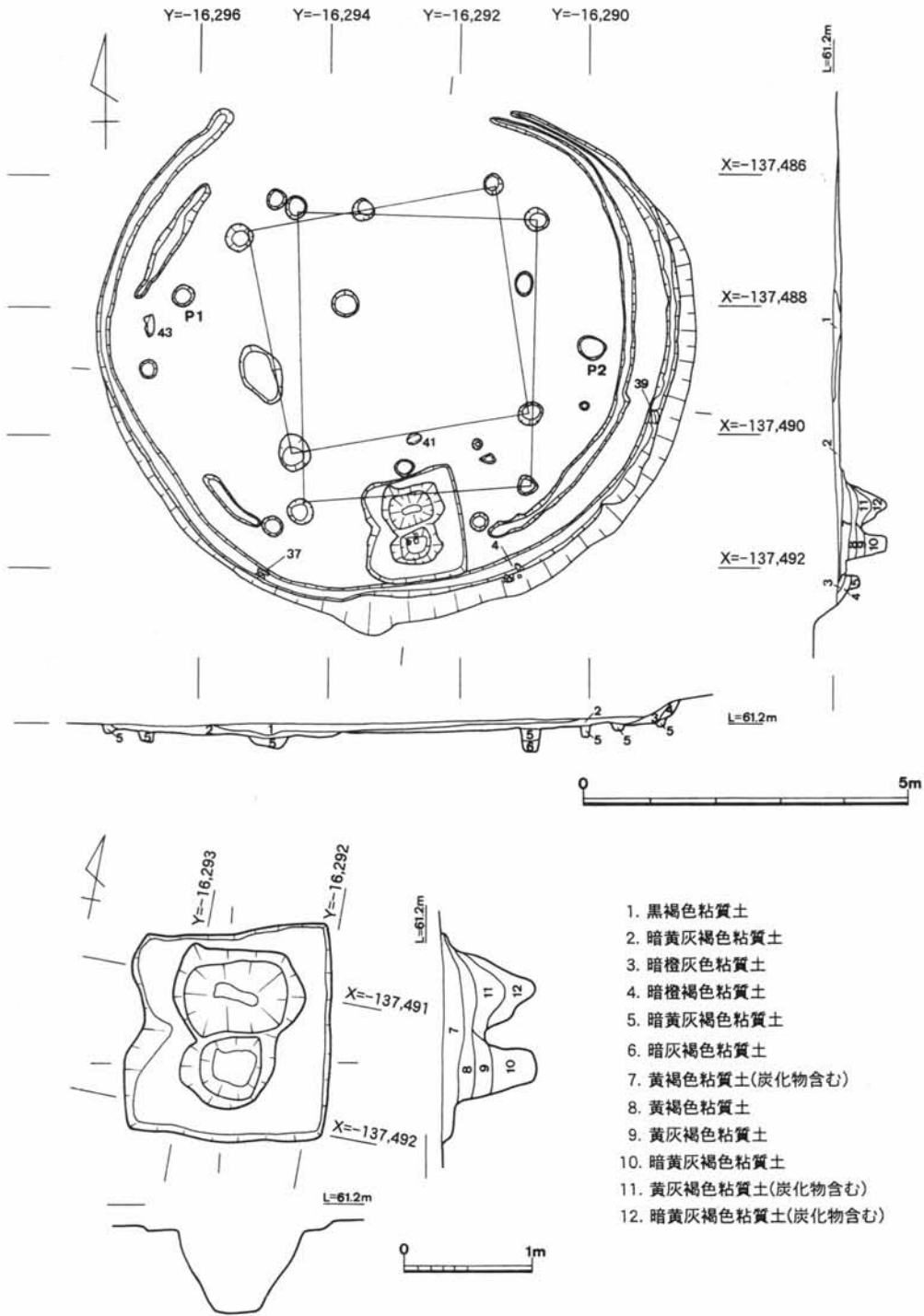
a. 縄文時代の遺構

土坑 S K 41 (第72図) 調査区北部で検出した土坑である。北部では、古墳の基底部と推定される低い円丘状の盛土を除去した標高61.8mのレベルで検出したものである。土坑の輪郭は、南北に長い歪な楕円形状を呈する。長径2.2m、短径0.95m、深さ約0.3mを測る。基底部はほぼ水平に掘削されており、埋土は淡黄灰色粘質土(上層)と黄灰色粘質土(下層)の2層からなる。土坑内南東で人頭大のチャート製の石材1点が出土した。石材には加工は認められず、重さは約13kgを測る。また、中央部下層から、縄文時代後期初頭と推定される縄文土器片1点が出土した。土坑の形状や石材の出土状況から、墓の可能性はある。

落ち込み S X 50 土坑 S K 41の東側で検出した円形状をなす炭化物の薄い広がりである。直径約0.7mを測る。周辺から遺物は出土していないが、検出レベルは、土坑 S K 41に近く、縄文時代の遺構である可能性が高い。

b. 弥生時代の遺構

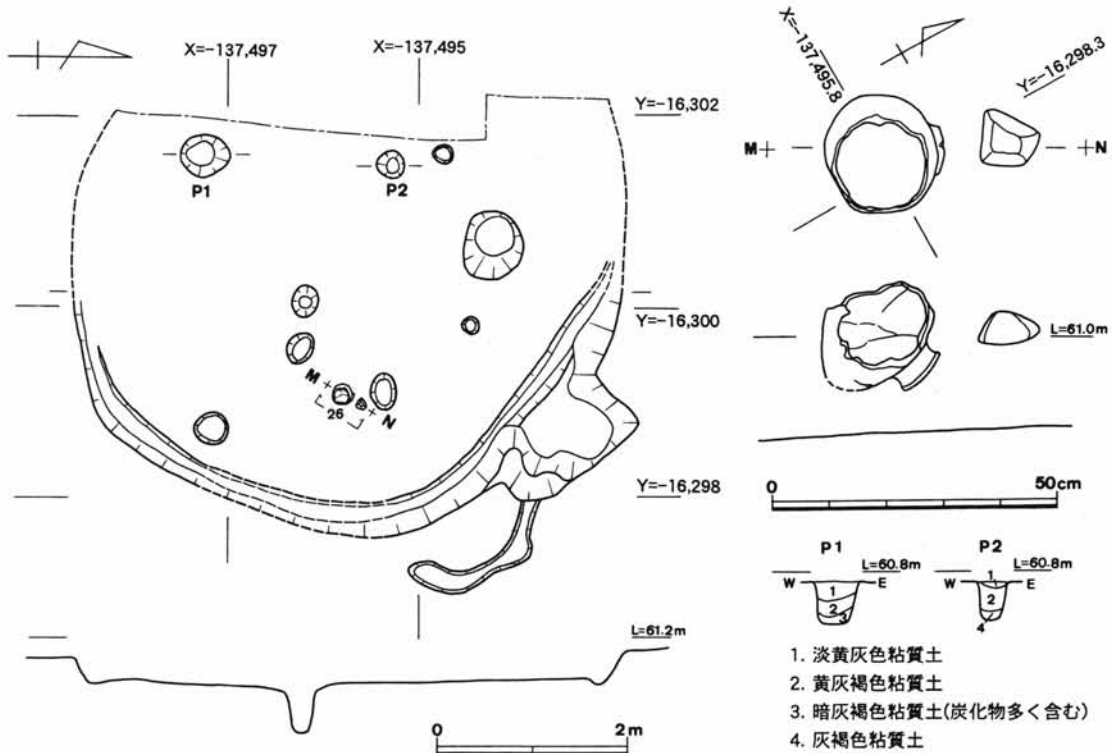
竪穴式住居跡 S H 22 (第73図) 調査区北部で検出した竪穴式住居跡である。規模は、直径約9.2mを測る。住居の床面から、支柱穴や土坑のほか、円形に巡る周壁溝を検出した。周壁溝が2重に巡ることや、支柱穴の数と位置から、住居はほぼ同じ位置で建て替えが行われ、規模を拡大したとみられる。柱構造は、対角線上に位置する4基の柱穴を主柱穴とするものである。建て替え後も、柱構造は踏襲されるが、東西の各柱列におおよそ直交する位置に、主柱穴と同様の深さをもつ柱穴を検出しており、建て替え後は屋内に棟持柱の支柱を配する入母屋構造をとったと推定される。住居床面では、南側の壁寄りで検出した円形の土坑は、径約0.4m、深さ約0.6mを測り、その上面に方形の浅い掘り込みを設けるもので、上板などで蓋をする構造の貯蔵穴とみられる。この土坑もまた、建て替えによって南側に再掘削される。土坑内からの出土遺物は乏しく、わずかに土器片が出土した。床面からは、弥生土器のほか、砥石や砂岩製敲石、花崗岩製台石など、石製品が出土した。遺物の多くは地盤を削り出した床面直上から出土しており、貼り床は施されなかったものとみられる。また、床面には、被熱して赤変した部分は認められず、灼跡は検出していない。出土遺物のうち、壺の体部片には、赤色顔料が付着しており、赤彩土器と推定される。また、敲石にもわずかに赤色顔料の付着が認められた。土器の赤色顔料は、色調から



第73図 竪穴式住居跡S H22実測図

ベンガラ(酸化鉄)と推定される。出土土器から、弥生時代後期中葉頃の住居跡とみられる。

竪穴式住居跡S H23(第74図) 第1トレンチ北部に位置する住居跡である。床面の西側は、後世の削平を受けている。残存状況が悪いため、住居の平面形には不明な部分が多いが、円形ないしは、多角形住居となる可能性がある。南西部は直線的に延びる部分があり、これをその一辺と捉えた場合は、一辺約3.3mの五角形状を想定することが可能である。規模は、直径約5.6m、深さ約0.25mを測る。床面から、周壁溝と支柱穴を検出した。支柱穴は、深い掘形をもつP 1～3



第74図 竪穴式住居跡S H23実測図

などが該当するものとみられる。また北東側に土坑状の落ち込みを検出しており、住居の出入り口に対応する部分である可能性がある。出土遺物は、床面から、ほぼ完形の壺形土器1点が出土した。出土した土器から、おおよそ弥生時代後期中葉の住居跡と推定される。

土坑群 第1トレンチから、計12基の土坑群を検出した。これらは縄文時代の土坑とは離れて、住居のない中央から南部に集中する。このうち土坑SK1からは、弥生土器片が出土している。掘削レベルや埋土の状況などから、土坑群の時期は、土坑SK1とおおよそ同様のものとみられ、弥生時代の土坑群と推定される。

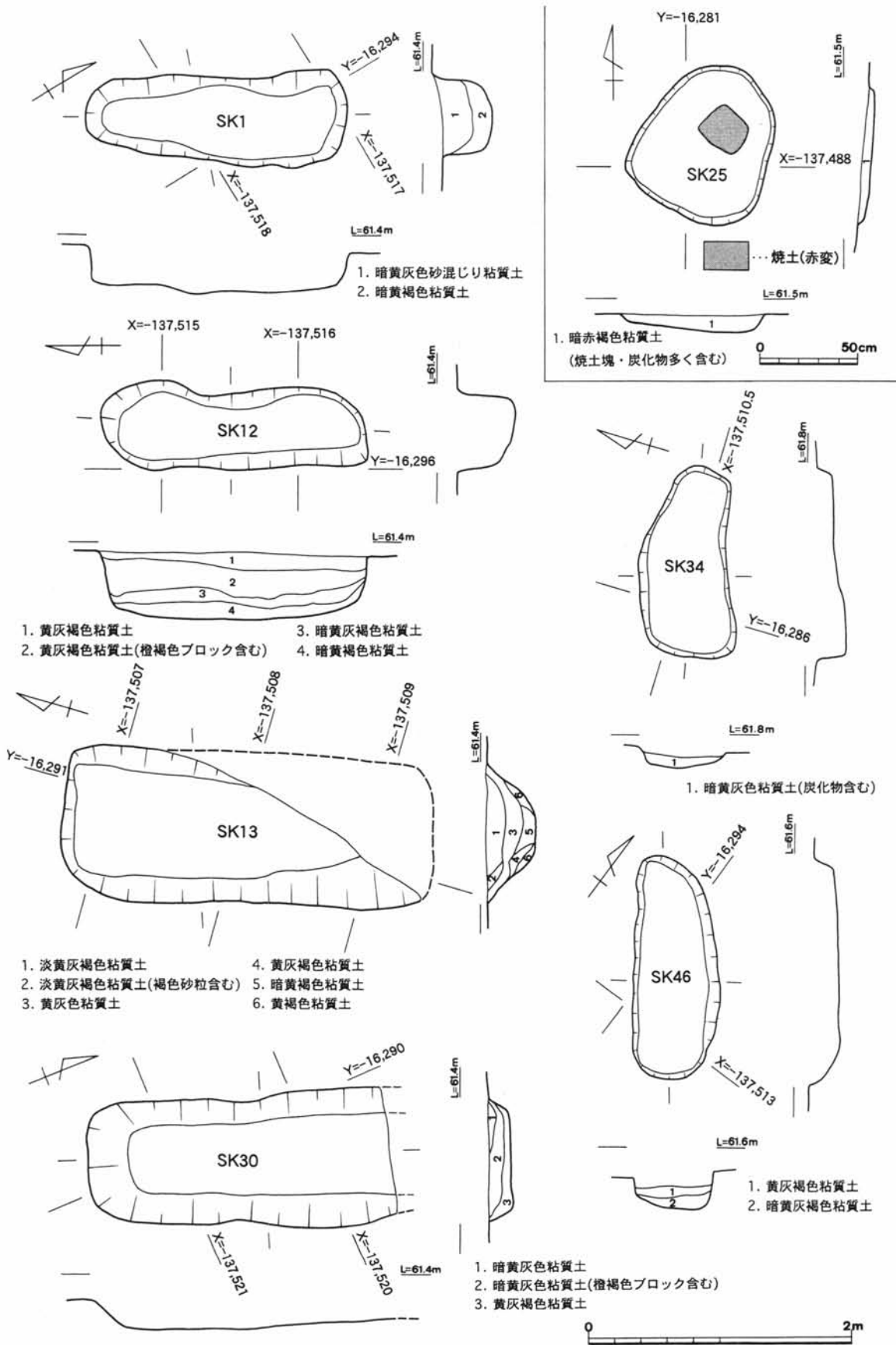
土坑SK1(第75図) 第1トレンチ南部で検出した方形の土坑である。規模は、約2.0m×0.6m、深さ0.4mを測る。埋土の中位から、弥生土器片が出土した。土坑の形状から、弥生時代の埋葬施設の可能性がある。

土坑SK12(第75図) トレンチ南西部で検出した土坑である。平面形は、歪な方形を呈する。規模は、約1.95m×0.6m、深さ0.45mを測る。

土坑SK13(第75図) トレンチ中央部で検出した。試掘調査で南東部を検出しており、規模は約2.5m×1.1m、深さ0.4mを測る。遺物は出土していない。

土坑SK30(第75図) トレンチ南東部で検出した方形の土坑である。試掘調査で、北側の一部を断面で確認した。規模は、約2.3m×0.95m以上と推定される。基底は平坦に掘削されている。遺物は出土していない。

土坑SK34(第75図) トレンチ中央で検出した歪な方形の土坑である。規模は、約1.45m×0.65m、深さ0.15mを測る。埋土には、炭化物を多く含む。



第75図 土坑実測図

土坑 S K 46(第75図) トレンチ中央西側で検出した方形の土坑である。規模は、約1.7m×0.65m、深さ約0.2mを測る。遺物は出土していない。

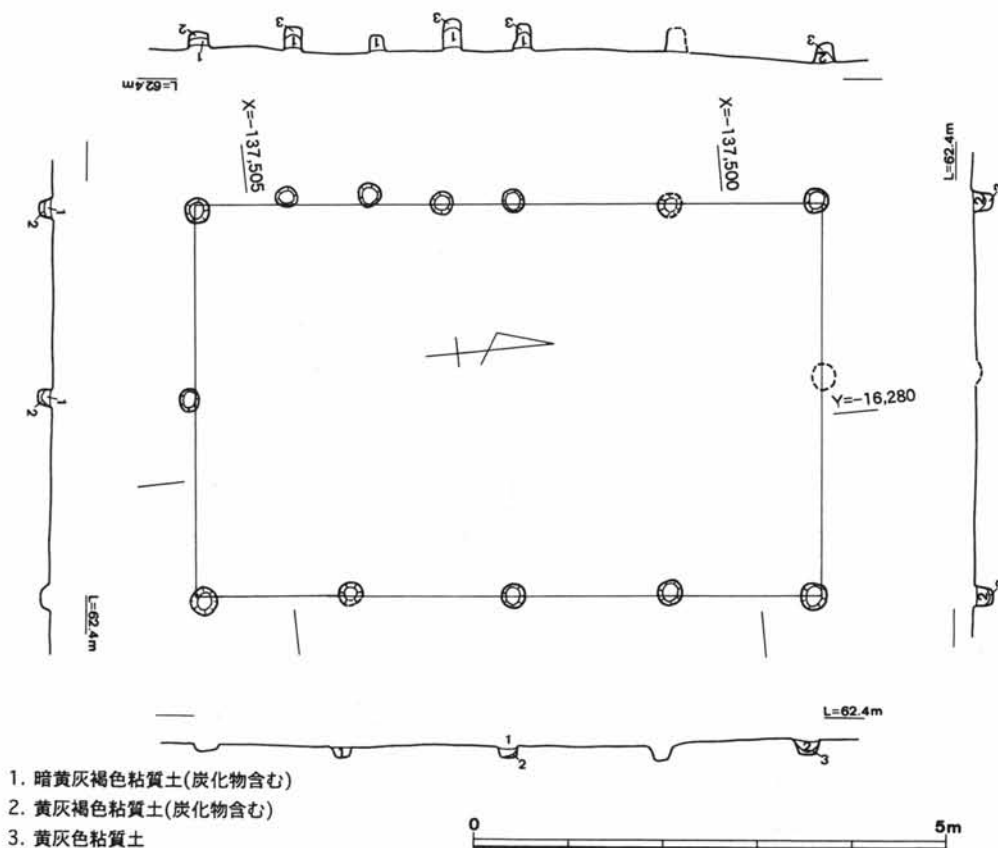
c. 古墳時代以降の遺構

古墳状隆起(第71図) トレンチ北東で溝 S D 21・27・44などに囲まれる古墳状隆起を検出した。これらの溝の内側の地山は周囲より約10cm程度高く、おおよそ径約12m前後の円形を呈する。断面観察からも(第70図)、人為的な地山の掘削を行っていることが明らかであり、古墳の基底部分である可能性が高い。中央部はすでに大きく削平されており、埋葬施設などは検出していないが、周辺で古墳時代後期とみられる須恵器高杯の脚部片が出土している。

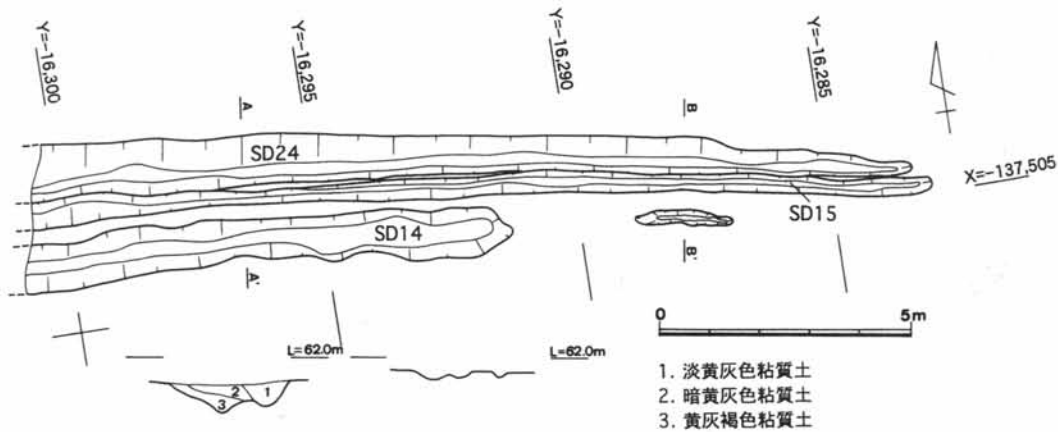
土坑 S K 36 この古墳状隆起の南に接して検出した。規模一辺約1.2m、深さ0.1mの方形の土坑である。上面で、古墳時代後期と推定される長頸鎌が出土した。この周辺では、鉄鎌の破片とみられる鉄器が出土しており、古墳に伴う遺物の可能性が高い。

土坑 S K 25(第75図) トレンチ北東端で検出した円形の土坑である。規模は径約0.7mを測る。土坑内から特に遺物は認められなかったが、焼土や炭化物が多く出土した。床面は著しく赤変した部分があり、長時間にわたって被熱を受けたとみられる^(注2)。

掘立柱建物跡 S B 26 トレンチ北東で検出した4間×2間の建物跡である。桁行約6.6m、梁間約3.6m、柱間約1.5~1.8mを測る。西柱列の南2基の柱穴間では、添え柱の柱穴(第71図)を



第76図 掘立柱建物跡 S B 26実測図



第77図 溝S D14・15・24実測図

検出している。遺物は出土しておらず、時期は明確にできない^(注3)。

柱列S A45 トレンチ南端で検出した柱列である。柱間は1.3～1.9mであり、2間分を検出した。柵列とみられるが、南側は大きく後世の削平を受けるため、建物跡であった可能性も否定できない。柱穴から、遺物は出土していない。

溝S D14・15・24 トレンチ中央部を東西に併走する溝群である。溝S D15と溝S D24は長さ約17mにわたって検出した。溝S D14と溝S D24が最初に掘削され、さらに溝S D24に一部重複して、溝S D15が掘削されている。東西の溝底のレベル差は、約1.4mを測り、丘陵部の本来の傾斜に沿って東から西へ掘削されたものである。溝S D24の埋土から、寛永通寶7枚が一部融着して出土した。いわゆる「古寛永」であり、溝は江戸時代前期に掘削されたものとみられる。

溝S D11 トレンチ西端で南北方向に部分的に検出した溝である。幅約0.5m、深さ約0.2mを測る。染付が出土しており、江戸時代中期の溝と推定される。

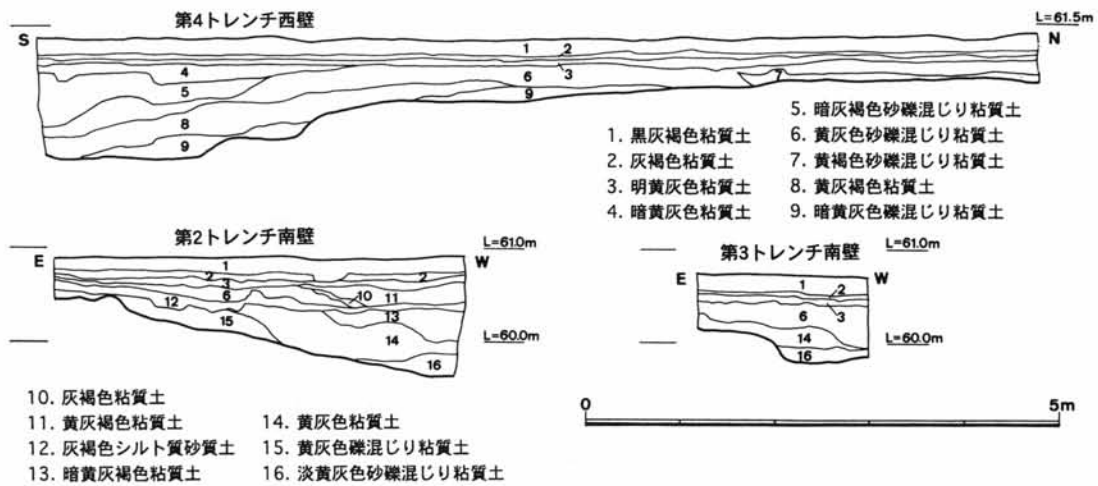
溝S D19 トレンチ北端で東西方向に検出した溝である。幅約0.3m、深さ約0.2mを測る。溝S D11と同様、染付などが出土し、江戸時代中期の溝とみられる。

②第2トレンチ

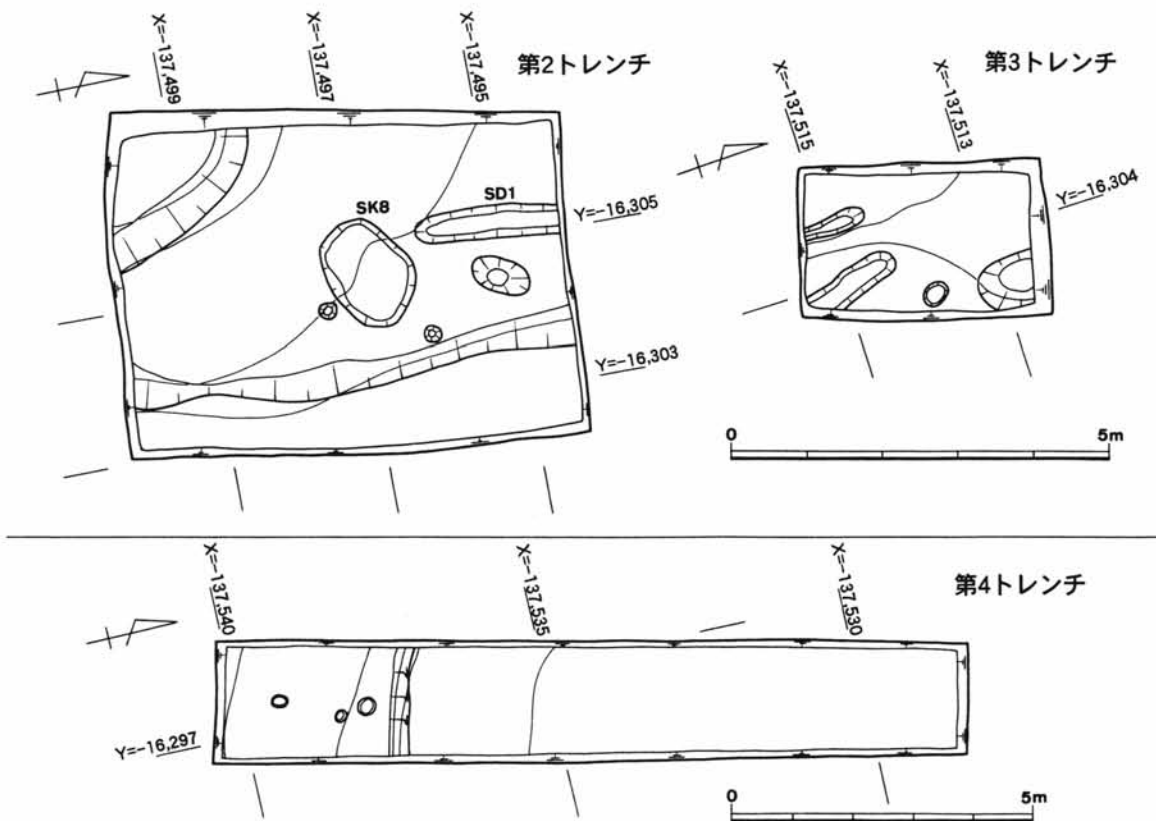
第1トレンチ北西に隣接して設定したトレンチである。第1トレンチの平坦面から、約1.3～1.5m低い地点に位置する。中央部で、土坑1基と柱穴とみられるピット2、さらに西壁で溝の東の肩部とみられる落ち込みを検出したため、西側を崖面まで拡張した。最終的なトレンチの規模は、約6.0×4.5mを測り、面積は約27㎡である。検出遺構のうち、土坑S K 8は、規模約1.4m×1.0m、深さ約0.2mを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。溝S D 1は、トレンチ北側で検出した溝である。幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。埋土の状況から、古墳時代以降の溝と推定されるが、遺物は出土しておらず、時期は確定できない。

③第3トレンチ

第1トレンチ南西に隣接して設定した試掘トレンチである。規模は、約3.5m×2.0mを測り、面積は約7㎡である。ピット1基、溝状の落ち込みを2条、土坑状の落ち込みを1基検出したが、



第78図 第2～4トレンチ土層断面図



第79図 第2～4トレンチ遺構配置図

いずれも遺物は出土していない。

④第4トレンチ

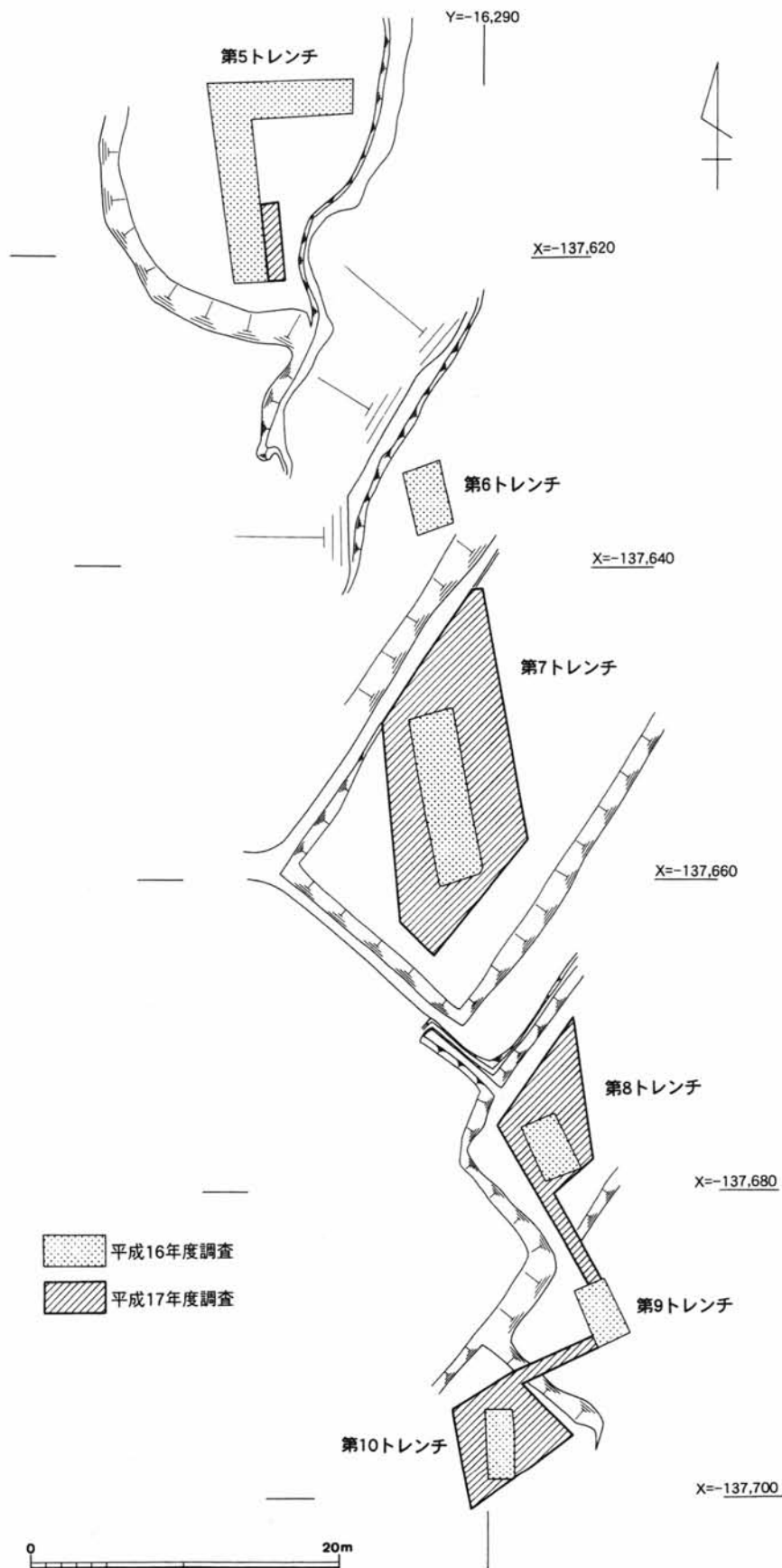
第1トレンチの南側は、約10mにわたって平坦面を形成しており、この中央部に第4トレンチを設定した。南北約12.5m、東西2mの規模をなし、調査面積は約25㎡である。トレンチは南端で大きく傾斜しており、この傾斜面からピットを検出した。しかしながら、中央部から北部にかけては大きく削平され、遺構はみとめられなかった。(高野陽子)

(2)第II地点の調査

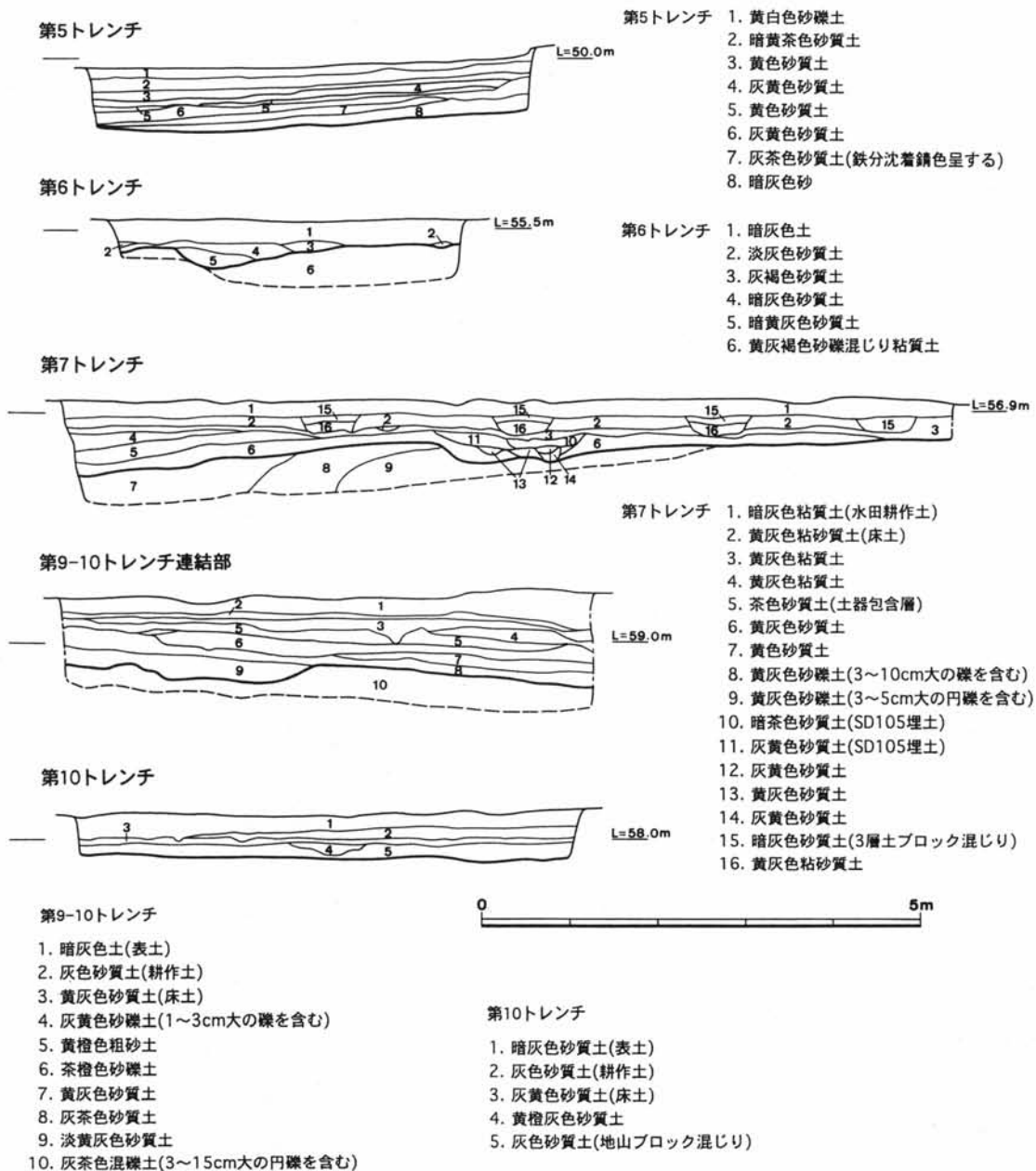
第II地点は、第I地点と谷を挟んで約100m南に位置する。平成16年度(第1次調査)に、6か所の地点(第80図:第5~10トレンチ)で合計120m²の試掘調査を実施し、遺構や遺物の確認された地点について、平成17年度(第2次調査)に200m²の面的調査を実施した。調査地点は、まず谷部に第5トレンチを設定し、丘陵部に第6~10トレンチを設定した。第6~10トレンチは、旧地形の高低差が大きく、第8~9トレンチ周辺が最も高く、第7トレンチとの高低差は、約2mを測る。

①第5トレンチ

第I地点北部の谷部に設定したトレンチである。試掘調査では、トレンチ北部で、谷筋に沿って構築された竹材の暗渠の一部を検出した。また南部では黄褐色粘質土の広がりを確認し、人頭大の石材が出土した。南部の西側斜面では、花崗岩の



第80図 第II地点トレンチ配置図

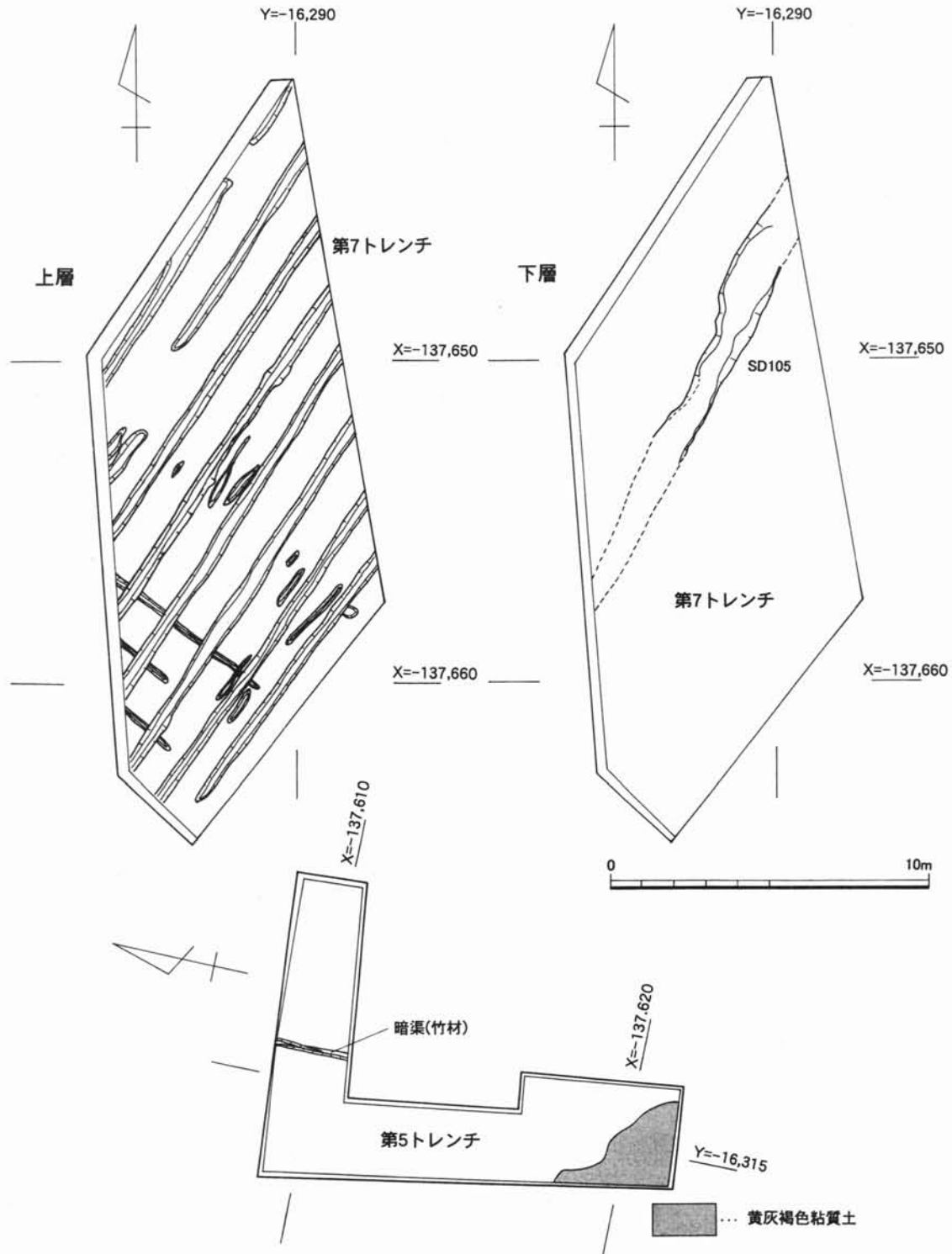


第81図 第5～10トレンチ土層断面図

石材の散乱する箇所がみられ、横穴式石室の一部の可能性が考えられたことから、平成17年度に東側の延長部分を拡張して調査を進めたが、明確な遺構は検出されなかった。暗灰色砂質土の堆積土中では瓦器椀や白磁椀の破片が出土した。この堆積土の下層は暗灰色粘質土となり、谷に向かって斜めに傾斜する状況であった。この層に達すると多量の湧水がみられた。同層位では、さらに周辺から流れ込んだとみられる弥生土器片を確認した。また、調査の最終段階で掘削面からさらに約1.3m掘り下げ、谷部の堆積状況の確認を行った結果、基本的に水平堆積をなしていることが判明したが、遺物は確認できなかった。

②第6トレンチ

丘陵の傾斜面に設定したトレンチである。表土下、約20cm掘下げたところ、ベースに掘削され



第82図 第5・7トレンチ遺構配置図

た幅約0.5mの素掘り溝を検出した。約1.5mの間隔で北東—南西方向に平行し、第7トレンチとほぼ同じ方位をとる。包含層中から、陶磁器片が出土している。

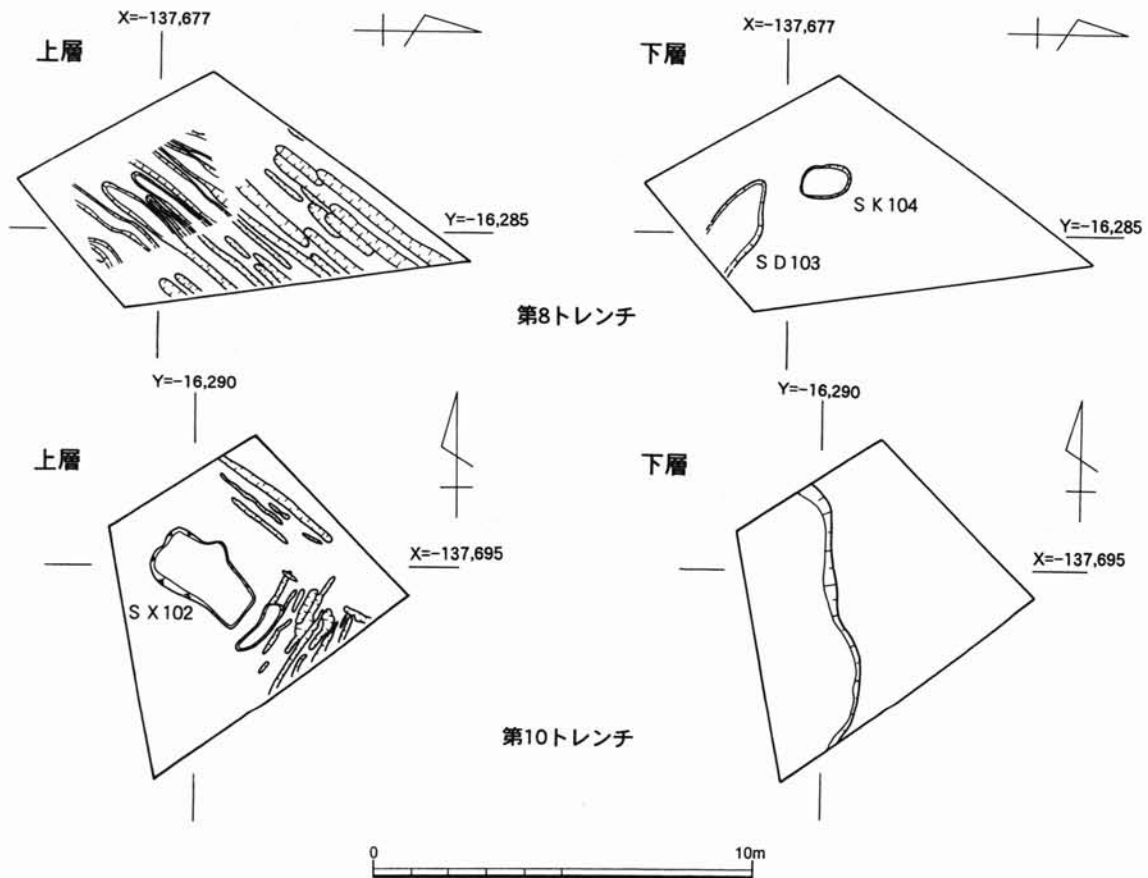
③第7トレンチ

水田の床土直下の上層では、約1.5mの間隔で北東—南西方向に平行する素掘り溝群を確認した。溝の幅は約0.5m、深さは約0.1~0.15mを測る。埋土は暗灰色砂質土である。溝からは土師

器や陶磁器の破片が出土した。また、調査地の南西部分では、幅広の溝々に直交する北西—南東方向の溝を確認した。幅は約0.15mを測り、浅く窪む程度である。すべて幅広の溝に切られている。下層では、北東—南西方向の溝(S D105)を確認した。長さ約13.5m、幅1.2~1.5m、深さ約0.15mを測る。溝の中から若干の土器が出土した。また、溝S D105の北西側で下層遺構の検出面から北西側に向かって斜め堆積する弥生時代後期のものと考えられる遺物包含層を確認した。主に包含層の北東側から弥生土器の破片や石鏃1点が出土した。

④第8トレンチ

上層では北東—南西方向の素掘り溝群を確認した。この溝は後世に削平を受けたため、わずかに窪む程度の浅いものである。下層では土坑S K104と溝状遺構(S D103)を確認した。土坑S K104は長軸1.5m、短軸0.9mを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは0.4mを測る。埋土は暗黄色砂質土である。溝S D103は長さ2.5m、幅1.2mを測り、わずかに窪む程度の浅いものである。埋土は灰色砂質土である。下層遺構面を断ち割った結果、この遺構面の下層には遺物を包含する黄灰色土の2次堆積層が認められ、底部穿孔された弥生土器などの土器片がわずかに出土した。地山は北西側に向かって傾斜している状況を確認した。地山面では、土坑状遺構(S K114・115)のほか、炭化物の混じるピット状遺構を確認した。調査の結果、穴の形状は直に下がらず、木の根が入り込んだような状況であり、木の根の痕跡と判断した。穴の中からは土器片が出土した。



第83図 第8・10トレンチ遺構配置図

⑤第9トレンチ

地形の変化を確認するために第8トレンチと第10トレンチの2方向に重機で断ち割りを行い、人力掘削で地山面まで掘削した。両方向とも現状では階段状の地形となっており、北および西側に一段低くなっていた。耕作に伴い地形を改変しているものと判断した。

⑥第10トレンチ

上層では北西—南東方向と北東—南西方向の素掘り溝群を確認した。素掘り溝はごく浅いものである。下層では西側に傾斜する地形の変化を確認した(S X110)。この落ち込みの上部は灰白色の粘土で埋め戻されていた。包含層中から須恵器片が出土している。

(柴 暁彦)

4. 出土遺物

(1) 第1地点の出土遺物

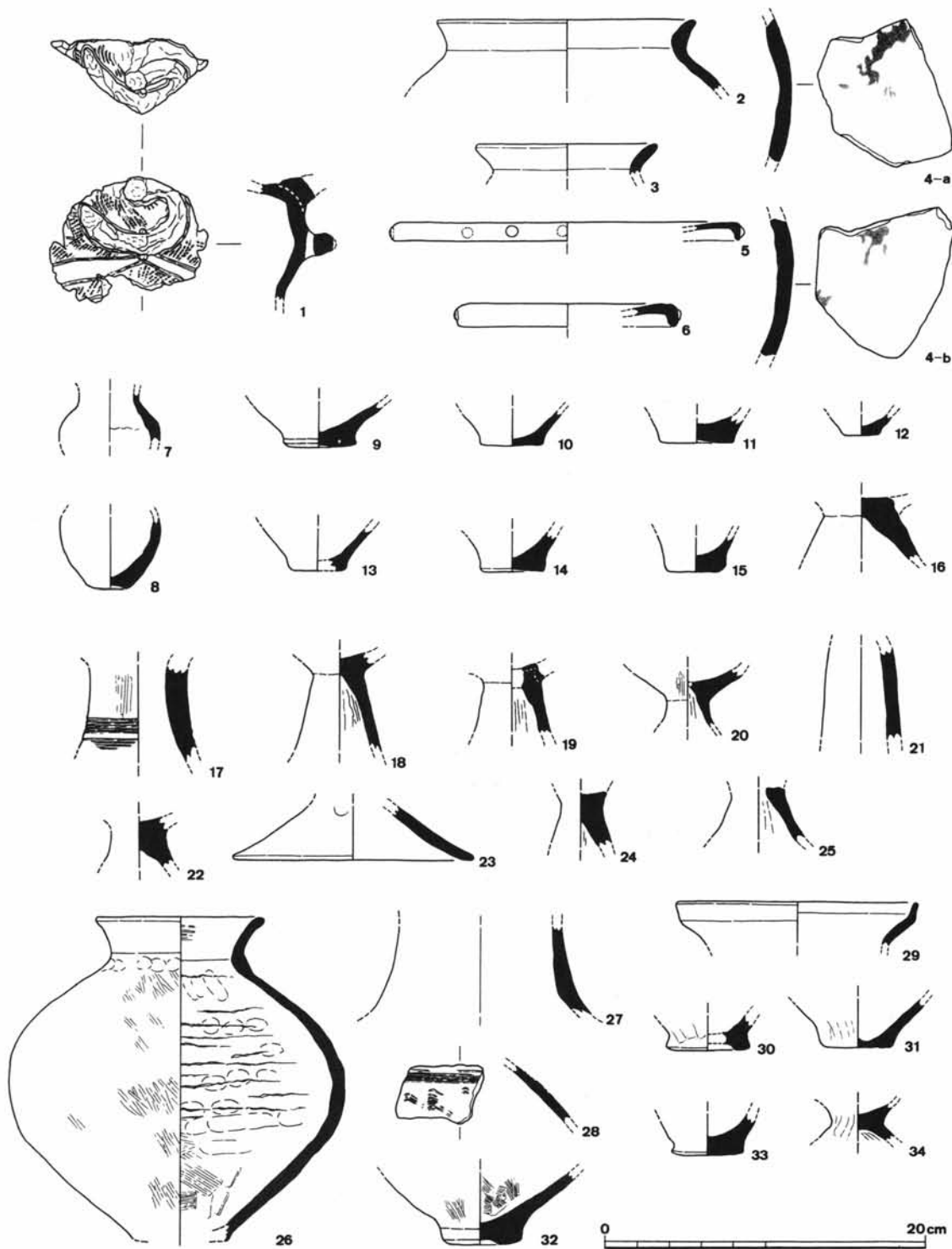
a. 縄文～弥生時代の遺物

土器 1は、第1トレンチの土坑S K41から出土した縄文土器の破片である。端部はすべて破断しており、端面は遺存していない。上部に突起がみられるが、その先端部を欠損している。またこの突起から中央部へ向かって、隆帯が螺旋状に延びる。隆帯の周囲には、磨り消し縄文が施される。突起の下方には、隆帯中央を貫通する縦方向の穿孔が施されている。全体が大きく湾曲し、体部径は小さくとどまるとみられることから、器種は小形の壺あるいは異形土器の可能性はある。時期は、縄文時代後期前葉と推定される。

2～25は、第1トレンチの竪穴式住居跡S H22から出土した。2・3は、「く」の字に外反する壺の口縁部である。2は、口径15.8cm、3は11.0cmを測る。4(a・b)は、竪穴式住居跡S H22の周溝内から出土した。壺の体部の破片と推定される。磨耗が著しいが、外面には、一部赤色顔料が遺存し、内面に一部ハケ調整が残る。焼成前に赤色顔料を塗布した赤彩土器とみられる。赤色顔料は、色調からベンガラと推定される。淡茶褐色を呈する。5・6は、器台の受部である。5は、円形浮文が施され、6には、口縁部外面と受部に波状文が施される。ともに淡褐色を呈する。5は口径20.8cm、6は口径18.2cmを測る。7・8は、手捏ね土器である。7は、壺の肩部であり、8は壺体部とみられる。9～15は、壺および甕の底部である。平底の底部をなすものと(10・15・12)、やや窪ませるもの(9・11・14)があるが、タタキ成形によって仕上げるものはみられない。16は、高杯あるいは台付鉢の脚部とみられる。色調は赤褐色を呈する。17～25は、高杯脚部である。17は、太い脚径をなし、脚部から裾部へゆるやかに開脚する高杯で、その傾斜変換点に2条の櫛描直線文が施される。淡褐色を呈する。高杯には、ゆるやかに裾部が開脚するもの(18・19・21・24)と、大きく開くもの(23・25)がある。

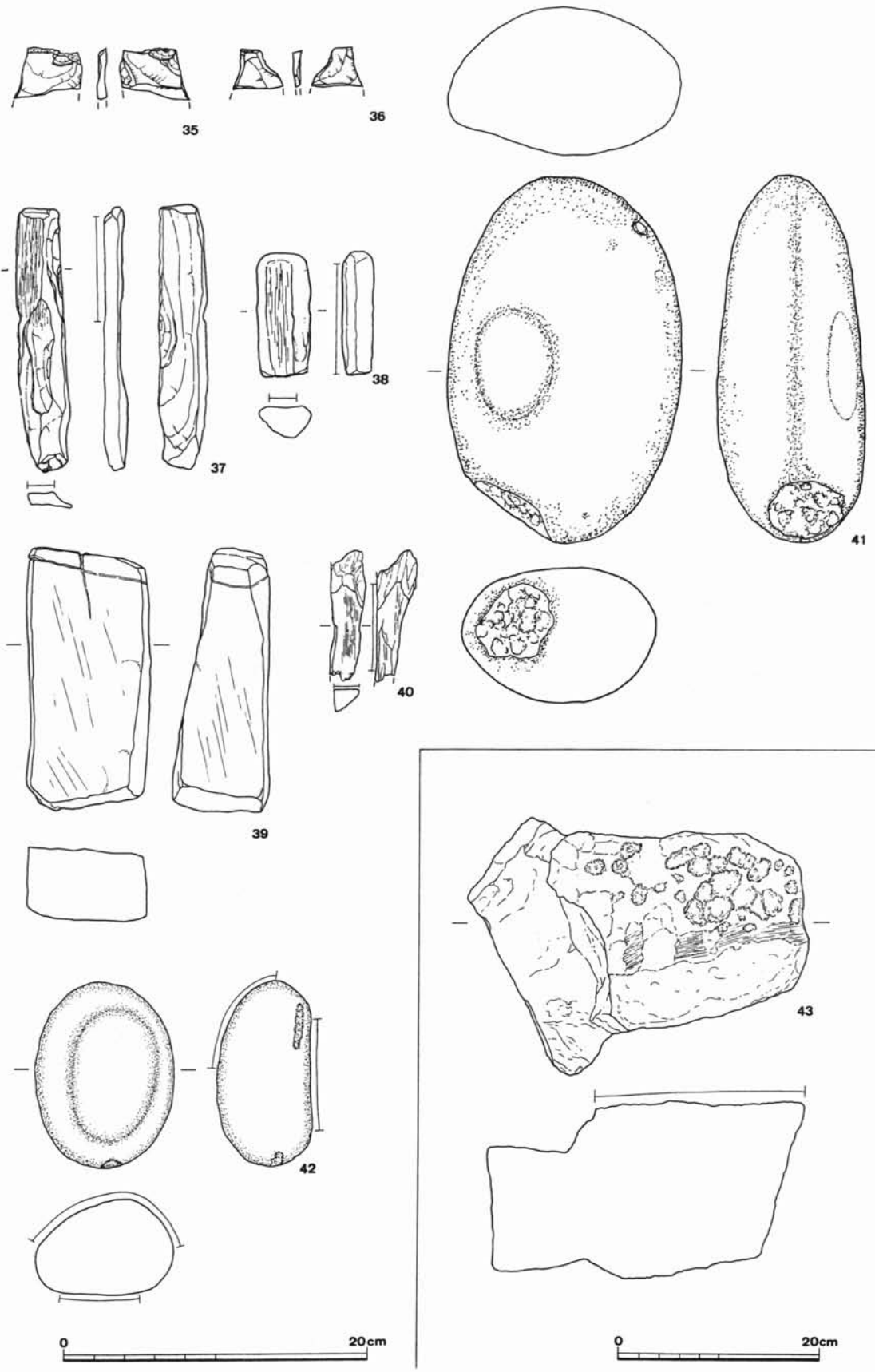
26～34は、第1トレンチの竪穴式住居跡S H23から出土した。26は、広口壺である。口頸部は、強く引き締まり、体部が大きく張り、体部最大径を中位にもつ。外面は、部分的にミガキが残存する。頸部には、指頭圧痕が顕著にみとめられる。また内面は、一部にハケ調整がみとめられる。

口径10.6cm、器高約20.8cmを測る。27は、広口壺の肩部とみられる。26は、櫛描波状文と櫛描直線文を施す壺の体部である。29は、受口状をなし、口縁部外面に刻みを施す、近江系の壺の口縁部である。淡黄灰色を呈する。口径は、15.1cmを測る。30～33は、いずれも底部である。窪み底をなすもの(32・30)と、平底(31・33)をなすものがある。34は、台付鉢の脚部とみられる。



第84図 第I地点出土遺物実測図(1)

1. 土坑S K41 2～25. 竪穴式住居跡S H22 26～34. 竪穴式住居跡S H23



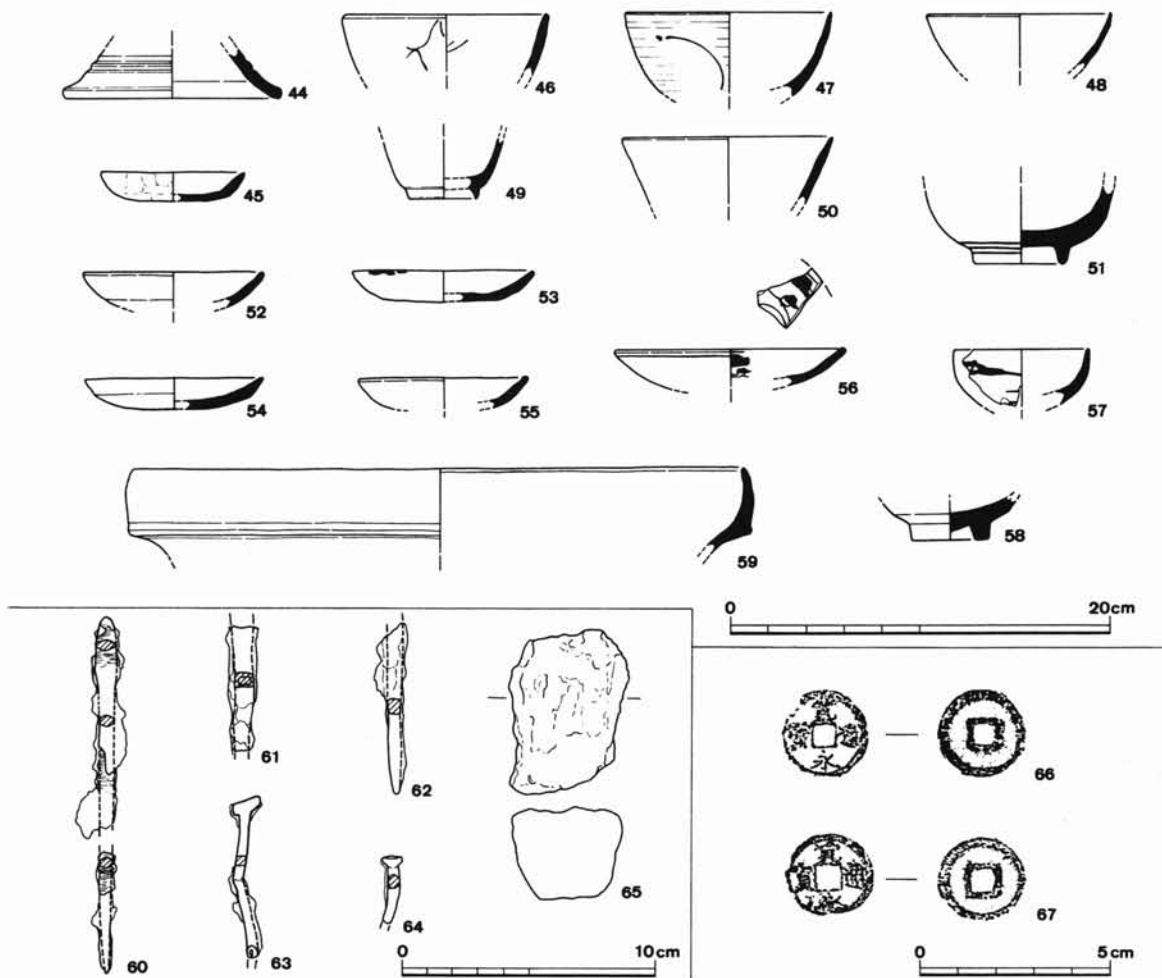
第85図 第I地点出土遺物実測図(2)

35・37~41・43. 竪穴式住居跡SH22 36・42. 包含層

石器 35・37～41・43は、竪穴式住居跡SH22から出土した。35は、サヌカイト製の縦長の剥片である。長さ4.5cm、厚さ0.6cmを測る。下半部が折損する。重さ9.63gを測る。37は、粘板岩製の砥石である。片面に縦方向の研磨痕がみとめられる。38は、断面三角形の結晶片岩製の砥石である。一面に、縦方向の研磨痕がみられる。重さ79.6gを測る。39は、周壁溝から出土した。形状から、素材石核か砥石として使用するために搬入された石材とみられるが、表面の風化が著しく、研磨面は十分確認できない。材質は、閃緑岩である。40は、粘板岩製の砥石である。断面は三角形状を呈し、一面に縦方向の研磨痕がみられる。41は、砂岩製の敲石である。長さ24cm、厚さ15.5cmを測る。敲打面には、出土当初、赤色顔料がわずかに付着していた。重さ4.67kgを測る。43は、花崗岩製台石である。長さは34.2cm、高さは13.2cmを測る。住居床面に据えられていたものである。上面に敲打痕が認められる。重さ16.3kgを測る。

36・42は、包含層中から出土した。36はサヌカイト製剥片で、42は花崗岩製の敲石である。42は、重さ91gを測る。

b. 古墳時代以降の遺物



第86図 第I地点出土遺物実測図(3)

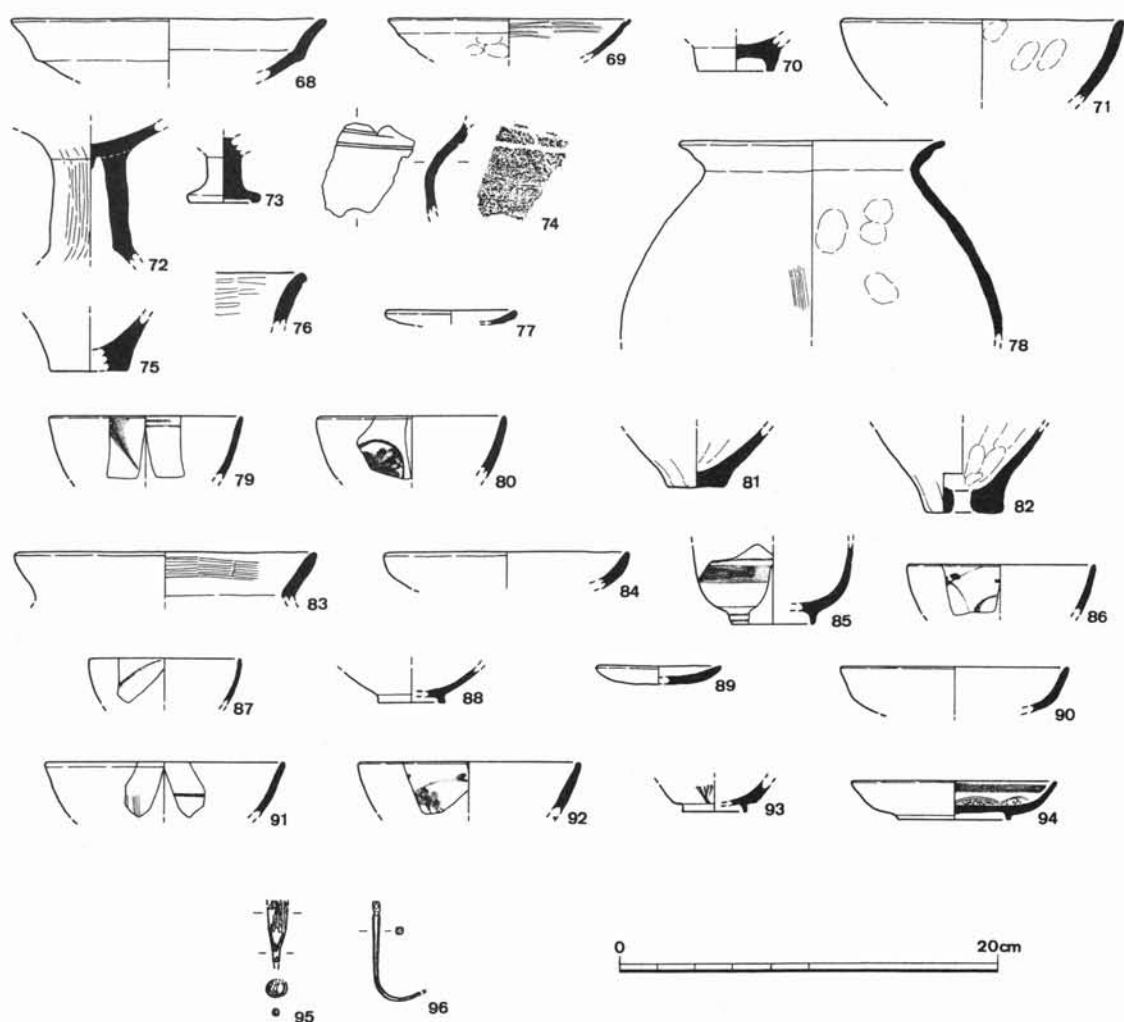
44は、第1トレンチの古墳状隆起の精査中に出土した。須恵器の小形高杯の脚部とみられる。2条の沈線を施す。脚径約11.2cmを測る。46・47の染付と、45の土師皿は、溝S D19から出土した。46には網目文様が施され、47には弧文が施される。45は、口径7.6cmを測る。50は、溝S D15から出土した京焼き椀である。口径11.0cmを測る。49・52は、溝S D24から出土した。49は京焼きの小椀で、52は土師器皿である。口径約11.4cmを測る。

51・53～59は、第1トレンチの包含層中から出土した。56は、染付の皿で、57は染付の小椀である。53～55は、土師器皿である。53は、口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたとみられる。口径9.6cmを測る。54は、口径9.4cmを測る。59は焙烙である。口径は約32.0cmで、色調は淡褐色を呈する。58は、第3トレンチの包含層中から出土した施釉陶器である。削り出し高台をもち、色調は淡灰褐色を呈する。底径4.1cmを測る。60は、古墳状隆起の南辺の土坑S K36から出土した鉄鏃である。一部欠損し、推定復原長は、約14.3cmである。平根の長頸鏃であり、柄部には樹皮が巻かれている。古墳時代後期の鉄鏃と推定される。61・62は、断面が方形をなす鉄製品である。土坑S K36の周辺の包含層中から出土した。鉄鏃の柄部の一部と推定される。63・64は、包含層中から出土した断面方形の鉄釘である。65は、包含層中から出土した炉壁の一部とみられる焼土塊である。66・67は、溝S D15から出土した寛永通寶である。7枚出土したうちの2枚である。5枚は融着し、一部欠損している。66・67は、寛永13(1636)年～万治2(1659)年までに鑄造されたとされるいわゆる「古寛永」である。融着して出土したものも、「古寛永」とみられる。66は、輪外径は22.85mm、同内径は19.7mm、郭外形は0.72mm、同内径0.58mmを測る。重量は、2.5gである。67は、輪外径は2.32mm、同内径は1.96mm、郭外形は0.83mm、同内径0.63mmを測る。重量は、2.06gである。

(高野陽子)

(2)第II地点の出土遺物

68～71・73は、第5トレンチから出土した。いずれも包含層中から出土した。68は、高杯の口縁部片である。口縁部は「く」字状に屈曲し端部はわずかに外反する。口径は16.5cmを測る。色調は内外面とも暗黄橙色を呈する。69は、瓦器椀である。70は、白磁の底部片である。71は、土師器の杯部である。73は灯明台の脚部である。72・74～82・96は、第7トレンチから出土した。72は、包含層中から出土した高杯の脚柱部である。時期は、弥生時代後期と推定される。74は、包含層中から出土した縄文土器の頸部片である。頸部に横方向の沈線が2条確認できる。色調は内外面とも暗茶褐色をなす。75は、弥生土器の底部片である。溝S D150から出土した。76は、土師器の甕の口縁部片である。色調は外面が灰茶褐色、内面は淡黒灰色をなす。77は、土師器皿である。色調は淡褐色をなす。78は、土師器の甕である。包含層から出土した。色調は黄褐色をなす。79・80は染付椀である。81・82は弥生土器の底部である。82は底部穿孔された底部片である。包含層から出土した。焼成前に底から内面に向かって穿孔されている。底径は4.2cmを測る。底部内面には指頭圧痕が残る。色調は赤褐色を呈する。96は、銅製の自在ばかりの鍵である。83～85は、第8トレンチから出土した。83は、土師器口縁部である。85は、染付椀である。86・87



第87図 第Ⅱ地点出土遺物実測図

は、第9トレンチから出土した染付椀である。88~95は、第10トレンチから出土した。89は、土師器皿である。色調は淡褐色をなす。90は、須恵器の杯である。91は、青磁片である。92は、染付椀口縁部片である。94は、色絵皿である。95は、煙管吸い口である。内部に木質が残存する。

(柴 暁彦)

5. まとめ

今回の調査では、事業予定地内の谷部を挟む2地点の丘陵上を中心に、調査を実施した。北部の第Ⅰ地点では、縄文時代から、江戸時代に至る各期の遺構群を確認した。検出した主な遺構は、縄文時代時代の土坑1基、弥生時代後期の竪穴式住居跡2基、弥生時代と推定される土坑群、削平された後期古墳の基底部と推定される古墳状隆起と土坑1基、掘立柱建物跡1棟、江戸時代前期の溝などである。

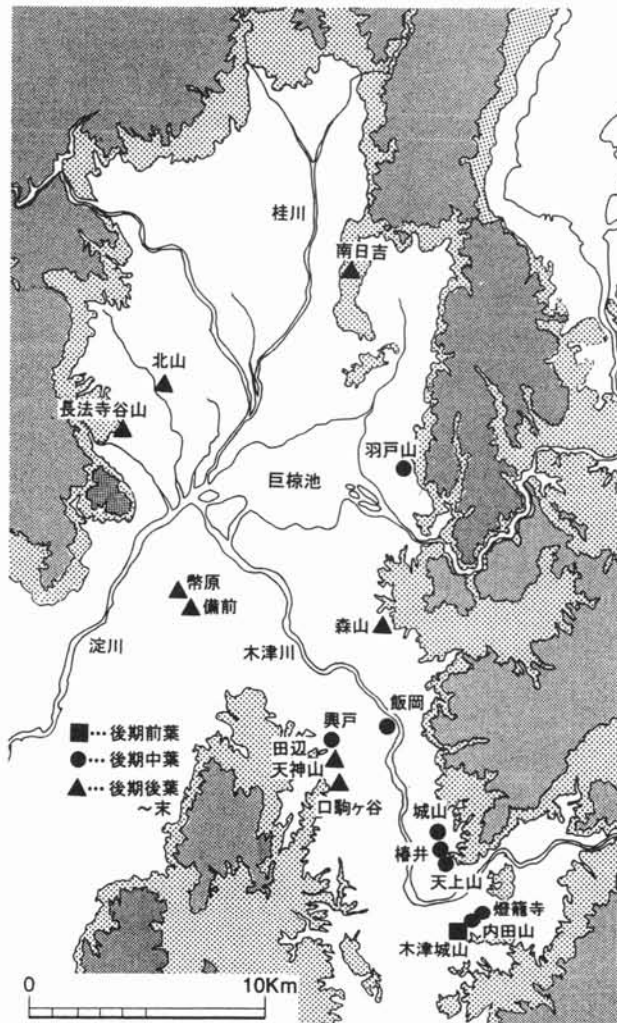
谷部を挟んだ南部の第Ⅱ調査地点では、第7・8・10トレンチの上層で、近世以降の耕作に伴うと思われる素掘り溝群を検出した。また、第7トレンチの下層では、弥生時代後期の遺物を出土する溝や遺物包含層を確認した。第Ⅱ地点の立地する場所は、北側と南側は谷に挟まれた狭い

尾根地形になっている。地形は丘陵斜面上部から下部に向かって段状をなしており、丘陵斜面を切り崩して平坦地を確保するという地形の改変が行われたことにより、中世以前の遺構が削平を受けた可能性が高い。

今回、特に注目される成果は、弥生時代後期の竪穴式住居跡を検出したことである。調査地の周辺の標高は、約60mを測り、平野部との比高差約30mを測ることから、当遺跡は、いわゆる高地性集落に概当し、山城南部の高地性集落に新たな一例を加えることとなった。また、わずかながら、縄文時代の遺構を検出したことも特記される。これまで周辺では、後期初頭の土器が椿井大塚山古墳の墳丘から出土することが知られていたが、遺構に伴って出土した例ははじめてである。古墳時代後期の遺構群については、後世の著しい削平を受けていたが、古墳の基底部と推定される遺構を検出することができた。さらに第I調査地点周辺では、一帯に大規模な盛土がみられたが、江戸時代前期の溝が丘陵傾斜に沿って検出されたことから、盛土の造成時期は、これを遡るものではないことが明らかになった。

山城の高地性集落は、現在までに、散布地を含めると約20例を数えるが、その存続時期は、山城南部の木津町赤ヶ平遺跡や同燈籠寺遺跡の前期～中期を除き、ほとんどが後期を中心とするものである(第88図)。

後期の高地性集落は、山城町から木津町域にかけての木津川東岸の丘陵上に点在し、特に後期中葉の集落が数多く営まれている。椿井遺跡をはじめとして、椿井大塚山古墳下層遺跡、椿井天上山遺跡下層遺跡、城山遺跡、木津町燈籠寺遺跡、同内田山遺跡などの例がある。一方、後期後葉～末には、高地性集落の分布域は大きく変化し、巨椋池を囲む丘陵地帯に相次いで出現するようになる。その例として、八幡市幣原遺跡、同備前遺跡、城陽市森山遺跡のほか、東山丘陵では京都市南日吉遺跡、乙訓地域では長岡京市北山遺跡、同長法寺谷山遺跡などがあげられる。椿井大塚山古墳の調査で出土した築造前の土器とされた弥生土器のほとんどは、弥生時代後期中葉の所産であり、一帯の丘陵部では、後期中葉を中心に、高所に集落が大きく展開する可能性が高い。西日本における後期の高地性集落が、後期初頭と後期後葉～末にピークがあるとされるなかで、やや時期を



第88図 山城の高地性集落(参考文献④より)

違えて展開している点は注意されることである。周辺では、防御性の高い「V」字形の溝が掘削される天上山古墳下層遺跡の例などがある一方で、木津町域の遺跡など、山城南東部では平野部から緩斜面で連続的に繋がる集落も多く、防御性が必ずしも高い事例ばかりではない。こうしたことから、高地性集落の性格として、平野部が乏しいうえに、木津川の氾濫原が大きく、居住の適地が限られるという地理的要因も考慮する必要があるであろう。山城の高地性集落は、後期後葉～末において、山城南部から一転して、山城中部の巨椋池を囲む丘陵地帯に相次いで出現する。こうした背景には、後期後葉以降、淀川—巨椋池—琵琶湖を結ぶルートが東西交通の基幹路としての重要性を増したことが影響していると考えられる。新たな高地性集落は、乙訓地域や、その対岸の八幡地域の丘陵に出現することから、主に西側地域からの人の移動・流入によって、この地域の社会的緊張が増幅したものであろう。

今回の調査によって、弥生時代後期中葉の高地性集落が確認されたことは、古墳時代初頭の築造とされる椿井大塚山古墳出現の前段階に、この地域を基盤とする地域勢力が形成されつつあったことを示すものである。椿井遺跡は、山城南部の高地性集落の新たな一例となり、古墳出現前後の地域社会を考えるうえで、注目される資料となった。

(高野陽子)

注1 調査を通じて、石野博信・小野山節・奥義次・近藤奈央・辰巳和弘・中川要之助・穂積裕昌の各氏にご指導・ご教示を得た。

調査参加者は以下のとおりである。

調査補助員 生駒昌史・大谷博則・阿南宗憲・川勝麻貴・堀瀬賢二・石井誠実・穂積優子・杉江貴宏
整理員 上田祐子・村上優美子・陸田初代・山中道代・丸谷はま子・藤井矢壽子・井上聡・荻野富紗子(順不同・敬称略)

注2 弥生時代の焼土坑の可能性があると考えてきたが、出土した炭化材の放射性炭素年代分析(AMS測定)を行った結果、yrB P 1290年±30年の数値を得ている。分析は、(株)加速器分析研究所による。

注3 土層観察から古墳時代以降としたが、柱穴の埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代分析を実施した結果、yrB P 2030年±30年の数値を得た。分析は、(株)加速器分析研究所による。

注4 小野忠熙「高地性集落の概念」(小野忠熙編『高地性集落跡の研究』 学生社) 1979、高地性集落とは、「水稻栽培や日々の居住条件に不適当か不可能な、水田農民にとっていわば異状ともいえる高所を占地した集落」とされる。

参考文献

- ①近藤義郎編『椿井大塚山古墳』(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第3集) 1986
- ②中島正編『椿井大塚山古墳』(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第21集) 1999
- ③伊藤淳史「山城地域における弥生集落の動態」(『みずほ』第32号 大和弥生文化の会) 2000
- ④高野陽子「椿井遺跡の調査と山城の高地性集落」(『京都府埋蔵文化財情報』第97号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005

5. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡 平成16年度発掘調査概要

はじめに

関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡の発掘調査は、都市基盤整備公団、独立行政法人都市再生機構の依頼を受けて継続して実施しているもので、平成16年度は、上人ヶ平遺跡・内田山遺跡・内田山古墳群について調査を実施した。

上人ヶ平遺跡は、京都府相楽郡木津町大字市坂小字上人ヶ平31ほかに所在する。昭和59年度から昭和62年度にかけて実施された試掘調査^(注1)、ならびに昭和63・平成元年度に実施された発掘調査^(注2)により、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴式住居跡16基、古墳時代中期から後期にかけての古墳17基・埴輪窯跡^(注3)3基、奈良時代の瓦工房跡4棟とその関連遺構などを多量の遺物とともに検出した。特に、奈良時代の瓦工房跡は近接する市坂瓦窯跡と一体のものとして捉えることができ、平城宮大膳職などに瓦を供給していたことが明らかになった。このような調査成果を受けて、上人ヶ平遺跡の中心部分は保存され、公園整備化が図られることになった。

今回の調査は、昭和63年度・平成元年度に調査に至らなかった地点を対象として行った。調査地は、既往の調査区に挟まれるため、古墳、あるいは瓦工房跡に関連する遺構などが検出される可能性が高いと判断された。調査期間は、平成16年4月19日～平成16年6月29日までである。調査面積は約800㎡である。

内田山遺跡・内田山古墳群は、京都府相楽郡木津町大字木津小字内田山に所在する。調査は、平成11・12・14・15年の各年度に実施しており^(注4)、今回が第5次調査に当たる。これまでの調査で、内田山B1号墳の一部を確認するとともに、弥生時代後期の遺構・遺物などが出土している。今回の調査は、内田山B1号墳の全面的な調査を実施するとともに、弥生時代の遺構・遺物の検出される可能性があった。調査期間は平成16年12月1日～平成17年2月17日までである。調査面積は約500㎡である。

発掘調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、同調査員筒井崇史が担当し、発掘調査および整理作業には、多くの調査補助員・整理員の参加・協力をいただいた^(注5)。本概要報告は筒井が執筆した。本概要報告に掲載した写真のうち、遺構を筒井が、遺物を調査第1課資料係主任調査員田中彰が撮影した。なお、本概要報告で用いた国土座標系は、過去の調査との関係上、日本測地系(旧座標系)を使用している。

調査期間中は、京都府教育庁指導部文化財保護課・京都府立山城郷土資料館・木津町教育委員会・木津の緑と文化財を守る会・京都府立木津高等学校などの関係諸機関、樋口隆康当調査研究センター前理事長、福永伸哉大阪大学教授両先生からご教示・ご協力をいただいた。

なお、今回の上人ヶ平遺跡の調査にかかる経費は都市基盤整備公団が、内田山古墳群・内田山遺跡の調査にかかる経費は独立行政法人都市再生機構が負担した。

(1) 上人ヶ平遺跡第8次

1. 遺跡の位置と歴史的環境

上人ヶ平遺跡(1)は、京都府と奈良県の境に位置する丘陵から派生する段丘上に立地し、遺跡の前面には木津川によって形成された沖積平野が広がる。上人ヶ平遺跡周辺では、関西文化学術研究都市の開発に伴って多数の遺跡が調査されており、その内容が明らかになっている。ただ、大半の遺跡がすでに造成工事によって姿を消しており、わずかに上人ヶ平遺跡・市坂瓦窯跡(2)が保存されることとなった。

上人ヶ平遺跡周辺では、弥生時代以前の遺跡はあまり知られていない。古墳時代になると、上



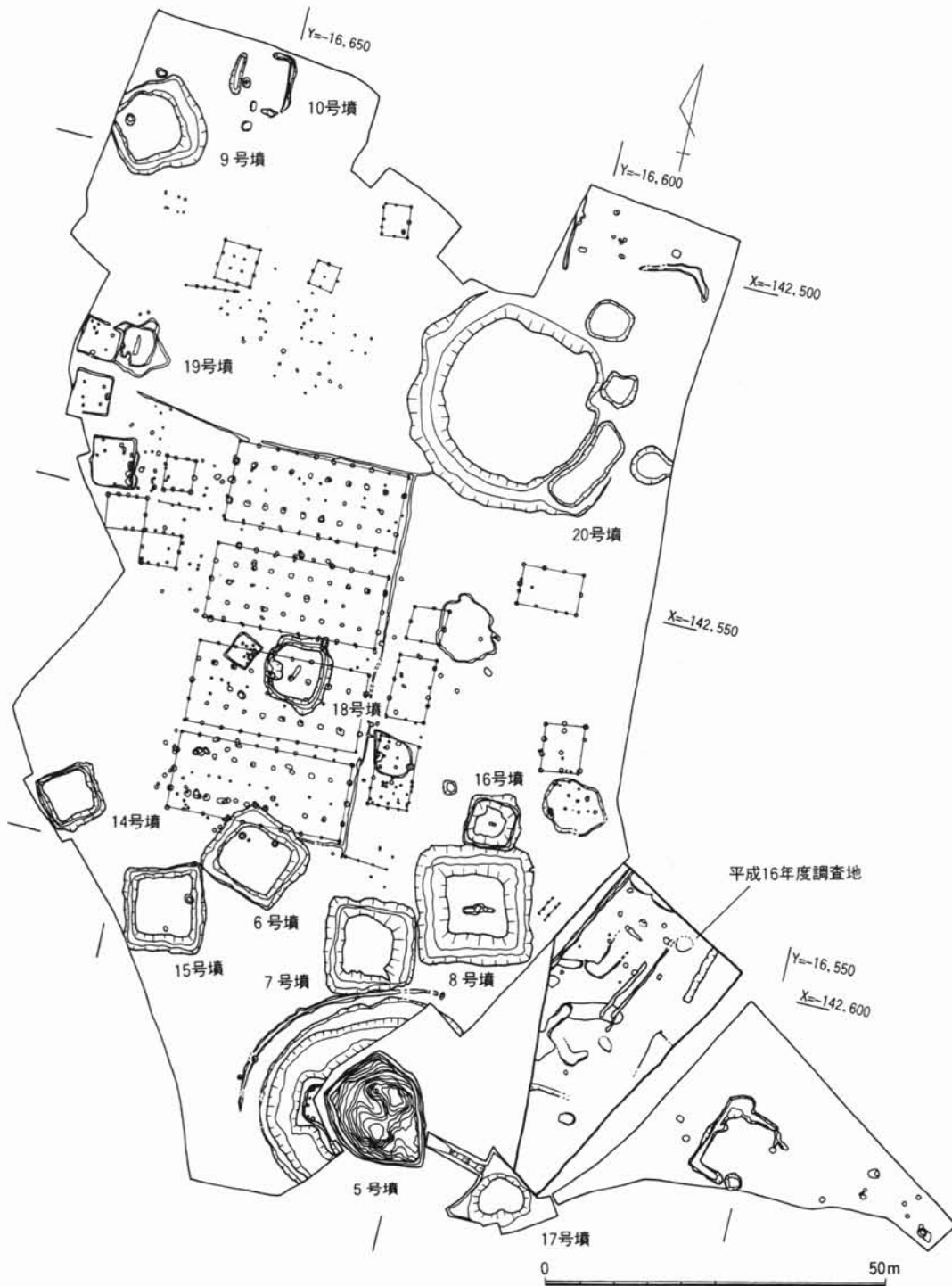
第89図 上人ヶ平遺跡周辺主要遺跡分布図
(国土地理院1/25,000奈良)

- | | | |
|---------------|-------------|------------|
| 1. 上人ヶ平遺跡・古墳群 | 2. 市坂瓦窯跡 | 3. 五領池東瓦窯跡 |
| 4. 上人ヶ平埴輪窯跡群 | 5. 瓦谷遺跡・古墳群 | |
| 6. 瓦谷埴輪窯跡群 | 7. 西山遺跡 | 8. 歌姫瓦窯跡 |
| 9. 瀬後谷瓦窯跡群 | 10. 弓田遺跡 | 11. 辰ヶ坪遺跡 |
| 12. 古川遺跡 | 13. 作り道遺跡 | 14. 八後遺跡 |
| 15. 奈良道遺跡 | | |
| 16. 文廻池遺跡 | 17. 天神山古墳群 | 18. 大谷窯跡 |
| 19. 岡田国遺跡 | | |
| 20. 大島遺跡 | 21. 八ヶ坪遺跡 | 22. 鶴ノ町遺跡 |
| | | 23. 田中遺跡 |

人ヶ平遺跡・古墳群をはじめ、瓦谷遺跡・古墳群(5)、幣羅坂古墳、西山塚古墳、西山遺跡(7)、弓田遺跡(10)などが営まれる。瓦谷古墳群は、全長約50mの前方後円墳である1号墳をはじめ、一辺ないし径が6~15m程度の小規模な方墳や円墳からなり、古墳時代前期後半から中期前半にかけて営まれた。瓦谷遺跡では顕著な遺構は未検出であるが、谷部から瓦谷古墳群に併行する時期の土器群が木槿状木製品とともに大量に出土しており、水辺での祭祀が行われていた可能性が高い。西山塚古墳は、単独で営まれた円墳であるが、上人ヶ平古墳群の盟主墳である上人ヶ平5号墳とほぼ同時期かわずかに遅れる古墳である。立地の相違から上人ヶ平

古墳群とは異なる系統の在地首長の墳墓の可能性も考えられる。弓田遺跡では、古墳時代中期末頃の土器と埴輪が大量に出土しているが、埴輪生産関連遺構や古墳などは未検出で、その性格については不明である。

奈良時代には、瓦工房跡が検出された上人ヶ平遺跡をはじめ、市坂瓦窯跡、瀬後谷瓦窯跡(9)、五領池東瓦窯跡(3)など、平城宮・平城京の瓦を生産した窯跡が多数調査されている。瓦窯跡は、瀬後谷瓦窯跡が奈良時代前半、市坂瓦窯跡および五領池東瓦窯跡が奈良時代後半に営まれた。ま



第90図 上人ヶ平遺跡全体配置図

た、平城京の外港と想定される泉津へと通じる作り道遺跡(13)などもある。ただ、上人ヶ平遺跡の所在する木津町南部には、瓦窯跡とその関連遺跡を除くと、奈良時代の遺跡は少ない。

2. 調査の経過

今回の調査は、昭和63年・平成元年度に実施した本調査地のうち1・6・7・8の各トレンチに囲まれた未調査区を対象として実施した。調査区は、長辺45m、短辺24mの矩形の未調査区のうち、西側約1/3をのぞいた約800㎡の調査を実施した。

発掘調査は、平成16年4月19日から開始した。耕作土・床土を重機で除去し、その後、人力による精査を加えた。その結果、当初の予想に反し、古墳あるいは瓦工房跡に関連する遺構は検出

されず、これまでの調査で確認していた上人ヶ平17号墳の周溝の一部と、時期不明の溝・土坑・柱穴などを検出した。

調査がおおむね終了した6月24日には、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。また、6月25日には関係者説明会を実施し、11名の参加があった。6月29日にはすべての作業を終了し、機材を撤収した。

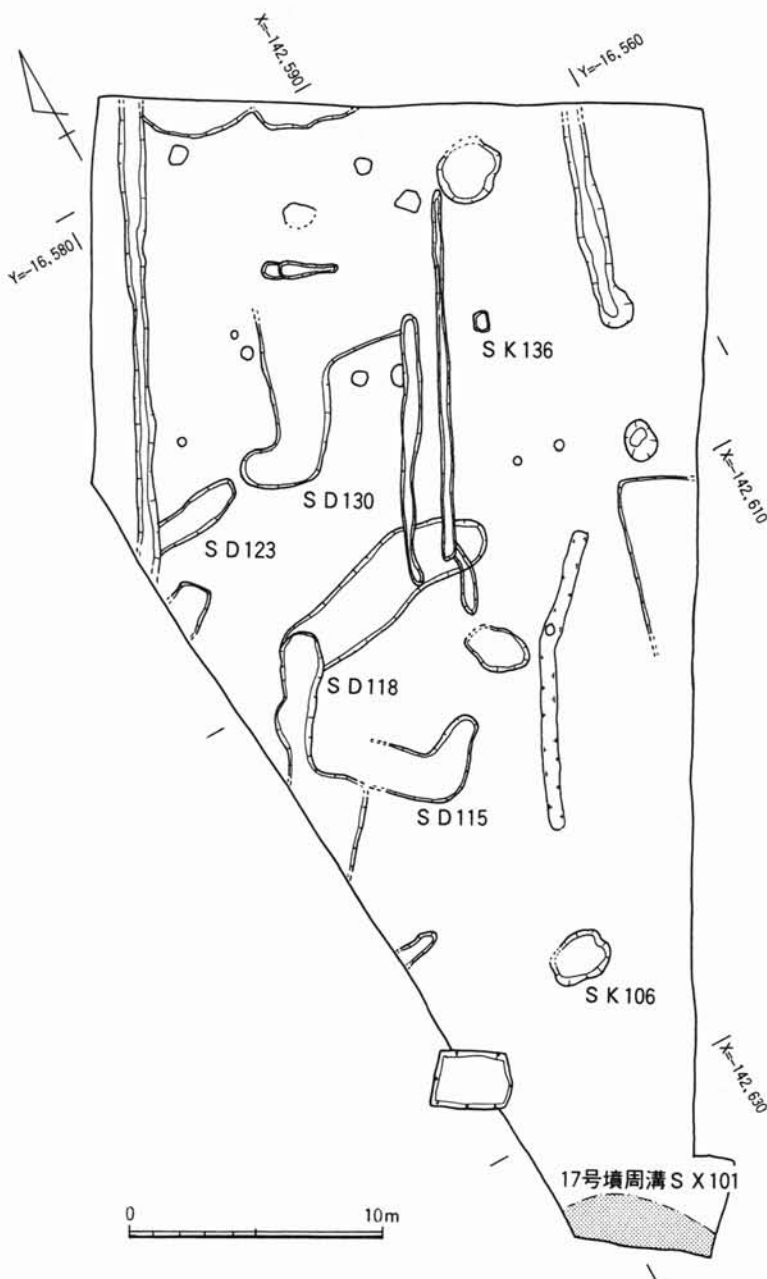
3. 調査の概要

(1) 検出遺構

検出した遺構としては、上人ヶ平17号墳の周溝の一部や溝、土坑、柱穴状などがある。

上人ヶ平17号墳周溝 S X 101(第91図)

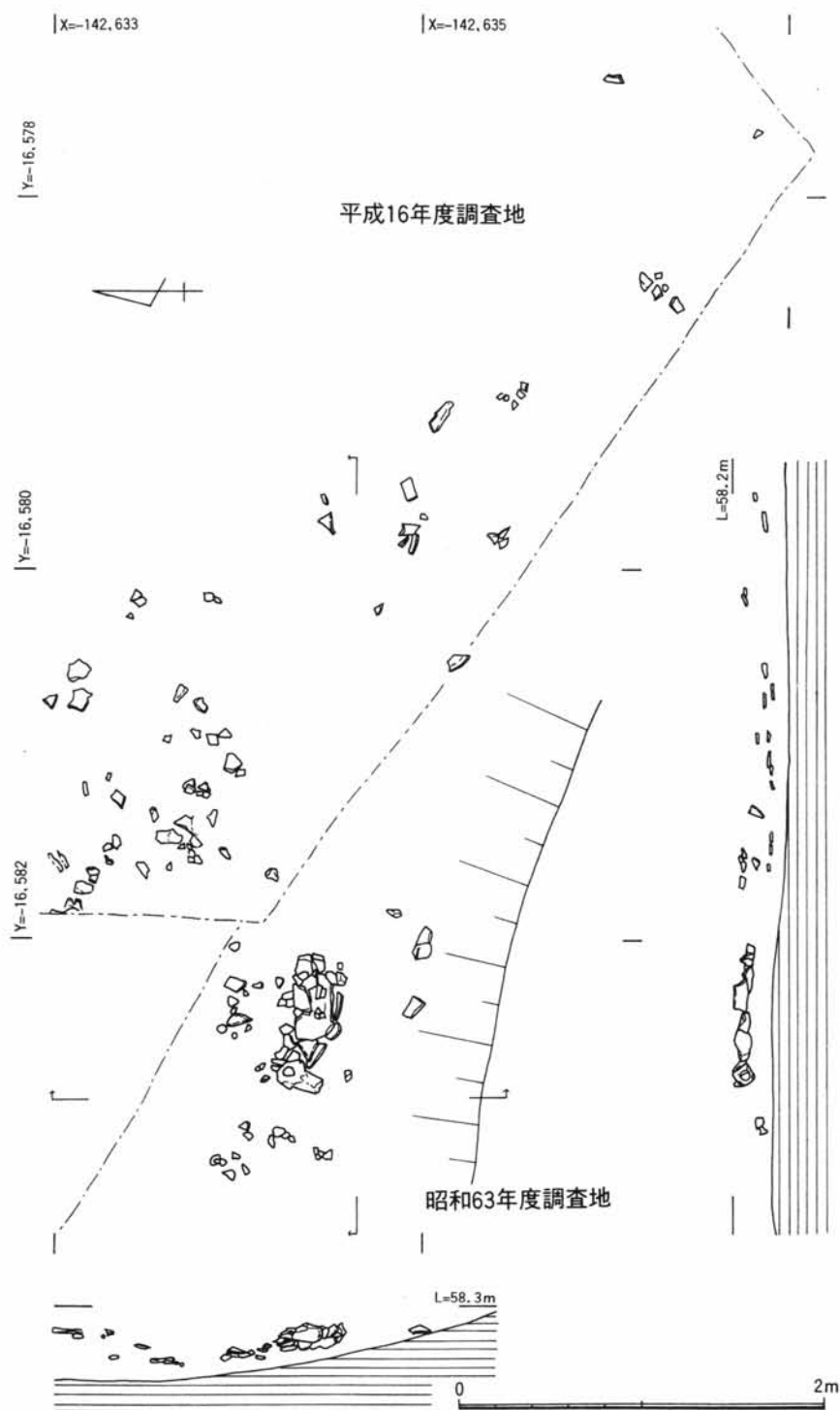
調査区の南端で検出した。上人ヶ平17号墳の調査は、昭和63年度に実施して



第91図 上人ヶ平遺跡遺構配置図

いたが、今回の調査では、その周溝の一部を検出した。周溝の外堤はすでに削平されていたため、正確な規模は明らかでない。遺物は、長さ6m、幅1.7mの範囲から出土した。周溝内から出土した遺物には、円筒埴輪、馬形埴輪、土師器・須恵器などがある(4・8・9)。土器は、奈良時代のもと考えられる。これらはいずれも細片化していた。

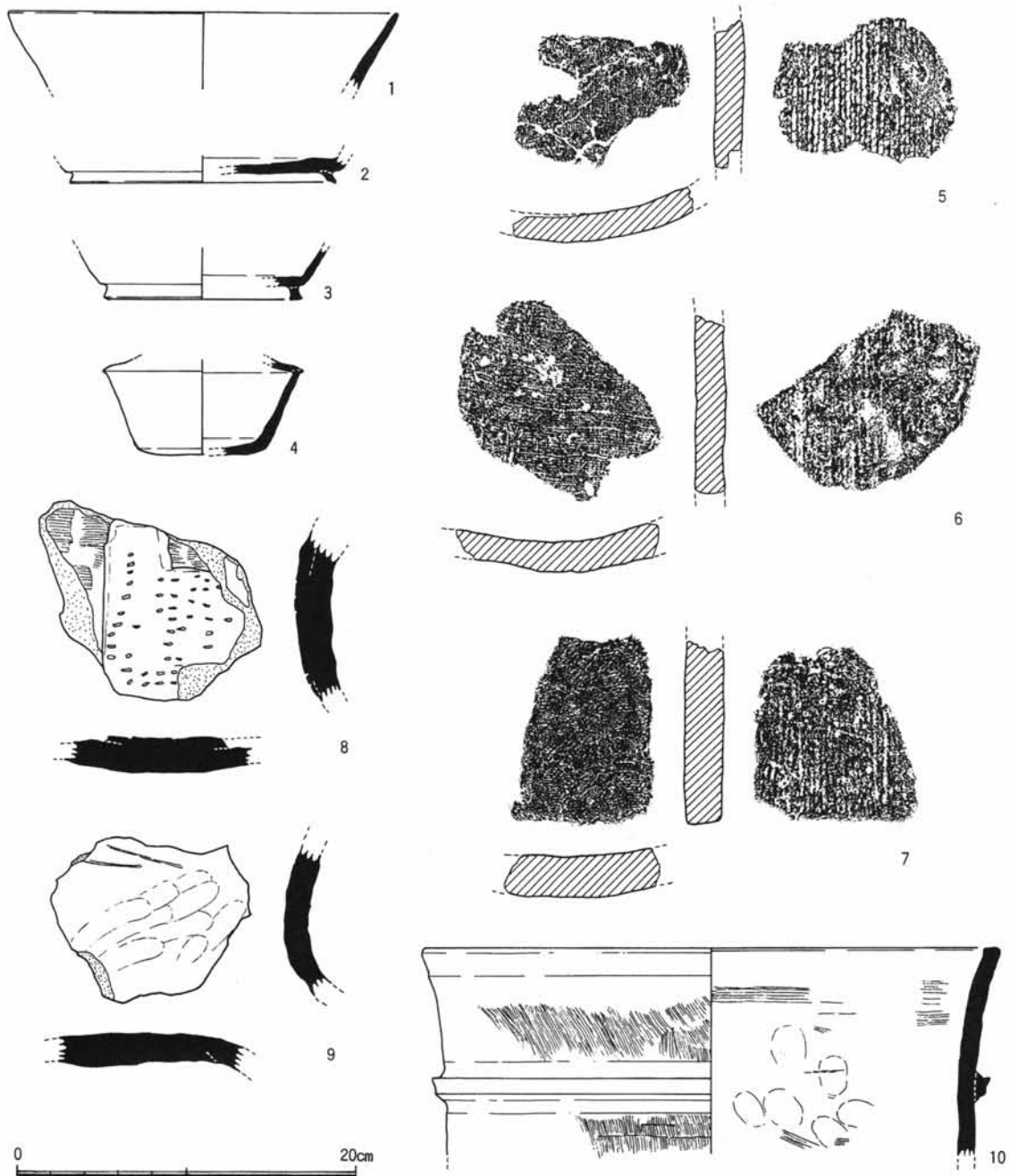
溝S D123(第91図) おおむね東西方向にのびる溝である。検出長3.6m、幅1.3m、深さ5～10cmである。検出位置から上人ヶ平8号墳の周溝の排水溝の可能性が考えられる。



第92図 上人ヶ平17号墳周溝S X101遺物出土状況

溝S D115・118・130(第91図) 溝S D115は、「L」字形に屈曲する溝であるが、西端は不明瞭なまま終息する。検出長5m、幅1.5~1.8m、深さ5~10cmである。溝S D118は、北東にのびる溝である。検出長13.3m、幅1.5~2.2m、深さ5~10cmである。溝S D118から須恵器杯^(注6)Bの破片が出土している(3)。溝S D130も北東にのびる溝であるが、北東端は不明瞭なまま終息する。検出長5.5m、幅1.5~2.5m、深さ5~10cmである。いずれも幅が広く浅い溝状を呈すること、方形や円形に区画されないことなどから、古墳の周溝の可能性は低く、自然地形の可能性もある。

土坑S K106(第91図) やや不整形な形状を呈する土坑で、長軸長2.4m、短軸長1.9m、深さ



第93図 上人ヶ平遺跡出土遺物実測図

5 cm程度である。土坑内からは埴輪片や土師器片などが出土した。

土坑 S K 136(第91図) はほぼ長方形を呈する土坑で、内部に厚さ10cmほどの炭・灰が充填されていた。長辺0.75m、短辺0.6m、深さ20cmである。須恵器や土師器の小片が出土したが、詳しい時期やその性格については不明である。

(2) 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして3箱と、過去の調査成果にくらべて非常に少なかった。出土した遺物には、円筒埴輪、形象埴輪(馬形埴輪)、須恵器、土師器、瓦のほかサヌカイトの剥片などがある。いずれも過去の調査で出土しているものと同様のものである。

1は包含層出土の須恵器杯の口縁部である。口径22.8cm、残存高4.4cmである。2・3は須恵器杯Bの底部の破片である。2は包含層出土で、底径15.7cm、残存高1.6cmである。3は溝 S D 118出土で、底径11.0cm、残存高3.1cmである。4は上人ヶ平17号墳周溝出土 S X 101出土の須恵器で、壺Cと思われる。体部最大径11.8cm、残存高5.6cmである。

5～7は平瓦の破片で、凹面には布目圧痕、凸面には縦位の縄叩き痕が残る。いずれも10cm×8cm程度の破片である。なお、今回の調査では軒丸瓦・軒平瓦は出土しなかった。

8・9は上人ヶ平17号墳周溝 S X 101出土の馬形埴輪の破片である。上人ヶ平17号墳では、昭和63年度の調査で馬形埴輪が出土しており(第92図参照)、今回出土した馬形埴輪の破片はこれと同一個体のものと考えられる。8は鞍の一部を表現した破片である。鞍褥または障泥の破片と考えられ、昭和63年度の調査で出土した個体と表現方法もほぼ同じである。13cm×10cm程度の破片である。9は馬形埴輪の体部で、内外面ともナデ調整で仕上げる。12cm×10cm程度の破片である。10は包含層出土の円筒埴輪である。口径33.6cm、残存高12.7cmである。最上段と2段目の上半部が残存する。

4. まとめ

今回の調査では、古墳または瓦工房に関係する遺構の検出が想定されたが、上述の上人ヶ平17号墳周溝 S X 101を除くと、いずれも関連する遺構とは判断できなかった。しかし、薄く形成された遺物包含層やごくわずかな遺構からは、古墳時代の埴輪や奈良時代の瓦・須恵器などが出土した。以上のような状況から、今回の調査地周辺は、もともと明確な遺構が形成されていなかったと考えられる。

(2) ^{うちだやま}内田山遺跡・内田山古墳群(第5次)

1. 遺跡の位置と歴史的環境

内田山古墳群(1)・内田山遺跡(2)は、木津町東部の丘陵から木津町市街地に向かって西北西方向にのびる支尾根のほぼ先端部に立地し、木津町の平野部を一望できる。木津町東部の丘陵やその周辺には数多くの遺跡が展開する。

内田山遺跡・内田山古墳群が立地する丘陵の先端には、現在、京都府立木津高等学校が所在する。木津高等学校では、校舎の建て替えに伴って発掘調査を実施している。遺跡としては燈籠寺遺跡(3)と呼称し、主に弥生時代中期の方形周溝墓や弥生時代後期の竪穴式住居跡などが検出されている。また、一辺が10~18mの小規模な方墳が13基のほか、埴輪棺も検出されている。これらの古墳については、内田山古墳群と呼称し、燈籠寺遺跡とは区別している。なお、今回の調査



第94図 内田山遺跡・内田山古墳群周辺主要遺跡分布図
(国土地理院1/25,000奈良)

- | | | | |
|------------|-------------|-------------|----------|
| 1. 内田山古墳群 | 2. 内田山遺跡 | 3. 燈籠寺遺跡 | 4. 燈籠寺廃寺 |
| 5. 上津遺跡 | 6. 釜ヶ谷遺跡 | 7. 赤ヶ平遺跡 | 8. 白口遺跡 |
| 9. 菰池遺跡 | 10. 片山遺跡 | 11. 木津城跡 | |
| 12. 木津城山遺跡 | 13. 鹿背山瓦窯跡 | 14. 作り道遺跡 | 15. 木津遺跡 |
| 16. 木津平城跡 | 17. 八ヶ坪遺跡 | 18. 奈良道遺跡 | |
| 19. 岡田国遺跡 | 20. 大谷窯跡 | 21. 天神山古墳群 | |
| 22. 文廻池遺跡 | 23. 鹿背山焼南窯跡 | 24. 鹿背山焼北窯跡 | |
| 25. 車谷遺跡 | 26. 藪ヶ浦遺跡 | 27. 鹿背山城跡 | |

対象となった内田山B1号墳とは同じ内田山古墳群に属するが、立地する支尾根が異なることから、木津高等学校内の古墳群をA支群と呼んでいる。

燈籠寺遺跡の北側には山城国分尼寺の可能性も指摘される燈籠寺廃寺(4)が所在する。また、関西学術研究都市関係の調査で、釜ヶ谷遺跡(6)、赤ヶ平遺跡(7)、菰池遺跡(9)、木津城山遺跡(12)などが調査されている。釜ヶ谷遺跡では、顕著な遺構は検出されていないが、縄文時代から奈良時代

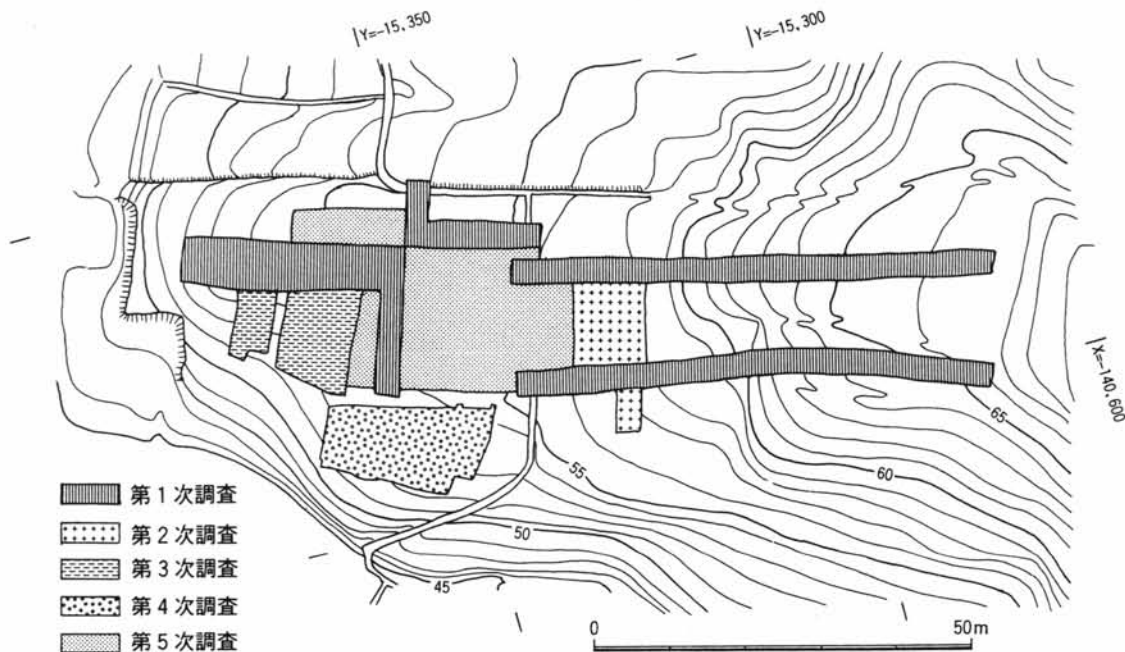
に至る遺物が出土しており、特に奈良時代の祭祀遺物がまとまって出土していることは注意される。赤ヶ平遺跡では弥生時代前・中期の竪穴式住居跡や石器製作で生じた剥片

を廃棄した土坑などが検出されている。木津城山遺跡では弥生時代後期前半の集落跡が確認されている。標高90～105m付近に集落が営まれた、いわゆる高地性集落である。京都府南部では、当該期の遺跡が少なく、出土した弥生土器とともに重要な資料となるものである。

また、内田山遺跡・内田山古墳群の西側の水田部分には片山遺跡(10)がある。片山遺跡では、大型掘立柱建物跡や井戸、溝などを検出しており、官衙的な性格を考えることができる。その時期は恭仁宮造営期よりも新しく、奈良時代後半に営まれたと考えられる。このほか、奈良時代の平城京の外港である泉津関連の遺跡と考えられる上津遺跡(5)や作り道遺跡(14)などがある。

2. これまでの調査

内田山古墳群と内田山遺跡の調査は、これまでに4回行われている。いずれも関西文化学術研究都市内の道路の建設に伴う事前調査として実施されたもので、今回の第5次調査によって、対象地内の調査を終えることになる。内田山B1号墳周辺は、調査前まで、畑や果樹園として利用されており、調査前には墳丘や周溝はほとんど不明で、わずかな高まりが確認できる程度であった。このため、第1次調査(平成11年度)では、対象地内に所在する内田山B1号墳の墳形・規模を確認するとともに、内田山遺跡の広がりを確認するために試掘調査を実施した。その結果、内田山B1号墳は、一辺18m程度の方墳である可能性が高いことを確認するとともに、埋葬施設として埴輪棺2基(SX01・02)を検出した。埴輪棺は、2基とも近現代の耕作などによって上部が大きく削平されており、下部のおよそ1/3が遺存していたに過ぎない。埋葬施設としての構造は2基ともほぼ同じで、墓壙を穿ったのち、埴輪を固定するための黄褐色小ブロック混じり淡青灰色粘土を墓壙掘形の内側に置いて、埴輪を据える。この際、粘土は墓壙底には置かれていない。なお、第1次調査では墓壙底に黄褐色粘質土を置いて棺床とすると考えていたが、これは墳丘盛



第95図 内田山遺跡・内田山古墳群年度別調査区配置図

付表 内田山遺跡・内田山古墳群調査一覧

調査回数	調査年度	調査期間	調査面積(m ²)
第1次調査	平成11年度	1999.9.1~12.22	700
第2次調査	平成12年度	2001.2.5~2.27	100
第3次調査	平成14年度	2003.1.21~2.27	170
第4次調査	平成15年度	2003.5.27~6.27	200
第5次調査	平成16年度	2004.12.1~2005.2.17	500
		(合計)	1,670

土の一部であることを今回の調査で確認した。埋葬施設S X01は、全長2.4m・幅0.6mの墓壇に、特製埴輪棺を納める。棺身1点と両小口の蓋2点からなる。主軸は北に対して37°東に振る。削平が著しかったものの、副葬品として滑石製の管玉・棗玉・白玉などの玉類が約180点出土した。玉類は攪乱が及んでいたため原位置を保っているものはほとんどなかった。埋葬施設S X02は、全長2.3m、幅0.7mの墓壇に、普通円筒埴輪を棺身に転用し、朝顔形円筒埴輪の口縁部で両小口を閉塞する。棺身は後世の耕作などによって南側2/3が抜き取られていた。埴輪棺2の主軸は北に対して39°東に振る。副葬品などはなかった。埴輪棺に転用された円筒埴輪や周溝から出土した円筒埴輪片は、川西編年Ⅲ期に位置づけられることから、内田山B1号墳は古墳時代中期前半の築造と考えられる。なお、内田山B1号墳は、埴輪棺の検出状況から墳丘の大半が削平されているものの、部分的に墳丘盛土が遺存していることが確認できた。また、少量ながら弥生時代後期や奈良時代の土器片が出土した。

第2次調査(平成12年度)は、弥生時代や奈良時代の遺構・遺物について明らかにするために実施した。しかし、顕著な遺構は確認できず、出土遺物もごくわずかであった。第3次調査(平成13年度)では、調査区の南東部で弥生時代後期前半から中頃にかけての土器溜まりなどが検出された。第1次調査の成果と併せて、当該期の遺構が対象地一帯に広がっている可能性が高まった。第4次調査(平成15年度)も、第3次調査同様、斜面部の調査であったが顕著な遺構は検出されず、後世の攪乱によって転落したと思われる埴輪片が出土したにすぎない。

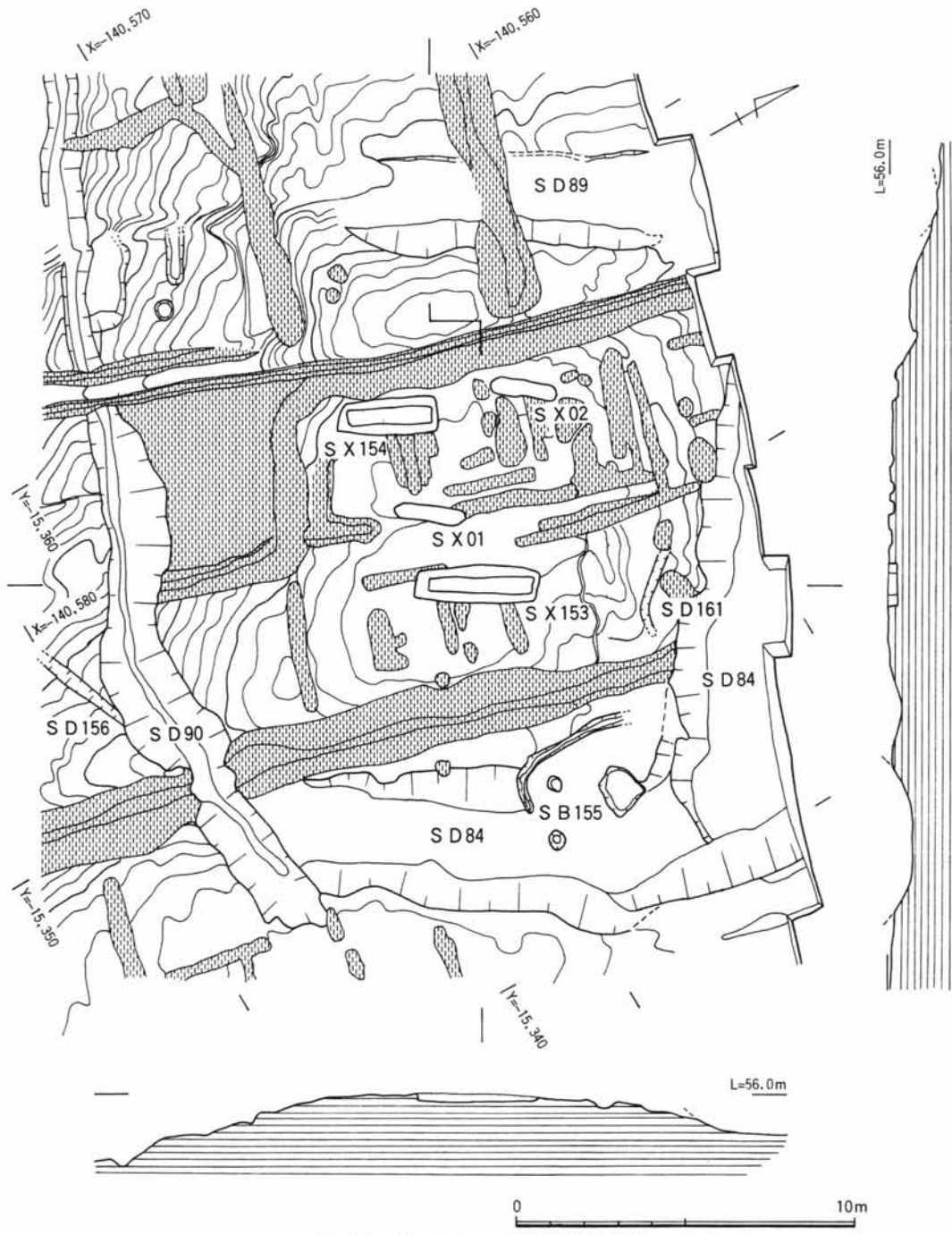
3. 調査の経過

今回の調査は、第1次調査で確認された内田山B1号墳の未調査分を調査するとともに、弥生時代や奈良時代の遺構が検出される可能性もあった。調査区は、対象地内の北辺に現用の水道管(道路建設に伴って移設される予定)が存在するため、この部分を避けて設定した。調査の結果から言えば、内田山B1号墳の北側周溝の外堤がこの部分に当たるが、水道管の埋設に伴って大きく攪乱されていると判断された。

発掘調査は、平成16年12月1日から開始した。調査は、第1次調査で調査を実施しなかった地点の表土を重機で掘削した後、人力による精査を行った。その結果、これまで未確認であった内田山B1号墳の東側周溝(S D84)を検出し、周溝内から大量の埴輪片が出土した。また、調査区の北西部分では第1次調査で検出していた西側周溝(S D89)の続きを検出し、やはり大量の埴輪片が出土した。墳頂部では、第1次調査の際に埴輪棺2基(S X01・02)を検出していたが、これらが中心的な埋葬施設とは考えられなかったことから、精査を繰り返した。ただ、調査開始当初

は埋葬施設を確認することができず、調査の重点を周溝から出土した埴輪の記録と取り上げにおくことにした。また、これらの作業と並行して墳丘の断ち割りを実施した。

埴輪の取り上げをおおむね終えた平成17年1月19日に墳頂部の精査を再度実施したところ、墳頂部の中央やや東寄りで埴輪片(蓋形埴輪)がまとまって出土した。周囲を精査したところ長さ3.7m、幅1.2mほどの範囲で土色の変化が認められ、埋葬施設の存在が明らかとなった(S X 153)。埋葬施設S X 153は、検出面で墓壙とともに棺痕跡を確認し、まず棺内から掘削を行った。棺内を掘り下げた結果、最初に出土した蓋形埴輪片が枕であることを確認するとともに、棺床に小磔を敷き詰めた磔床を検出した。棺内の掘削、ならびに遺物出土状況の記録を行うとともに、



第96図 内田山B 1号墳墳丘測量図

内田山B 1号墳の全景写真と墳丘測量を目的とした空中写真撮影を1月26日に実施した。

空中写真撮影を行った後、墳丘盛土の除去を開始した。ところが、2月1日には墳頂部の南西部で攪乱坑の精査中に鏡が出土し、新たな埋葬施設の存在が明らかになった(S X 154)。周辺の精査を行うと、埋葬施設S X 153と同様、長さ2.8m、幅1.1mほどの範囲で土色の変化が認められた。埋葬施設S X 154も検出面で墓壇と棺痕跡を確認し、まず棺内から掘削を行った。棺内を掘り下げた結果、埋葬施設S X 153のような礫床は認められなかった。また、土師器高杯の杯部を転用した枕を検出した。出土した鏡は2月4日に取り上げ、当調査研究センター理事都出比呂志大阪大学教授(当時)の指導を受けた。2月8日には当調査研究センター前理事長樋口隆康先生、9日には大阪大学助教授(当時)福永伸哉氏にご指導いただいた。出土した鏡は青銅製の仿製鏡で、獣形が著しくくずれた獣文を6体配した六獣形鏡である。

以上の周溝、主体部の調査に並行して古墳周辺でも若干の遺構を検出した。2月中旬には遺構の検出・掘削作業、記録作業などのすべての作業を終え、2月17日に現地説明会を実施して現地調査を終了した。現地説明会の参加者は平日にも関わらず120名を数えた。

4. 検出遺構

(1)内田山B 1号墳

内田山B 1号墳は、第1次調査と今回の調査によって、墳丘の調査をすべて行ったことになる(第96図)。墳丘は、大きく削平されている南側を除く3方で、直線的な溝(S D 84・89)を検出したことから、平面形が方形を呈する方墳と考えられる。古墳の主軸は、北に対して30°東に振る。墳丘の規模は、東西で検出された墳丘裾の長さで17.5mである。墳丘は、大きく削平されており、特に近現代の耕作に伴う溝や地境溝などによって墳丘は著しく損なわれている。墳丘の南側は、谷部に面していることもあるが、周溝すら遺存しないほどの削平・改変を受けている。墳頂部では、第1次調査で埴輪棺2基(S X 01・02)、今回の調査で木棺直葬墓2基(S X 153・154)を検出した。埋葬施設は現地表面から10cm足らずで検出しているが、埴輪棺の遺存状況から、墳丘は50cmから1m近く削平されている可能性が高い。原位置を保つ埴輪の出土はなかったものの、周溝から大量の埴輪片が出土しており、埴輪列が存在したと考えられる。周溝から礫がほとんど出土しなかったので葺石は葺かれていなかったと考えられる。なお、段築の有無は不明である。

以下、今回の調査で検出した埋葬施設・周溝について報告する。

①埋葬施設

墳頂部のほぼ中央と南西部で新たに2基の埋葬施設を確認した(S X 153・154)。第1次調査で検出した埋葬施設はいずれも埴輪棺であったが、今回の調査では組み合わせ式木棺が用いられていた。2基のうち、墳頂部のほぼ中央に位置する埋葬施設S X 153が内田山B 1号墳築造の契機となった被葬者の埋葬施設と考えられる。

埋葬施設S X 153(第97図) 全長3.7m、幅1.2mの墓壇に全長3.3m、幅0.6mの木棺を納めていた。主軸は北に対して32°東に振る。木棺材は腐食して遺存していなかったが、その痕跡を明

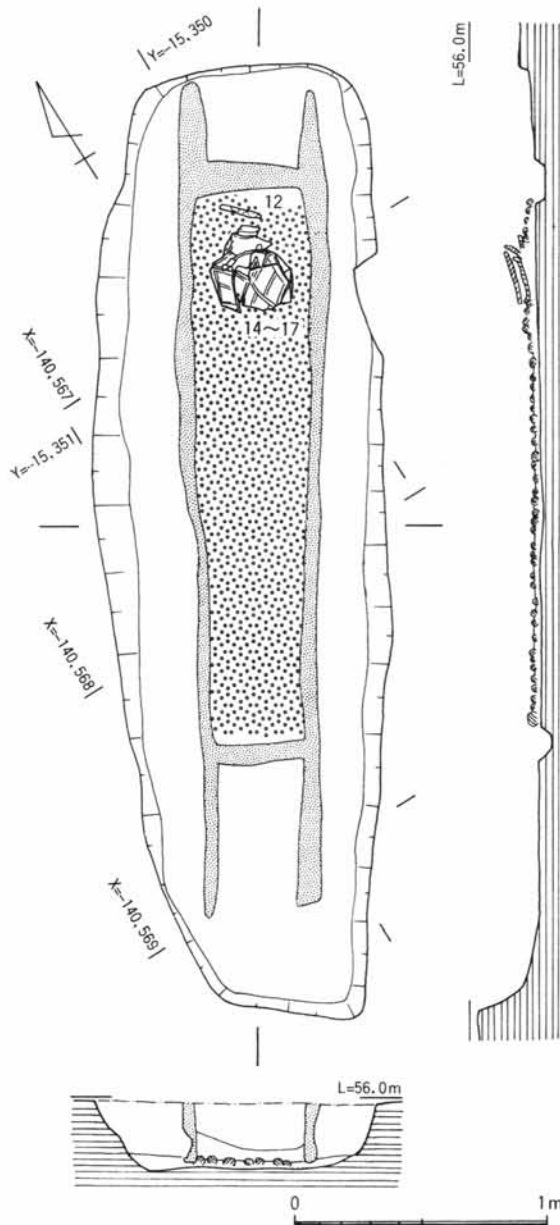
瞭に検出することができた。木棺は、組み合わせ式木棺で、側板が両小口板をはさみ込む形態である。棺内の規模は長さ2.18m、幅0.46~0.36mで、北側が広く南側が狭い。棺内に仕切り板はなく、小礫が敷きつめられて礫床としていた。棺の底板の有無は確認できなかったが、存在しなかった可能性が高い。礫床の北東寄りには蓋形埴輪の立ち飾りや飾り板受部^(注7)を折り重ねて、被葬者の枕としていた。被葬者は北頭位に埋葬されていたと考えられる。このことは木棺の北側の幅が広いことから首肯できる。副葬品は、枕の北東側から刀子1点が出土したにとどまる。

埋葬施設 S X 154 (第98図) 墓壇南端が削平によって損なわれていたため、正確な規模は不明である。検出長2.8m、幅1.1mの墓壇に全長2.5m、幅0.5mの木棺を納めていた。主軸は北に対して27°東に振る。木棺材は腐食して遺存しておらず、材の痕跡も確認することはできなかった。木棺は、埋葬施設 S X 153と同様、組み合わせ式木棺であるが、木棺の形状は埋葬施設 S X 153のそれとは異なり、北側の小口板が木棺の幅よりも広い形状をとる。南側の小口板の状況は不明瞭である。

木棺は箱形の形状をとるようである。木棺の内部は、北寄りに仕切り板が存在し、大きく2つの空間に分けられる。北寄りの空間は副室的な空間で、南寄りの空間は被葬者を埋葬した主室である。主室の北東寄りには高杯の杯部が置かれており、被葬者の枕に転用していたと考えられる。埋葬施設 S X 154同様、被葬者は北頭位に埋葬されていたと考えられる。副葬品は、主室の中央から鏡1面が出土したのみである。鏡は鏡面を上にしており、検出当初その上面に木質が遺存していた。木棺材と考えられる。枕と考えられる高杯杯部とは約0.7m離れて出土したことから、鏡は被葬者の腹部に置かれていたと考えられる。なお、木棺の内部は、淡いピンク色に変色した土が広がることから、朱が塗られていたと考えられる(第98図網点の範囲)。また、鏡面にも少量の朱が付着していた。

②周溝

周溝は、削平の著しい南辺を除く、東・北・西の各辺で確認しており、本来は全周するものと

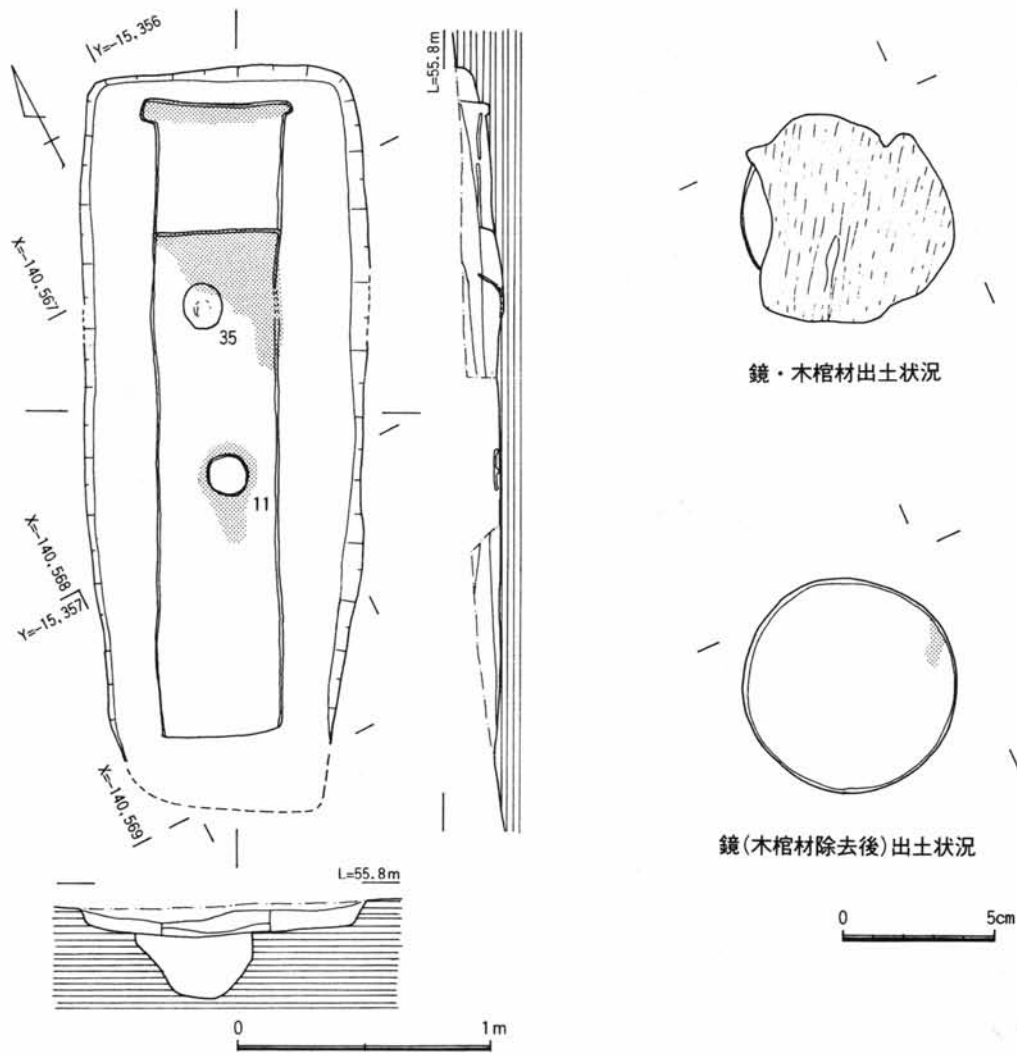


第97図 埋葬施設 S X 153実測図

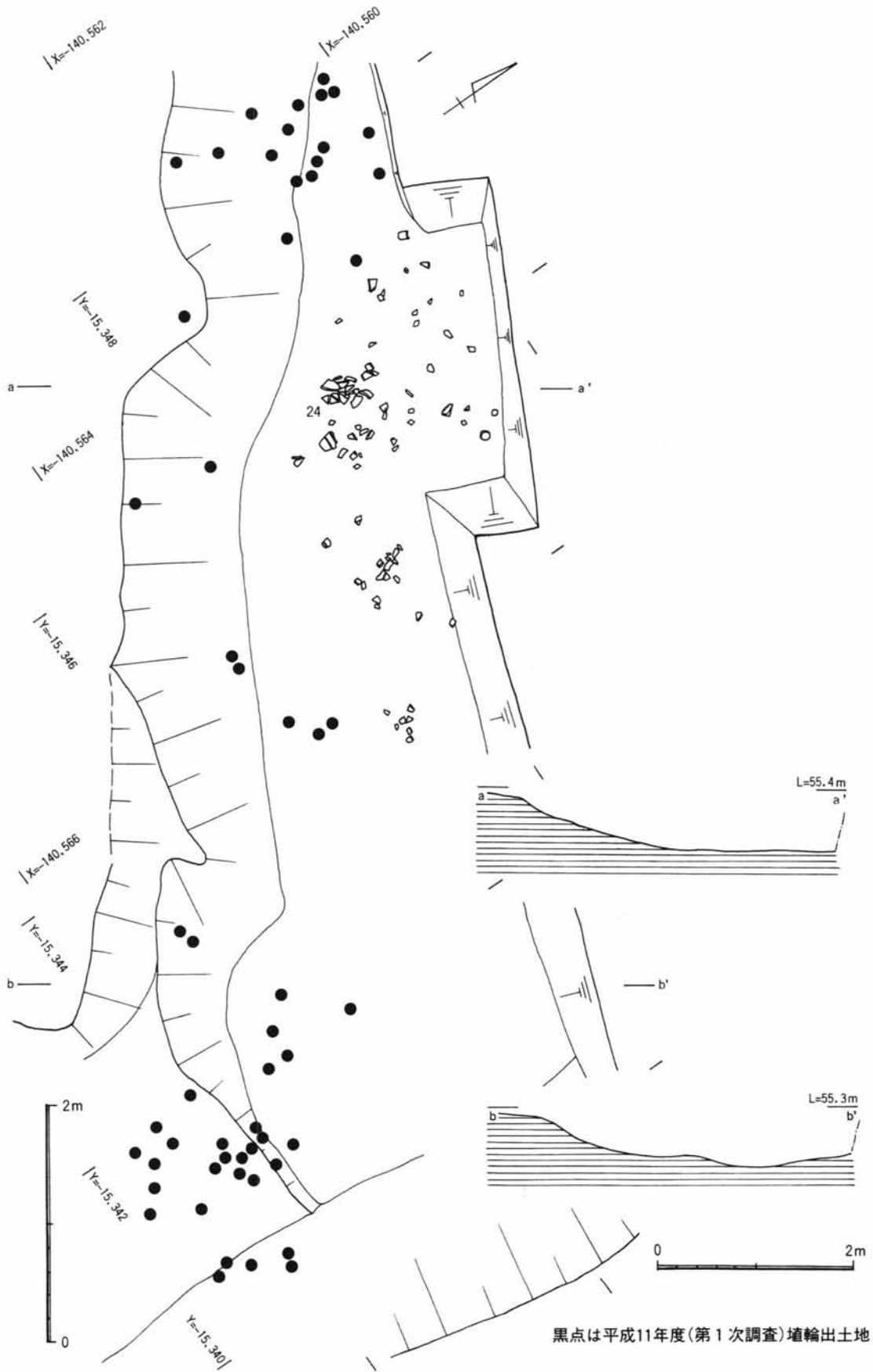
考えられる。周溝の一部は第1次調査の際に確認しており、北側周溝をSD84、西側周溝をSD89と呼称した。また、今回の調査で確認した東側周溝は北側周溝と連続していることが確認できたので、同じくSD84と呼称することにした。また、第1次調査で南側周溝の可能性を考えていた溝SD90は、今回の調査でその全容を確認することができ、内田山B1号墳の周溝ではないと判断した。

3方のいずれの周溝からも多数の埴輪が出土した。埴輪の出土状況からは埴輪列の存在が予想されたため、出土した埴輪の詳細な位置を記録する必要があると判断した。これは、墳丘上に存在した埴輪が、周溝内に転落したならば、周溝内の出土位置を記録することは、墳丘上における埴輪の配置状況の復原が可能と考えられたからである。第5次調査で出土した埴輪についてはすべて1/10の出土状況図を作成したが、調査結果から述べるならば、大きく攪乱されていたため、墳丘上の埴輪の配置状況を復原することは不可能であった。

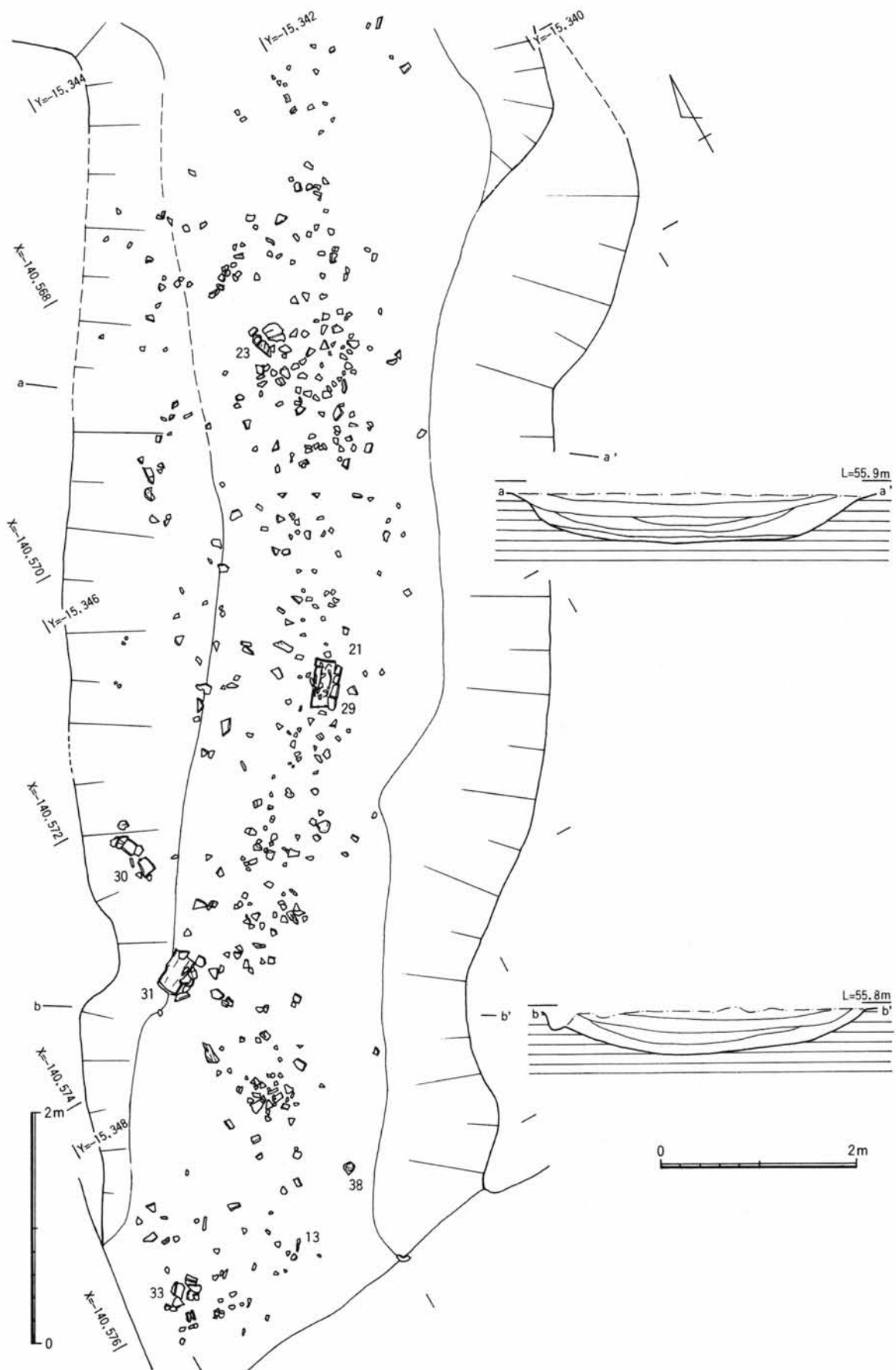
北側周溝SD84(第96・99図) 第1次調査で検出したもので、墳丘側の斜面と周溝底を検出し、埴輪片が多数出土した(第99図黒丸点)。今回の調査でも、残余の調査可能な範囲まで拡張して調



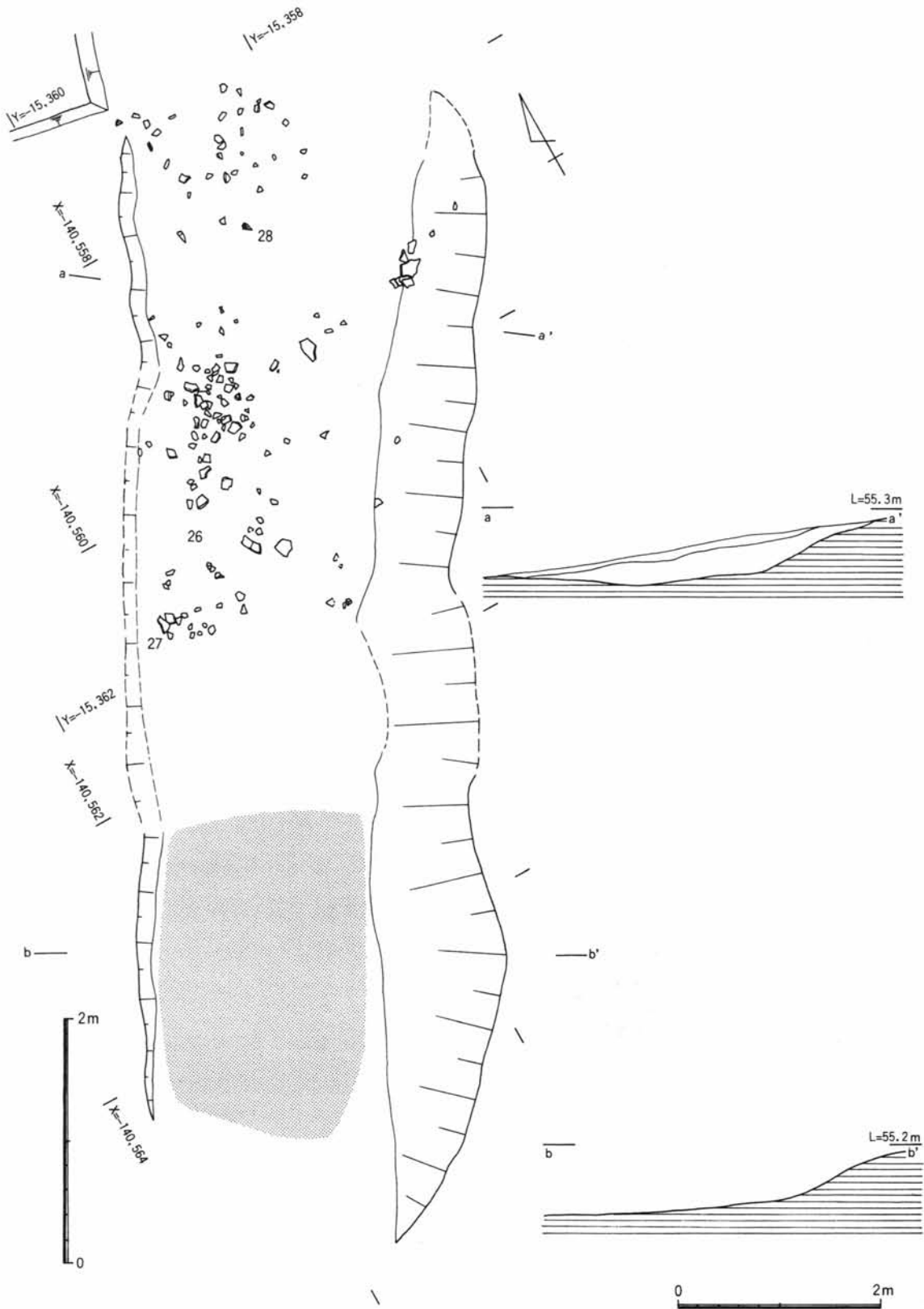
第98図 埋葬施設S X154実測図



第99図 内田山B 1号墳東側周溝S D84遺物出土状況図(1)



第100図 内田山B 1号墳東側周溝S D84遺物出土状況図(2)



網点は平成11年度(第1次調査)埴輪出土地

第101図 内田山B 1号墳東側周溝S D89遺物出土状況図

査を行った。しかし、外堤に当たる場所で、現用の水道管が埋設されていたことや、調査区北辺から3mほど北へ行くと比高差1mほどの段差があることから、北側周溝の外堤は残存していない可能性が高いと判断された。このため、周溝の幅は不明であるが、遺存状況から3m以上あったと考えられる。また、周溝の西端部は調査区外となる。周溝の検出長は16m、墳丘側での深さは0.7m前後である。周溝底の標高は西端で54.7m、東端で54.6mである。第1次調査の成果によると、周溝埋土は上から、淡橙褐色細砂混じり粘質土(上層)、淡茶灰色粘質土(中層)、灰茶色砂質土(下層)である。上層は周溝のくぼみを埋め立てた整地土と考えられる。ただ、遺物が出土しなかったため、整地された時期は不明である。中層は埴輪片が多数出土したことから、内田山B1号墳の墳丘が大きく削平されたころの堆積土と考えられる。下層は、埴輪片がほとんど含まれないことから、古墳築造後まもない時期の堆積土と考えられる。今回の調査で出土した埴輪片には、周溝底直上で検出されたものもあるが、第1次調査出土埴輪片も含めて大半は中層から出土したものである。出土した埴輪には円筒埴輪、蓋形埴輪(24)などがある。24は、周溝S D84のほぼ中央付近でまとまって出土した。

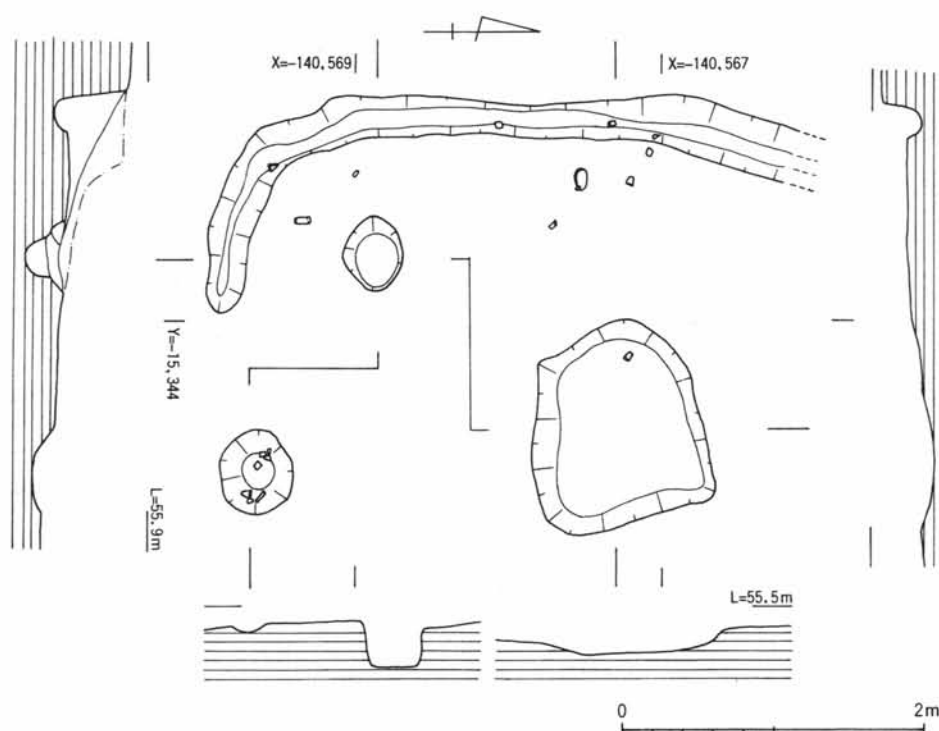
東側周溝S D84(第96・100図) 今回の調査で初めて検出したものである。周溝北端は、北側周溝S D84と接続するが、墳丘北東隅に弥生時代後期の竪穴式住居跡S B155が存在したことから、明確に確認することはできなかった。また、南端は溝S D90によって完全に削り取られており、墳丘や周溝外堤の南東隅はまったく遺存していなかった。周溝の検出長14m、検出幅4m、深さ0.5mである。周溝底の標高は北端で55.2m、南端で55.4mである。周溝底の標高が北側周溝と東側周溝では大きく異なり、50cm以上の比高差がある。しかしいずれも埴輪がまとまって出土していることから、両者とも、本来的に内田山B1号墳に伴う周溝であると判断される。東側周溝から北側周溝への変化点については、遺構基盤層の状況がわかりにくかったこともあって不明瞭であるが、緩やかなスロープ状を呈していたのではないかと考えられる。したがって、北側周溝の東端の標高は54.6mであるが、本来の周溝底はもう少し高かった可能性も否定できない。周溝埋土は上から、淡黄茶色ないし淡黄橙色細砂混じり粘質土(上層)、茶黄色ないし暗灰色粘質土(中層)、灰茶色砂質土(下層)である。周溝の堆積状況は北側周溝と類似している。出土した埴輪片は普通円筒埴輪や朝顔形円筒埴輪(33)、蓋形埴輪(18~23・25)、家形埴輪、不明形象埴輪(29~31)などがある。蓋形埴輪の立ち飾り軸受けである21は、29の内部から出土した。蓋形埴輪の立ち飾りである18~20・22は、同一個体の可能性が高いが、周溝内から散在して出土している。29~31は形象埴輪の基部と考えられ、ややまとまって出土した。しかし、周溝S D84から出土した埴輪の大半が細片化していたことや、離れた破片どうしが接合することから、墳丘から自然転落したのではなく、墳丘が大きく削平、破壊された際に、墳丘上にあった埴輪が周溝内へ廃棄あるいは堆積したものと考えられる。また、これらの埴輪片の直上から鉄鏃(3)や須恵器片(84)、瓦片が出土した。3は、墳頂部の埋葬施設のうち埴輪棺2基(S X01・02)が大きく削平されていたことから、どちらかの埋葬施設の副葬品の可能性がある。84は須恵器壺で、奈良時代のものと考えられ、墳丘の削平時節、埴輪片の埋没時期がこの時期である可能性を示唆している。

西側周溝 S D 89(第96・101図) 南半部を第1次調査で、北半部を今回の調査で検出した。いずれの調査でも外堤の遺存状況はわずかで、周溝の検出長9.5m、検出幅4m、墳丘側での深さは0.5m、外堤側の深さは10cmに満たない。周溝底の標高は北端で54.7m、南端で54.5mである。周溝埋土は上から暗灰色砂質土(上層)、黄茶色砂質土(下層)である。周溝埋土は北側周溝や東側周溝とは若干異なる。これは周溝の遺存状況によるのであろう。墳丘北西隅は今回の調査範囲内では検出できなかった。また、墳丘南西隅は、第3次調査の際に確認したと報告したが、今回の調査成果をふまえると、墳丘隅はもう少し南に位置すると考えられ、すでに遺存していない。周溝から大量の埴輪片が出土しており、第1次調査ではグリッドを設定して取り上げを行い(第101図網点の範囲)、今回の調査では出土状況を記録して取り上げを行った。埴輪は周溝底から若干浮いた状態で出土した。出土した埴輪は、周溝 S D 84出土のものと同様、接合できるものが少なかったが、円筒埴輪や蓋形埴輪(26)、盾形埴輪(28)、不明形象埴輪(27)などがある。

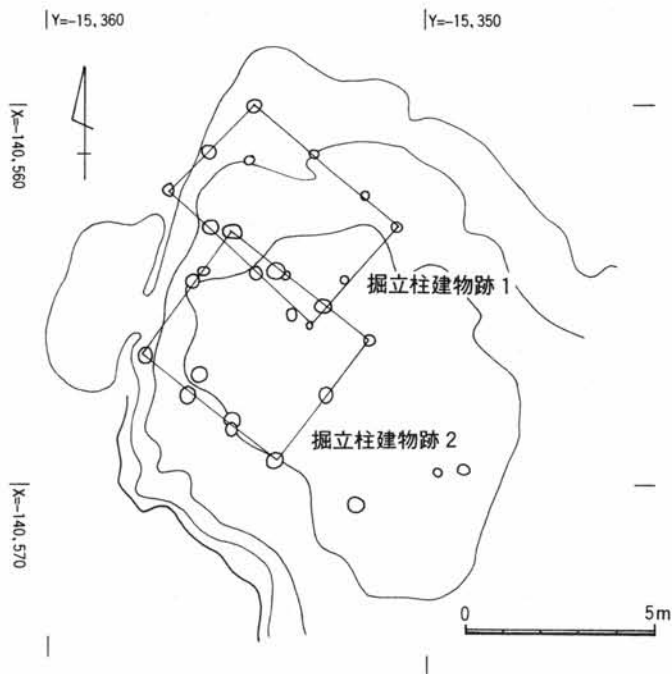
(2) そのほかの遺構

竪穴式住居跡 S B 155(第102図) 内田山 B 1号墳の墳丘下層で検出された竪穴式住居跡である。検出された周壁溝の形状から住居跡の掘形は隅丸方形と考えられるが、東側は周溝 S D 84の掘削に伴って削平されている。また、住居跡の北半部は、墳丘と周溝埋土の違いがわかりにくかったため、掘りすぎて検出できなかった。住居跡の残存規模は長辺3.8m、短辺1.4mで、住居内で柱穴2基と土坑1基を検出した。住居内からは弥生土器の破片が出土したものの、形状などがうかがえる個体はそれほど多くなかった(36・39)。出土した土器から、弥生時代後期中頃の住居跡と判断される。

掘立柱建物跡 1・2(第103図) 内田山 B 1号墳の墳丘盛土である黄褐色粘質土(約10cm)を除



第102図 竪穴式住居跡 S B 155実測図



第103図 内田山B1号墳下層検出掘立柱建物跡平面図

去すると、約30基の柱穴が検出された。柱穴は重複するものの、2棟の建物に復原することができた。建物跡1は桁行き3間(5.0m)、梁間2間(3.2m)を数える。建物跡2は桁行き3間(4.6m)、梁間2間(4.0m)を数える。柱穴の掘形はおおむね円形で、直径20~40cm、深さ30~45cmである。柱穴内からの出土遺物はほとんどなく、2、3の柱穴から土器の小片が出土したのみである。このため時期は不明であるが、墳丘盛土よりも下層で検出したことから、内田山B1号墳の築造以前の遺構である。周辺で検出されている弥生時代後期の遺

構が存在することから、これと同時期の可能性が高い。

溝S D161 内田山B1号墳の墳丘下層で検出した溝で、溝からは弥生時代後期の土器が出土した(37)。検出長2.5m、幅0.3mである。周辺は近現代の耕作などによる削平を大きく受けており、溝S D161が竪穴式住居跡の周壁溝であった可能性もある。

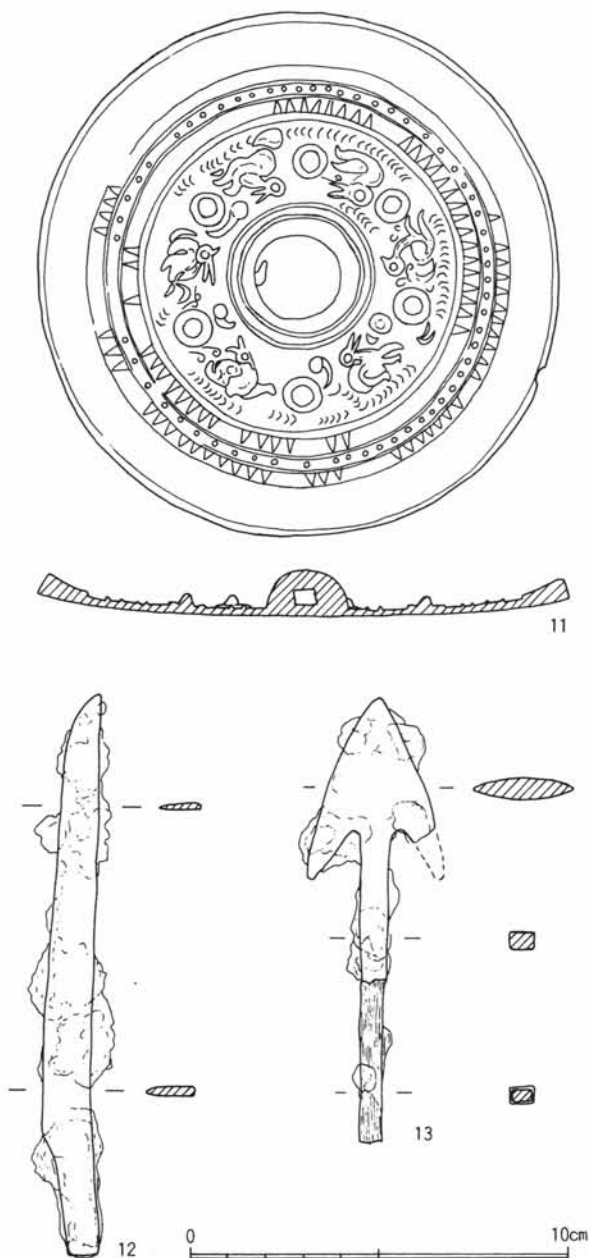
溝S D156 後述する溝S D90の南側で検出した溝で、奈良時代の土器が出土した(41)。検出長3.0m、幅0.3mである。これまでの調査でも奈良時代の遺物ごく少量出土しているが、具体的な遺構の検出は初めてである。ただ、周辺には関連する遺構はみられず、奈良時代の具体的な土地利用については明らかでない。なお、西側の水田に位置する片山遺跡の発掘調査では、奈良時代中頃から後半にかけての遺構・遺物を検出しており、これとの関連性が指摘できる。

溝S D90 第1次調査で検出した溝で、当初は内田山B1号墳に伴う周溝の可能性を考えていたが、今回の調査によってその可能性は否定された。溝S D90自体は、内田山B1号墳の周溝S D84の東南端付近から、内田山B1号墳の所在する丘陵の南側斜面の中腹を西に向かってのび、第3次調査で検出した溝S D108につながる事が確認された。溝S D90は、総検出長34m、幅1.7~2.2mである。もっとも残りのよいところでの深さは1mで、その断面形は「V」字状を呈する。周辺では弥生時代後期の土器が出土していることから、集落域を圍繞する区画溝の可能性も考えられた。しかし、溝S D90からはわずかながらも埴輪片が出土したことから、内田山B1号墳よりも後に掘削された溝と考えざるを得ない。時期を明らかにできるような遺物は出土しなかった。

5. 出土遺物

今回の調査では、埴輪類だけでなく、青銅鏡や鉄製品、弥生土器、須恵器などが出土した。出土した遺物は、整理箱で22箱を数える。周溝部分や埴輪棺の調査を実施した第1次調査とはほぼ同量である。

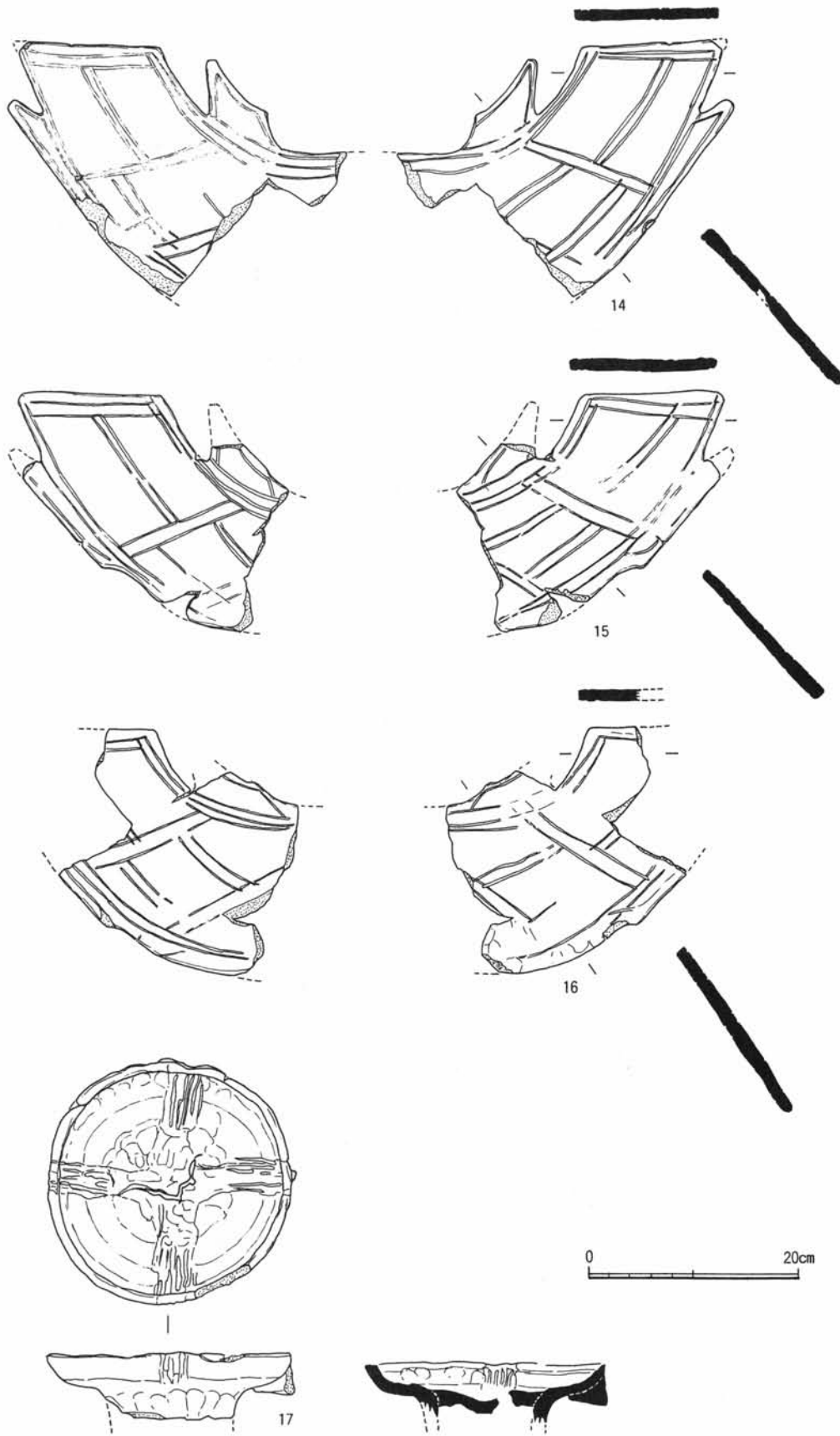
(1)鏡(第104図11) 埋葬施設S X154から出土した青銅製の鏡で、獣形がくずれて鳥頭化した獣文を6頭配した六獣形鏡である。遺存状態は比較的良好で、折損などもみられない完形品であるが、全体に錆がみられた。布の付着した痕跡はみられなかった。面径約13.9cm、鏡面から鈕頂までの高さ1.2cm、反りは約0.4cmである。鈕は半球形状である。鈕孔は長方形で内区面よりもわずかに高い位置にある。鈕孔には紐が遺存していた(図版第79上段左)。鈕座は、鈕の周りに2本の圈線がめぐり、圈線の間には珠文がみられる。内区は、6個の円圈乳座を配し、その間に6体の獣形を配している。獣形はいずれも右向きで、鳥のような頭と「V」字形の嘴様のものを持つ。首は細長く、「鳥首」もしくは「鳥頭」と呼ばれるものである。外区は鋸歯文・珠文・鋸歯文と続く。周縁は幅1.2cmの平縁に近い斜縁である。紐孔が内区面よりも高い位置にあることや、獣形の鳥頭化が著しいことから古墳時代中期前葉のものと推定される。



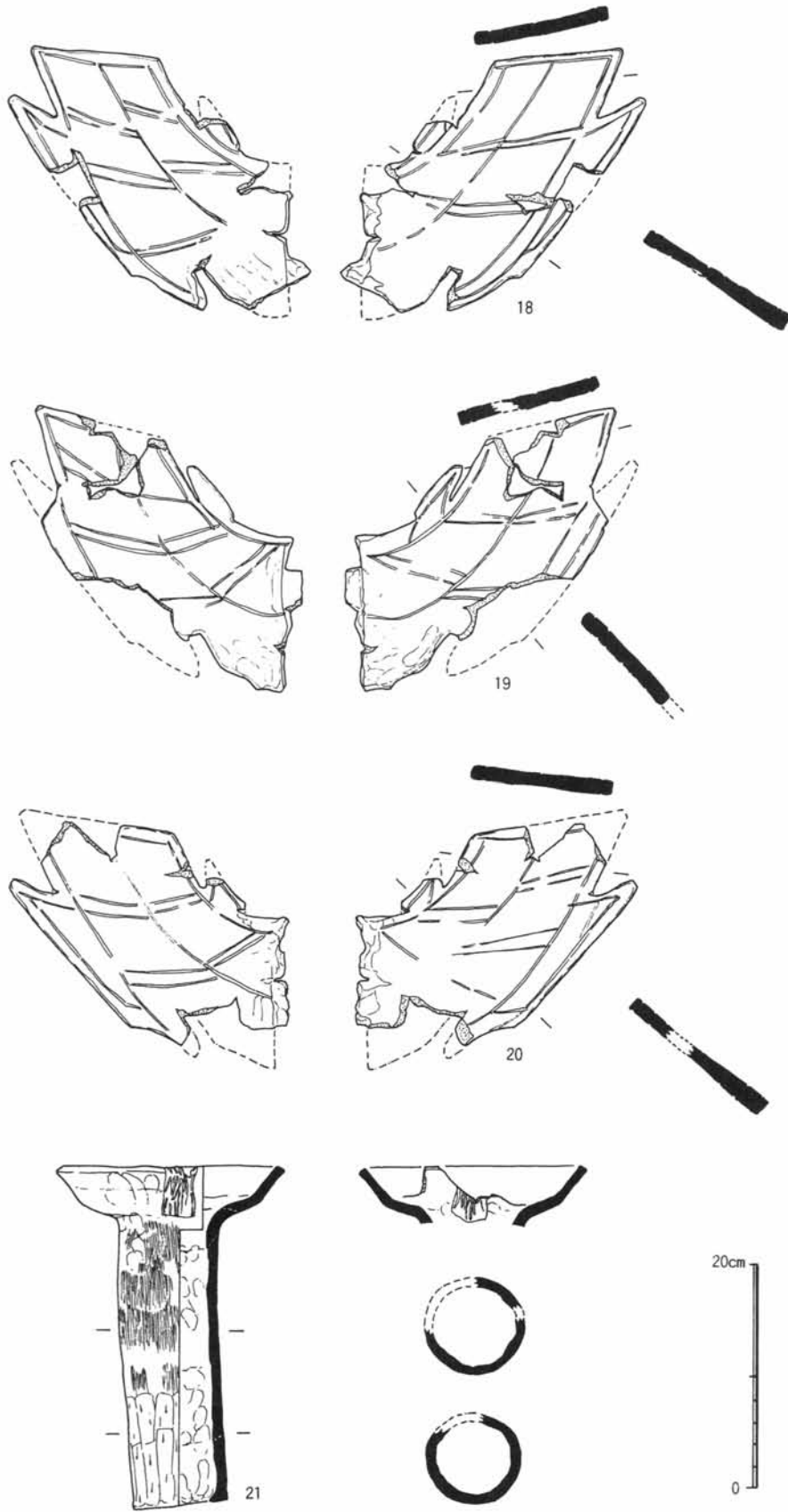
第104図 鏡・鉄器実測図

(2)鉄器(第104図12・13) 今回の調査では、鉄器2点が出土した。12は埋葬施設S X153から出土した刀子である。全長14.8cm、刃部長11.4cm、刃部幅1.3cmである。関は傾斜の緩い斜角状である。13は東側周溝S D84から出土した鉄鎌で、有茎の腸扶三角式である。全長11.6cmである。鎌身は、鋒からわずかにふくらみながら逆刺に至る。逆刺はやや丸みを帯びている。鎌身と茎の間にはわずかに段がみられる。茎長4.2cmで、断面形は長方形を呈する。茎には木質が残るので、もともと矢柄が装着されていた可能性が高い。

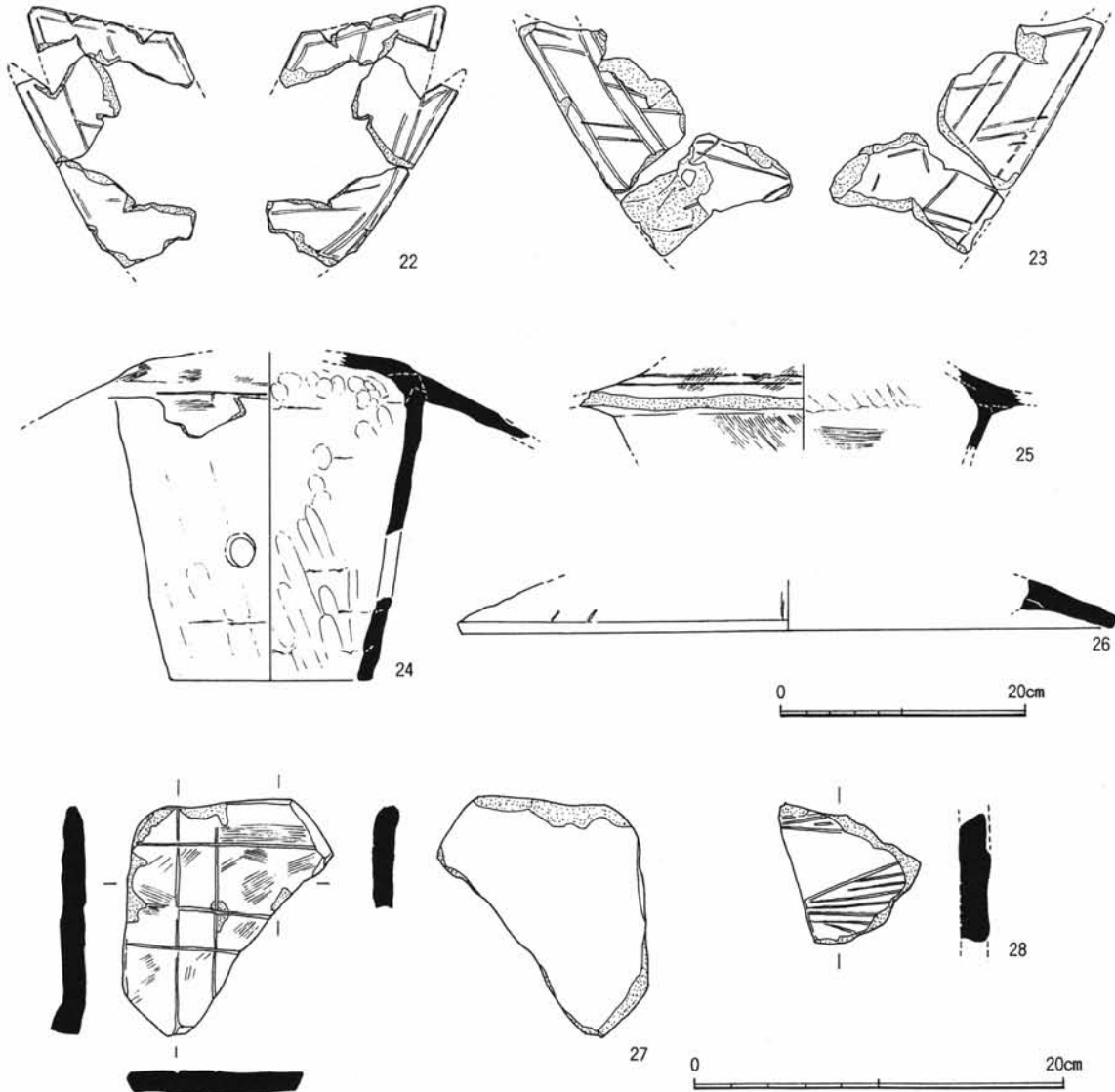
(3)埴輪(第105図14～第108図34) 調査の結果、埋葬施設S X153、周溝S D84、溝S D89から多数の埴輪片が出土した。埋葬施設S X153では、蓋形埴輪の立ち飾りや飾り板受部の破片を枕



第105図 内田山B 1号墳埋葬施設 S X153出土埴輪実測図

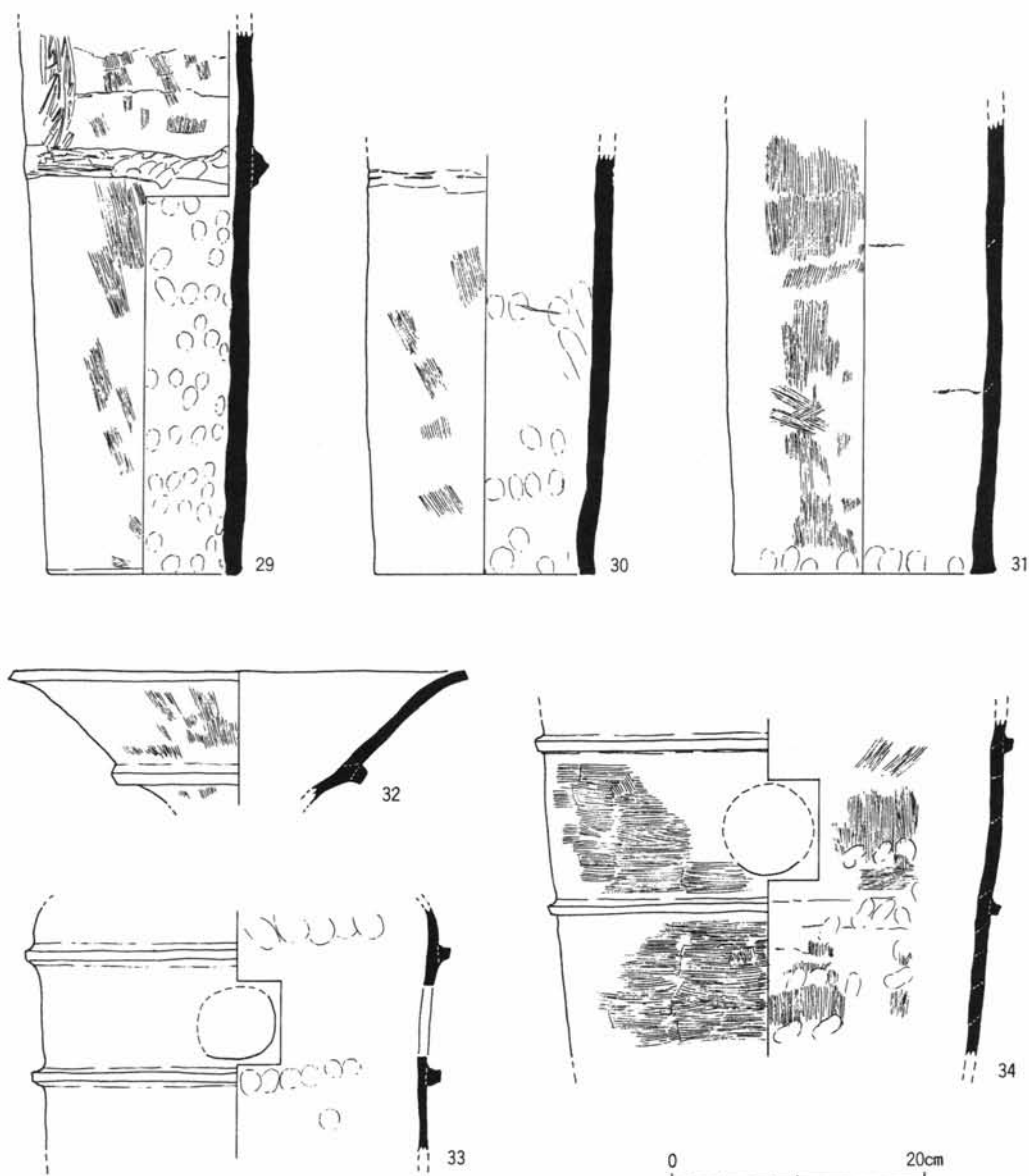


第106図 内田山B 1号墳東側周溝S D84出土埴輪実測図



第107図 内田山B 1号墳東側周溝S D84・89出土埴輪実測図

に転用していた(14~17)。これらはもともと同一個体と考えられ、枕として転用される際に意図的に折損されている可能性がある。胎土は直径1mm未満から3mm程度の砂粒、小礫を比較的含んでいる。色調は淡橙褐色である。焼成は良好である。器表面の遺存状態は比較的良好であるが、枕として利用されていた際に最上面に置かれていた14のみ磨滅が著しい。14~16は立ち飾り、17はその受部である。17の受部内面に遺存する「十」字形の剝離痕跡から、本資料が、「U」字形を呈した飾り板を直交させた4枚羽根の立ち飾りであったことが確認できる。飾り板の形態は、文様の描かれる飾り板とその内側・外側に1つずつの鱗が付加されたもので、飾り板の両面に線刻による文様がみられる。文様は、鱗が1条の線刻で、飾り板が2条の線刻で縁取られ、飾り板の内部は2条を一単位とする線刻による文様が描かれる。これは飾り板内部を横方向の線刻によって大きく3分割し、上段には縦方向の線刻を1単位、中段には同様の線刻を2単位分描く。下段は欠損するため、文様の有無は不明である。飾り板の厚さは1.0~1.7cmである。16には受部との接合部分が遺存する。17は直径23.2cm、残存高6.7cmで、受け口状を呈するが、軸受部に挿入



第108図 内田山B 1号墳東側周溝S D84出土埴輪実測図

されるべき筒部はほとんど遺存していない。受部と筒部は一体に製作されており、後から受部の閉塞を行っている。閉塞部分には逆「L」字状の不定形な隙間がみられるが、これは焼成に伴う粘土の収縮によって生じたひび割れと考えておきたい。受部への立ち飾りの接合には、受部の器表面に接合を容易にするためのヘラによる条線が10条前後刻まれる。また、受部外面に飾り板の一部が遺存する。ただ、このような特徴をもつ立ち飾りとセットになるべき笠部については、全く不明である。

周溝S D84からは蓋形埴輪(18~25)、円筒埴輪(34)、朝顔形円筒埴輪(32・33)、形象埴輪基台(29~30)などが出土した。このうち、18~22は同一個体と思われる蓋形埴輪の立ち飾りである。胎土は直径1mm未満から2mm程度の砂粒を含んでいる。色調は橙褐色ないし暗橙褐色である。焼成は良好である。器表面の遺存状態は比較的良好である。飾り板の受部である(21)の状況から、埋葬施設S X153出土資料と同様、4枚羽根の立ち飾りと考えられる。飾り板の形態は、文様の

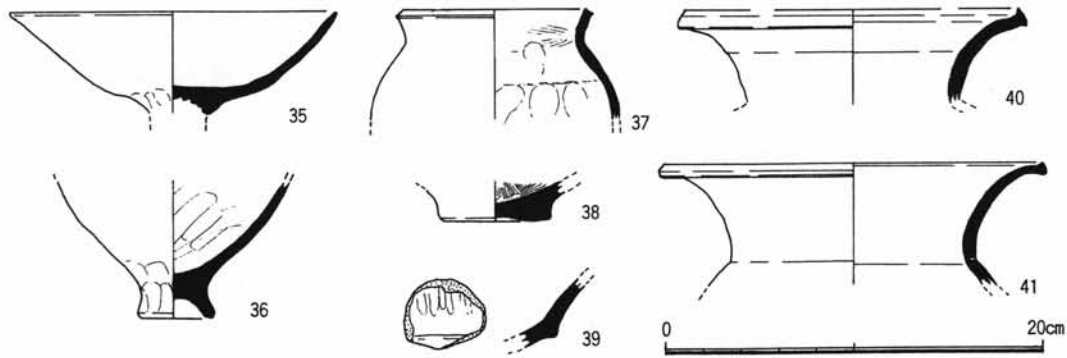


第109図 内田山B 1号墳出土傘蓋形埴輪立ち飾り拓影(S=1/4)

描かれる飾り板とその内側・外側に1つずつの鱗が付加されたものである。飾り板の両面に線刻による文様がみられる。文様は、14~16と大きく異なり、鱗、飾り板ともに1条の線刻で縁取られる。飾り板の内部はまず、飾り板の主軸に1条の線刻を施して左右に分割し、2条の直線を1単位とする線刻を左右それぞれに3単位ずつ施した文様が描かれる。飾り板の厚さは1.1~1.7cm

である。19は、4枚の飾り板が「十」字形に接合される接合部が比較的良好な状態で遺存していた。ほぼ直線的な接合面にほぞ状の突起がみられる。ほぞは高さ1.5cm、長さ3.8cmである。18・20にも同様のほぞ状のものが認められるが、19ほど明瞭はない。ほぞは飾り板の接合を目的としたものと考えられ、立ち飾りは4枚の飾り板を別個に製作した後に接合されたものと考えられる。ただし、18～20は互いに接合しない。一方、18・19には受部との接合部分が明瞭に遺存し、それは21の受部の断面形と全く一致する。ところで両者の大きさをくらべると、受部径が18.2cmであるのに対して、飾り板では接合部から受部までの長さが7.5～8.0cmで、仮に直交する飾り板の幅(1.2～1.7cm)を加えても若干短い。したがって、本資料では、接合の芯となるような部分が欠落している可能性が高い。21は直径18.2cm、器高30.9cmで、ほぼ全体の形状を知りうる資料である。受部と筒部は一体に製作されているが、17のように受部の閉塞は行っていない。受部内外面にナデ調整、口縁端部にヨコナデ調整を施す。筒部の内面はユビオサエを施し、部分的に接合痕が遺存する。筒部外面は上半部に縦方向のハケ調整を施すが、下半部は上から下に向かってケズリ調整を施す。受部への立ち飾りの接合には、受部の器表面に接合を容易にするためのヘラによる条線が10条前後刻まれる。22は、18～20と同一個体と思われる資料であるが、互いに接合しないため復原して図示している。23は、18～20・22とは別の文様を施した蓋形埴輪の立ち飾りである。胎土は砂粒を多く含み、色調は淡黄橙色ないし淡橙褐色を呈する。24は蓋形埴輪の笠部と基部の資料である。笠部先端と軸受部は欠損して不明である。笠部には線刻による笠の表現が施される。製作方法は、基部から笠部上半にかけて連続的に製作した後、笠部下半を付加するものと考えられる。底径16.0cm、残存最大径42.6cm、残存高26.5cmである。25は笠部と基部の接合部付近の資料である。同一個体と思われる破片が比較的多数出土した。笠部側に基部との接合のために、やや大きめの方形ないし長方形の刺突(一辺0.5～1.0cm程度)が連続的にみられる。このことから、25は笠部と基部を別々に製作した後に合体させるものと考えられる。笠部には線刻による2条の沈線が施される。残存最大径36.4cm、残存高6.6cmである。

34は円筒埴輪の一部である。内田山B1号墳では多数の埴輪片が出土し、その大部分は円筒埴輪の破片であるが、接合できる資料が少なく、これまでの調査と合わせても、全容を知りうる資料は得られなかった。34は、円筒部が2条3段分が確認できる資料で、残存高26.7cm、最大径39.1cmである。突帯は台形状を呈し、ていねいなヨコナデ調整で仕上げられる。また、大半が欠損するものの、円形のスカシ穴をもつ。外面には断続的な横方向のハケ調整を施す。内面には縦方向のハケ調整とユビオサエ痕が確認できる。32・33は朝顔形円筒埴輪である。32は口縁部の資料で、外面に縦方向のハケ調整がみられる。口径35.8cm、残存高10.3cmである。33は上端部がゆるやかに内湾することから、朝顔形円筒埴輪の肩部と判断した。肩部の一部と円筒部の2条2段分が確認できる資料で、残存高19.3cm、最大径34.0cmである。磨滅が著しく、調整は不明であるが、内面にユビオサエ痕が残る。スカシ穴は円形である。29～31は、底径が33や34などの円筒埴輪などに比べて著しく小さいことから、形象埴輪の基部と考えられる。いずれも外面に縦方向のハケ調整を施し、内面にユビオサエ痕が残る。29の上部は、円筒部に何らかの部材を接合して



第110図 内田山B 1号墳・内田山遺跡出土土器実測図

いた痕跡が明瞭に残る。残念ながら、これに接合する破片はみられなかったが、盾形埴輪の可能性が高い。底径14.9cm、残存高42.8cmである。30は29に類似した資料で、同一個体の可能性もあるが、接合しなかったので別々に報告する。底径17.4cm、残存高33.2cmである。31は29・30よりもやや大きく、上部にも接合部がみられない。29・30とは違う形式の形象埴輪の基部と考えられる。底径20.4cm、残存高36.0cmである。

周溝S D89からは蓋形埴輪(26)、盾形埴輪(28)、不明形象埴輪(27)などが出土した。26は蓋形埴輪の笠部の先端部である。基部との接合部で剥離したものと考えられる。復原径53.4cmである。28は盾形埴輪の破片で、線刻による鋸歯文がみられる。しかし、盾形埴輪の破片はこれ以外に確認できず、全容は全く不明である。27は格子状の線刻が施された板状の破片であるが、どのような形象埴輪か不明である。靱形埴輪あるいは家形埴輪の一部であろうか。

(4)土器(第110図35~41) 調査の結果、弥生土器・土師器・須恵器が出土した。35は第4主体部S X154の枕に転用されていた土師器高杯の杯部である。口径17.2cm、残存高5.3cmである。内外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。胎土は径1~4mmの砂粒、小礫を多く含む。色調は淡橙褐色である。杯部は脚部との結合部で剥離している。36は竪穴式住居跡S B155出土の弥生土器鉢である。小さな脚台部を有するが、口縁端部を欠損する。脚台径3.8cm、残存高7.3cmである。胎土は比較的精良で、色調は橙褐色を呈する。体部は内外面ともていねいなナデ調整で仕上げられている。37は溝S D161出土の壺または甕である。口径19.6cm、残存高5.7cmである。胎土は密で、色調は暗褐色である。内外面ともナデ調整で仕上げる。口縁部内面にナデ調整以前のハケ調整がわずかに認められる。外面にはススが付着する。38は弥生土器または土師器の壺の底部である。内田山B 1号墳の周溝S D84から出土した。墳丘の削平などに伴って周溝内に再堆積したものであろう。内面にハケ調整を施す。底径6.0cm、残存高2.1cmである。39はS B155から出土した高杯の破片である。小片のため法量は不明である。調整は磨滅気味のため全体に不明瞭であるが、外面にはミガキ調整と思われる痕跡がある。また、わずかに赤色顔料が付着する。40・41は須恵器壺あるいは甕の口縁部の破片である。40は口径17.5cm、残存高4.9cm、41は口径20.0cm、残存高6.5cmである。どちらも口縁端部をつまみ上げた形状を呈する。成形は回転ナデ調整による。40は周溝S D84、41は溝S D156から出土した。

6. まとめ

内田山B 1号墳と内田山遺跡の調査は、平成11年度から6か年、5回にわたって調査を実施した。その結果、内田山B 1号墳については、墳丘・埋葬施設・埴輪などについて明らかにすることができた。また、内田山遺跡についても、弥生時代や奈良時代の遺構・遺物が検出された。

以下では、内田山B 1号墳と内田山遺跡について、これまでの5次にわたる調査を通じた明らかになった点について若干の検討を加えてまとめとしたい。

(1)内田山B 1号墳

①墳丘 内田山B 1号墳は、大きく削平を受けていたものの、東西墳丘長が17.5mの小規模な方墳であることが明らかになった。埋葬施設は4基検出されたが、検出位置や規模などから、埋葬施設S X 153が内田山B 1号墳築造の契機となった被葬者の埋葬施設と考えられる。ただ、埋葬施設S X 153の位置は墳丘の中央ではなく、約1.8m東へ寄っている。一方、南北方向の墳丘長は、埋葬施設S X 153の中心から北側の墳丘裾まで7.5mあり、これを南側に折り返すと、南北の墳丘長は15mとなり、やや東西に長い長方形墳であった可能性が高い。

周溝は、削平などから全容は明らかでないが、墳丘の周囲を全周していたと考えられる。周溝底の標高は、東側周溝が北側・西側周溝くらべて著しく高い。これは内田山B 1号墳が丘陵鞍部に築造されたために丘陵高位側である東側の周溝底が高くなったものと考えられる。墳丘の高さは墳頂部の削平を考慮すると、埋葬施設の検出面よりも50cmから1mほど高かったと考えられ、S D 89の周溝底からの高さは2mから2.5mほどに復原できる。平野側からみると、丘陵の高さもあって、より高く感じることもできたと思われる。

②埋葬施設 検出された4基の埋葬施設の構造はそれぞれに異なる。埋葬施設S X 153やS X 154では蓋形埴輪や土師器高杯を枕に転用したり、木棺内に礫床を設けたりしており、日本海側の北近畿地方や山陰地方にみられる特徴と同じである。特に中心的な埋葬施設である埋葬施設S X 153のような木棺内に礫床を有するものは、近隣では、同じ木津町内の西山塚古墳や上人ヶ平16号墳、城陽市下大谷2号墳などがある。もう一つの特徴である、枕の利用についても、西山塚古墳の第1主体部で枕石が検出されている。礫床の設置とともに、枕の利用という点を重視するならば、埋葬施設S X 153の構造は、北近畿地方の影響を強く受けていたものと考えられる。このように考えることができるならば、埋葬施設S X 153の被葬者はこうした地方に出自をもつ可能性も生じてくる。この点については、考古学的にはこれ以上の追求は困難であるが、『古事記』や『日本書紀』によると、大和と丹波・丹後方面との交渉が伝説的に語られており、こうした伝承を内田山B 1号墳の背景に考えることもできる。なお、墳丘上に4基もの埋葬施設を設ける点はあまりみられず、内田山B 1号墳の特徴といえる。

③副葬品 内田山B 1号墳では、副葬品の内容が必ずしも芳しくない点も注意される。中心的な埋葬施設と考えられる埋葬施設S X 153の副葬品はわずかに刀子1点である。埋葬施設S X 154でも面径14cmの鏡を副葬するとはいえ、これのみである。埴輪棺S X 01では滑石製の玉類が約180点出土しており、量的な点からは埴輪棺S X 01の副葬品がもっとも豪華ともいえる。内田山

B 1号墳の副葬品でもっとも注目されるのが埋葬施設 S X154から出土した六獣形鏡である。本資料は獣形が著しくくずれて鳥頭化しており、獣形鏡のなかでも比較的新しい段階に位置づけられる。また、鏡の同范例も確認できない。鏡の詳細な検討は十分ではないものの、面径が約13.9cmと、小型鏡というよりは中型鏡(その中では最小の部類となるが)に含めることができる資料である。鏡の大きさと古墳の規模に相関関係があるとするならば、古墳の規模にくらべると著しく優良な鏡を保有していたことになる^(注13)。しかも、この鏡が中心的な埋葬施設ではなく、追葬もしくは従属的な埋葬施設から出土した点は注目され、その点も含めてこの鏡の保有者の立場についてはさまざまな角度からの検討が必要である。このように内田山B 1号墳における埋葬施設と副葬品の対応関係はやや違和感を覚えるが、その背景にはそれぞれの被葬者が生前にはたした役割が強く反映されていることが読みとれる。ただ、その具体的な役割については今回の調査成果からは十分に迫ることはできなかった。

④埴輪 周溝内から大量の埴輪片が出土したことから、墳丘上には埴輪列が存在したと考えられる。出土した埴輪のうち、円筒埴輪については、その全容をうかがい知ることのできるような資料はほとんどない。しかし、外面に横方向の断続的なハケ調整を施すものが主体的である。突帯は突出度の高い断面台形状を呈し、スカシ穴は円形のものに限られるようである。また、黒斑がみられる。以上のような特徴から、内田山B 1号墳出土の円筒埴輪は川西編年のⅡ期、瓦谷古墳群出土埴輪の第4群・第5群に相当すると考えられる^(注14)。

また、今回出土した埴輪で注目されるのが蓋形埴輪である。蓋形埴輪は、笠部・基部と立ち飾り部からなるが、これまでの調査で出土した資料のうち、笠部・基部の資料は遺存状態もそれほど良好とはいえない。これに対して立ち飾りは比較的良好な資料が出土した。蓋形埴輪の編年的な研究は、おもに全体の形状や笠部の文様などを対象として行われている^(注16)。しかし、立ち飾りの形態・文様の変遷についても型式学的に検討していくことが可能である^(注17)。今回の内田山B 1号墳出土資料に加えて、近年各地の古墳からも蓋形埴輪の良好な資料が出土しつつあり、立ち飾りの形態・文様の変遷からみた蓋形埴輪の編年的研究が可能となりつつある。まず、埋葬施設 S X153の枕に転用されていた蓋形埴輪の立ち飾りと類似したものが、奈良県栗山古墳や岡山県金蔵山古墳などで出土している^(注18)。また周溝から出土した蓋形埴輪の立ち飾りと類似したものが、奈良県乙女山古墳などから出土している^(注20)。前者は古墳時代前期末から中期初頭に、後者は中期前半に位置づけられている。これら蓋形埴輪の変遷については別稿を用意したい。

最後に、内田山B 1号墳における埴輪の配置について若干述べておきたい。既述のように、埴輪は、墳丘の削平にともなう転落、廃棄によって堆積したものと考えられ、墳丘上の本来の位置を復原することは困難な状況であった。しかし、蓋形埴輪は、各周溝ごとに1点ごとに別個体の出土が確認でき(西側周溝 S D89からは26、北側周溝 S D84からは24、東側周溝 S D84からは18~22・25)、また、南側についても第4次調査で丘陵斜面から蓋形埴輪の笠部の破片が出土している。このことから、少なくとも古墳の4辺のいずれにも蓋形埴輪が樹立されていた可能性が高い。一方、他の器種については、形象埴輪の出土が東側周溝や西側周溝に多いことから、墳丘の

東辺と西辺にやや集中して樹立されていた可能性がある。円筒埴輪や朝顔形埴輪の樹立位置の復原は出土資料が細片化しているため困難であった。以上、断片的な資料からではあるが、内田山B1号墳の埴輪の配置状況についての復原を試みた。

⑤小結 以上、墳丘、埋葬施設、埴輪について検討を加えた。出土した六獣形鏡や円筒埴輪、蓋形埴輪などの特徴から、内田山B1号墳は、古墳時代中期前葉に築造されたものと考えられる。また、埋葬施設S X153・154の構造から、日本海側地域の埋葬施設の特徴が強くみられることは、被葬者がこれらの地域との間に深いつながりがあったことを示唆しており注目される。同時に面径14cmの鏡を、一辺18m程度の小規模な方墳の被葬者が所有していたことについても、今後の検討課題である。

(2)内田山遺跡

5次にわたる調査の結果、内田山遺跡の概要についても明らかにすることができた。内田山B1号墳の下層からは、第5次調査で弥生時代後期の竪穴式住居跡と、同時期と推定される掘立柱建物跡を検出した。また、第3次調査でも丘陵斜面から弥生時代後期の土器溜まりを検出した。したがって、内田山遺跡が弥生時代後期の集落遺跡であることが確実視されるに至った。その時期は、筆者の南山城地域における弥生時代後期の土器編年の第3段階から第4段階にかけての時期と考えられる^(註1)。

このほかに、奈良時代の遺物も出土しており、当該期の遺構の広がりも考えられる。

(筒井崇史)

- 注1 ①小山雅人「木津地区所在遺跡昭和59年度発掘調査概要 (3)上人ヶ平遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
 ②戸原和人「木津地区所在遺跡昭和61年度発掘調査概要 (2)上人ヶ平遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第26冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
 ③小池寛「木津地区所在遺跡昭和62年度発掘調査概要 (1)上人ヶ平遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第32冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注2 石井清司・伊賀高弘ほか『上人ヶ平遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第15冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注3 上人ヶ平埴輪窯跡群3基のうち2基は平成5年度に調査を実施した。
 石井清司「上人ヶ平埴輪窯第2次」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注4 ①筒井崇史「木津地区所在遺跡平成11年度発掘調査概要 (2)内田山遺跡・内田山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第95冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
 ②筒井崇史・山内基樹「木津地区所在遺跡平成12年度発掘調査概要 (2)内田山遺跡・内田山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第101冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
 ③筒井崇史「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成14年度発掘調査概要 (3)内田山遺跡・内田山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第109冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
 ④筒井崇史「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成15年度発掘調査概要 内田山遺跡・内田

- 山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第113冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005
- 注5 調査参加者 大谷博則・岡野奈知子・田中陽子・中津梓・永野宏樹・野上由香・藤野好博・山田三喜子・鷺田紀子
- 注6 奈良時代の土器の器種名については、奈良文化財研究所の分類に準拠する。
奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』Ⅶ(『奈良国立文化財研究所学報』第26冊) 奈良国立文化財研究所) 1976、『平城宮発掘調査報告』X I(『奈良国立文化財研究所学報』第40冊) 奈良国立文化財研究所) 1981などを参照。
- 注7 蓋形埴輪の部位名称については、原則として松木武彦「蓋形埴輪の変遷と画期」(『鳥居前古墳—総括編—』大阪大学文学部考古学研究室 1990) 71頁 の部分名称図による。
- 注8 この種の小規模な方墳を、筆者は「小型方形墳」の名称を与えている。小型方形墳については、拙稿を参照されたい(筒井崇史「小型方形墳の再検討」(『文化財学論集』文化財学論集刊行会) 1994)。
- 注9 石崎善久「京都府下における礫床をもつ木棺について」(『太邇波考古学論集』両丹考古学研究会) 1997、岩本崇「棺内礫敷をもつ組合式木棺」(『大手前大学史学研究所紀要 オープン・リサーチ・センター報告』第3号 大手前大学史学研究所) 2003
- 注10 伊賀高弘「木津地区所在遺跡平成4年度発掘調査概要 (1)西山塚古墳」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注11 注2文献参照
- 注12 近藤義行ほか「下大谷古墳群」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第2集 城陽市教育委員会) 1974
- 注13 大阪大学教授福永伸哉氏にご指摘いただいた。
- 注14 川西幸幸「円筒埴輪総論」(『古墳時代政治史序説』塙書房) 1988
- 注15 筒井崇史「瓦谷古墳群出土の円筒埴輪」(『瓦谷古墳群 京都府遺跡調査報告書』第23冊) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 注16 高橋克壽「器財埴輪の編年と古墳祭祀」(『史林』第71巻第2号 史学研究会) 1988、田中秀和「畿内における蓋形埴輪の検討」(『ヒストリア』第118号 大阪歴史学会) 1988、注7文献および松木武彦「蓋形埴輪の型式と範型」(『究班』埋蔵文化財研究会) 1992、同「吉備の蓋形埴輪」(『古代吉備』第16集 古代吉備研究会) 1994
- 注17 伊賀高弘「上人ヶ平古墳群の蓋形埴輪」(『京都府埋蔵文化財情報』第32号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989、櫻井久之「長原40号墳の形象埴輪」(『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ (財)大阪市文化財協会) 1991
- 注18 奈良県広陵町教育委員会編『出島状遺構 巢山古墳 調査概報』(学生社) 2005
- 注19 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』(『倉敷考古館研究報告』第1冊 倉敷考古館) 1959
- 注20 河上邦彦・木下亘ほか『史跡 乙女山古墳』(『河合町文化財調査報告』第2集 河合町教育委員会) 1988
- 注21 筒井崇史「南山城地域における弥生時代後期の土器編年」(『木津城山遺跡 京都府遺跡調査報告書』第32冊) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

版 圖



(2)上安久城跡と田辺城下町(東から)



(1)上安久城跡全景(東から)

図版第2 上安久城跡



(1)上安久城跡A地点遠景(北から)



(2)A地点曲輪跡1・4調査前風景
(北から)



(3)A地点曲輪跡4調査前風景
(南東から)

(1) A地点曲輪跡2・3 試掘調査
風景(北西から)



(2) A地点曲輪跡4 調査風景
(南西から)



(3) A地点曲輪跡2 斜面調査風景
(北西から)



図版第4 上安久城跡



(1) A地点曲輪跡3から曲輪跡1・2を望む(南から)



(2) A地点曲輪跡2調査状況(北から)



(3) A地点曲輪跡2土層堆積状況(東から)



(1)A地点曲輪跡1トレンチ調査
状況(北から)



(2)A地点曲輪跡1土層堆積状況
(西から)



(3)A地点曲輪跡1土層堆積状況
(南から)



(1) B地点掘削作業風景(北から)



(2) B地点石組み遺構検出作業風景
(北から)



(3) B地点遺構実測風景(北から)



(1) B地点石組み遺構検出状況
(西から)



(2) B地点石組み遺構検出状況
(南から)



(3) B地点石組み遺構検出状況
(北西から)



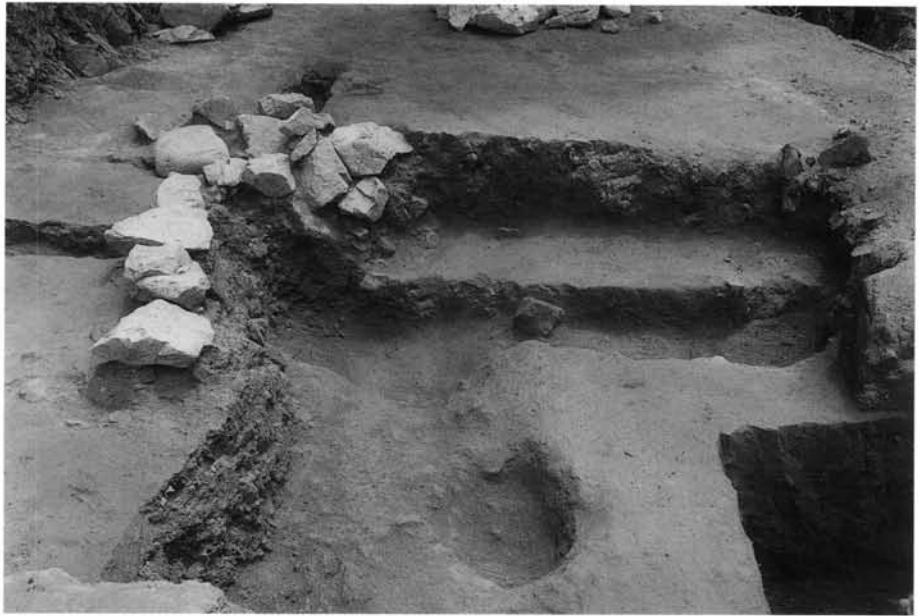
(1) B地点石組み遺構・円礫群
検出状況(西から)



(2) B地点石組み遺構・円礫群
検出状況(南西から)



(3) B地点石組み遺構・円礫群
検出状況(上が南)



(1) B地点石組み遺構・円礫群
除去後(北から)



(2) B地点石組み遺構・円礫群
除去後(南から)



(3) B地点石組み遺構・円礫群
除去後(西から)



(1) B地点石組み遺構・鉄磐
検出状況(上が北)



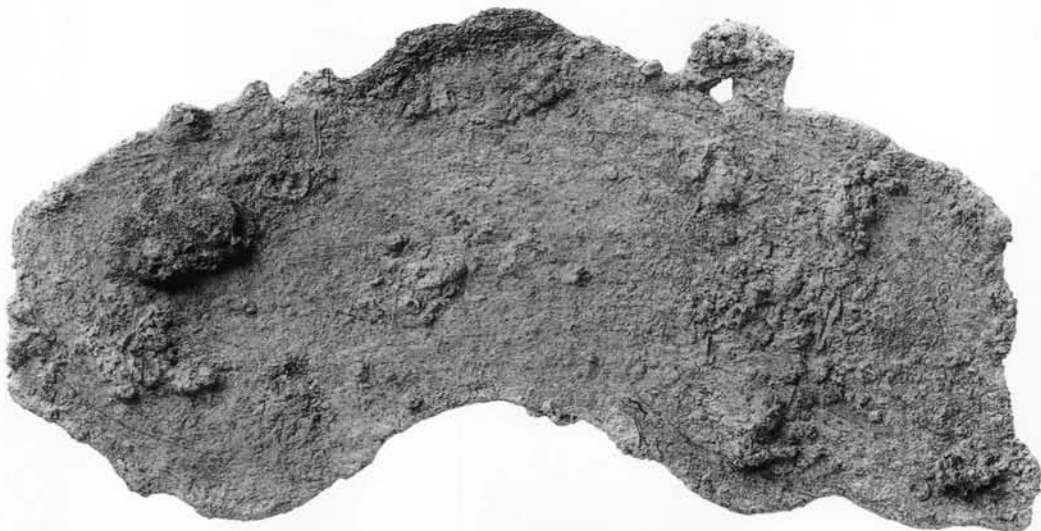
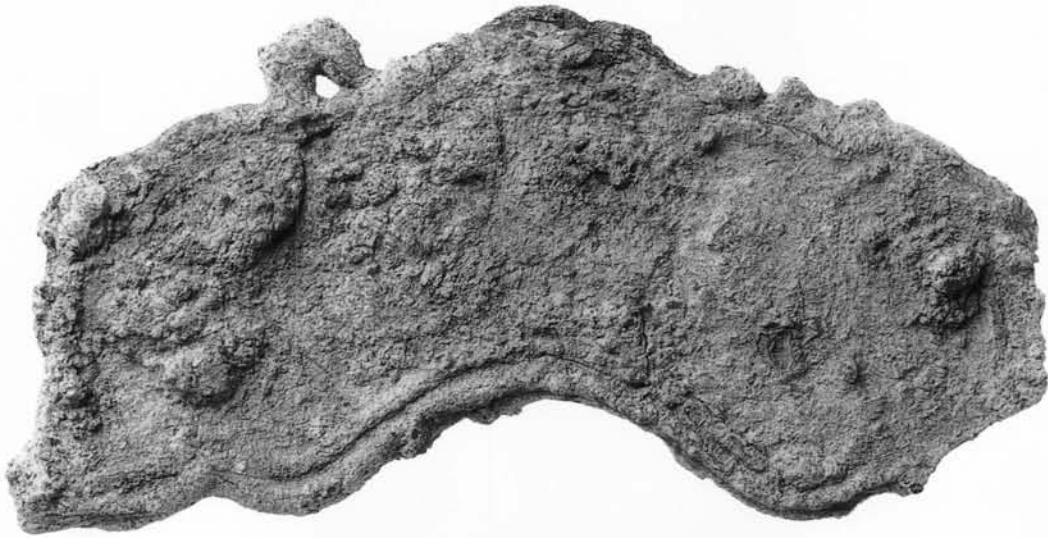
(2) B地点石組み遺構・不明金具
検出状況(左が北)



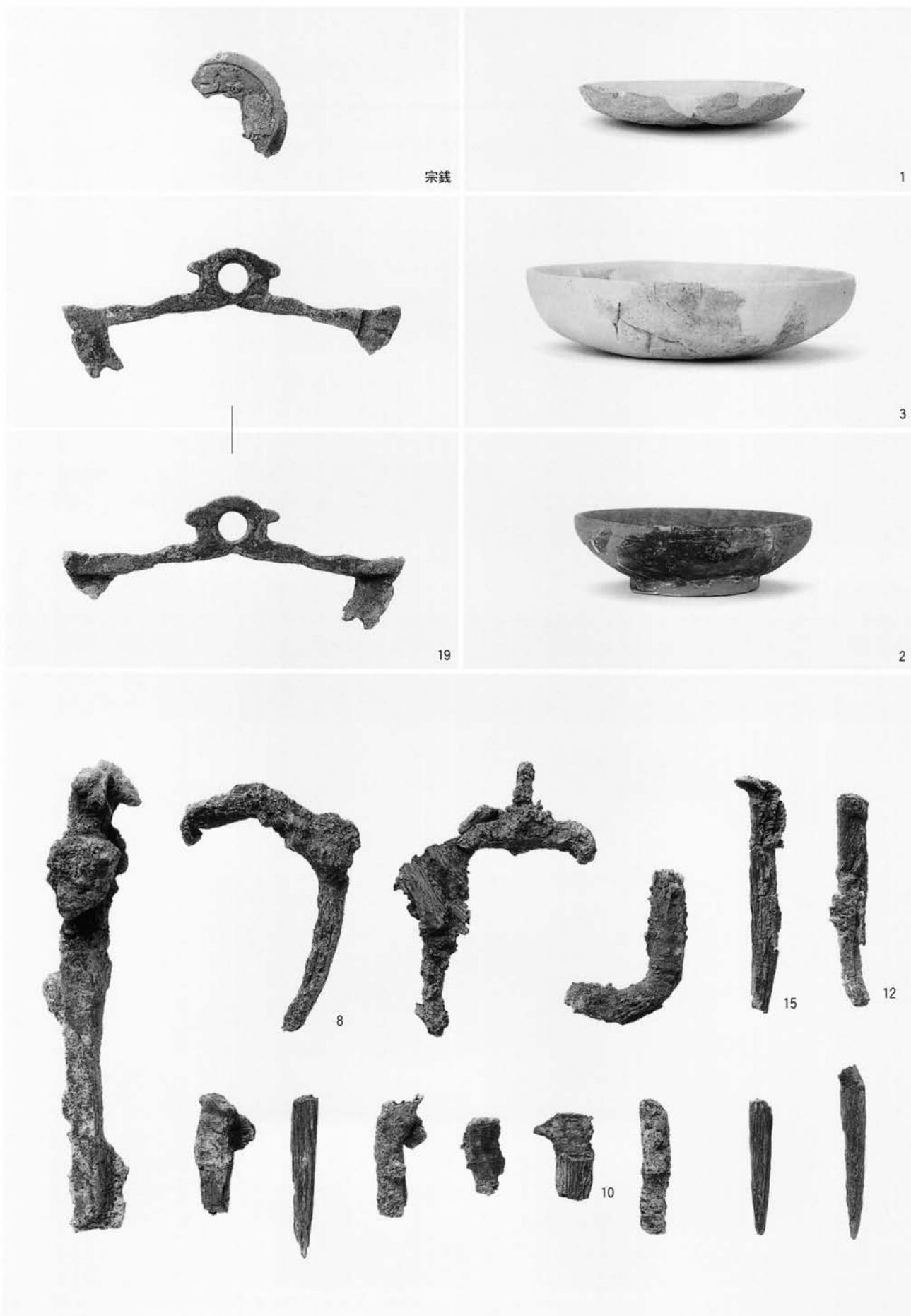
(3) B地点石組み遺構・瓦器碗と
鉄刀検出状況(上が北)



21



20



出土遺物(2)



(1)Aトレンチ全景(上が東)



(2)Eトレンチ全景(上が西)



(1)A トレンチ遠景(上が南)



(2)E トレンチ遠景(上が北)



(1) Aトレンチ近景(南から)



(2) 井戸 S E02断面(北から)



(3) 竪穴式住居跡 S H148(西から)



(1) 竪穴式住居跡 S H77 (西から)



(2) A トレンチ近景 (北から)



(3) 土坑 S K04 (東から)



(1)土坑S K117(西から)



(2)B・Cトレンチ調査前全景
(北から)



(3)Bトレンチ近景(南から)



(1)井戸 S E172近景



(2)井戸 S E172井戸側検出状況



(3)Cトレンチ近景(北から)



(1) Dトレンチ近景(北から)



(2) 井戸 S E 175断面(西から)



(3) 土坑 S K 392近景(北東から)



(1)土坑 S K392遺物出土状況
(東から)



(2)溝 S D218近景(北から)



(3)溝 S D218遺物出土状況
(南から)



(1)掘立柱建物跡 S B 210
(北西から)



(2)Eトレンチ調査前全景(南から)



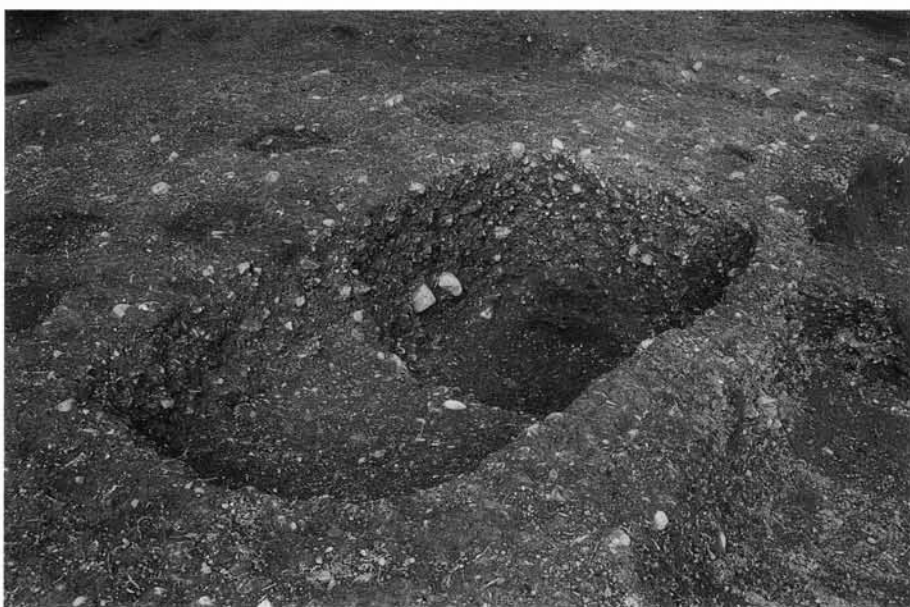
(3)Eトレンチ近景(北から)



(1) S X 231近景(南から)



(2)土坑 S K 272・273、S X 231近景
(北から)

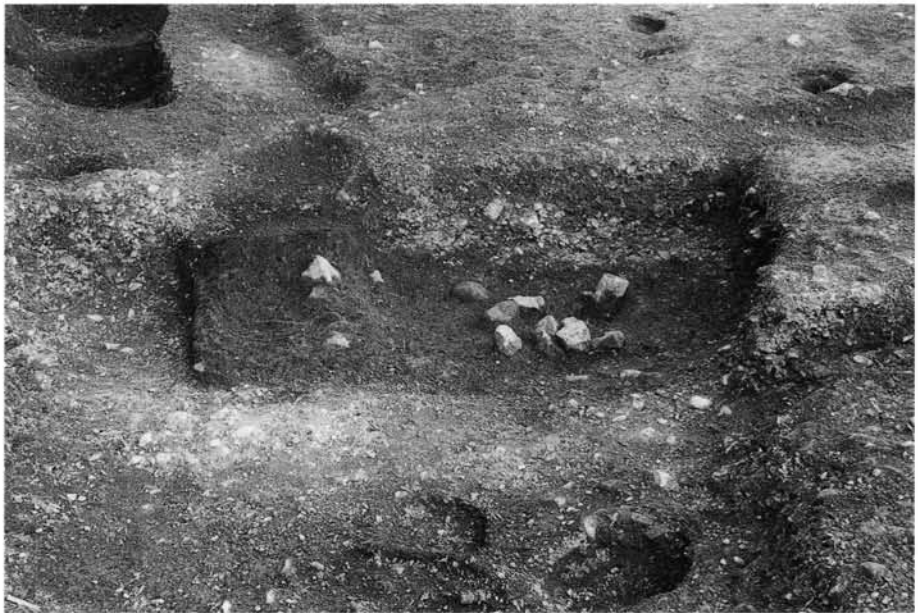


(3)土坑 S K 272近景(南東から)

(1)土坑 S K272遺物出土状況
(北から)



(2)土坑 S K273近景(南から)



(3)土坑 S K273磔検出状況
(西から)





(1) 溝 S D250 近景 (北西から)



(2) 溝 S D250 近景 (南東から)



(3) 溝 S D427 近景 (北から)



(1)土坑 S K359近景(南西から)



(2)土坑 S K359遺物出土状況
(南東から)



(3)Eトレンチ近景(南から)



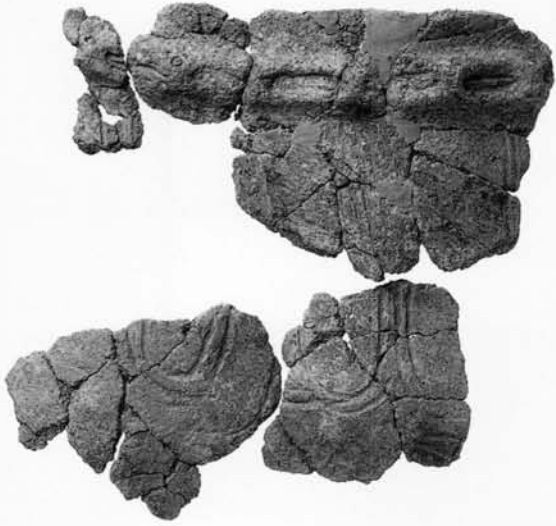
(1)溝 S D190遺物検出作業
(西から)



(2) S X231掘削風景(北から)



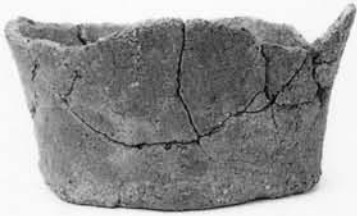
(3)現地説明会風景(南東から)



52



183



53



37



153



190



8



24



34





95



51



87



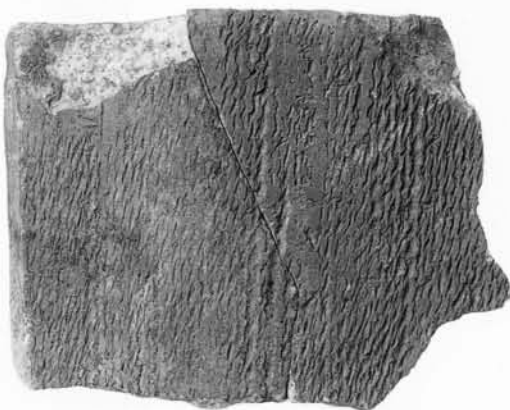
231



210



234



42



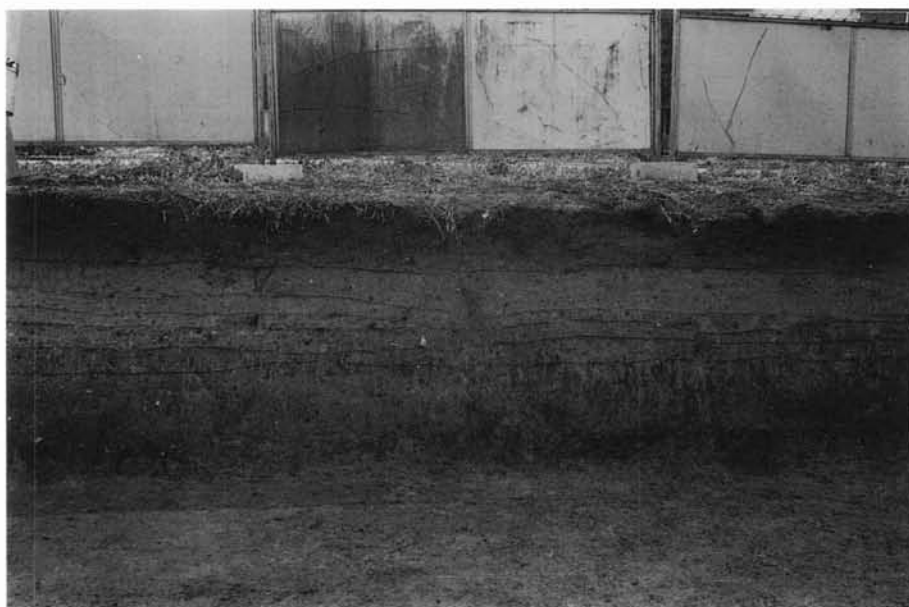
出土遺物(4)



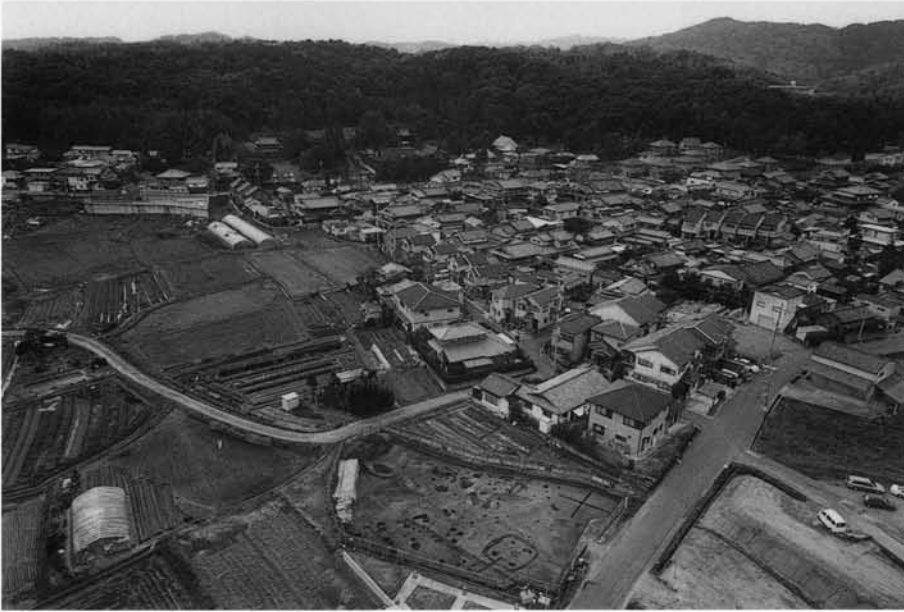
(1)調査前の状況(南から)



(2)調査前の状況(北から)



(3)西壁断面(部分)(東から)



(1)調査地遠景(上が西)



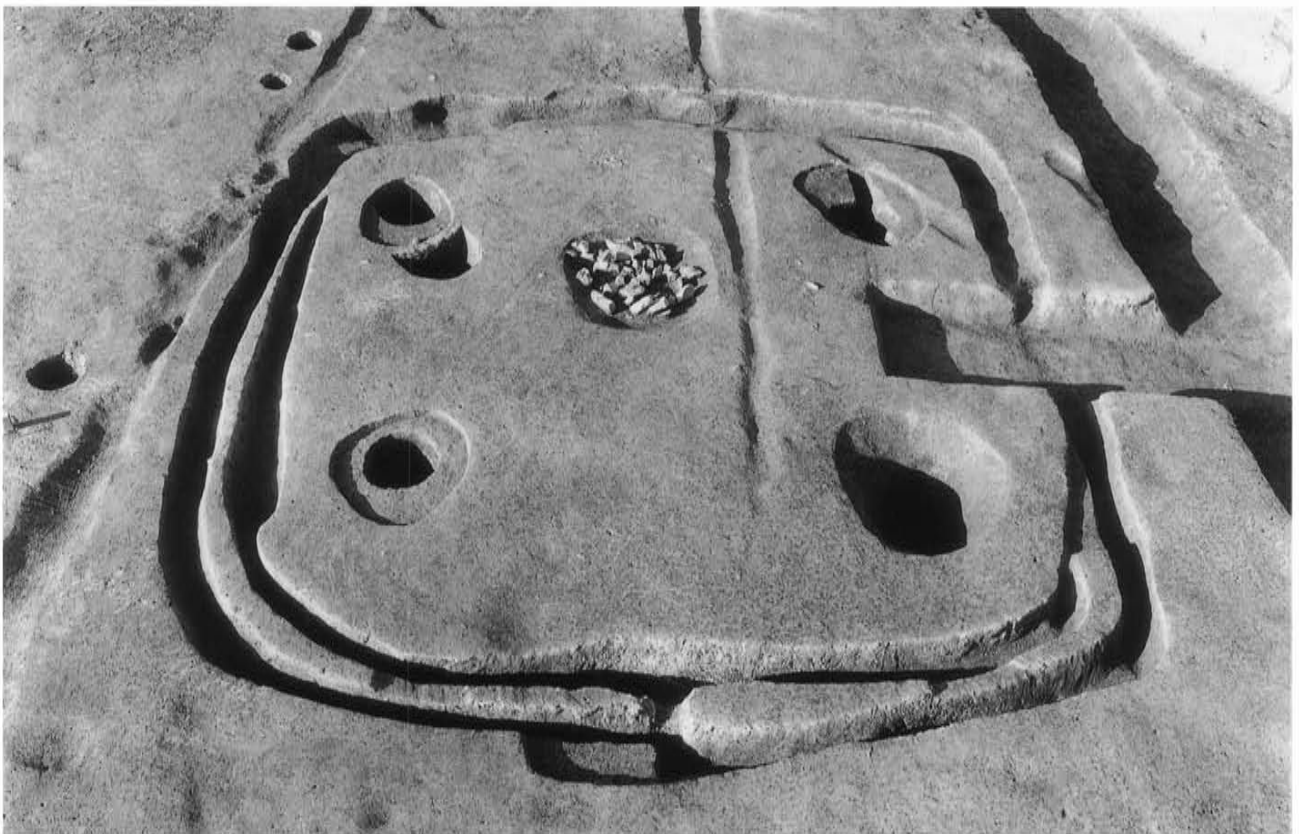
(2)調査地遠景(上が南)



(3)調査地の状況(真上から)



(1)北半部検出遺構の状況(南から)



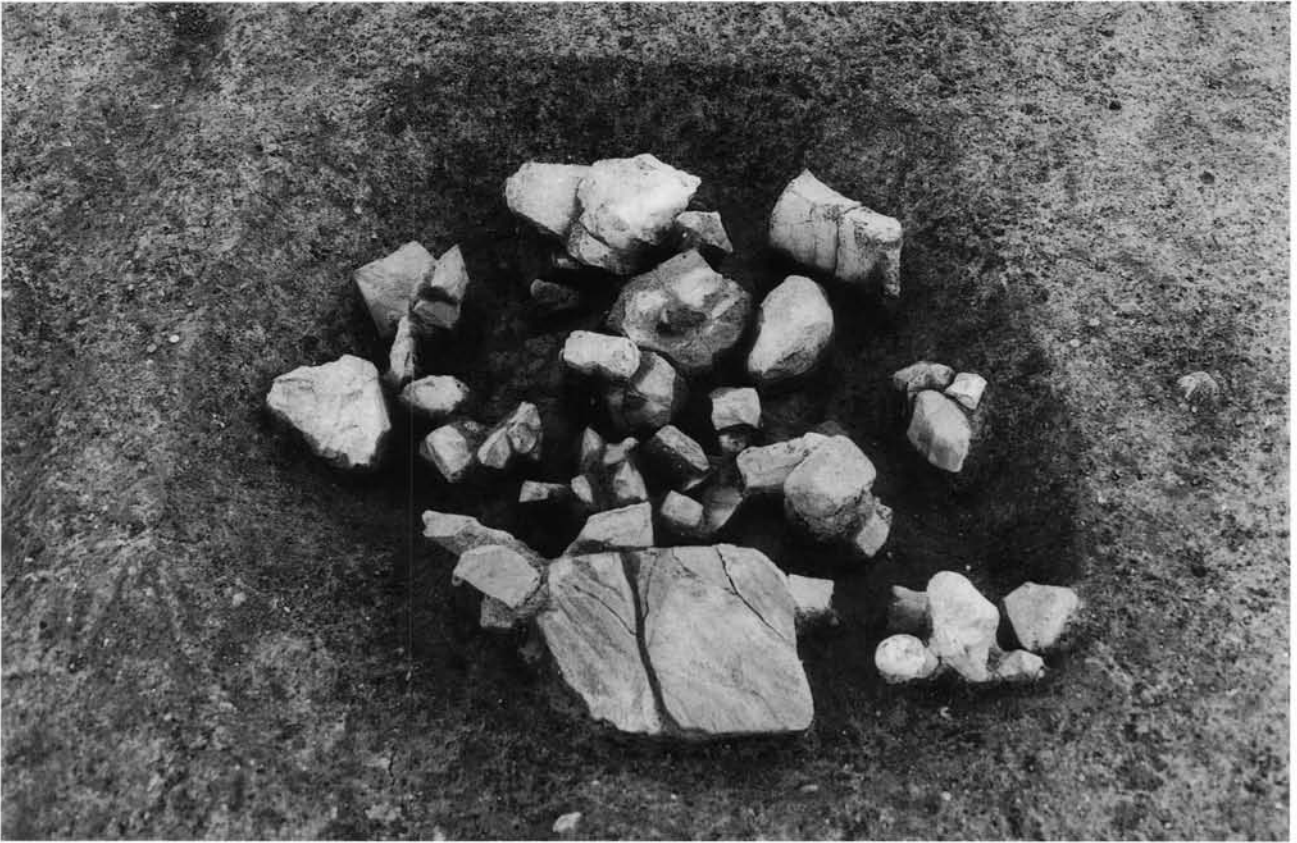
(2)竪穴式住居跡 S H68完掘状況(南から)



(1) 竪穴式住居跡 S H68 検出状況 (西から)



(2) 竪穴式住居跡 S H68 完掘状況 (南から)



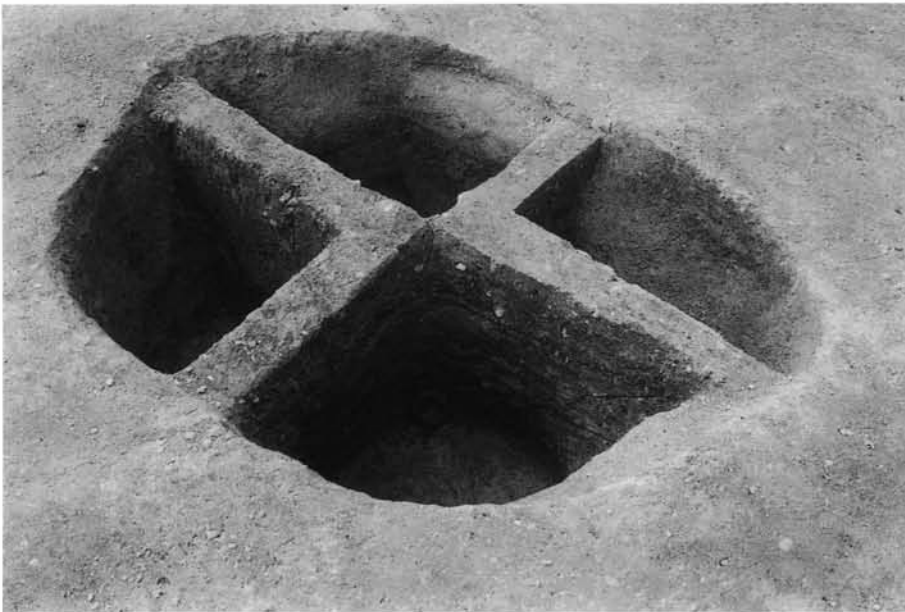
(1) 竪穴式住居跡 炉跡 礫出土状況 (北から)



(2) 土坑 S K17 北白川 C 式土器出土状況 (北から)



(1) 竪穴式住居跡 S H31



(2) 土坑 S K26 遺物出土状況
(北東から)



(3) 土坑 S K30 遺物出土状況
(南東から)



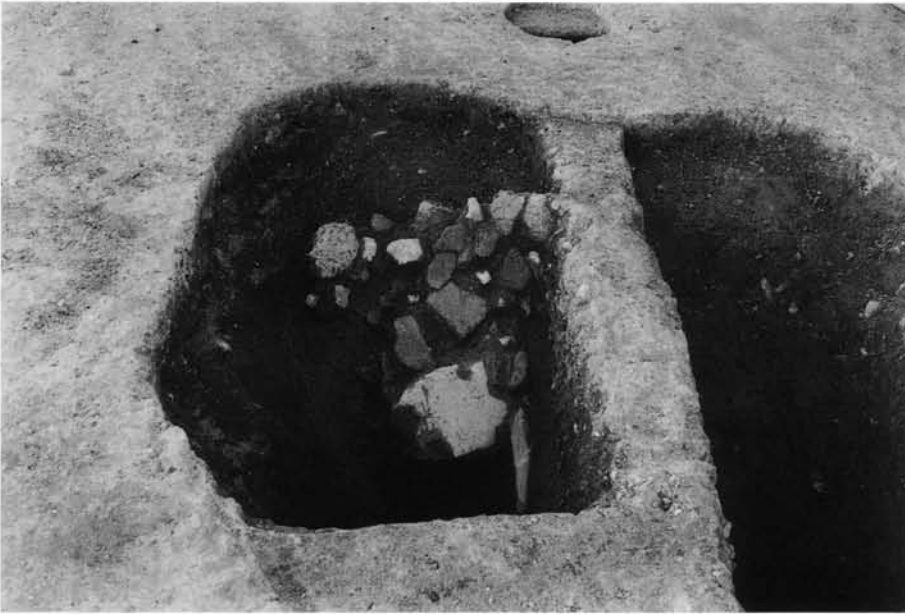
(1) 竪穴式住居跡 S H68 炉跡 炉床
(南から)



(2) 同上 断ち割り 状況 (北から)



(3) 現地説明会風景 (西から)



(1)土坑 S K17上面遺物出土状況
(北から)



(2)土坑 S K17下面遺物出土状況
(北から)



(3)土坑 S K17完掘状況(北から)



(1)土坑 S K 22遺物出土状況
(南から)



(2)土坑 S K 27完掘状況(南東から)



(3)土坑 S K 20焼土塊出土状況
(南東から)



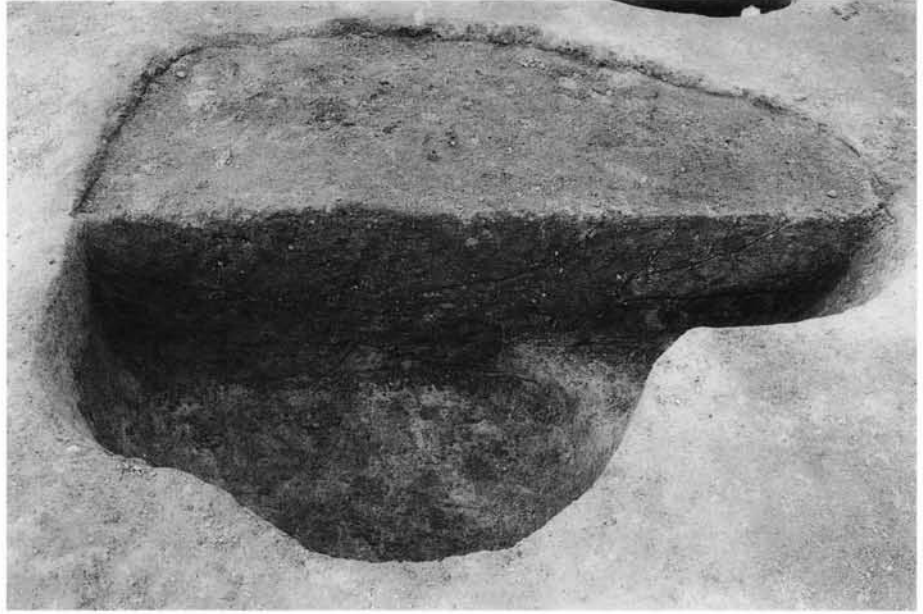
(1)土坑 S K70検出状況(南から)



(2)土坑 S K70半掘状況(北から)



(3)土坑 S K70完掘状況(東から)



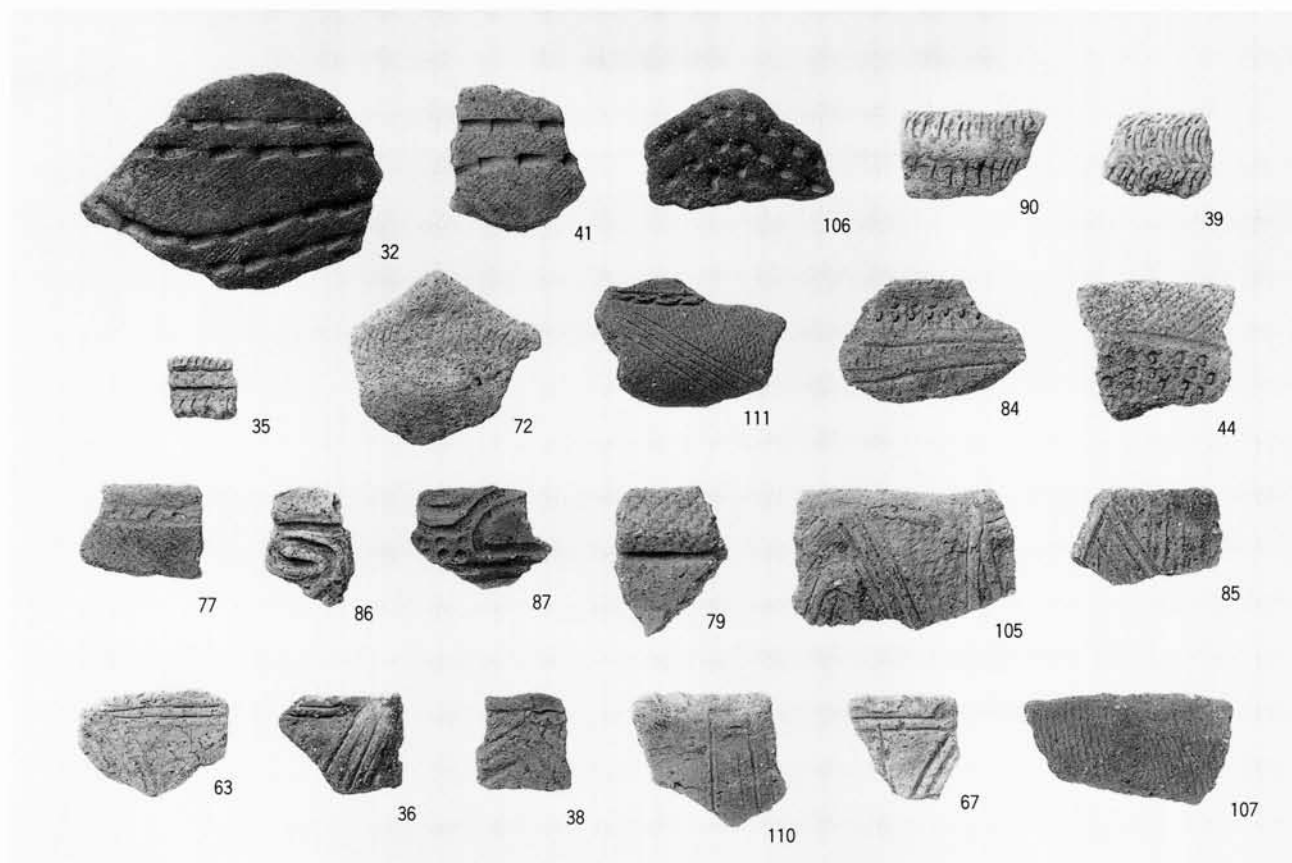
(1)土坑 S K63断面(南から)



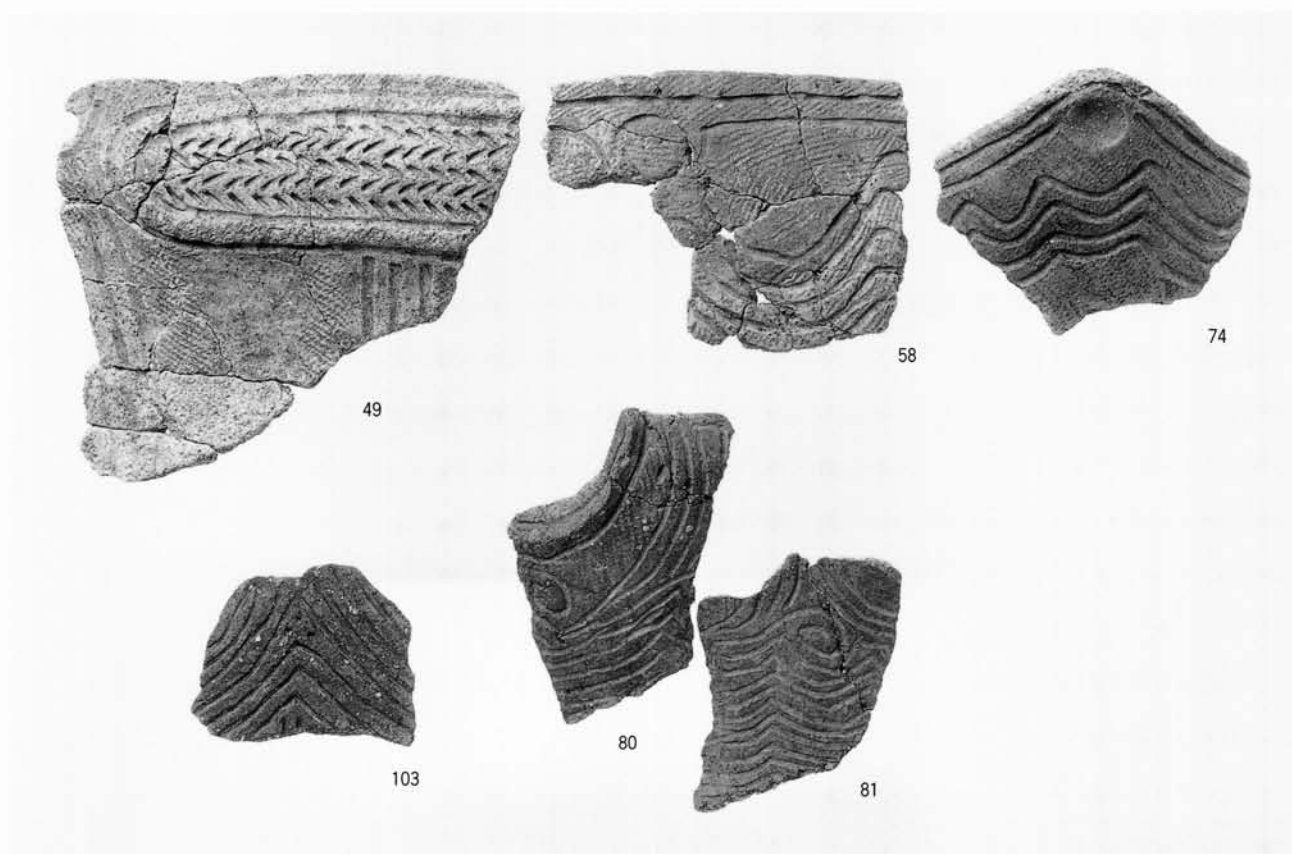
(2)土坑 S K22断面(南から)



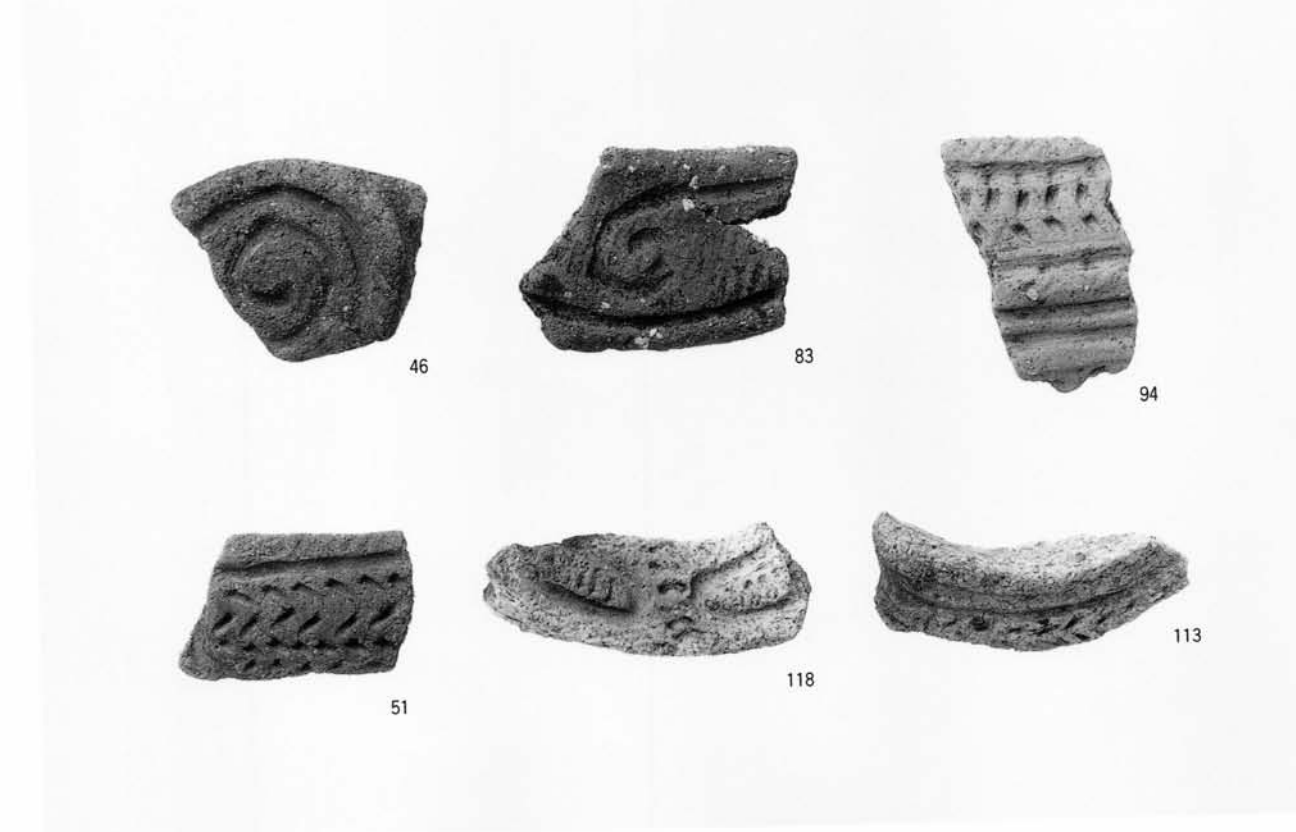
(3)溝跡 S D66掘削状況(南から)

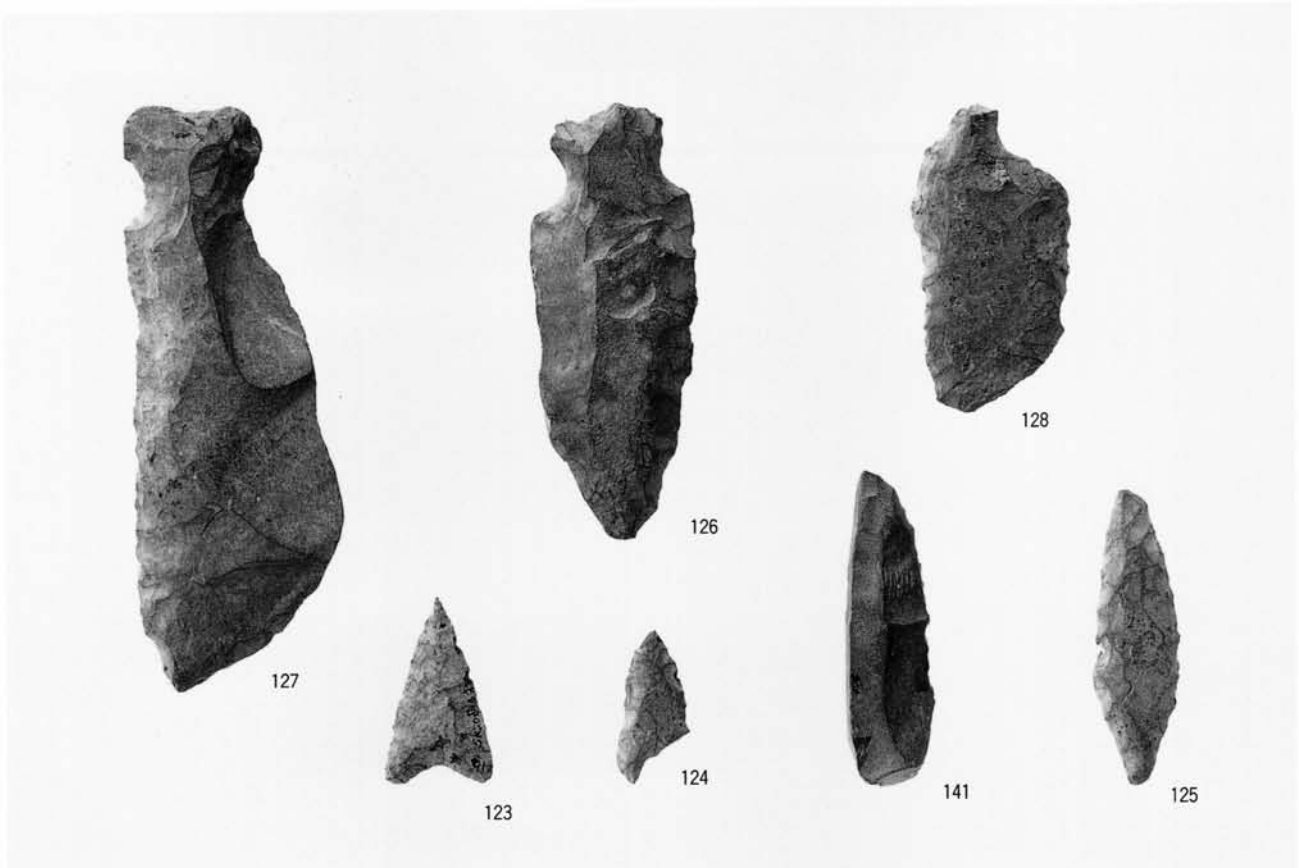


(1)出土土器(1)

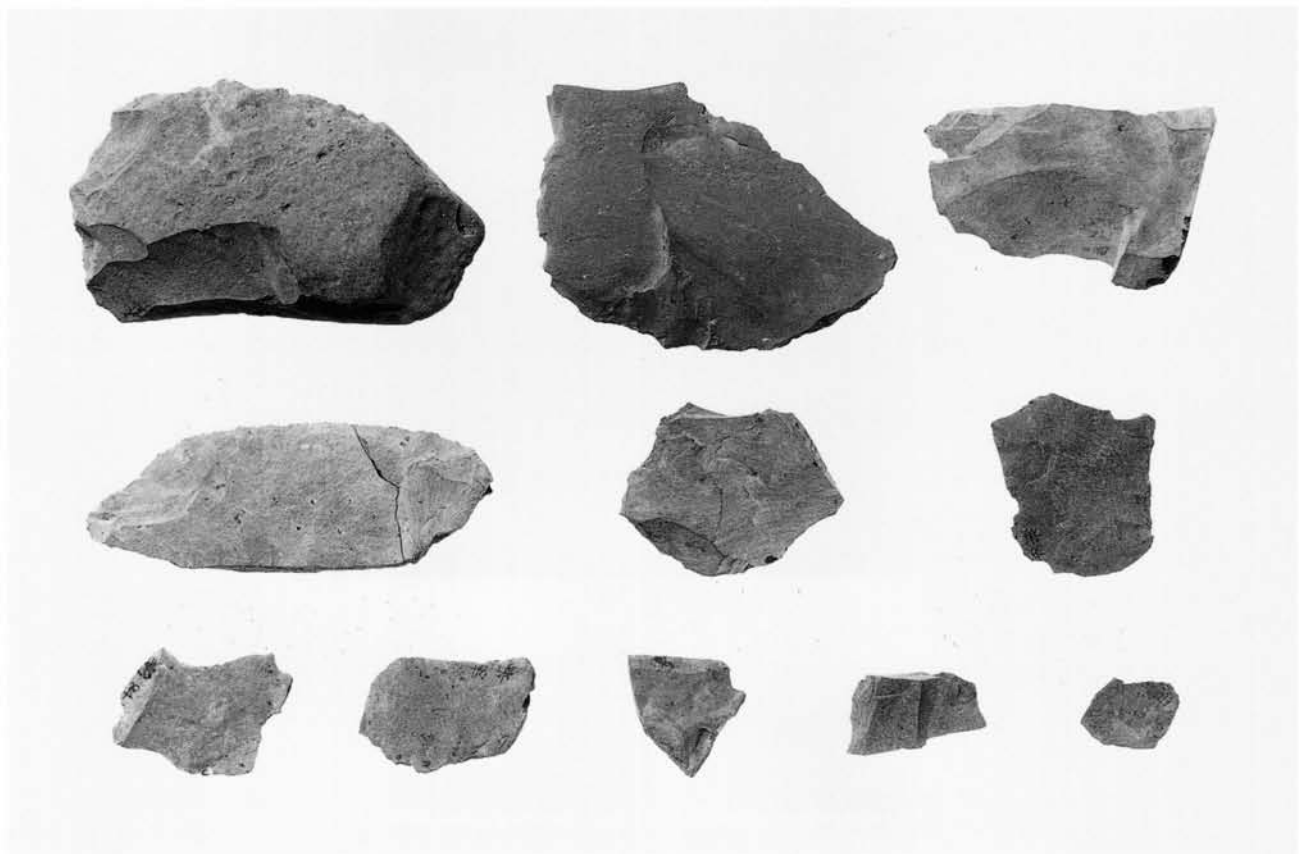


(2)出土土器(2)





(1)出土石器(1)



(2)出土石器(2)



130



138



133



139



134



132



131



137



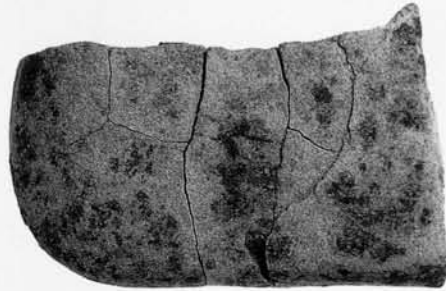
135



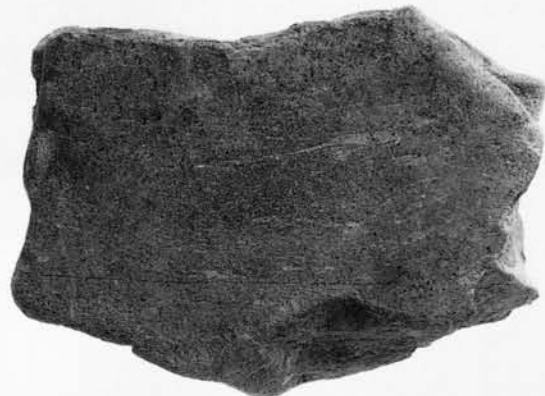
129



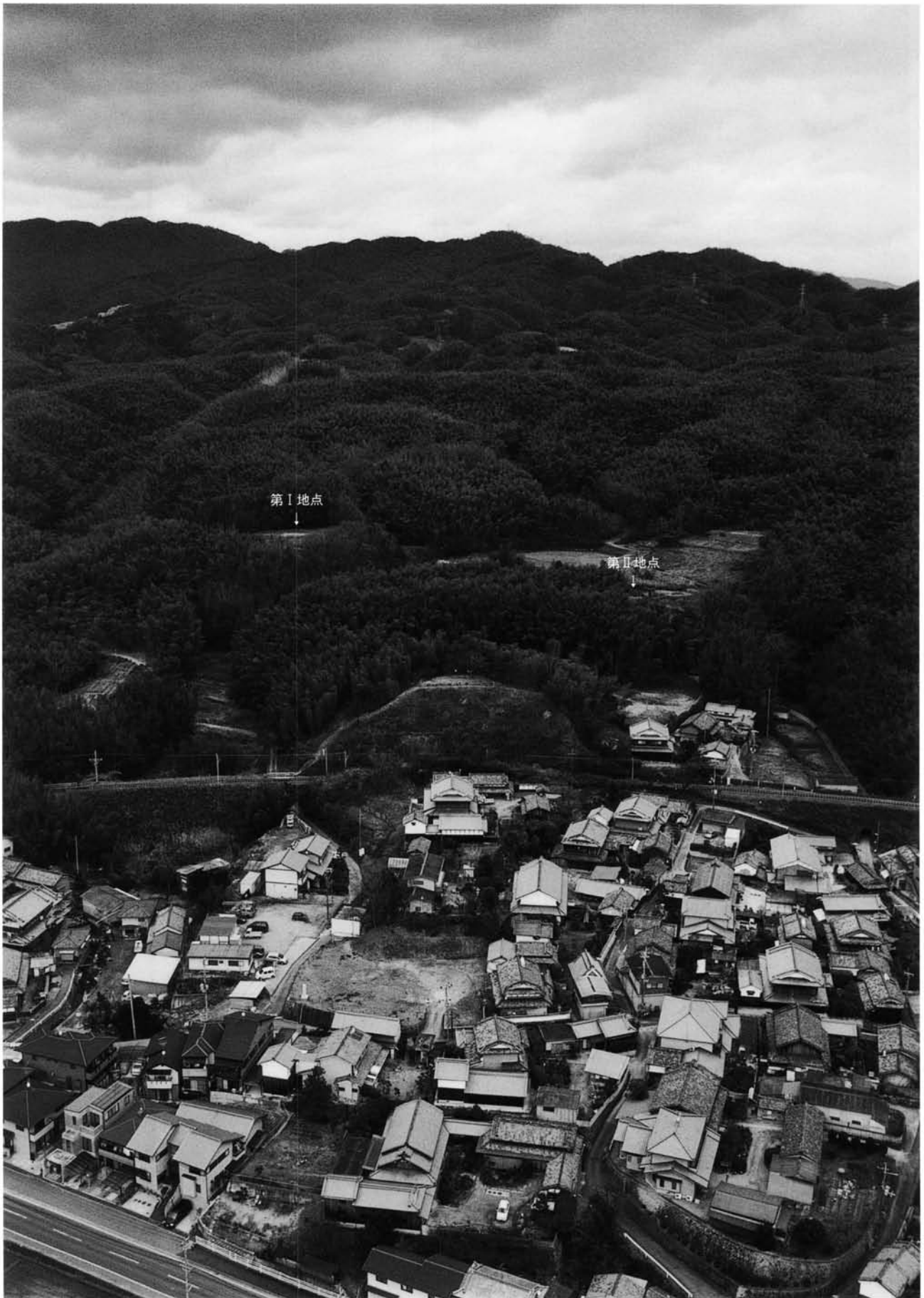
136



140



142



調査地遠景(西から、手前中央は椿井大塚山古墳)



(1)調査地遠景(北東から)



(2)調査地近景(上が北西、左上は椿井大塚山古墳後円部)



(1)調査地近景(上が北西)



(2)第1トレンチ全景(上が西)



(1) 椿井遺跡遠景(北西から)



(2) 調査前全景(第I地点)



(3) 第1トレンチ全景(南から)



(1)第1トレンチ北部全景(東から)



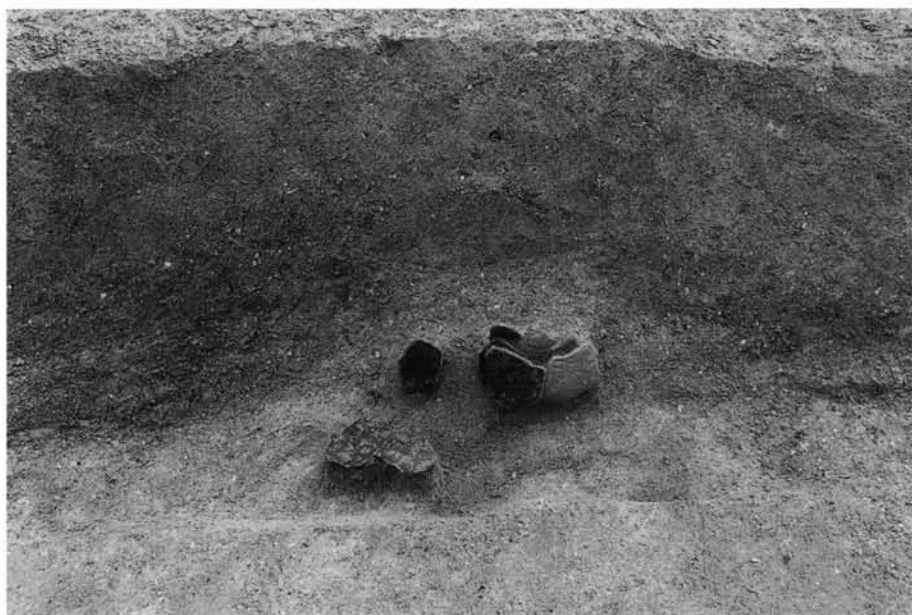
(2)堅穴式住居跡SH22全景
(北西から)



(3)堅穴式住居跡SH22周壁溝
検出状況(西から)



(1) 竪穴式住居跡 S H22 貯蔵穴
検出状況(上が東)



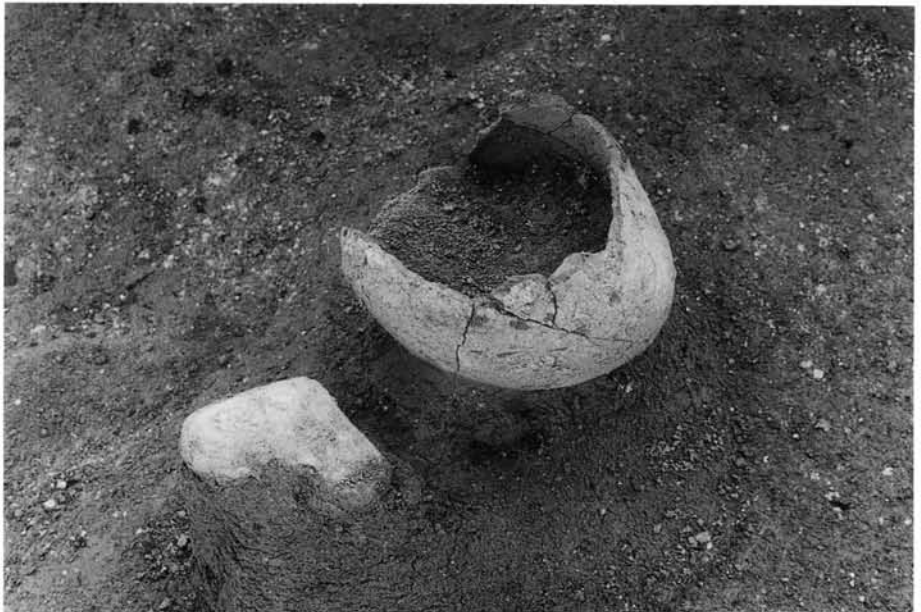
(2) 竪穴式住居跡 S H22 周壁溝内
土器出土状況(北から)



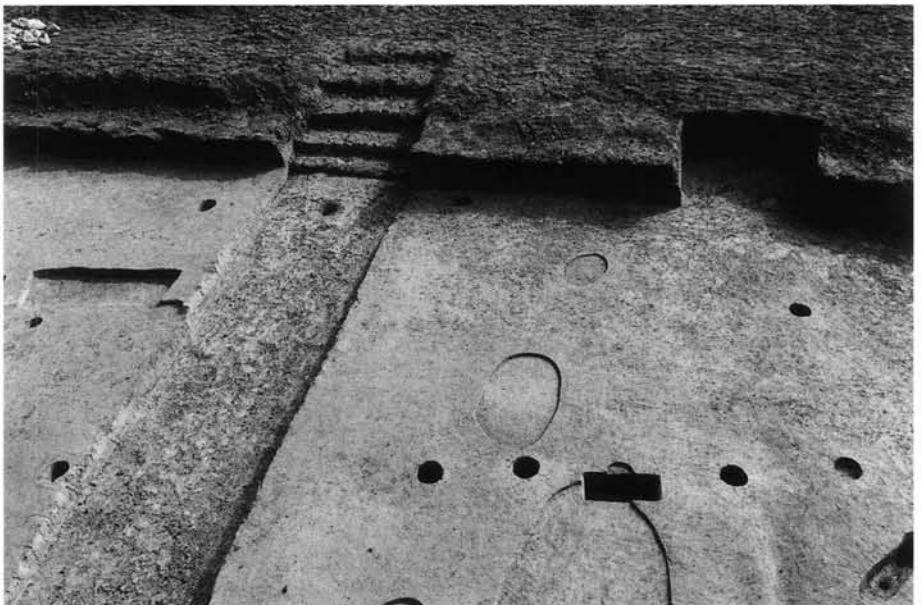
(3) 竪穴式住居跡 S H22 周壁溝内
砥石出土状況(上が南)



(1) 竪穴式住居跡 S H23 全景
(東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H23 (北西から)



(3) 掘立柱建物跡 S B26 (西から)



(1)土坑 S K 41(南東から)



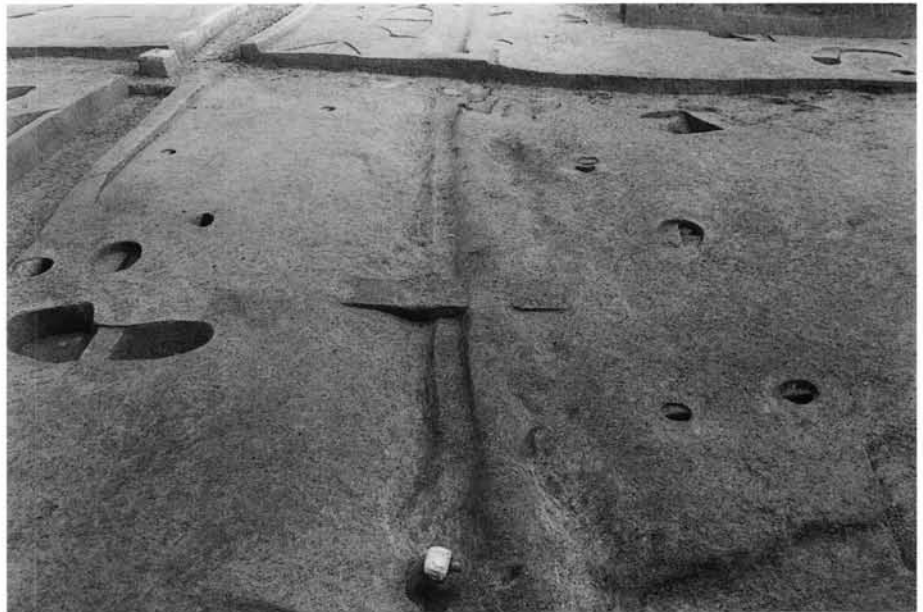
(2)土坑 S K 1(北東から)



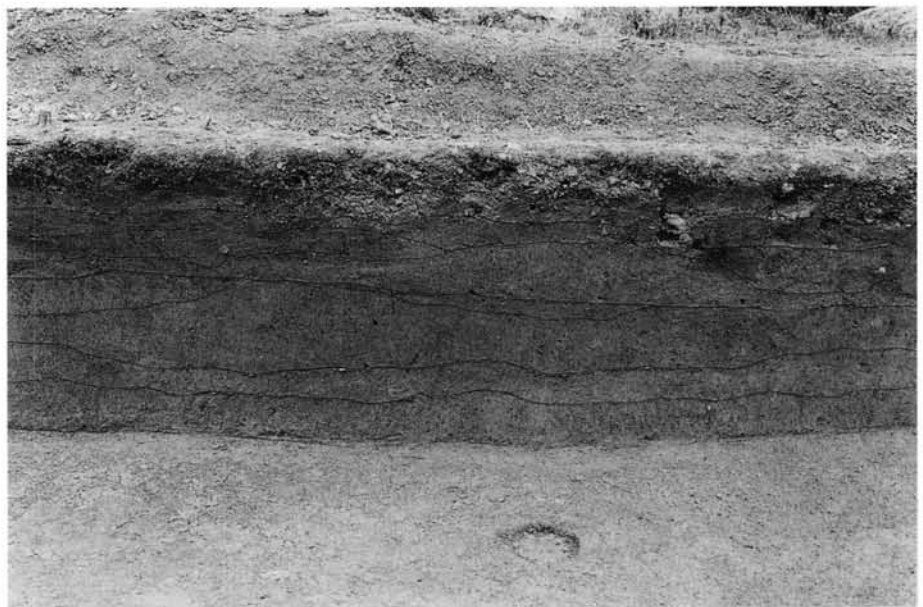
(3)土坑 S K 25(北から)



(1)第1トレンチ中央部遺構
検出状況(古墳状隆起)
(北西から)



(2)溝 S D14・15・24検出状況
(西から)



(3)第1トレンチ東壁中央部
土層断面(西から)



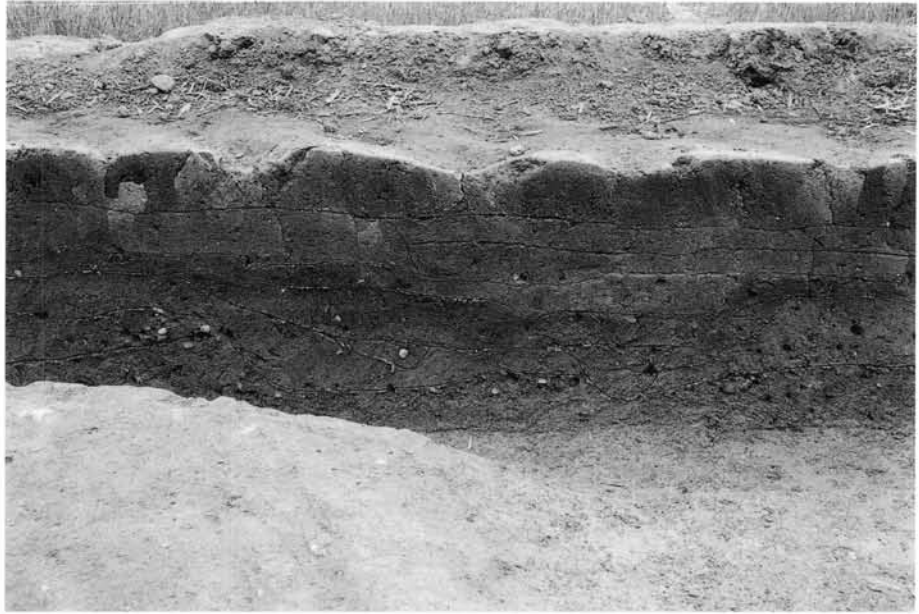
(1)第2トレンチ全景(北から)



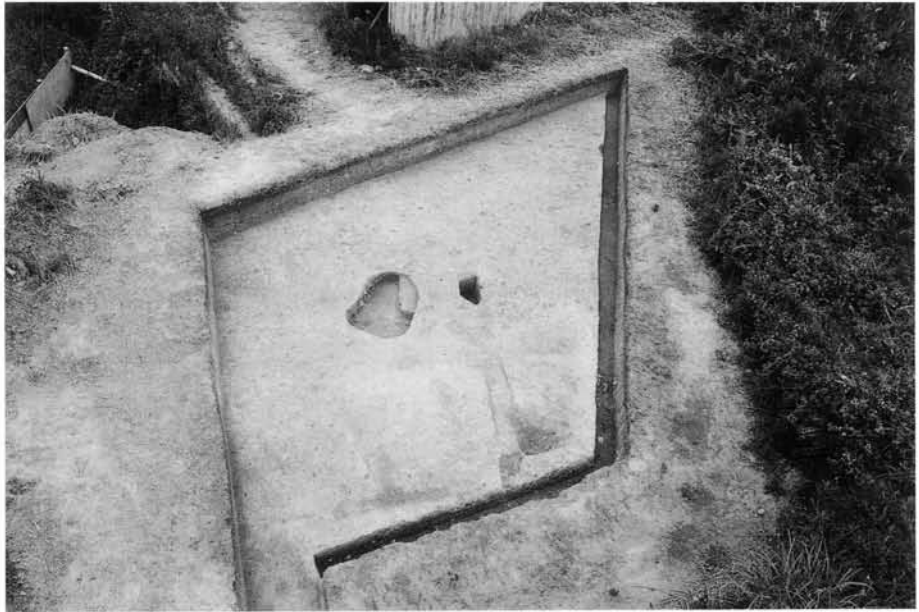
(2)第3トレンチ全景(北から)



(3)第4トレンチ全景(北から)



(1)第7トレンチ西壁土層断面
(東から)



(2)第8トレンチ下層遺構全景
(南から)



(3)第8トレンチ下層土坑S K 103
完掘状況(南から)



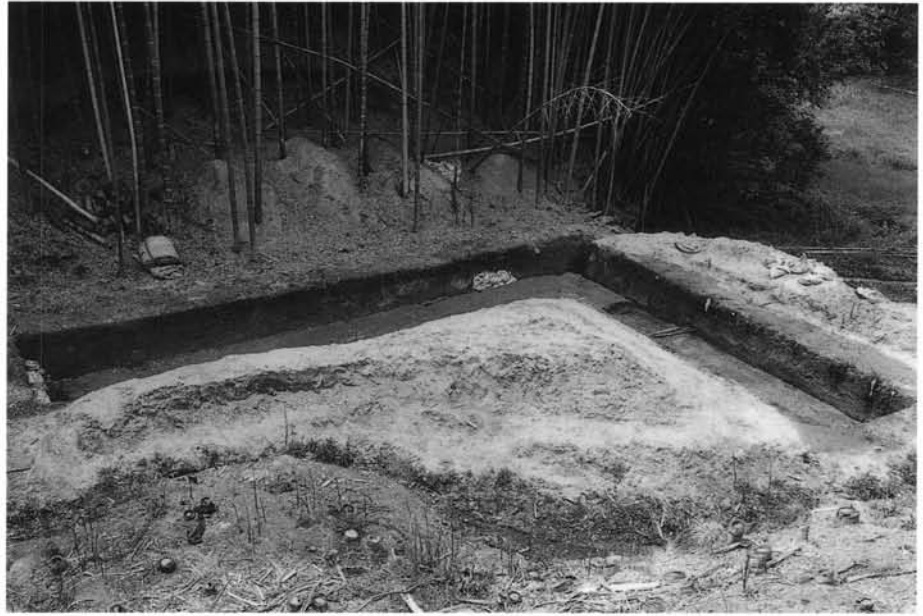
(1)第7トレンチ上層遺構全景
(北東から)



(2)第7トレンチ下層遺構全景
(北東から)



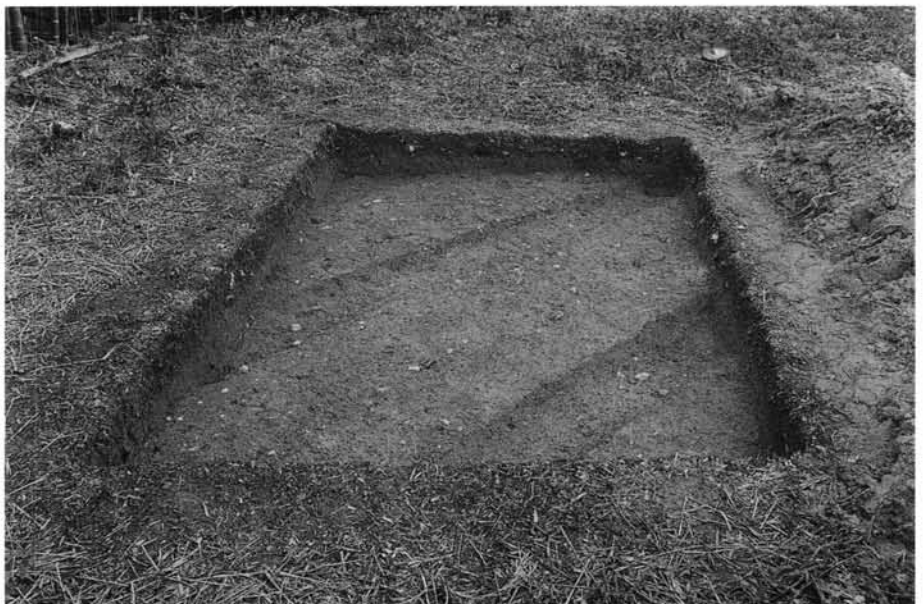
(3)第7トレンチ下層溝S D105
完掘状況(南西から)



(1)第5トレンチ全景(東から)



(2)第5トレンチ近景(西から)



(3)第6トレンチ全景(南から)



(1)第10トレンチ上層遺構検出状況
(東から)



(2)第10トレンチ西壁土層断面
(西から)



(3)第10トレンチ下層遺構完掘状況
(北から)



1



26



78



5



4-a



4-b



8



27



16



17



18



20



19



22



33



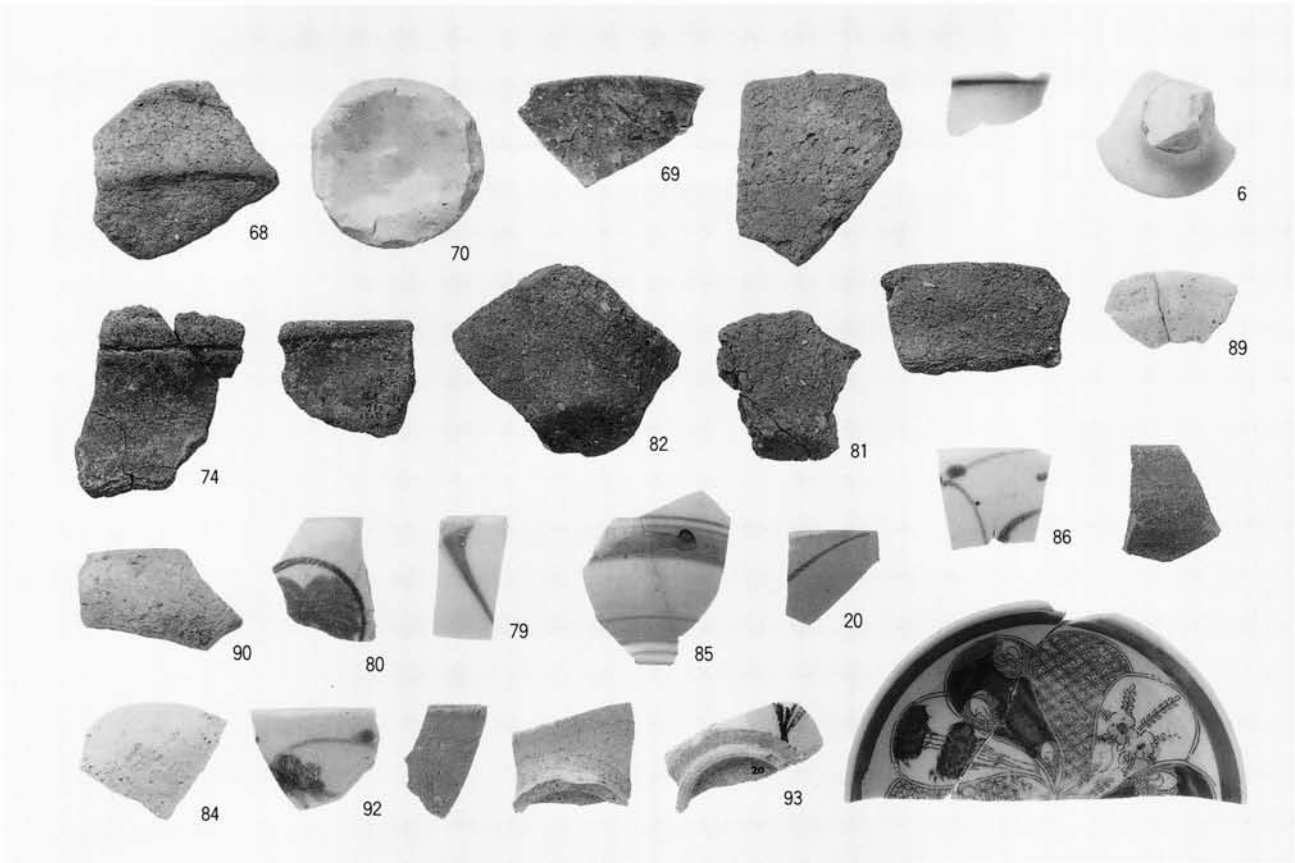
31



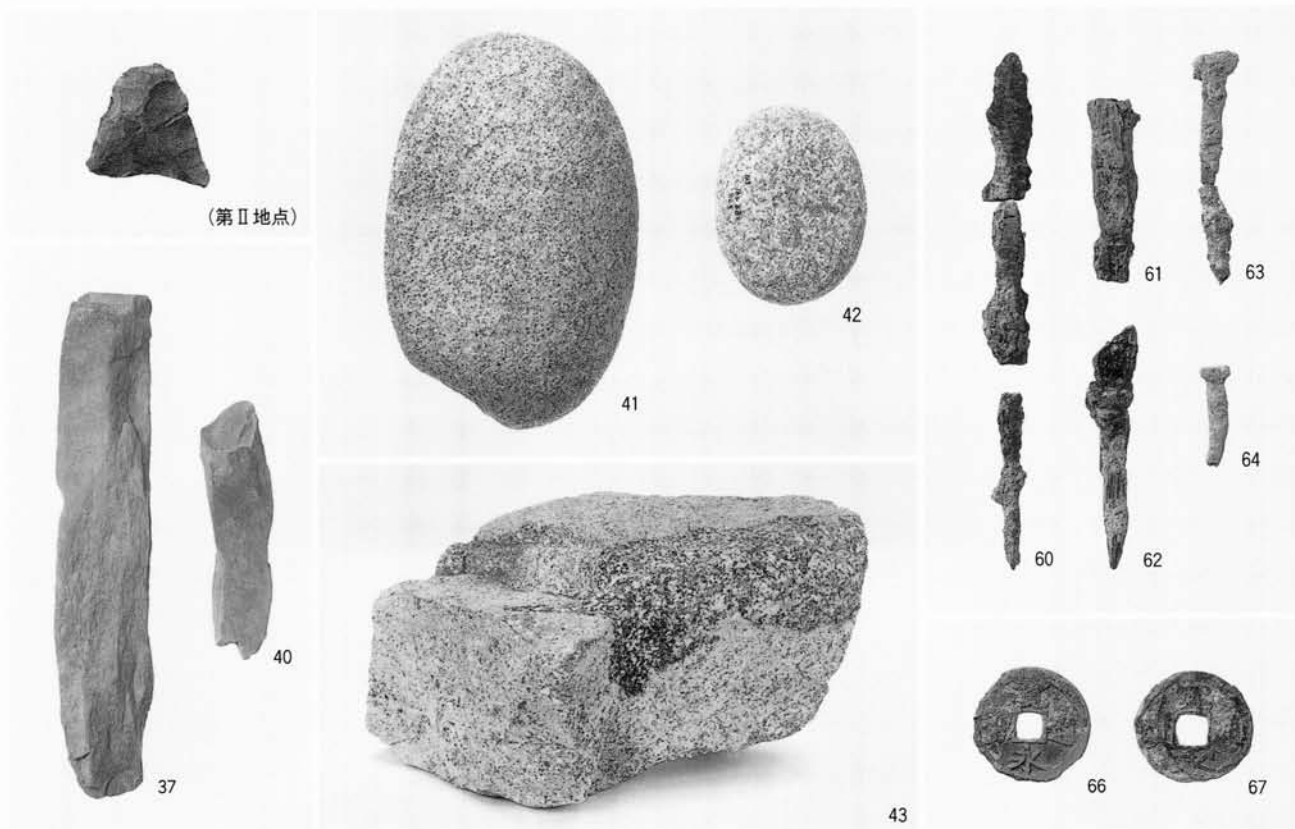
9



32



(1)第Ⅱ地点出土土器



(2)出土石製品・鉄製品・銭貨



(1)調査地全景(北東から)



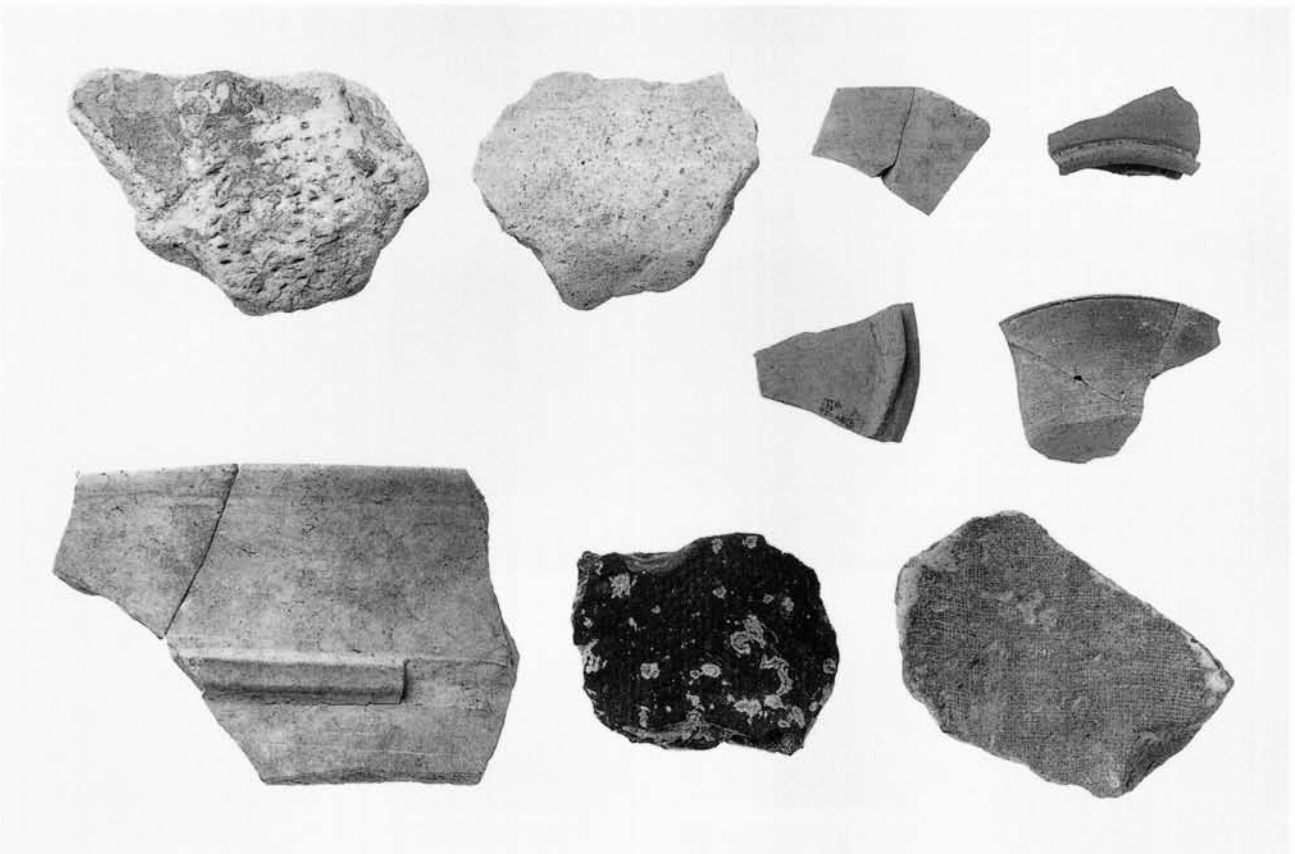
(2)調査地南半全景(北東から)



(3)調査地北半全景(南東から)



(1)上人ヶ平17号墳周溝S X101遺物出土状況(北東から)



(2)出土遺物



(1)内田山B 1号墳・内田山遺跡全景(東から)



(2)内田山B 1号墳・内田山遺跡全景(西から)



(1)内田山B 1号墳・内田山遺跡全景(真上から、上が北)



(2)内田山B 1号墳・内田山遺跡全景(南西から)

(1)調査前全景
(東から、第1次調査)



(2)重機掘削作業風景(南西から)



(3)掘削作業風景(南東から)



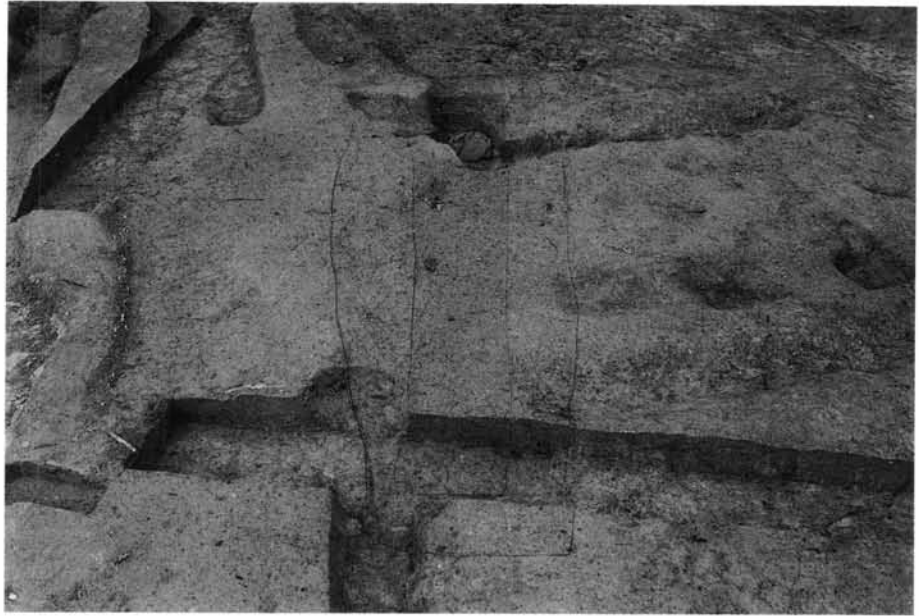


(1)埋葬施設 S X 153全景(北西から)



(2)埋葬施設 S X 153全景(南西から)

(1)埋葬施設 S X 153 検出状況
(南西から)

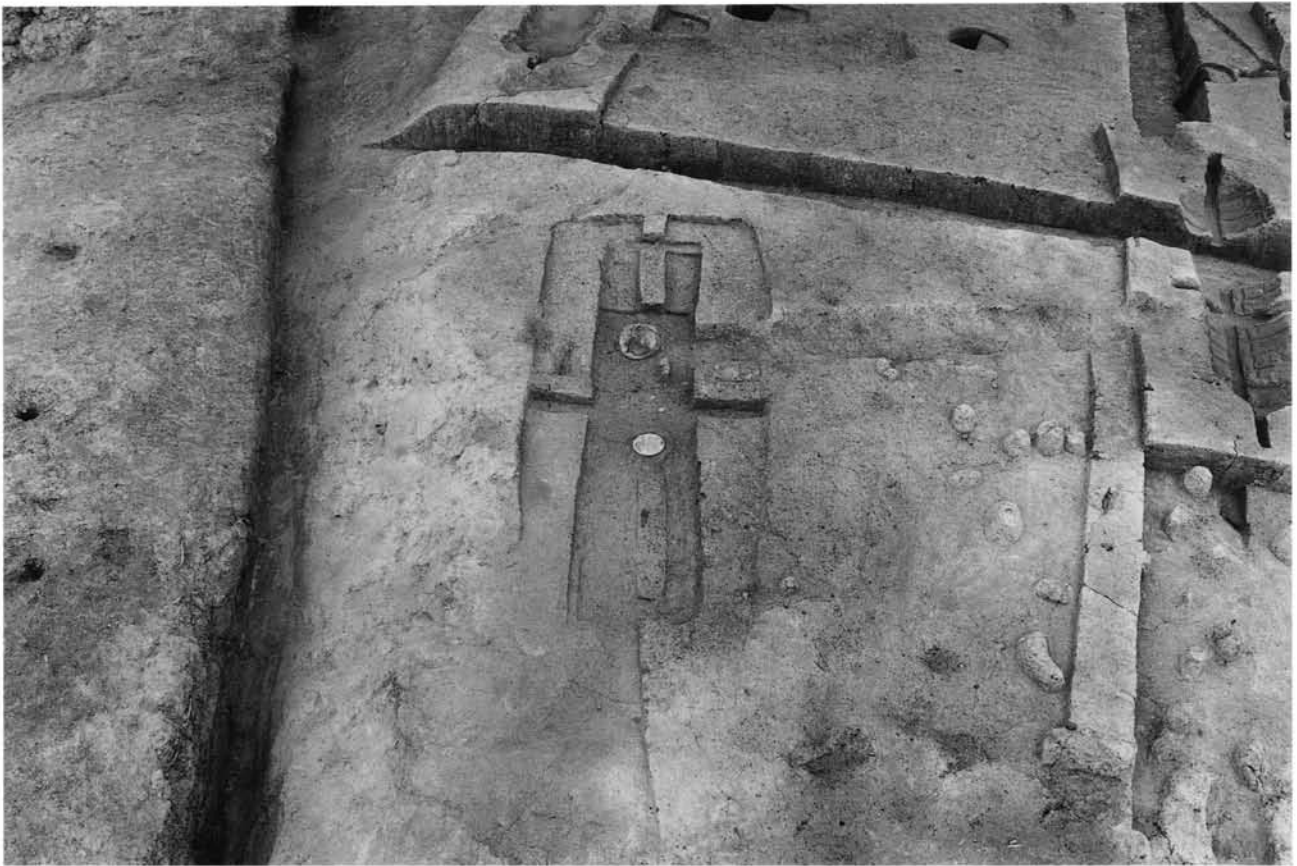


(2)埋葬施設 S X 153
蓋形埴輪転用枕出土状況
(北西から)



(3)竪穴式住居跡 S B 155 全景
(東から)

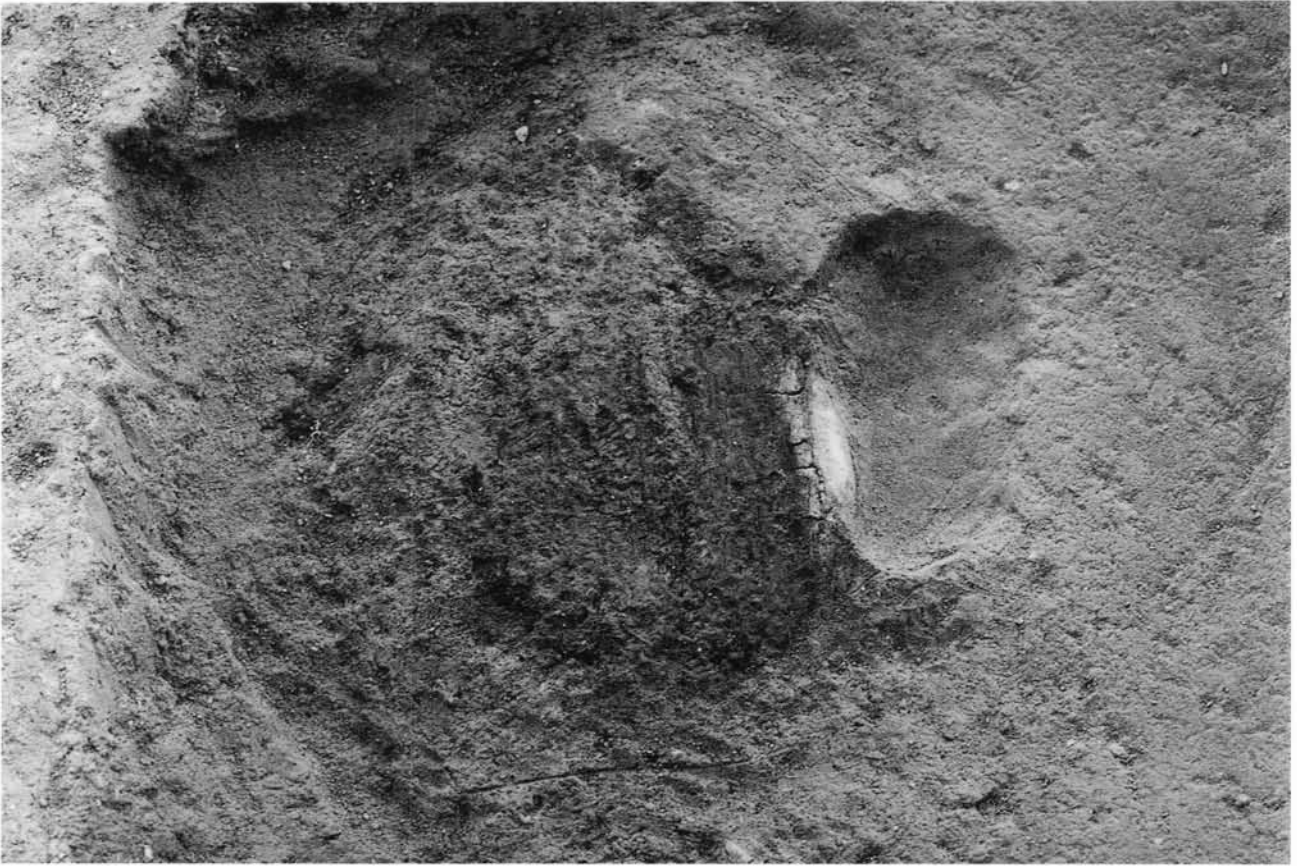




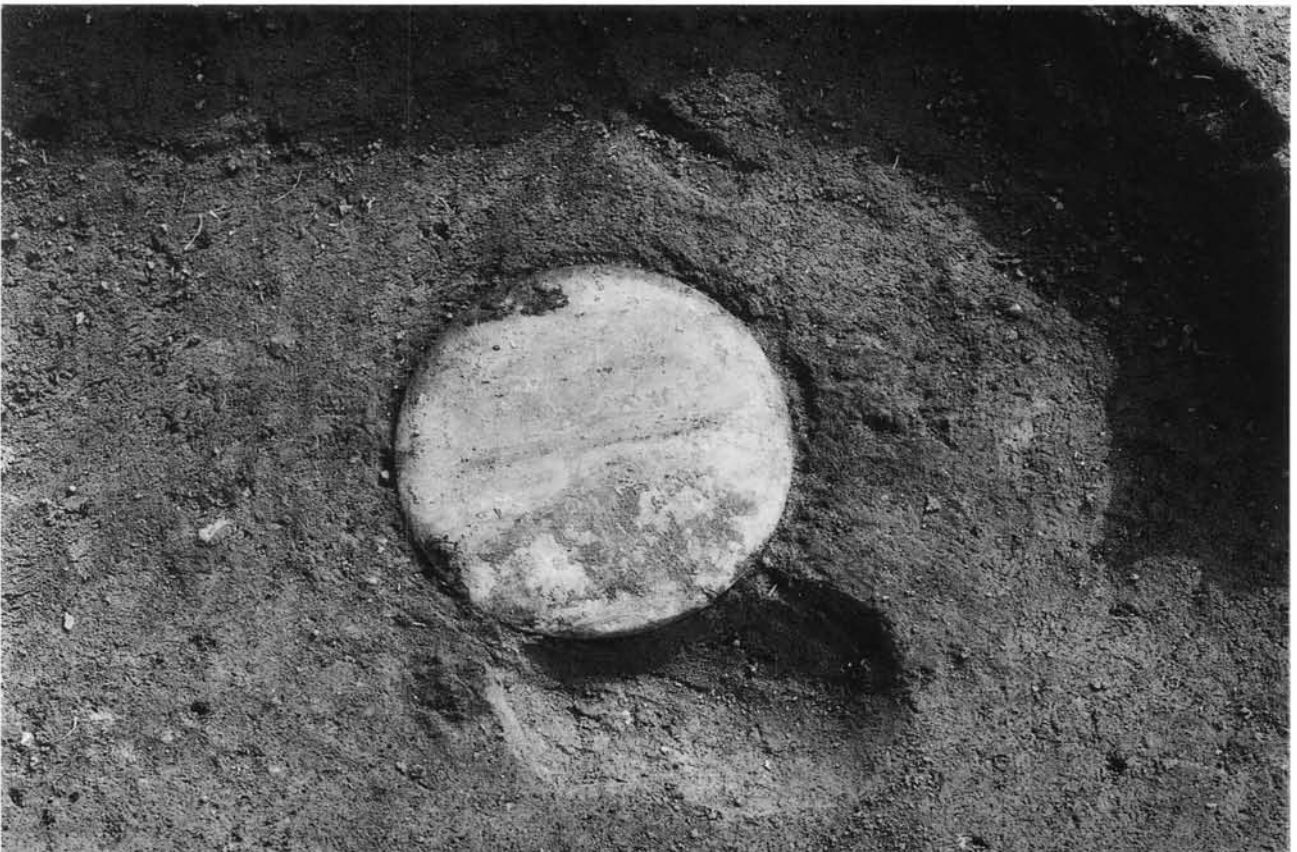
(1)埋葬施設 S X 154 全景(南西から)



(2)埋葬施設 S X 153 近景(南西から)



(1)埋葬施設 S X 154六獣形鏡出土状況(木棺材遺存、北東から)



(2)埋葬施設 S X 154六獣形鏡出土状況(北西から)



(1)埋葬施設 S X154検出状況
(南西から)



(2)埋葬施設 S X154六獣形鏡
検出作業風景(北から)



(3)現地説明会風景(東から)



(1)東側周溝 S D84全景(北西から)



(2)西側周溝 S D89全景(北西から)



(1)東側周溝 S D84掘削作業風景
(南から)



(2)東側周溝 S D84
埴輪片出土状況(北西から)



(3)東側周溝 S D84堆積状況
(南西から)



(1)東側周溝 S D84蓋形埴輪
立ち飾り片出土状況(北から)



(2)東側周溝 S D84鉄鏃出土状況
(北西から)



(3)溝 S D90堆積状況(南西から)



(1)北側周溝 S D84(北西から)



(2)西側周溝 S D89掘削作業風景
(南西から)



(3)西側周溝 S D89埴輪片出土状況
(南西から)



(1)埋葬施設 S X01第1次調査全景
(南東から)



(2)埋葬施設 S X02第1次調査全景
(南東から)



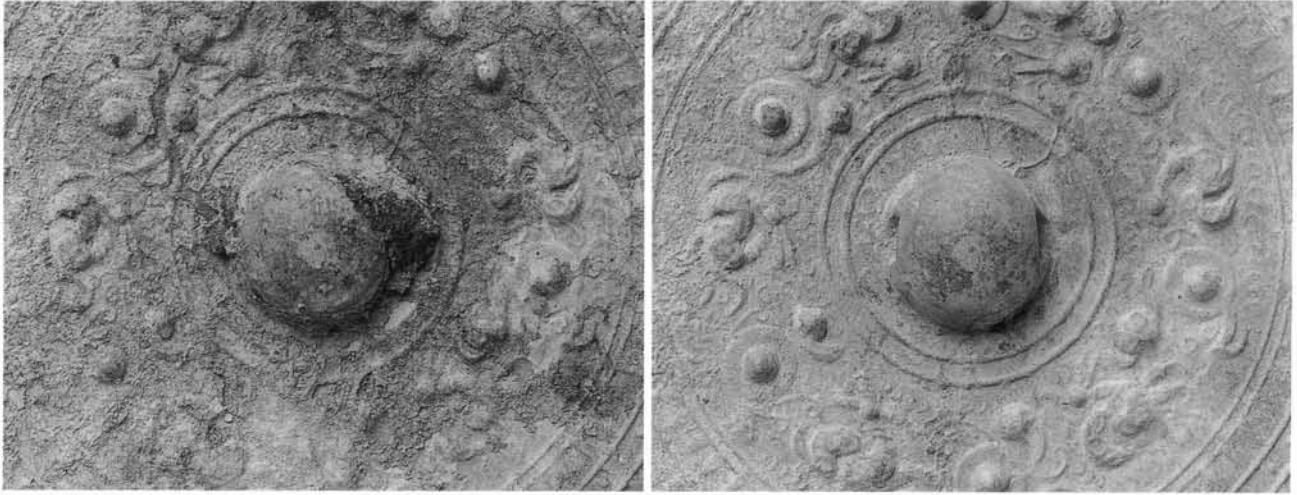
(3)西側周溝 S D89埴輪片
第1次調査出土状況(北から)



(1)埋葬施設 S X 154出土六獣形鏡(鏡背)



(2)埋葬施設 S X 154出土六獣形鏡(鏡面)

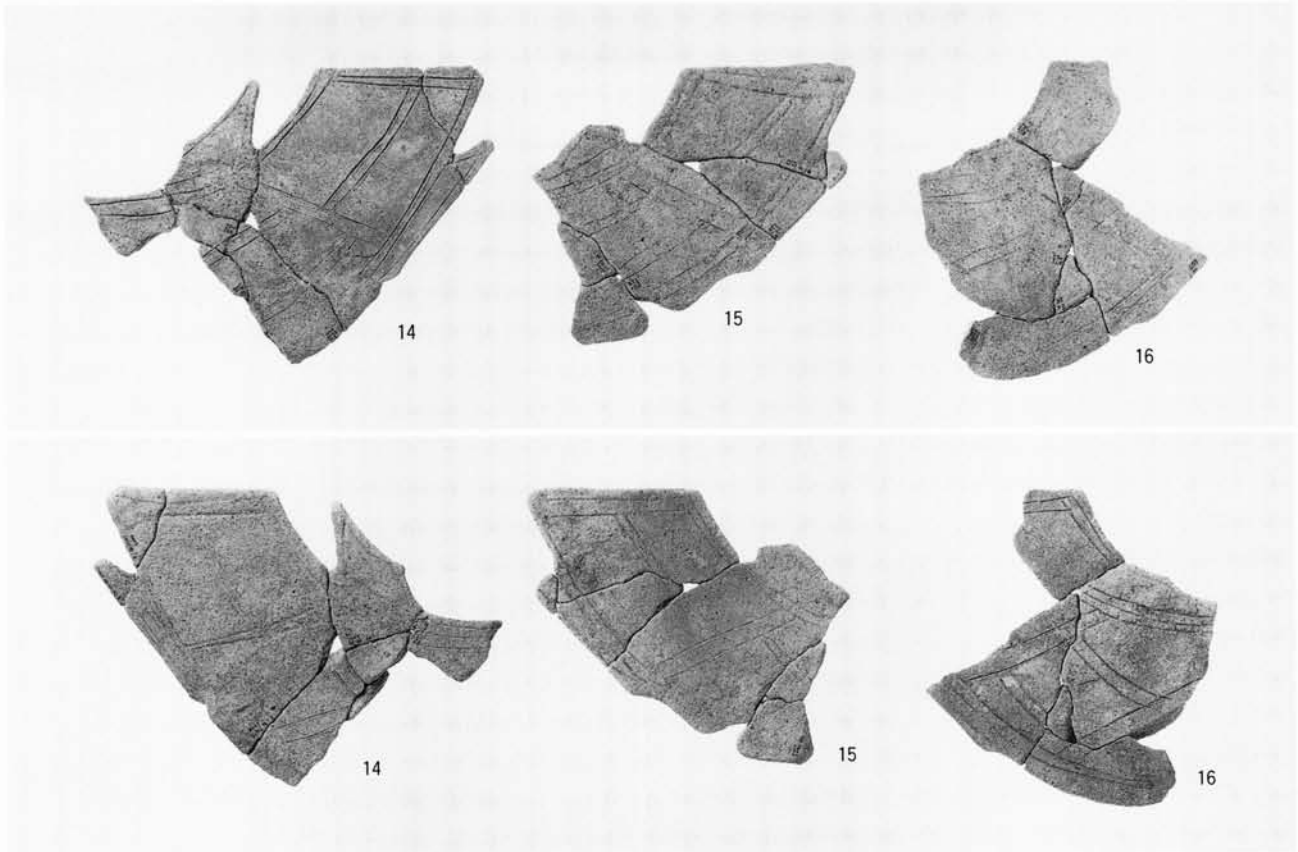


12

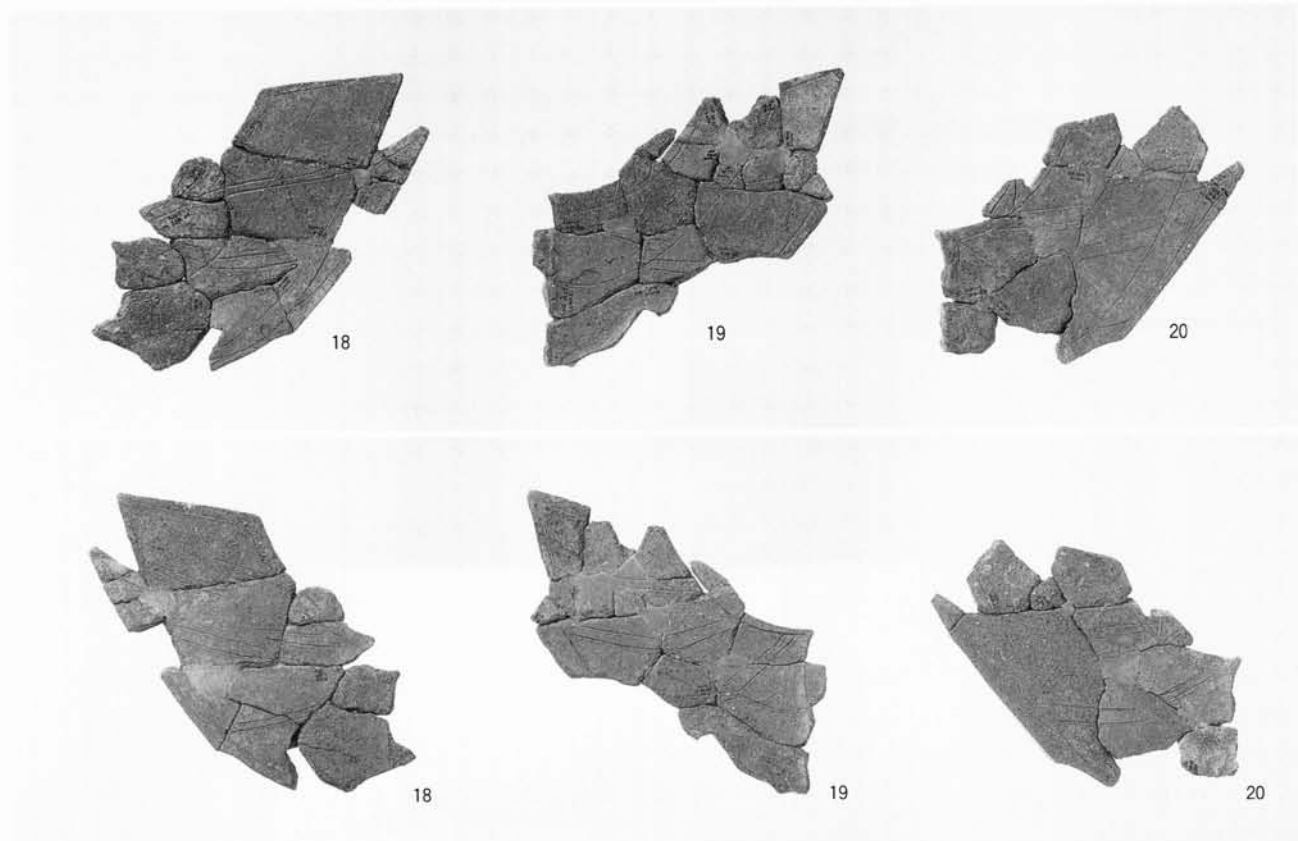


13

21



(1)埋葬施設 S X 153出土蓋形埴輪立ち飾り



(2)東側周溝 S D84出土蓋形埴輪立ち飾り



24



33



29

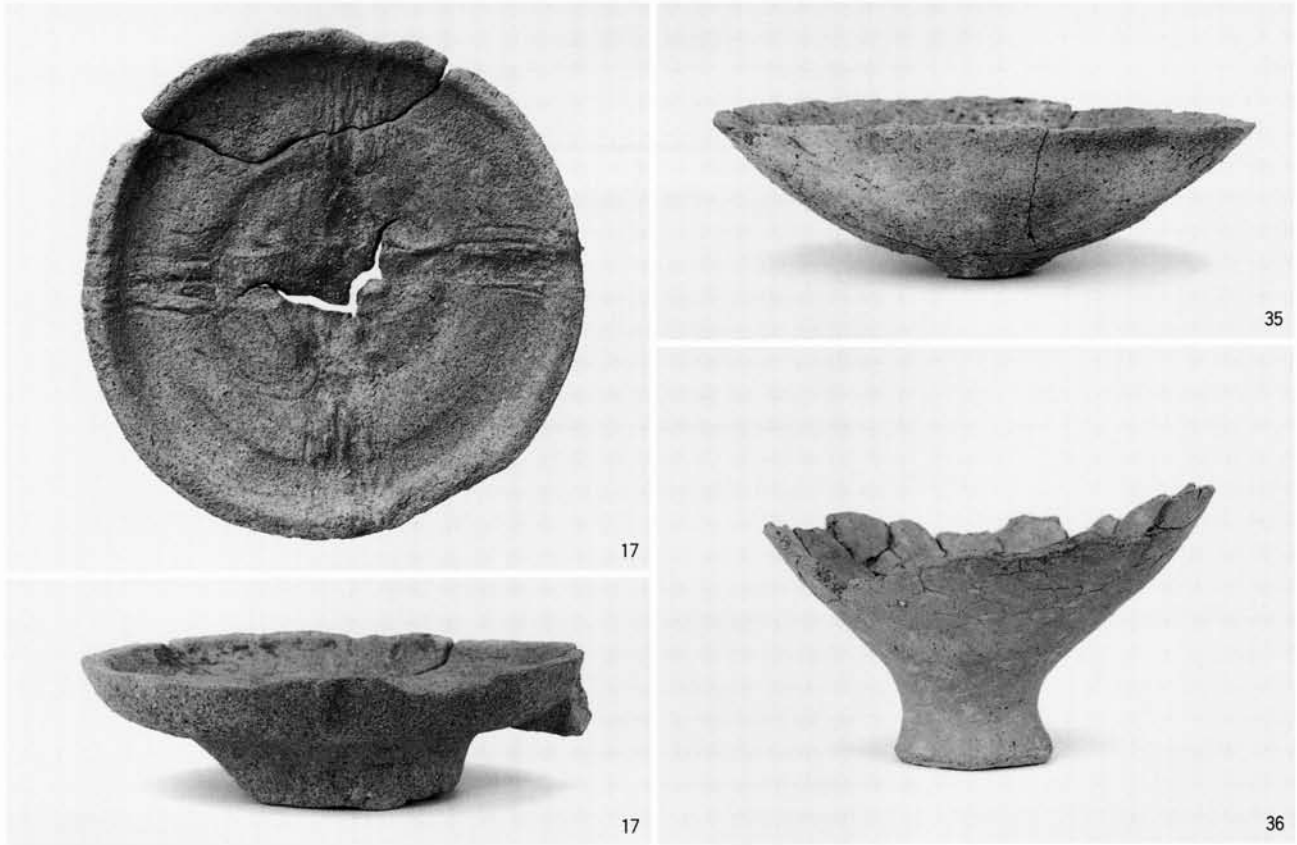


30

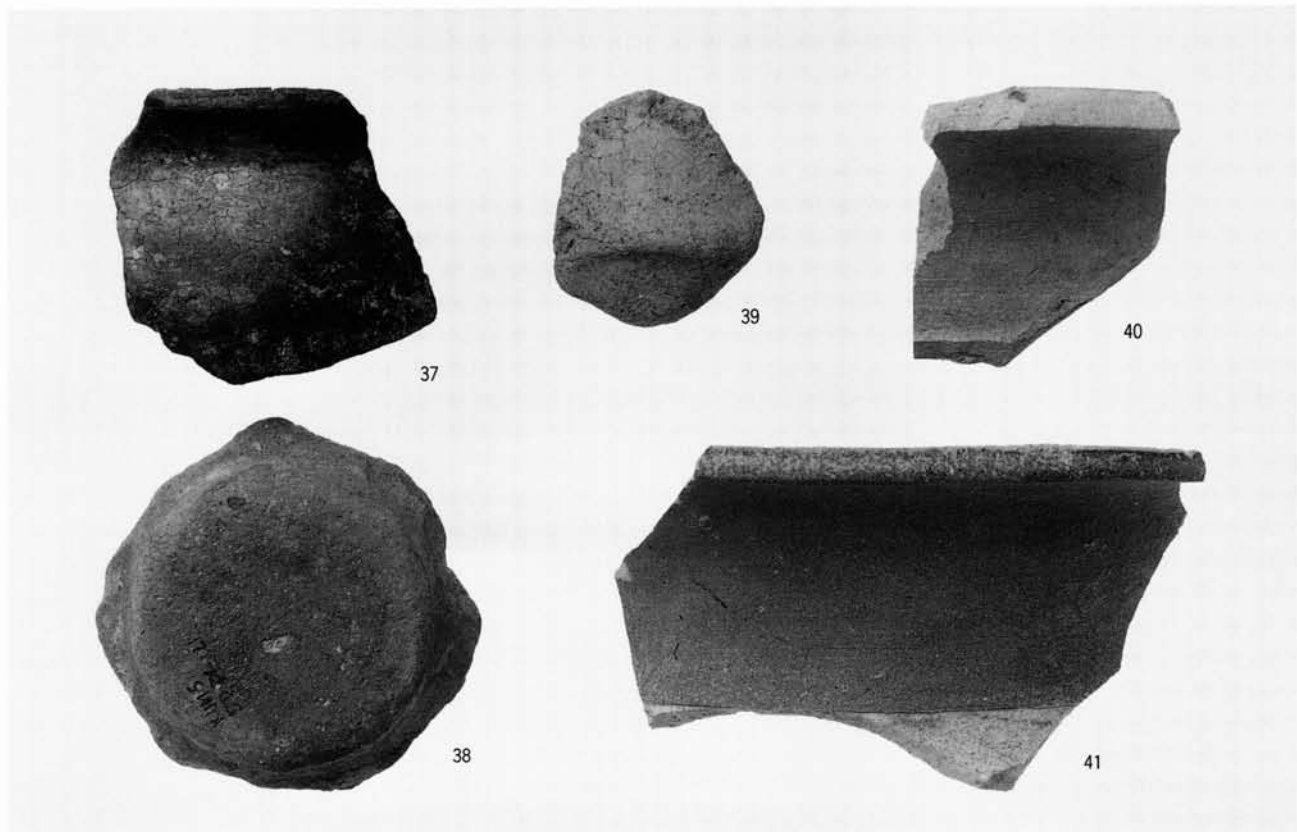


31

出土遺物(蓋形埴輪、朝顔形埴輪、不明埴輪)



(1)出土遺物(蓋形埴輪、土師器、弥生土器)



(2)出土遺物(弥生土器、須恵器)

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第117冊							
編著者名								
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Tel		075(933)3877		
発行年月日	西暦 2006 年			3 月		30 日		
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
かみあくじょう あと 上安久城跡	きょうとふまい づるしかみあく 京都府舞鶴市上 安久	26202	86	35° 27' 13"	135° 20' 08"	20050518 ～ 20050804	320	道路建設
ながおかきょう あとうきょうだ いはっぴやくさ んじゅうじ・か みざといせき・ いのうちいせき	きょうとふなが おかきょうしい のうちかしらも と・ひろかいど う	26209	10・51・ 91	34° 56' 35"	135° 41' 07"	20040726 ～ 20050308	2,500	道路建設
たきざいせきだ いろくじ	きょうとふきよ うたなべしたき ぎたつみ	26342	24	34° 49' 23"	135° 45' 27"	20040921 ～ 20041227	750	道路建設
つばいいせきだ いいち・にじ	きょうとふそう らくぐんやまし ろちょうつばい	26361		34° 45' 48"	135° 49' 07"	20040921 ～ 20050210 20050417 ～ 20050530	950 200	道路建設
しょうにんがひ らいせきだいは ちじ	きょうとふそう らくぐんきづ ちょうおおあざ いちさかこあざ しょうにんがひ ら	26362	66	34° 43' 05"	135° 48' 54"	20040419 ～ 20040629	800	土地区画整 理
うちだやまいせ き・うちだやま こふんぐん(だ いごじ)	きょうとふそう らくぐんきづ ちょうおおあざ きづこあざうち だやま	26362	53・54	34° 44' 16"	135° 49' 52"	20041201 ～ 20050217	500	土地区画整 理
内田山遺跡・内 田山古墳群(第 5次)	京都府相楽郡木 津町大字木津小 字内田山	26362	53・54	34° 44' 16"	135° 49' 52"	20041201 ～ 20050217	500	土地区画整 理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上安久城跡	経塚・墳墓 城跡	平安～鎌倉 室町	石組遺構 曲輪跡/溝	土師器/瓦器/鉄刀 /鉄磐/鉄釘/銅製 品	中世山城跡 から平安時 代末期～鎌 倉時代初頭 の経塚か墳 墓と思われ る石組遺構 を検出。
長岡京跡右京第 830次・上里遺 跡・井ノ内遺跡	集落 集落/墓 都城/集落 集落	縄文 古墳 奈良～平安前期 中世～近世	土坑 竪穴式住居跡/掘立柱建物跡 溝/土坑/道路状遺構/井戸	縄文土器 須恵器/埴輪 土師器/須恵器/黒 色土器/緑釉陶器/ 無釉陶器/灰釉陶 器/土馬/軒平瓦/ 平瓦/埴/鉄滓/鉄 器 瓦器/銭貨	長岡京期～ 平安時代前 期の大型井 戸および宅 地または道 路に關係す る溝を検 出。
薪遺跡第6次	集落	縄文中期	竪穴式住居跡/溝/土坑	縄文土器/石器	縄文時代中 期後葉(北 白川C式) 時期の集落 の調査。
椿井遺跡第1・ 2次	集落 集落 古墳	縄文 弥生 古墳	土坑 竪穴式住居跡/土坑 古墳状隆起/土坑/掘立柱建物 跡	縄文土器 弥生土器/石器	椿井大塚山 古墳背後に 位置する弥 生時代後期 の高地性集 落の調査。
上人ヶ平遺跡第 8次	古墳	古墳	周溝/土坑	円筒埴輪/形象埴 輪/須恵器	上人ヶ平17 号墳周溝の 調査。
内田山遺跡・内 田山古墳群(第 5次)	集落 古墳	弥生 古墳	竪穴式住居跡/掘立柱建物跡 埋葬施設/周溝	弥生土器 鏡/鉄器/円筒埴輪 /形象埴輪/土師器	古墳時代中 期の方墳で ある内田山 B1号墳の 調査。木棺 を納める埋 葬施設から 六獣形鏡が 出土した。

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

京都府遺跡調査概報 第117冊

平成18年3月30日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141